

外政家としての
大久保利通

清沢 洸

凡例

本 pdf 作成に当っては、山本義彦編集解説『清澤冽選集』第七卷（1998.7.25 日本図書センター刊）を底本とした。が、別に、中公文庫版も参照した。オリジナルは1942年5月中央公論社刊である。

- ・ 漢字は、新漢字のあるものは改めたが、いくつかJIS第二水準までになく第三、四水準の字形を使っている。ただし「辨理大臣」、「三條」（人名）は、そのママにした。また字形の定められていない文字は※「#」で注記した。例、台湾の地名で琅※「#王+喬」。
- ・ 旧仮名遣いを新仮名遣いに改めた。
- ・ 引用史料に關しても全て、カナを平仮名にし、さらに漢文を読み下し文に改め、適宜振り仮名を追加した。――従って、歴史研究の資料としての信頼性が低下している。底本自体も公開され、多くの史料がネットに公開されており、厳密さを求められる方はそちらを参照されたい。
- ・ 引用史料等において、頭に「○」を置き小文字による二列並記で著者による注が入られている。これ等は全て、○を取り、1ポイント小さい文字にし□で括った。
- ・ ルビは、幾つか底本にも有るが、多くは作成者が追加した。特に区別はしていない。漢文に付したルビは、読みもあるが、幾つかは読み方ではなく語意を示すものである。
- ・ ルビで、黒字「ママ」は底本にあるもの、赤字「**ママ**」は作成者の追加したものである。

・ 参考文献で、青字斜体で記したものは、ネット上に公開されている。『大久保利通日記』『大久保利通文書』は煩瑣になるので青字斜体になっていない部分があるが、公開されている。日本語文献は、国立国会図書館デジタル化資料または、グーグルブックス (books.google.co.jp) から、英文文献は Open Library (openlibrary.org) から得られることを確認している。

・ 【及び「#」】は作成者の追加したものである。頁端の脚注も作成者によるものである。【】は語の意味を記す場合と、底本で抜けた語を追加したものがある。

・ その他、細かな誤植は注記していない。逆に、おかしい字があるとすれば、それは本作成者のミスと判断された。

・ 略年譜において、西暦に並んで「皇紀」が付されているが全て省略した。

外政家としての大久保利通

目次

序

第一章 征韓論を中心に

- 一 大久保の外交機略
 - 二 大陸主義と内治主義
 - 三 外遊による心境の変化
 - 四 財政と政治の調和
 - 五 西郷の身を思う
 - 六 西郷、大久保の対立
 - 七 身命を賭する閣議の激論
 - 八 征韓論の理論的理拠
 - 九 大久保の内治主義の理拠
 - 一〇 大久保第一線に起つ
 - 一一 西郷故山に還る
- #### 第二章 征台を敢行するまで
- 一 自ら支那に使いす

二 対外思想の進化

三 琉球帰属問題解決の必要

四 米人顧問の進言

五 閣議、征台を決す

六 英国公使パークスの横槍

七 米国公使の抗議

八 西郷従道、命を聴かず出発

九 大久保責任を一身に負う

一〇 紛糾する英米との交渉

第三章 日清間の予備交渉

一 征蕃派軍と国内事情

二 外人記者の日本軍隊観

三 台湾に於ける西郷とその軍隊

四 柳原と支那側との交渉

五 廟議積極論に一決す

第四章 全権辨理大臣として

一 大久保の決意と重臣の反対

二 広大なる権限と準備

- 三 大久保の出発と国内事情
- 四 外人顧問ル・ジャンドル

第五章 北京談判の行詰り

- 一 大久保の交渉政略
- 二 談判、破局に瀕す
- 三 英仏米その他の動き
- 四 支那に妥協の色
- 五 日本国内の動搖
- 六 談判不調、帰国に決す

第六章 交渉妥結に到る

- 一 英国公使ウエードの調停
- 二 ウエードの本国政府への報告
- 三 支那側の経過報告書
- 四 談判中の大久保の心事
- 五 パークスの征台観
- 六 在支外人の交渉批判

第七章 大久保の心事と政策

- 一 天津にて李鴻章と論ず

- 二 成果に対する賛否の対立
- 三 樺山資紀の交渉観
- 四 償金の返還を主張す
- 五 故国の熱狂的歓迎
- 六 御下賜金で新築
- 七 外政家大久保の存在理由

附録

復命書

使清趣意書

大久保利通略年譜

【以下六点は載録せず】

索引

口絵大久保利通肖像

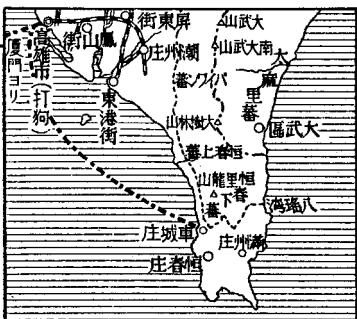
下通州偶作

黒田清隆宛書翰（明治七年十月三十日附）

大久保全権の論議文書

保護国旗

明治七年征台軍進行略図

[illegible]

序

日本外交史を通じて、最も異色あり、興味ある外交は征蕃事件から引続く北京談判である。外政と内政とからみあひ、一つの時代と他の時代とが衝突する。舞台の正面に現れるのは大久保利通であるが、西郷隆盛が出て、李鴻章が明滅し、英米仏の列強が出て来る。この事件を通り越して、初めて内外に対する明治日本の地固めが出来た。

内政家としての大久保利通が、世に知られている割合に、外政家としての大久保は、案外紹介されていない。これは大久保のために考えて公平ではないであろう。殊に大久保のやつたこの明治七年の北京会談は、支那との最初の正面切つての談判であり、またそれが台湾へ派兵した跡始末のためであつた点から、現に支那事変を最大の問題として有している日本国民に、いろいろの示唆を与えるものがある。

こうした史実を正直に紹介するのが本文起稿の目的であつた。ところが、さて筆をとつてみると、外交家としての大久保を画くのは、北京会談だけでは充分ではない。北京で振つた大久保の外交技術は、殆んど満点に近いにしても、かれの対外政策の理念を知るためには征韓論こそ、かれが莫逆の友として相許して来た西郷隆盛と正面衝突してまで争つた不退転の立場であり、またその後、日本の外交と政治において絶えず対立するところの大陸派と内治主義とが、最初にその飛沫をあげた舞台であつた。北京会談が近景であれば、征韓論は遠景である。この二つを並び画かなくては、外交家としての大久保利通の全貌を見ることは出来な

い。

初め国民学術協会雨宮主事の委嘱により北京談判を小冊子におさめうる程度を目標に採った筆は、こうして止まるところなく拡大して行つて、一冊の書をなすに至つてしまつた。筆者としては更に慾が出て、その頃の日本及び支那に対する列強の外交政策を画いて、西郷、大久保、木戸といった人々の足許にその方面からの照明^{フット・ライト}を与えたく思つたのであるが、それでは益々膨脹するばかりである。そこでこの方面の事は、直接関係の事件に限り、他は総て割愛することにしたが、それにしてもこう長くなつた点は、編輯者に対して御詫びしなければならぬところである。

ただ自慰するところは、ここで取りあげた問題が、未だ系統的には何人によつてもなされなかつた一事である。最初の部分の征韓論については、余りに人口に膾炙^{かいしや}しているが、後半の北京談判については、纏つた研究敘述は、未だないようである。従つて筆者は征韓論については、大久保の外交意見を知りうる程度に止め、主力を後者にそそいだ。征韓論に関する限りは、筆者によつて新しく提供される材料はないと思うが、北京談判については、わが国において初めて紹介される資料が少なくない筈だ。それ等の出処は『註』に書いて置いたから、ここには一々これを挙ぐるの煩を省きたいと思う。

最後に予はこの機会に——必らずしもこの著書と直接関係ありというのではなしに、左の二氏に対し感謝の意を表したい。一人は中央公論社長嶋中雄作氏に對してである。この著を出版した国民学術協会は、嶋中氏の寄附金を基礎として成立したものであり、それは同氏がなしたる幾つもの文化的事業の一つである。諸

外国に比して、そうした民間文化機関が極めて少ない現状にあつては、學術振興に貢獻する凡ゆる行為が、いまし文化人によつて感謝されていい筈である。

もう一人は東洋經濟新報社長石橋湛山氏に對してである。他の場合にもそうであるが、この著においても同氏は同社員を予に貸して、材料蒐集その他の便宜を与えてくれた。予が日本外交史の完成に発足して居るのは、同氏のエンカレージメントが最も大なる動機に座する。また源川公章君が例によつて忠実に予を助けてくれたことを感謝する。

昭和十六年十月

清沢 洵

第一章 征韓論を中心に

一 大久保の外交機略

いい政治家はまたいい外交官である。一つの幹の外に對う面は外政であり、内に対するものは内政だ。

大久保利通が生い立った幕末においては、その国家はその藩であつた。国家が日本全土を意味するようになつたのは、維新の大業が成就した後のことであつて、土分の生活の基礎が藩にあり、彼等の生命が藩主によつて左右される封建制度の下にあつては、その眼界は自然に藩に限られざるを得ない。だから大久保利通と共に脱藩を計画した吉井友実が父に遺した書中にも『天朝の御為、且御國家の御為、順聖公の御遺志に随い……』(一)とあり、またこの一党に對して与えた藩主島津忠義の諭告書にも、

『方今、^{ほうこん}世上一統動搖容易ならない時節にて万一時變到来の節は、順聖院【島津斉彬】様御深意を貫き、國家を以て忠勤抽きべきを心得に候。各有志の面々、深く相心得、國家の柱石に相立、我等の不肖を輔^{たす}け、國名を汚さず、誠忠を尽し呉候様、偏に頼り存じ候。仍て件^よの如く』(二)

といい、更に大久保の日記には『是迄の處は、万々全國義不相調ざるの見留を以て、やむを得ず決心いたし候訳合』とて薩藩を以て全國といつてゐる(三)。

藩を以て國家となす考え方は、討幕の運動が進んで、慶応三年六月廿二日に王政復古の薩土盟約が出来、『国

に二帝無し、家に二主なし、政刑なだ惟一君に帰すべし』、『將軍職に居て政柄せいへいを執る。是天地間有る可らざるの理也。宜く侯列に帰し翼戴よくたひを主とすべし』というような土藩宣言を発表した後も、なお続いている。即ち同年十月八日、薩、長、芸の三藩士が、兵力を以て王政復古の大義を断行するに決し、中御門経之、中山忠能に上申した決議要目の中に『容易ならぬ御大事の時節に付き朝廷のため国家こくかを抛すて必死の尽力致すべき事』(四)とある。ここである国家が、各自の藩を指すのは云うまでもない。

この藩(国家)を代表して、四方に使う。あるいは長州と聯合を策し、あるいは提携を申し込み来たる会津を強く拒絶し、あるいはまた京都の尹宮いん(朝彦親王)、二条閔白(斉敬)、近衛忠房等の宮中上層部に対して雄弁宏辞を揮つて天下の為に長州再征の朝旨を変更しようとした。それは内政ではなくて、外交の分野に属する。この外交をなすに当つて、大久保は相手と場合によつて体当り的な策略をなすことを辞さない。

第一に盟友に対しては、自己の死をかけてその主張を貫徹した。たとえば薩藩の志士が水戸の志士と盟約して、江戸で大事を挙げんとした時、かれもその同志の一人であつた。かれはその時期に非ざる故を以て制したが、彼等はこれを聴かない。そこでその幹部の有村俊斉(海江田)に説いて耦死ぐうししようといい、『もし諸士にして我言を用いずんば、先ず我が首を刎ねて後、出京せよ』と切言してこれを承服せしめた(五)。大久保が三十一才の時だ。西郷隆盛に対してもかれは同じ手を用いた。西郷を大島の流謫るたくから救つて、浪人団の軽拳の抑えにするため東上させたのは大久保だったのだが、その西郷は、木乃伊みいとりが木乃伊みいになつて、却つて彼等と通謀した。大久保の藩主島津忠義に対する責任は重大である。かれは西郷を人なき浜辺へ誘い

出して、事情を報告し、共に死のうと云った。情にもろい西郷は直ぐ帰国することになって、問題は解決した。これを大久保の単に口先きの嚇しと取るのは可愛想である。西郷が死のうといえど死なねばならぬ。西郷は既に月照と入水したほどの純血漢だ。この時、大久保は三十三才だ（六）。

第二に大久保は对手が弱いと見れば威嚇する。薩藩は英国軍艦と戦争して、勝敗は五分五分だったにしても、攘夷の事は言の容易なる如く容易でないことを実感した。終始一貫戦場に居った大久保が、その持つて生れた進歩性から、特にこれを感じない訳はない。事実、力を最高の価値標準にする武士道においては、実力を示されると豁然^{かつぜん}として悟るのが常である。ペリー (Matthew Calbraith Perry) 来訪の時がそうであり、また薩藩と長藩が攘夷から討幕一本になったのは、実力を以ては洋夷に抗し難いことを実験によって知ったからである。尤も大久保はその後、列国聯合艦隊が摂海に迫った時、薩摩の代表者として一藩を率いて攘夷の先鋒たらんと上書しているが、これは大隈重信が批評しているように『大久保の聡明なるや、此の如き賭易き道理（外国に敵せざる事）を知らざるにあらず』、実は目的は倒幕にあったのだ（七）。

大久保は薩英戦争の跡始末をつけるために選ばれた。但しかれはまた卅四歳の微禄なる壮年者で表立った大役を仰せつかる資格はない。英国側代理公使ニール (John Neal, 1862-64) との交渉責任者は重臣岩下佐次右衛門〔方平〕を使とし、重野厚之丞〔安繹〕を応接掛としてこれに当り、薩藩から賠償金として二万五千磅^{ポンド}（六万三千三十三万両余）を支払うことになったのだが、この金の工面を引受けたのが大久保だ。かれはこれを幕府から出させようとして借用方を申込んだ。しかしその当時の疲憊^{ひはい}しきった幕府の財政としては、薩

藩の尻ぬぐいまでは出来ない。幕府は既にその生麦事件のために償金拾万磅（他に公使館襲撃事件の賠償金一萬磅）を支払わされて居る。閣老板倉伊賀守勝静が薩摩のために償金立替えを渋るので、大久保は最後の手を出して、重野、能勢（次郎左衛門、直陳）の若者を板倉邸に遣わして『所要の金を御貸与なくば、止むなく英公使を斬り、我等も割腹して相果てよう』と云わしめた。そんなことをされては堪ったものではない。板倉は三井に交渉して借金し、それを薩藩に貸与し、問題はそれで解決した（八）。

第三に大久保のつた外交手法は、奇計的な策略だ。幕府が長州再征伐をするに当って、一番困ったのは第一回征長の中心であつた薩藩が反対していることだ。そこで板倉閣老はこれを説伏するために重役の出頭を命じた。この重大使命を買つて出たのが白面の大久保である。大久保はこの日、耳聾を煩つて居ると、特に聾を粧つた。板倉が長州処分について協力を勧説すると、大久保はわざと驚いて見せ『奇怪な御仰せである。弊藩、何の罪あつて追討されるのか。併し若し弊藩にして罪があらば、速かに師を発せられて可なり、弊藩また兵を整え、備を修めて、大簏^{はた}をお迎え申そう』と云つた。板倉は遽^{あわ}てて、更に近くへ進ませて説明した。相手の氣勢を挫いて置いて、大久保は、天下の公道は、島津家が將軍家と縁故ありというが如き私的理由を以て行うべきでないとして、ガンと拒絶した（九）。そして後、京都留守居木場伝内の名で、公然薩藩出兵拒絶の書を幕府に提示し、板倉が斯様な重要書を京都重役の名では薩藩の意志とは認め難しと却下するのを、閣老に無理に面会して、これを受理させてしまった。薩藩と幕府との関係、長藩との提携及び藩内部の態度は斯くて決定し、明治維新における薩藩の指導的位置の礎石は据えられた。

二 大陸主義と内治主義

大久保が常に藩を代表し、京都、大阪、江戸において諸種の折衝に当つたことは、普通には内政家と観られる大久保が、実は外交家であることを語るものである。そして彼を成功せしめた最も大きな動力は、何よりもその外交家的な素質である。

だがこの外交的素質を、薩藩という部局的な立場から、日本全体の全国的規模に発展せしめて行つたのは、何といつても明治の新政が布かれて以後のことだ。この場合においても、大久保はその意を外政に専らにするのには、その位置が余りに内政的に重要であつた。第一には当時、外国使臣、特に英、仏公使の威勢が廣大で、自尊心高きものはこれと折衝することを好まなかつた。三條実美【1837-91】、岩倉具視【1825-83】の如きも常に之を云つていた（一〇）。第二に大久保は伊藤、井上、大隈の如きと異なつて海外留学乃至は外人との接触の機会を持たなかつた（一一）。この意味においては彼を以て固より内政家と呼ぶに差支えはない。

外政家としての大久保を知るためには二つの事件に対する彼の立場と行動を画くことが便利である。一つは征韓論に関するかれの立場であり、他は台湾事件に関するかれの外交手腕である。前者に於て大久保の外交に対する見識と哲学は遺憾なく表明された。西郷がこの問題については生命を賭けて争つたのに対し、大久保もこれについては刎頸の友を正面の對手として闘うて悔ゆることを知らなかつた。幕末から維新にかけ

て、相敬愛してやまなかつたこの二人は、異常なる国家の大問題に面しては、許し得ない政敵となつた。国家の重きに任する者の悲劇であり、またその頃の政治家の懸命なる態度の表現だ。

由来、わが国には一貫して二つの流れがある。一つは謂わば大陸派とでもいうべきものであり、他は内治派とでも称すべきものだ。その内容は国力の發展によつて異なつて来るのは勿論であつて、嘗て大陸に發展することに反対した者が永遠にそこに止まつて居るのではない。たとえば大久保の場合をとつてみても、明治六年に征韓論に反対しながら、翌年には台湾征伐に賛成している。大陸主義と内治主義の相違は、要するに前者がひたぶるに国権伸張を念願するに對し、後者は内治と外交との調和を主張するともいふのが當つてゐるであらう。これは西郷と大久保との人柄の相違である。しかもこの二つの主張は、明治維新以来、押しつ押されつ、その盛衰を繰返して、日本の外交を一貫するところの二大主流だ。そしてこの代表的なる論拠は、傑出した維新の功臣達によつて、最もよく代弁されている。

第二の台湾事件については、大久保自ら特命全權大使として北京に赴き、その得意の折衝をなして成功した。前年、征韓論に於てその基本的外交政策を示し、翌年、外交官として自身これに當るにより大久保の外交家としての真価は、最早疑われないものとなつた。この二つの事件——征韓論と台湾事件とは、従つて、外政家としての大久保を画くために、是非共並述されなくてはならぬ。

三 外遊による心境の変化

大久保の欧米巡遊中、西郷と大久保の交友は依然として親密であつた。大久保はしばしば書信を送つたし、西郷もこれに答えた（二二）。ところが大久保が明治六年五月廿六日に帰京するや、最初の間は西郷の大久保邸に赴くこと頻繁で、交情の親厚なること従前と毫も異なるところがなかつたが、時日が経つに随つて、次第にその度数が減ずるに至つた（二三）。その理由は明らかだつた。征韓論に熱中する西郷と、洋行して日本の行くべき道について、新たな心境を得て来た大久保とは、相共通し得ざるものが自然に出て来たのだ。

大久保の心境がその欧米漫遊と共に變つて来たとしたら、この偶然な欧米視察ほど、日本の歴史に重大な影響を与えたものは少ないといわなくてはならぬ。無論、大久保の持つて生れた進歩性は、外国に行かなくても時代と共に移つたろう。この点は封建性が身の髓まで自分のものとなつてゐる西郷と異なるところだ——その封建性の豊かなところが西郷の人気のあるところでもある。しかし大久保の転心は、欧米漫遊を契機として急激、かつ断然たるものがある。たとえばかれは少くとも明治二年八月までは、露国と一戦を交えるべしとの論者であつた。露国が北海を侵略するのを觀て、その禍心かしんの顕然たるを知り、我より機先を制し、戦争を覚悟してかれに対すべしとなした。かれの明治二年八月十一日の日記に曰く、

『十一日、無休日、十字【二〇時】参朝。蝦夷の評議これあり。尚又今朝條公【三條】参殿、北地出張、断然願ひ奉り候。尤決心に及び候也。段々御評議これあり、御不決也。』（二四）

とあり、かれは自ら北地に出張して其事に當ろうとしたのである。『尤及決心候也』がその決心を知るに足り、

更にまた当時の建言書も存している（二五）。この立場が四ヶ年の後に、露国と事を構えることの非なるを理由の一として征韓に反対するに変わったことは、欧米漫遊にその原因を発見せずしては説明に困難だ。

大久保が欧米から帰つて来た時は、廟議は既に征韓政策を決定していた。韓国が日本の交渉を受付けず、その上に無礼なことばかりするので（二六）、外務卿副島種臣【1828-1905】が清国に赴いた後の留守を預つていた外務少輔上野景範は閣議に提案して、陸海の兵を韓国に出してわが居留民を保護せしむること、使節を派し韓廷に直接談判を為さしむることを以てした。当時、閣議（明治六年六月十二日）には太政大臣三條実美を初め、西郷隆盛、板垣退助、後藤象二郎、大木喬任、大隈重信、江藤新平等の各参議が列したが、板垣は直ちにこれに賛して、まず一大隊の兵を釜山に送り、後に修好条約を結ぶべしと云つた。これに対し西郷は『急に陸海軍を韓国に派すれば、韓国人は日本が韓国併合の意図ありと解するであろう。これ豈、聖天子、韓国を保全する所以の道であらうや。現在に於ては陸海軍を派遣するを止め、責任ある全権大使を派し、正理公道を以て韓国政府に説き、これを反省せしめなくてはならぬ。しかも尚、かれ暴拳を逞うし、我全権大使を殺害するに至らば、その時公然罪を万国に鳴らして之を討つべきである』と云つた。流石にその事を起すに大義名分を明らかにせんとするを見るべきだ。かれは更に三條の説に対し云つた。

『大使たるものは宜しく烏帽直垂【えぼしひたたれ】を着し、其礼を厚うし、其道を正うして之に当るべし。今俄に兵を率い之に赴くが如きは断じて不可也。』（二七）

この時、西郷はペリー提督、プウチャーチン（Euphinius Putiatin）の例をひいて説いたというから、板垣

も西郷も黒船時代の経験を先例として思い出していたのであろう。西郷は『鳥帽直垂』の大使説を述べて自らその任に当らんことを請うた。かくて西郷の主張が余りに熱心なるにひかれて、結局三條もこれを容れ、遂に八月十七日（明治六年）の閣議に於て西郷を遣韓大使に任すべく、唯その発表は岩倉大使の帰朝を俟つて行うことに決した。時に天皇は箱根に暑を避けさせ給うたので、三條は行在所に候し廟議内定の状を奏上して宸裁を仰いだ。

四 財政と政治の調和

大久保が帰朝したのは明治六年五月廿六日だが、かれは征韓論に対しては明らかに反対であつた。それには二つの理由があつた。一つは日本はまず内治を整え、国家富強の基礎を確立しなくてはならない時であつて、今、外国に事を醸^{かも}すが如き時期ではないというのである。これはかれの反対論の理論的基礎をなすものであつて、後に示す意見書に現れている。

大久保は内治については、維新重臣の恐らくは何人よりも通曉^{つうぎょう}していた。それは彼の性格と頭脳からも来ているであろう。維新の大業に當つて、かれの着眼は常に財政と政治との調和を離れなかつた。しかしそれ以上に、かれをして内治に心を用いしめた理由は、大蔵卿というかれの地位が与かつて力があつた。当時、大蔵省はその必然の理由から権力を増し、往々太政官をも圧する勢いであつて、しばしば問題になつたが

(二八)、その大蔵省にかれは明治四年六月廿七日に大蔵卿として専任することになった。かれが進んで遣外使節の一行に加わったのは、この大蔵省改革のための一手段であつたことは、四年九月十二日に岩倉に宛てた書翰で明らかだ。

『上略』段々、近來の様子を熟察いたし候に、大蔵省の権盛んに相成り、是非殺さず候ては相濟まらずと申す論説これあり、既に左院においても彼是異論相立ち、布政使の事等に付き正院へ申立相成り候とか。よつて将来を熟思洞察いたし候に、不日必らず不測の弊を生じ、又々御変革とか申す事に相成り申すべし〔下略〕(二九)

大久保が予想した通り大蔵省内には、果して問題が起り、大蔵大輔井上馨【1835-1915】と、大蔵少輔事務取扱渋沢栄一【1840-1931】とは五年五月七日職を辞した。かれの欧米漫遊中の出来事である。井上と渋沢の解職理由は政府が国家財政の如何を顧みずに事を挙ぐるに急であるのに反対なためであつた。井上は辞職の際上れる財政意見書に云っている。

『今全国歳入の総額を概算すれば四千万円を得るに過ぎずして、予じめ本年の経費を推計するに、一変故なからしむるも、尚五千万円に及ぶべし。然らば則ち一歳の出入を比較して、既に壹千万円の不足を生ず。しかのみならず、維新以来国用の急なるを以て、毎歳負う所の用途も亦將に壹千万円に超えんとす。其他官省旧藩の楮幣【紙幣】及中外の負債を挙ぐるに、殆ど壹億貳千万円の巨額に近からんとす。故に之を通算すれば、政府現今の負債實に壹億四千万円にして償却の道未だ立たざるものとす。』(二〇)

財政難は井上のいう如くであるのに(二二)、新興日本の要求は満足するところを知らなかつた。徴兵令を

しいた陸軍省、交通運輸の完備に乗出した工部省、全国に大中小学を設置した文部省、法権の独立統一を図つて全国に裁判所を新設した司法省とは、何れも巨額の予算を要求した。井上大輔が緊縮政策を標榜しながら、陸軍の改革と、徴兵令発布に要する項目のみを容認したのは、陸軍大輔山県有朋が同じ長州派であるからだとの攻撃も猛烈であつた。

大久保は専門財政家の渋沢栄一の如きが見てこそ、『いま国家の柱石とも言われる人でありながら、理財の実務に通ぜざるのみか、その原理さえも了解していない』（二三）との批難もあるうが、財政と政治との調和は前述の如く何人よりも承知していた。この時に征韓を実行せんとする政策に対しては、かれとしては何としても賛同し得なかつた。

五 西郷の身を思う

もう一つ大久保が征韓論に反対した理由は西郷の一身を思うからであつた。西郷は自ら韓国に使せんことを、殆んど死を賭けて主張した。外務卿副島種臣が清国から帰朝するや、自身韓国への使臣の任に当らんことを建議したが、西郷は副島の私邸に抵つて、大使の任を譲らんことを懇請して、その了解を得たのである（二三）。そしてこの事の貫徹を、板垣、副島等を通じて努力した。その切々たる気持は西郷が板倉に与えた手紙に最もよく現れている（西郷は七月二十九日から九月三日までに八回、板垣に書を贈っている）。

『上略』さて朝鮮の一条、副島氏も帰着（七月二十六日帰京）相成り候て、御決議相成り候哉。もしいまだ御評議これなく候わば、何日には押して参朝致すべき旨御達相成り候わば、病を侵し、罷り出で候様つかまつりべく候間、御含下されたく願ひ奉り候。いよいよ御評決相成り候わば、兵隊を先に御遣し相成り候儀は、如何に御座候哉。兵隊を御繰込相成り候わば、必ず彼方よりは引揚候様申立候には相違これなく、其節は此方より引取らない旨答候わば、此より兵端を開き候はん。左候わば、初よりの御趣意とは、大に相変じ、戦を醸成候場に相当り申すべき哉と愚考つかまつり候間、断然、使節を先に差し立たれ候方、御宜敷はこれあり間敷哉。左候得ば、決して彼より暴挙の事は、差見得候に付、討つべきの名も慥に相立候事と存じ奉り候。兵隊を先に繰込み候訳に相成り候わば、樺太の如きは、最早、魯より兵隊を以て保護を備え、度々暴挙もこれあり候事故、朝鮮よりは先に保護の兵を御繰込相成るべきと相考え申し候間、旁往先の処、故障出来候わん。夫よりは公然と使節を差向け候わば、暴殺は致すべき儀と相察され候に付、何卒私を御遣い下され候処、伏して願ひ奉り候。副島君の如き立派の使節は、出来申さず候得共、死する位の事は、相調え申すべきかと存じ奉り候間、宜敷希い奉り候。此旨略儀ながら書中を以て御意を得奉り候。

頓首、

七月二十九日

追啓、御評議の節、御呼び立下され候節は、何卒前日御達し下され度。瀉葉【下痢止め薬】を相用い候えば、決して他出相調え申し候間、是又御含置き下されべく候。』（二四）

西郷が『副島君の如き立派の使節は出来不申候得共、死する位の事は相調え可申かと奉存候』とあるのは、

その心事の程を知るに足るであろう。西郷は続いて八月三日に三條と板垣に書翰を送り、更に八月十四日に板垣に対し、速やかに閣議を開いて大使問題を解決せられんことを要望している。

『上略』就ては、少弟差出だされ候儀、先生の処にて御猶予成し下され候ては、又々遷延つかまつるべく候に付き、何卒振切て、差遣い下され候処御口出し成し下され度。是非、此処を以て、戦に持込み申されず候ては、迎も出来候丈けに御座なく候に付き、此温順の論を以て、はめ込み候えば、必ず戦うべき機会を引起し申すべき候に付、只此一挙に先立、死なせ候ては不便抔と、若し哉姑息の心を御起し下され候ては、何も相叶い申さず候間、只、前後の差別あるのみに御座候間、是迄の御厚情を以、御尽力成し下され候えば、死後迄の御厚意ありがたい事に御座候間、偏に願ひ奉り候。最早、八分通は参掛居候付、今少の処に御座候故、何卒希み奉り候、此旨略儀ながら書中を以て御願旁御意得奉り候。』(二三)

西郷の手紙の中に『死なせ候ては不便抔と若哉姑息の心を御起し被下候ては』とか『死後迄の御厚意難有』とか盛んに死を想うているのは注意すべきだ。西郷は十六日の夜、三條を其の私邸に問い膝詰談判しているが、十七日に左の如き書を板垣に贈った。

『上略』此節は戦を直様相始め候訳にては決してこれなく、戦は二段に相成り居り申し候、只今の行掛りにても、公法上より押詰め候えば討つべきの道理はこれあるべき事に候え共、是は全く言訳のこれあり迄にて、天下の人は更に存知これなく候えば、今日に至り候ては、全く戦の意を持たず候て、隣交を薄する儀を責、且、是迄の不遜を相正し、往先隣交を厚する厚意を示され候賦を以て、使節差向けられ候えば、必ず彼が輕蔑の振舞い相顕れ

候のみならず、使節を暴殺に及び候儀は、決して相違すいこれなき事に候間、其節は天下の人、皆あ拳げて討つべきの罪を知り申すべく候間、是非此処迄に不持参候ては相済まず場合に候段〔中略〕何卒、今日御出仕成り下され候て少弟差遣させんわされ候処、御決し下され度、左候えばいよいよ戦に持込申すべく候に付、此末の処は、先生に御譲り申すべく候間、夫迄の手配は御任し下され度合掌奉り候。〔下略〕（二六）

ここでも西郷は韓国に西郷が行けば『使節を暴殺に及候儀は決して相違無之事に候』と死を云つて居る。従つて若しこの時、西郷が韓国に行つて、しかも韓国が彼を暴殺しなかつたならば、どうしたかは想像して興味ある点である。いずれにしても西郷の征韓論は、およそ四つの原因から出発しているであらう。第一は彼自身の行き詰りだ。封建的心境は時代と共に移り得ず、その上に旧主島津久光の恨みを買ひ、純情なる彼は、自らの巨体を持て余して、武士らしい死場所を求めて居たのである。この点は大隈重信の觀察が当を得ていよう。

『明治五年夏、陛下は龍駕りようがを薩州の遠地に枉かげ、親しく島津二位〔久光〕を諭さとさせたまう。是れ、去年西郷上京に當り、二位公の間に対し、廃藩の意なきに答えながら、遂に廃藩を断行して顧慮する所なかりしにより、二位公大に憤激し「西郷・前言を食みて吾を売りたり」とて、深く之を啣くはまれけるを以て也。かくの如くして西郷は一時の重望を負ひ、百年の壮志を抱きて朝に立ちしも、諸事心と違ひ、志望を達する能わす。前には旧君の激怒して、痛く之を難責するあり、後には群少不満、新政を攻撃して之に援引するあり。西郷も進退しんたい維きれ谷やまり、乃、人事を抛なげ世を遁のがれんと意を決するに至りしが、図らずも対韓問題の勃興するあり。渠則、千繞せんぎやう万匝まんさくの重圍中に一

条の血路を開き得たるを思い、其苦悶を遣るは、之を措きて他に其途なしと爲す。扱こそ、熱心に問罪使を発せんことを主張し、且、自其任に当らんことを切望したるに似たり。』(二七)

右は大隈の当時の事態に対する批判であるが、序だから大隈の大久保と西郷に対する觀察を引用して置く。かれは西郷を以て『世上に称する如き大人物にあらず』といい、大久保の方を遙かに高く買っている。

『當時、大久保は枢要の地に在りながら、諸事に沈黙にして所謂改革革新の決行に逡巡躊躇する所ありしを以て、本戸は大久保の心事に就きて頗る危疑する所ありしなり……大久保の性行に至りては、容易に其意氣を表面に顯わすことなく、且つ又容易に決断することなしといえども、或る場合に於ては非常に決断の資に富み、且つ一たび決断せば、千艱万難を排しても、必ず之を遂行するの資性にして、其意氣の猛銳なる所、殆ど能く之に當るものあらざりし程なり……初め余〔大隈〕は思えらく「大久保は極端の保守主義を執れる者にして、本戸は稍や余等の執れる所に近き進歩主義を執れる者なり」と。然るに一朝、内閣に入りて親しく其人々に接し談論するに及び、大久保も決して余の予想の如き極端なる保守主義者にあらず、寧ろ進歩主義者と称するも可なり、然るに其藩主と郷友との關係より意の如くならずして決行に躊躇する所あり、遂に余等をして極端の保守主義を執れる者と誤想せしむるに至りしを覚れり。

西郷は世上に称する如き大人物にあらず、政治の才に於ては大久保にも、本戸にも劣れり。』(大隈は斯くいつて西郷の推挙したる津田出のことを書いている)(二八)

西郷及びその同志の征韓論の第二の理由は、幕末の武士が急に太平になり、その精力は一劍を撫して、い

ずこかに洩さざるを得ない事情にあつた。この解決策の一つとして征韓論が唱道されたのである。西郷の同志板垣退助がこの辺のことをよく書いている。

『明治五年、新政府の小康を見るや、人心早く既に情氣を生じ、腐敗は殊に軍人に甚しきものあり、偶・山城屋和助の屠腹事件あるに及んで、板垣は西郷を訪う、西郷曰く「予は北海の地に退隠して老余を養わんと欲す」と。板垣切に其不可なるを説き、今日の腐敗墮落を救済するの責任は、我徒これを負わざる可らずと論談し、爾来、二人稍劃策する所あり。尋いて朝鮮事件の起るや、二人以為らく「此時機失うべからず、今日の腐敗墮落は維新の戦・猶未足らざるものあればなり。故に此機を利用せば、庶幾わくば士氣を一振するを得ん」と。八月、三條首相に請い、陸軍中佐北村重頼、同少佐別府晋介を韓国に、池上四郎、武市熊吉を満洲に派遣し、地理・風俗・形勢を視察せしむ。又二人の志に出ず。』(二九)

『維新の戦猶未足らざるものあればなり』というのは、西郷らしい考え方である。ここに国内政拾の解決策としての征韓論の根拠がある。

第三の理由は藩閥相互牽制の具としてである。副島、江藤、後藤は何れも征韓論者であるがその心事は同じではない(三〇)。『江藤の心事は多端なれど、一言にして之を蔽えば、事を外に構え、以て薩長の権力を打破するに在り。後藤も亦其の意見を同くし、相共に大隈を勧説する所あり、然れども大隈は之を拒絶し、薩を援けて長を挫くも、憂患は更に甚しきを加えるを説き、利害を勧告して前議を翻さしめんとしたり』(三一)

i 陸軍(用達商人山城屋(山県有朋の知遇)が、陸軍からの借金を返すことが出来ず、証書を燃やし、割腹自殺した。

という吉田東伍博士の説明は、その辺の事情を語っていよう。

第四にはその大陸政策遂行の本意からである。韓国は既に昔から日本の関心を有するところであり、その韓国が無礼なる仕打のみする上に、露国代理公使ビューツォフ (Eugenie de Bützow, 1872-73) は本国政府の意を受けてか、副島に対し日本が仮に韓国に事を起しても、露国では之に干渉の意がない旨を告げて居り、大陸論者としてはこの時が好機会だと考えたであろう。

征韓論の理拠するところは、以上の如くであるが、これ等を通じて明らかなのは、西郷がそこに死場処を求めていることと、また西郷の遣韓大使は日韓戦争の名分を求めるためであつて、結局は戦争に行きつくことである。これについて、大久保はまず西郷が死ぬことに反対であり、同時にまた戦争にも反対であつた。更に征韓反対論の中には留守内閣が、約に背いて種々なことを決定した反感もあつたに違いないが、それ等はこの文の範囲ではない。

六 西郷、大久保の対立

大久保は政府の召還によつて岩倉、木戸等より一足先に帰つて来た。国内では征韓論が起るや三條は西郷の大使問題を決裁し得ず、大久保と木戸に至急帰朝するように命令したのである。元来ならば木戸と大久保とが同船して帰るべき筈なのが、洋行中より感情の衝突を来たした関係もあつて別な船をとつた(三二)。大

久保が帰朝したのは六年五月廿六日、木戸は七月廿三日、岩倉（伊藤博文、山口尚芳）は九月十三日であつた。大久保が帰つて来てみると、廟堂びやうどうは征韓党で占められていた。参議の大隈、大木は旗幟不鮮明だが、積極的な反対論者ではない。その上に大久保は大蔵卿であつて閣議に列することが出来ない。かれとしては、せめては岩倉が帰つて来るまではどうするわけにもいかない。かれは一応留守中の事務整理をすませると、八月十六日、飄然ひょうぜんとして、箱根から富士登山、上方各地へと関西旅行に出かけた。征韓論が正院で閣議の問題となり、西郷が遣韓大使に内定したのは、その翌日八月十七日のことである。正式発表を岩倉大使帰朝後としたことは前述した通りだ。

この間の大久保の心事は、かれが東京出発の前日（八月十五日）に巴里にある大山巖、村田新八に与えた手紙で明らかだ。

『上略』当方の形光は追々御伝聞もこれあるべく、実に致し様もなき次第に立至り、小子帰朝いたし候ても、所謂蚊山を背負の類にて、なすところ知らず、今日迄荏苒じんぜん【はかどらず】、一同手の揃そろいを待ち居り候。仮令有為之志ありといえども、此際に臨み、蜘蛛の捲き合をやつたとて寸益もなし。且又愚存もこれあり、泰然として傍觀仕候いたしまさ。国家の事、一時の憤発力にて暴挙いたし、愉快を唱える様なることにて、決して成るべき訳なし。尤其時世と人情の差異に關係するは、無論なるべし。〔中略〕当今光景にては、人馬共に倦み果て、不可思議の情態に相成り候。追々役者も揃そろい、秋風白雲の節に至り候わば、元氣も復し、可見の開場もこれあるべく候。〔下略〕（二三）大久保が『所謂蚊背山を負うの類にて、なす所を知らず』といい、『国家の事、一時の憤発力にて暴挙い

たし、愉快を唱える様なる事にて決して成るべき訳なし』といい、『追々役者が揃い秋風白雲の節に至り候わば』というは、暫らく傍觀して、後者の揃うのを待つ^{まち}の意であらう。八月十六日に東京を出発したかれは悠々自適して九月廿一日に東京に帰つて来た。

東京における政治情勢は、しかし左様な悠暢^{ゆうちやう}なものではなかつた。岩倉は帰朝したが、かれの面したのは既に内定した閣議である。征韓反対の岩倉は如何にすべきか。かれの頭に浮んだのは木戸と大久保とを廟堂に列せしめて、征韓陣營に当らしめることである。併し大久保と木戸は不仲である。その上に木戸は参議だが病氣の故に参朝することが出来ないで、木戸の了解を得て大久保を参議に就任させるの外はない。木戸は一言の下に賛成した。交渉に赴いた伊藤が岩倉に与えた手紙に『早速、木戸へ罷り越^{まか}し、尚又熟議仕候^{いたすしう}処、同人に於ても大久保拜命の儀第一着と相心得居候趣に御座候』(三四)と云つて居る。国家危急の場合には感情などは二の次である。

しかし困つたことには肝心の大久保が何といつても参議就任を承諾しないのである。三條、岩倉、伊藤、黒田が総出で説いたが大久保は頑としてこれに応じない。一方、西郷の閣議開催に対する催促は急だ。大久保無くしてこの戦いに勝算のないことは、三條の岩倉に対する手紙が代弁している。

『(上略) 初二日(十月)よりは、尊公(岩倉)にも御出勤に相成り候得ば、(中略) 大久保の処、偏に奉命を相祈申候。反覆相考候ても、同人奉命これなくては、千万困難と存候。(中略) 同人の進退、大關係ある事と存候得ば、只管^{ひたすら} 同人の拜命を祈念仕候^{いたします}。(下略)』(三五)

大久保としては何と説かれても、そう簡単に出馬は出来ない。第一にそれは竹馬の友、西郷との死を賭けたの正面衝突を意味する。第二に木戸との性格上の対立から折合いが懸念される。だから彼は岩倉に宛て辞意を縷述した書翰の中で『木戸先生を根本にして御一定これあり候外、見込これなき旨相答え置き候次第に御坐候云々』(三六)と書いて木戸中心の政治を主張して居る。第三に島津久光及び旧藩の連中が、かれに對して明らかに敵意を有していることは、今に始つた話ではない。第四にかれが出馬してこの問題の片をつければ、後の事は自然にかれが責任を以て收拾しなければならぬ。軍力の中心たる西郷の問題だけを考へても、それは容易ならぬことである。

飽くまで参議就任を拒絶していた大久保も、三條と岩倉の兩人が署名して、遣韓使節派遣を延期する旨の書面を与えるに及んで遂に承諾した。『此上は御旨趣を遵奉し惟命惟従、謫劣を顧みず、碎身つかまつるべく候』とその返書の一節にある(三七)。この手紙が明治六年十月十日で、大久保の参議就任の発表が十二日。それから延ばしに延ばして来た閣議は、その翌々日の十四日である。西郷は既に決心の意を示して『前以ケ様の事迄、御聴き入り奉り候義、万々恐懼の仕合しあわせ〔巡り合わせ〕に御座候得共、若し哉相變じ候節は實に致し方なく、死を以て国友え謝し候迄に御座候間、其辺の処、何卒御憐察成り下だされ置き度、是又願ひ奉り候』(三八)とある。大久保は『碎身可任候』といい、西郷は『死を以て国友え謝し』という。従来相携えて維新の大業を完成するに努力して来た莫逆の親友は、ここに死闘に於て相見えることになった。西郷の側には板垣、副島等があり、大久保の側には岩倉、木戸その他があるが、突き詰めればその闘將は西郷と大久保だった。

七 身命を賭する閣議の激論

征韓論を繞る閣議^{めく}ほど、生命まで打込んだ廟議は嘗てなかったであろう。そこには最早、友人関係も感情問題も存しない。あるものは国家のために考えて是なりとする主張の対立のみである。そしてこの場合、欧米漫遊組が全部挙つて非征韓党になつたのは洋行組の人選そのものにもよるが（西郷は洋行を勧められたが行かなかつた）新しく世界を視たことの影響を無視し得まい。明治六年十月十四日の閣議（岩倉帰朝彼の第一回目）には、木戸は病氣の故に出席出来なかつたが、他は全部出席した。

征韓党

非征韓党

太政大臣	三條実美	(三十七歳)	右大臣	岩倉具視	(四十九歳)
参議	西郷隆盛	(四十七歳)	参議	大久保利通	(四十四歳)
同	板垣退助	(三十七歳)	同	大隈重信	(三十六歳)
同	江藤新平	(四十歳)	同	大木喬任	(四十三歳)
同	後藤象二郎	(三十六歳)	同		
同	副島種臣	(四十六歳)	欠席	木戸孝允	(四十一歳)

(註) 副島は大久保の参議就任の均衡上、十月十三日に参議に任命された。

この閣議に於て征韓党は西郷、板垣、副島が交々議論^{こまも}をなしたが、非征韓党で発言したものは岩倉と大久保だけであつた。しかもその岩倉は、韓国問題を遅延させるために、樺太問題をまず解決すべきを主張した。

議論が樺太問題から露国との武力衝突に及ぶ戦略論になると、それは西郷の領分だ。西郷は露国を相手にするのにも、韓国北部若しくはポシエト湾を経略する必要がある、それには矢張り韓国大使派遣が先決問題だ、若し政府の意志が露国を先にし、そこから韓国問題を解決せんとするのなら、その遣露大使を自分に任命して貰いたいというのである。樺太、韓国の何れを先にするやというのであれば、この議論では岩倉の受太刀になるのは当然だ。

ここで必然に大久保の内治論が登場せざるを得ない。西郷としても前述の如く、その正面の相手は大久保であることを知っていたので、その論法を大久保に向けた。もしその意見が容れられざるにおいては断然辞職する旨をも附言した。大久保は、出来るだけ西郷と衝突したくなく、その論述の形式も最初岩倉に向って西郷派遣の不可を陳したのであるが、併し問題の本質は左様なところに止まっていられるものではない。両者の激語はついに感情までも加わるに至った。大隈が会議半ばに、伊藤博文と共に横浜に赴いて某外人と会見の約あり、退席せんとするや、西郷は巨眼一睨、斯かる重要な会議の際に、一外人の会宴の約あるの故を以て席を辞するのは何事ぞと詰ったので、大隈は黙然として再び席に復したという（三九）。

大久保の内治論に対して相手も黙してやむべきではない。板垣、副島はその改善の期限と程度とを示せという。大久保は『目下、内務省を新設する計画あり、五十日を待たれたし』と答えた。板垣は西郷に、暫らく待たれては如何と計ったが、西郷は『斯かる国家の大事は一日と雖も猶予することが出来ぬ』と断乎として一蹴した。かくてその日には決せずして翌十五日に再開することになった。

第二回閣議は十五日午前十時に開会した。出席者は前日の通りだか、西郷のみは、昨日既に述べべきは述べ、閣議の決定を待つて進退を決するばかりだとあつて閣議に列しなかつた。この日も論議は依然繼續した。三條、岩倉は西郷辭職の影響を慮つて結局、西郷の遣韓大使説を承認した。大久保の日記（十月十五日）には『実に西郷進退に關係候ては御大事に付、やむを得ず、西郷見込通に任せ候処に決定いたし候との御談故……』（四〇）とある。ここに於て大久保は、その前晚に話したように裁定は三條、岩倉に任せたことであるから『御異存は申し上げず候得共、見込に於ては断然相変わらない旨申上候』（四一）というので、その場で断然辞意を表明したのである。

大久保の辞表は十月十七日に三條へ提出された。辞表と共に左の一書を添えた。

『小臣事無量の天恩を蒙り、殊に殿下の懇命に預ること亦浅からず。實に感佩する所に候。然るに今日に至り、恐縮の至りに堪えず候得共、奉職の目的相立ち難く、辞表差出候。暗愚にして漫ろ重任を汚し候儀、今更赧顔至極に御坐候。今日の事、何様の御沙汰を拝承つかまつり候ても断然心決しつかまつり候に付、速に御放免下され候様万禱りつかまつり候。さりながら、国家の事、度外に置候心事、毛頭無御坐候間、若し禍い端相開き候わば、兵卒とも相成り、一死を以て万分の一を報し度微衷に付、其節に臨み候わば、御垂憐を賜り候様、今より願ひ奉り置候。必ず進んで御依頼申上げ奉りべく候。誠惶々々。』（四二）

いま奉職の目的相立ち難いから辞表は提出するけれども、禍端相開かば兵卒と相成り一死奉公したしとは、大久保の心事を云い得て余蘊なきものであろう。大久保はこの辞表を三條に手交した。大久保と共に木戸、

大隈、大木も一致聯袂^{れんべい}、辞表を提出した。征韓党の大勝利である。

だがこの大久保の断然たる態度は、二つの結果を齎^{もたら}せた。一つは岩倉の腰を強くしたことだ。元来、岩倉は征韓論反対だ。ただ西郷の職を賭けての決心に、その影響を恐れて西郷任命に賛成したまでだ。今、大久保が辞職したのを観て、かれもまた進退を決することを覚悟した。もう一つの結果は、一層重大だった。三條が心痛の極、病氣になったことこれである。この三條の病氣は、以前からの引続いた苦慮の結果もあつたろうが、その直接の原因は大久保の辞表提出によることは大久保の日記によつてこれを推察することが出来る。

『十月十七日 金曜日 今朝八字〔八時〕、條公へ参上、辞表差出、趣意書差上候。今朝の御様子、よほど御周章の御様子に候。黒田子〔黒田子爵〕入来、得能〔良介〕氏入来。』(四三)。

この三條の病氣について大久保は黒田清隆に書を送つて『今暁より太政大臣殿、大病相発、人事も御不通の由、凡の御様子^{うけたまわ}承^{うけたまわ}候得ば精神御錯乱の趣に御坐候。実に驚駭^{きやうがい}に堪ず』(四四)と云っている。当の責任者三條が病氣になつて、事態は一変せざるを得ない。殊に西郷は頭脳においても、弁舌においても、駆引においても到底大久保の敵ではない。

八 征韓論の理論的根拠

歴史の偶然性ということが、この時ほど考えられることはない。前述の如く征韓論は既に二重の決定を見第一章 征韓論を中心に

た。第一は岩倉一行が外遊中（八月十七日）であり、第二回は十月十五日だ。この時には最高責任者三條と岩倉とが合議の結果で、不同意を明言したのは大久保だけである。残る問題は上奏の手続きのみである。しかも越えて十七日の閣議には岩倉は病み、大久保、大隈、大木は何れも辞表を提出して出席せず、この所西郷以下征韓論者独占である。そこで西郷としては、この場合（一）閣議前に征韓論者の陣営を強化して地固めをして置くか、（二）然らざれば時期を逸せず、十七日に三條をして上奏、御裁可を請わしむべき筈であつた。事實、西郷は即日上奏を三条に迫つたが、三條はせめて一日の猶予を乞い、もし明日岩倉が登閣しなかつたら、自身責任を以てこれを実行する旨を断言した。西郷が是非にというのを、後藤象二郎が、一日のことであれば、明日まで待つも差支えないではないかと口を出し、西郷もその上の主張も出来かねてこれを納得した。豈^{あに}図らんや、これが全局を転換し、それがまた従つて日本の将来に対し、重大なる影響を与えようとは。大久保が得意の政治工作に出て、征韓党覆滅の芝居を打つのを見る前に、少しくどくはなるが、今一度西郷及び大久保の征韓論の内容を検討する必要がある。

西郷の征韓論の内容については前掲の板垣に宛てた西郷の書翰でその大体を知りうるし、西郷の思想を検討することを目的としない本稿においては、これを詳述することを避けるが、それが大陸政策の本流を代表していることはいうまでもない。この征韓論は二つの面を有する。第一は大陸発展を目がける東方政策である（四五）。遅く目覚めた日本が、將に韓土に迫らんとする外国勢力と拮抗せんがため、まずそれに先んじて、少くとも優越なる地位を占めんことを企図したのである。これをなすに当つて、西郷は外交上にも万全の策

をとることを忘れなかった。露国と提携し、進んで清国の韓国及び台湾に対する関係如何を明らかにすることにとつとめた(四六)。西郷が『護兵一大隊差出だされべし』の議に断然反対して、却つて暴虐なる韓国に対し『是非交誼^{こうぎ}を厚く成され候御趣意貫徹いたし候様これあり度^{たく}』(四七)、なおそれに拘らず大使虐殺等のことあらば、その時には断然たる処置に出ずべしといつてゐるのは、かれが国際関係において大義名分の必要なることを認識していたのである。三條に提出した西郷の書翰にこの辺の意志を表明して余りがある。

『いまだ十分尽さざるものを以て、彼の非をのみ責候^{せめ}ては、其罪を真に知る所これなし。彼我共疑惑致し候故^{ゆえ}討入も怒らず、討るるものも服せず候付、是非曲直判然と相定候議肝要の事と見居^{みすえ}云々』(四八)

韓国を日本の勢力範囲に帰せしめる点に於ては、西郷を頭目とする大陸論者は一致したが、その後の対露政策においては必ずしも一致しなかつたようだ。これが不一致を暴露しなかつたのは、征韓論が実行の手前で挫折したからである。即ち板垣の如きは露国との握手論者であつて、日英同盟前後の伊藤博文の立場と似通つてゐる。板垣は曰く『また我国の外交政略は露国との交を厚くして、東洋に重きを持すべしと為せり。故に明治五年露国王子の来遊に際し、厚く之を遇し、露国の望を繋ぎたり。是を以て、彼の征韓論に付、其議合わず、余等同志の袖を聯ねて朝を退くや、露国公使は、大に失望したるの事あり』(四九)と。副島も大體に於て同論だ。

この板垣の説に対し西郷は武人として、その大陸政策が結局露国と衝突するに至るであろうことを疑わなかつた。この点は後日の山県有朋、桂太郎の立場に近似している。西郷はアレキサー太公の招待会にも、独

り列席しなかったが、太公は西郷と会談せんことを欲し、その旨を受けて三條、副島は態々わざわざその来会を促した。然るに西郷は副島に『足下請う、幸に僕の言を太公に伝えられよ。西郷は戦争好きなり、故に我国に向つて戦を挑むものあらば、西郷は、何時にても之が相手たるを辞するものに非ずと告げられたし』といつてとうとう出席しなかったという（五〇）。西郷は予てから北海道の警備に注意するところあり、明治四年九月には陸軍少将桐野利秋を北海道に遣して調査せしめ、その復命に接し、札幌に鎮台を設置し、自らその司令官たらんとした。かれは論じている。

『今日の御国情に相成り候ては、所詮無事に相済みべくもこれなく、畢竟は露国と戦争に相成り候外これなく、愈々戦争に相決著けつちやくに相成り候ては、直に軍略にて取運び申さずば相成らず、唯今北海道を保護し、夫にて露国対峙相成るべき哉。さすれば弥いよいよ以て朝鮮の事御取運びに相成り、ホッセツト【ボシエツト湾】の方よりニコライ【ニコライエフスク】までも張り出し、此方より屹度きつと一步彼地に踏込んで此地を護衛し云々』（五一）

これによつて見れば、丙郷は北海道の警備のみを以ては不充分であるから、韓国問題を決定し、更に沿海州方面に進出する意図があつたのを知るべきだ。またこの点に於ては副島、板垣の見透しよりも正確で、その当時の征韓論断行は、仮に副島が信じたが如くに、その時に露国が出て来ないにしても、日露衝突は決して明治卅七年を待たなかつたのは明らかだ。

征韓論の第二の面は固より国内問題である。これより先、陸軍少将鳥尾小弥太の如きは西郷に説いて、『故に今日の計は断然武政を布しきて、天下柔弱輕佻の氣風を一変し、国家の独立を全うする為には、外国と一戦す

るの覚悟を取るを以て上計と為す。是れ国を興すの早道なり〔中略〕今此武政を立るの方案は先ず全国の粗税三分して、兎に角其二分を陸海軍に費やす事と定め、而して已に土族の常職を解きし者を従前に引戻し、全国の土族を配して悉く六管鎮台の直轄となし、嚴格の法律を立てて之を制裁し、丁年以上四十五歳迄の男子は残らず常備予備の兩軍に編すべし。』(五二)

といっている。この文中『文明開化と称し、米を母とし、仏を父とし、妄に風を移し、俗を易え、傲奢淫蕩、衣服を金玉にし、飲食を醇醴美酒にす。是皆弱士情夫の国家を誤るもののみ』という如きは、所謂欧米追従に対する反抗であつて、西郷は固より思想系統に於てこれと一脈相通するものがある。この鳥尾の献策は明治六年春夏の交であつたが、西郷は岩倉一行が旅行留守の間は約に従つて何等内治問題に手を触れないと、この提言を拒絶した。鳥尾はこれに反し、一行が帰朝すれば出来なくなるから留守の間に断行しろと勧めた。クー・デタの勸説だ。

こうした思想的背景を有して、部厚な中堅層は時代の傾向に不満な上に、職を失なつた土族がその精力の吐け口に窮して居る。それは社会問題として由由しい事態を惹起しそうである。現に明治四年七月の廃藩置県から明治十年二月の西南戦役に至る約六箇年間に、そうした社会的意味を持った暴動の重なるものだけを拾つても三十幾回の多きに上つている(五三)。西郷はこの四十万余の失業土族の選手である。かれはこの吐け口を征韓論に発見した。事実また、この圧力に抗しかねて、征韓論に反対した大久保は台湾征伐には自ら全責任を負い、その尻拭いのために北京にも出張したのである。

九 大久保の内治主義の理拠

西郷の征韓論の主張が、整備統一されたものが少ないに對し、大久保の征韓反對論はかれの手記が残存して、その論拠は極めて明瞭なるものがある。大久保は西郷一派が征韓論の理由としたところを以て、これに反對している。即ち維新大業が成就して、国内なお不安であること、その事が朝鮮の役を起すべからずとするのである。また国内的には財政の窮乏をいい、国外的には交戦に乘じ、却つて英、仏をして漁夫の利を占めしめる懼れあるを論じた。大久保の議論は論策としても、現時なおその大要を紹介する必要がある。

『凡そ国家を経略し其疆土きやうど【国境】人民を保守するには深慮遠謀なくんばあるべからず、故に進取退守は必ず其機を見て動き、其不可を見て止む、恥ありといえども忍び、義ありといえども取らず、是其輕重を度り時勢を鑑み大期する所以なり、今般朝鮮遣使の議あり、未だ俄とわかに行うべからずとせし者は、其宜く鑑み厚く度はかるべき者あるを以なり、故に其旨趣を左に掲ぐ。

第一条 皇上の至徳に依り、天運を挽回し非常の功業を建て、今日の盛を致すと雖も、御親政日未だ久からず、政府の基礎未だ確立せず、且一旦にして藩を廢し県を置く等、実に古今稀少の大変革にして、今日都下の形体を以て臆見する時は、既に其事結尾に至るが如しと雖、四方辺隅に至ては、又之が為に所を失い産を奪われ、大に不平を懷くの徒実に少なからざるべし。〔中略〕一昨年より今歲こんさいに至る迄、或は布令の意を誤解し、或は租税の増加せんを疑念し、辺隅の頑民がんみん容易に鼓舞煽動され騷擾そうじょうを起すにより、止を得ずして鮮血を地上に注げる既に幾回

ぞや、是實に能慮るべき所の者にして、未俄に朝鮮の役を起す可らずとするの一なり。

第二条 今日已に政府の費用莫大にして、歳入常に歳出を償ふこと能わざるの患あり。況や、今禍端を開き数万の兵を外出し、日に巨万の財を費やし、征役久を致す時は其用費又自ら莫大に至り、或は重税を加え、或は償却の目算なき外債を起し、或は償ふこと能わざるの紙幣を増出せざるを得ず。〔中略〕且現今我国の外債已に五百万有余にして、其償却の方法に至て未だ確然たる定算なく、又定算あるも恐くは此一举に因て大に目的の差違を生じ、殆ど救うべからるの禍を招くに至らん、是大に憂うるべき所の者にして、未俄に朝鮮の役を起す可らずとするの二なり。

第三条 即今政府の諸業を起し富強の道を計る、多くは数年の後を待ち成功を期したる者にして、則海陸、文部、司法、工部、開拓等の諸業の如き、皆一朝一夕の能く効を致す所に非ず。〔中略〕然るに今無要の兵役を起し、徒に政府の心力を費やし、巨万の歳費を増し、幾多の生命を損し、庶民の疾苦を重ね、終に他事を顧ること能わざる時は、政府創造の事業尽く半途にして廃絶し、再度手を下すに至ては又新に事を起さざるを得ず。〔中略〕未俄に朝鮮の役を起す可らずとするの三なり。

第四条 我国輸出入の総計を察するに、輸出の高毎年大凡百万兩の欠乏あり、其欠乏は便ち金貨を以て之を償却する者とす、若し如此金貨外出する時は国内の金貨從て減少すべし。然して現今内国に行わるる者は金貨と紙幣となり、今其本を乏し其実を欠く時は、自政府の信用を薄うし、紙幣は漸次其価を失ひ、大に民間の苦情を起し、後日殆ど救う可らざるの勢を生ぜん。〔中略〕今内国の貧富を問わず、兵の強弱を詳かにせず、忽然戦端を開く時は、内国の壮丁外に苦しみ内に役せられ、是が父母たる者は憂慮煩乱動儉業を営むに意なく、〔中略〕内国の疲弊を起

さんは必せり、是又慮べき者にして、未俄に朝鮮の役を起す可らずとするの四なり。

第五条外国の關係を論ずる時は、吾国に於て最重大なる者魯英を以て第一とす、夫れ魯は北方に地方を占め、兵を下して樺太に臨み、一挙して南征するの勢あり。〔中略〕然るに今兵端を開き朝鮮と干戈を交ゆる時は、恰も鷸蚌〔シギとハマグリ〕相争の形に類し、魯は正に漁父の利を得んとす可し。是れ深く注意す可きことにして、未俄に朝鮮の役を起す可らずとするの五なり。

第六条 亜細亞洲中に於て英は殊に強盛を張り、諸州に跨りて地を占め、國民を移住して兵を屯し、艦を泛べて卒然不虞の変に備え、虎視眈々朝に告れば夕に來るの勢あり。然るに今我國の外債多くは英國に依らざるなし。若し今吾国に於て不慮の禍難を生じ、倉庫空乏し、人民貧弱に陥り、其負債を償ふこと能わずんは、英國は必ず之を以て口実とし、終に我内政に關するの禍を招き、恐くは其弊害言ふ可らざるの極に至らん。〔中略〕未俄に朝鮮の役を起す可らずとするの六なり。

第七条 我國欧米各国と既に結びたる條約は固より平均を得ざる者にして、其条中殆ど獨立国の体裁を失する者少からず、是が為束縛を受け利する所有る可きも却て害せらるることあり、然而已ならず英仏の如きに至ては、我國内政未だ齊整を得ずして、彼が從民を保護するに足らざるを以て口実と為し、現に陸上に兵營を構え兵卒を屯し、殆ど我國を見ること己が屬地の如し。嗚呼是外は外国に對し、内は邦家に對し恥すべきの甚きに非ずや、且夫條約改正の期已に近きに在り、在朝の大臣宜く焦思熟慮し、其束縛を解き獨立国の体裁を全うするの方略を立てざる可んや。是又方今の急務にして、未俄に朝鮮の役を起す可らずとするの七なり。

前文已に朝鮮の役を急にす可らざるを論ぜり。〔中略〕使節を發せんとせば、先に開戰の説を決せざるを得ず、然

る時は、外を征し内を守るの兵^{すくな}寡きも十有余万を募集すべし。且其使役に供せんが爲又数万の丁民を招集し、彈藥銃器船艦運輸其他百般の費用莫大なる者^は、予め定算を立て難しと雖も、今之を概算すれば日に若干万を以て算すべし。若し征役直に利を得ると雖も、其得る所恐くは其失う所を償うに足らず、況や遠征歲月の久を経るに於ておや。譬え終に全勝を得、或は全国を略有し、或は和議を許し賠償を成さしむるも、数年の間、常に兵を屯し要処を守り、彼が違約を予防せざるを得ず、況や全国を略有するの日に至ては、必ず國中不平の徒多く、四方常に紛擾^{ふんじょう}を生じ、国土を保有すること殆ど余日なきの勢あるに至らん。然れば今征討保衛の費用を算するに、恐くは朝鮮全国の物品も又是を償うに足らず、且魯也、支那也、夫の一二朝臣の語、或は黙諾に依り、朝鮮の事件に關涉^{かんしやう}することなきを論ずと雖も、又是を確定するの実証あることなし、譬え実証ありとするも、彼兩國政府は謀略を施し間隙を伺い、其機に乗じ突然不慮の禍を來すことあるや亦計る可らず、而て其前約を敗るに名を求むること実に難^{むずかし}きに非ず。然るを今茫然として思慮此に及ばず、卒爾^{そつじ}大事を醸さば将来恐くは大なる後悔を生ぜん。(中略)朝鮮の我国を侮慢するや、慨然^{がいぜん}忍ぶ可らざるの議論ありと雖も、今般遣使の議の由て起る処を察すれば、今特命の使節を送り、其接待若し傲慢無礼以て兵端を開くに確然たる名義を与えることあれば、則ち征討の師を出し其罪を問わんとするの意に似たり。若し果して然れば、既に今日に於て、我国の名譽を汚し国体に関し、止むを得ざるの事情に至り、他事を頼るに暇あらずして、此役を起さんとするに非ざるや固より明なり。然るを今國家の安危を顧みず、人民の利害を計らず、好で事變^{このん}を起し敢て進退取捨の機^{つまびらか}を審にせざるは、実に了解す可らざる所にして、以て此役を起すの議^{がえ}を肯んぜざる所以なり。』(五四)

右によつて大久保の鋭い論法を知ることが出来るが、殊に西郷の大義名分論に対し、(一)列国の我を遇

するや対等でないのに、即ち日本はなお半植民地的事情にあるのに、これを忍んで独り朝鮮の非礼を咎むるの不自然な事、(二) 西郷が大使たらんとする論拠は征討の名義を得んとするにある、とすれば次にそれほど国体に関する大事件ではなく、好んで事変を起さんとするのだと論ずる如き、征韓論の矛盾を突いて鋭鋒当るべからざるものがある。故に征韓論がいよいよ台閣で議せられてからは、三條も岩倉も江藤も、征韓論の是非よりも、寧ろこの問題の故に西郷が引退した後の軍の動向により多くの懸念を有していたのである。

この内治主義から出発する非征韓論は単に財政問題からのみではなく、軍事的理由からも少壮分子によって主張された。山県有朋の如きがそれであつて、当時かれは地方に出張してこの論に与らなかつたが、

『夫れで予が鎮台巡回に出ずる前に、老西郷に対し、「もう一兩年経つたらば兵制の基礎が立とうと思う。そうすれば、兵を外に出す事が出来ようが、今では余程混雑することを免れぬ」という話を為した。夫れが予と老西郷との、最終の別れとなろうとは、夢にだも思わなかつた。』(五五)

と、後年語っていることでも、その態度を知ることが出来よう。果然、西郷が故山に帰つた後も、憂えられた兵力の動搖は起らなかつた。それは山縣と小西郷によつて抑えられていた長州中心の新時代的勢力は、旧兵力の脱退の故に動搖しないだけに生長したからであり、この旧勢力の大挙脱退は、却つて守旧分子を一掃して、新兵力が急激に育成する機縁をすらもなした。

副島種臣は大久保を評して極めて妥協的な人だといった。

『毅然不拔、確乎篤信の氣象あれども、事甚執拗せざるが故に、時と流通して、身権貴を失わず。故大將西郷氏も所長多けれども不執拗の三字丈は、比の公に譲られしなり。余も固より此の公に恥るなり。』(五六)

大久保が妥協的であつて、その妥協が竹馬の友西郷と行動を共にするところまで行けば、薩藩の勢力は二分されず、かつ封建的な藩閥精神を満足せしめるから、かれの名声はその後見る如く、郷党の間、従つてまた一般人の間に悪くはなかつたであらう。しかし今やかれば国家の大事を前にして、個人的関係と、郷党的精神を顧みては居れぬ。三條は病んで政務を見る能わず、しかも征韓派は勝利を得て、その政策は実行せられんとす。大久保からこれを觀れば——征韓派からではなしに——國家の危うきこと累卵の如きものがある。

三條が病氣にかかつたその日、大久保の許に木戸孝允【桂小五郎】から一通の書翰が来た。大久保の蹶起を促したものだ。

『拙弟も且々一身自由に相成り候得ば及ずながら驥尾に属し、かかる折こそ微力のあらん限り御奉公申し上げ度存じ奉り候得共、如何とも難仕、實に残慨至極に御座候。御憐察下さるべく候』と病床の身を歎いて、『仰願わくば老台、岩公を此上ながら御輔佐、患害の蔓延を成るべく丈不長の間、御料理被為在度、千祈万禱奉り候』(五七)と依頼している。木戸としては岩倉をして三條に代つて国政をとらしめ、大久保をしてこれを輔佐せしめようというのだ。

誰が見ても非征韓派としてはこの外に方法はない。伊藤博文と大隈重信とは相携えて大久保を訪うて奮起

を希望した。また既に意を決した岩倉も大久保に勸説した。しかし大久保は中々起とうとはしなかった。その日記にこうある。

『十月十八日 土曜日〔中略〕伊藤子、大隅子入来〔中略〕偕條公御大病に付ては、今日にて岩公へ御憤発おえこれなく候ては、国家の事去るとの趣を以て御進め申し上げ候處、此に至てはやむを得ず断然振おこ起つべしとの御事故、小子へ是非憤発おこいたし候様、切に忠告これあり候、小子勘考の次第これあり、同意いたさず、先々見合みあひ候旨相答え置候。〔下略〕』(五八)

大久保は岩倉、木戸、伊藤、大隈等の矢のような催促に対して起たなかったが、しかしそれは如何なる場合にもたたないのではなくて、『小手勘考の次第有之』という条件付きだ。大久保としては、先に参議就任の際、三條、岩倉から書付けまでとつての上で承諾したのであるが、その約束は守られなかった。大事の場合、また同じ事を繰り返したら大変だ。この『勘考の次第』は黒田清隆の訪問によつて、その貌かたちが明らかになつて行つた。その日の大久保の日記に

『十月十九日 日曜日〔中略〕松方（正義）子、小西郷子、岩下（方平）子入来。黒田子入来、同人此困難を憂うること実に親切なり、予も此上の處、他に挽回の策なしといえども、只一の秘策あり、依て之を談ず、同人之を可とす。則ち同人考を以て、吉井子へ示談これあり候様申入れ置候。』(五九)

とある。黒田が可とした秘策というのは何か。三條が病氣の故を以て、岩倉をしてこれに代らしむるにある。そしてそれを為すのには黒田を以て吉井に説き、吉井から当時の宮内卿徳大寺実則さねのりに説き、徳大寺から至尊

に上奏し、かくて岩倉代行内閣を組織せしむるのだ。征韓論は既に一旦、閣議で内決し、且つ内勅許を得たのであるから、これを変更するためには、これだけの手続きを経るの外はない。しかもその事は決して容易なことではないので、用意周到な大久保は、その晩（十九日）黒田に向つて一書を与えて、『今晚、吉井氏と談合の模様、具に御聞取り下され、万々一見留け相付き兼ね候わば、止るに如かず』（六〇）と慎重なる努力を希望している。

この非征韓党の活動に対し、征韓党は勝利に依頼して何事をもなさなかつた。非征韓党は、従来の個人的不和を一擲して、岩倉、木戸、大久保、伊藤、黒田と手をつないで暗躍陽躍したのに対し、征韓党は西郷、板垣、江藤、副島の巨頭を集めたが、手足となるものがなかつた。別言すれば非征韓党は大久保を中心にして水も洩さぬ備えを固めたのに対し、征韓党は正攻法以外の手はなかつたのだ。

十月廿日、岩倉は太政大臣代理を拝命した。この日 車駕親臨、三條公の病を問わせ給ひ、更に御自ら岩倉を訪せ給うて優渥なる勅語を賜うたのである。大久保は翌廿一日夜、岩倉を訪問して会談し、廿二日には追いかけて激励の手紙を送つて『豈図、かくの如き難を生じ、偶然御責任に帰し候も、畢竟天賦というべし……実に御太儀ながら御負担下され候様、千祈万禱つかまつり候』（六二）と云つた。岩倉はこれに答えて『不肖実には恐怖の至に存候得共、不拔の一心、必ず貫徹の覚悟、決して御懸念下され間敷候。』（六二）と確信の程を示した。岩倉、大久保の同盟が確立したのだ。

一一 西郷故山に還る

岩倉臨時首相が出来たのを観て、征韓党側も黙していなかった。廿二日に江藤の發議によつて（六三）、西郷、副島、板垣、江藤の征韓党參議は岩倉邸を訪問した。

西郷はまず岩倉に對し、早速遣使の御裁可を仰ぐべしと主張した。これに對し岩倉は、『既に自分が首相を摂理する以上は、余の意見は諸君も既に知る通りであるから、明日參内して兩説を奏聞し、宸斷^{しんたん}を仰ぐつもりだ』と答えてこれを拒絶した。江藤は之を難じて、『岩倉公は首相を臨時摂理するに過ぎない。既に仮攝である以上は、原任者の意を遵行すべきものだ。兩説を奏聞する如きは不当である。且つ、至尊御幼冲^{ようちゆう}に在すが故に、政務は事大小となく内閣の議決を以て之を奏聞し、之が勅裁を仰ぐ慣例になつて來ている。この問題についてのみ兩説を上奏し、責任を陛下に歸し奉るのは輔弼^{ほひつ}の途にあらず』と論じた。だが岩倉は屈しない。それは常道であるけれども、兩説が對立して決しない場合には宸斷によつて決するの外はないではないかと駁し、予が目の玉の黒い間は、諸君の思う様には參るまいと断言した（六四）。

岩倉が如何に強く頑張つたかは、西郷が袂を払つて座を起ち、『長袖者大事を誤る』と云い捨てて、門を出でんとする時、副島等を顧みて『右大臣はよくも踏張つた』と嘆稱したのでも知れる。頑固に踏張つた岩倉と、しかしてその場に於てさえ敵の頑張りを称した西郷と、更に平生の友誼^{ゆうぎ}と悪感とを忘れ、国家のためと信ずるところを以て離合集散した重臣達の動向とは、觀來れば日本歴史における偉觀である。これより先、

桐野利秋は西郷の副使として朝鮮に行くことに内定していたが、閣内に異論があると聞き、憤慨して大久保の家に赴き『朝鮮問題について閣内に異論があるそうだが、怪しからんことだ。僕、国家のために彼等の首を斬ろう』といった。大久保は泰然として『異論を唱える者は重にこの大久保だ、君にその決心あらばまず僕の首を斬れ』と答えて驚かせた。そこで大久保は職域を異にするものが大政に容喙すべきに非ずと説き、桐野は忽々辞し去ったという（六五）。

岩倉に頑張られては征韓派としてはどうにもなるものではない。岩倉、大久保の方では、西郷派も然るものであるから、直接に上奏申上ぐるかも知れないという懸念があつて、その方面も徳大寺実則と打合せてあつたが（六六）——大久保の「秘策」の片鱗はこれだ——西郷等はその手段に出てなかつた。岩倉は廿三日参内して閣議の顛末と自己の意見を上奏し、廿四日には岩倉の上奏が御嘉納あらせられた。この結果、西郷、江藤、板垣、後藤、副島の辞表は聞届けられ、三條、木戸、大久保、大隈、大木等の辞表は却下された。征韓論の大詰は、かくて内治論者の勝利に帰した。

ここから西郷が故山に帰り、明治十年の西南の役に続くのだ。その西郷が鹿児島へついた十一月十日、大久保はその主張した内治主義を徹底するために内務省を創設して、産業日本の基礎を確立するためのスタートを切つた。大久保から観れば前にも述べたように、日本は進んで外国と事を構えるような事態ではなかつた。朝鮮が日本の領区以外にあるこそ幸い、これを堤塘として、我耕田を防護する役目をなさしむべきである（六七）。日本が関税の自主権を奪われ、治外法権によって圧制され、英、仏二国は横浜の公使館に戍兵

三千を置く權利を有し、政府部内の要所には、一千近くの外国人が高給を食つて、国庫の五パーセントの支出をやむなくせしめて居る状態にあつては、内に力を貯えて、この半植民地的状態から脱却することが何よりの急務であつた。明治政府は土族の家禄買収金のために、英国から千八十三万三千六百円（二百二十三万磅^{ポンド}）額面は千百七十二万二千円（百四十万磅）の借款をして、金貨が準備されていたのであり（六八）、また下関賠償金に対しても毎年一割の利子を英国銀行に支払つていたのである。謂わば日本の封建政治の大掃除は英国の資本主義の助けを借り、土族の家禄買収までがロンドンの銀行家の糸を引くところであつたが、その糸がまた断ち切れていなかつたのである。

この日本の資力を充実せしむるために、大久保が目がけたところは殖産興業政策であつた。即ち征韓論反對という對外消極面には、国内興発という積極策が楯の半面を形成していた。しかもこの事は言の容易なる如くに容易ではない。前にも述べたように財政問題では井上、渋沢が辞職した。また国力充実の表現は對外貿易に最もよく現れるが、明治元年以後明治十年までの間に^{はかばか}出超であつたのは、ただ元年及び九年の二ヶ年のみであり、他は何れも入超であり、その輸出の夢の進歩も^{はかばか}捗々しいものではなかつた（六九）。その上に貿易は外国商館が殆んど独占し、明治十年の貿易額についてみるも、輸出額の九割四分、輸入の九割五分は外国商館によつて取扱われた。

そこで大久保の殖産興業政策の中には、貿易奨励が最も重要な位置を占めていた。大久保は貿易を我国人の手に回収せねばならぬと考えた。そしてこれを為す具体的な方法としては第一に邦品の海外市場への宣伝

及び調査、第二に邦品の海外試売、第三は民間商人の直接輸出の奨励である。同時に輸入を防止しなくてはならぬ。それには内国産業の保護奨励政策が登壇した。するとこれはまた条約改正に延長せられざるを得ず、更にまた外債償還を断行することが外国の圧力を除くことである。大久保は明治八年に大隈と共に、外債償還を正貨によらず、政府にて適當の物品を輸出し、之によつて外債を償還し、かねて貿易を奨励しようと、一石二鳥の建議をしている(七〇)。

征韓論は大久保と西郷との争闘ではない。土族的なるものと、新政策的なるものととの争いだ。土族的なるものを大陸政策といえ、新政策的なるものを内治主義といつて固より差支えない。しかし内治は単に内治を目的としてはいいない。その目がけるところは日本の膨脹にある。その征韓論に於て新産業を代表するものが悉く反征韓論の陣営についたことが、この抗争の本質を語っている。仮にその時に西郷を朝鮮に送つて居れば、かれの捨身の手法が、何等かの新展開を見たかも知れない。だが明治時代の漸進的發展と膨脹が、特に欠点として指摘されるところがないならば、征韓論における両派の主張の是非は、歴史によつて最早確立されていい筈である。

(一) 『大久保利通文書』第一 三二頁。

(二) 同上、三九頁。

(三) 『大久保利通日記』上巻 四四頁。

(四) 同上、三九八頁。

- (五) 勝田『大久保利通伝』上巻一五〇——五一頁。
 - (六) 同上、二四五——四七頁、『大久保利通文書』第一 七五頁以下参照。
 - (七) 大隈重信『開国大勢史』一一七六頁。
 - (八) 勝田『大久保利通伝』上巻 四九五——六頁。
 - (九) 『大久保利通文書』第一 三八三——九七頁、勝田『大久保利通伝』中巻 三五——八頁参照。
 - (一〇) 三條実美が外国事務掛を兼ねたる後藤象二郎に与えた書が一般を語っている。
- 『昨日、英公使面会の処、彼馬車的一条は穩に相済み候と雖、日本に攘夷論家再発に付、和議の決答致度旨、切迫に申し陳べ、激語憤怒、頗る暴慢無礼を極め候。実に切齒憤懣に堪えず。忍びがたきを忍び、遂に和談に相済み申候。』(大森金五郎『現代日本史』一九二頁所収)。
- (一一) 大久保は他の同僚に比して対外交渉は少なかつたが、しかし少くとも三つの対外事件に腕を揮った。
 - (一二) 『大久保利通文書』、『西郷隆盛文書』等に拠れば、大久保が西郷に送つたもの四通(明治五年七月十九日、十月十五日、明治六年三月廿一日附及び明治五年別啓書翰)、西郷より送つたもの二通(明治五年二月十五日、八月十二日附)である。
 - (一三) 勝田『大久保利通伝』下巻 九三頁。
 - (一四) 『大久保利通日記』下巻 五八頁。
 - (一五) 『大久保利通文書』第三 二四九——五一頁。
 - (一六) 『六年五月東萊・釜山兩府使は、更に令を發して曰く、日本人は洋人と交り、夷狄の風に化せり、禽獸と

何ぞ扱ばん、爾後朝鮮人にして日本人と交る者あらば、直に死刑に処すべしと、而して我草梁公館に通知して曰く、今回、朝鮮政府は、嚴重の令を發布したり、或は朝鮮人にして、日本人に暴害を加えるものあるやも計り難し、請う、日本人をして速に朝鮮を去りて本国に帰らしむべしと、此時、釜山に在勤せし我外務省員森山茂等は、直に帰朝して之を報告したり、(勝田『大久保利通伝』下巻 八二頁)

(二七) 『西南記伝』上巻一 二九七頁。

(二八) 藤井甚太郎・森谷秀亮『明治時代史』(『綜合日本史大系』第十二卷) 四五三頁以下参照。

(二九) 『大久保利通文書』第四 三八〇頁。

(三〇) 『井上侯爵家文書』(『世外井上公伝』第一卷 五五七頁所引)

(三一) 明治四年十月より五年十一月に至る歳出入を見るに、次の如く歳入不足額は七百二十八万四千八百五十二円に達している。(東洋経済新報社編『明治大正財政詳覧』に拠る)

歳入	經常部	二四、四二一、七四二
	臨時部	二六、〇二一、四三一
歳出	合 計	五〇、四四五、一七三
	經常部	四二、四七四、九一九
歳入の再出に對する過不足	臨時部	一五、二五五、一〇六
	合 計	五七、七三〇、〇二五
歳入の再出に對する過不足	經常部	一八、〇五二、一七七
	臨時部	一〇、七六七、三三五
合 計	合 計	七、二八四、八五二

(二二) 土屋喬雄『渋沢栄一伝』一九三頁。

(二三) 勝田『大久保利通伝』下巻 八六頁。

(二四) 明治六年七月廿九日、板垣退助宛西郷隆盛書翰(『大西郷全集』第二卷 七三六—三八頁)。

(二五) 明治六年八月十四日、板垣退助宛西郷隆盛書翰(同上、七五一—五二頁)。

- (二六) 明治六年八月十七日、板垣退助宛西郷隆盛書翰（同上、七五四——五六頁）
- (二七) 吉田東伍『**倒敍日本史**』大政維新編 三三八頁。円城寺清『**大隈伯昔日譚**』六〇九頁以下参照。
- (二八) 渡辺修二郎『**大久保利通之一生**』六六頁。円城寺『**大隈伯昔日譚**』五二八頁以下参照。
- (二九) 吉田『**倒敍日本史**』大政維新編 三三八頁。
- (三〇) 江藤は明治四年三月五日に『對外策』を立案して岩倉に上っているが、かれによれば征韓は清国経略の第一着手としてである。『勝て而して之〔清国〕を取り、若し魯と併力せば之を分領し、我兵力のみにてならば全領し、都合によりて其一部を魯に与えることもあるべし』と云っている（『的野半介』『江藤南白』下二八九——九九頁参照）。
- 併しその後、征韓論の逼迫するに当つては、『既に朝鮮と戦の御決定これあり候上は万々此えざる節は魯と戦の御決定は可被^{あらせられべく}為^な在^あ事と存じ奉り候』（明治六年十月十五日（征韓論閣議の翌日）附）と岩倉に書を与えて征韓がまた魯国戦争に至るべきかを予想している（『**岩倉具視関係文書**』第五 三四二——四四頁参照）。
- (三一) 吉田『**倒敍日本史**』大政維新編 三四三頁。
- (三二) 『**西南記伝**』上巻一 三八六頁、円城寺『**大隈伯昔日譚**』六五三頁以下。
- (三三) 明治六年八月十五日、大山巖、村川新八宛大久保書翰（『大久保利通文書』第四 五二一——二二頁）。
- (三四) 明治六年九月廿七日、岩倉具視宛伊藤博文書翰（『大久保利通文書』第五 六頁所収）。
- (三五) 明治六年九月廿九日、岩倉具視宛三條実美書翰（同上、一一——一二頁所収）。
- (三六) 明治六年九月卅日、岩倉具視宛大久保書翰（同上、一六頁）。

(三七) 明治六年十月十日、三條、岩倉岡公宛大久保請書(同上、二七頁)。

(三八) 明治六年十月十一日、三條実美宛西郷隆盛書翰(『大西郷全集』第二卷 七八八頁)。

(三九) 『西南記伝』上巻一 四二三頁。

(四〇) (四一) 『大久保利通日記』下巻 二〇三頁。

(四二) 明治六年十月十七日、三條実美宛大久保書翰(『大久保利通文書』第五 六九——七〇頁)。

(四三) 『大久保利通日記』下巻 二〇四頁。

(四四) 明治六年十月十八日、黒田清隆宛大久保書翰(『大久保利通文書』第五 七二頁)。

(四五) 『西郷の征韓論は遠く其源を佐藤信淵の宇内混同論、島津斉彬の東邦経略論、藤田東湖の国民統一論、橋本景岳の日露同盟論に発せしや、疑う可からずと雖も、其実は時勢の必要に迫られて之を倡道し、之を実行せんことを期したるものの如し。』(『西南記伝』上巻一 三〇九——一〇頁)。

(四六) 『西南記伝』上巻一 三二三頁。

(四七) (四八) 明治六年十月十七日遣韓使節決定始末(『大西郷全集』第二卷 七九一頁。尚、本書を一に十五日に作る。同上書、七九二頁解説参照)。

(四九) 『西南記伝』上巻一 三二四頁。

(五〇) 同上、三二一頁。

(五一) 藤井、森谷『明治時代史』(前掲、四六九頁)。

(五二) 『明治政史』第六篇(『明治文化全集』第二卷、正史篇二〇一頁)【『明治文化全集』は第2、4巻のみネット公開】。

(五三) 白柳秀湖『明治大正国民史』明治次篇 四三一——三四頁参照。

(五四) 『征韓論に関する意見書』（『大久保利通文書』第五 五四——六四頁）——日時明白ならず、参議就任直後、三條に提出したものと思われる。

(五五) 徳富猪一郎『侯爵山県有朋伝』中巻 三一二頁。

(五六) 徳富猪一郎『大久保甲東先生』二二六頁。

(五七) 明治六年十月十八日、大久保宛木戸孝允書翰（『大久保利通文書』第五 七七頁、『木戸孝允文書』第五五六頁）。

(五八) 『大久保利通日記』下巻 二〇四頁。

(五九) 同上、二〇五頁。

(六〇) 明治六年十月十九日、黒田清隆宛大久保書翰（『大久保利通文書』第五 七八頁）。

(六一) 明治六年十月廿二日、岩倉具視宛大久保書翰（同上 八五頁）。

(六二) 明治六年十月廿二日、大久保宛岩倉具視書翰（同上、八六頁）。

(六三) 的野半介『江藤南白』下 二五七頁。

(六四) 同上、二五七——五九頁、『岩倉公実記』下巻 七四——五頁【国会図書館デジタル化資料 p1234】。

(六五) 渡辺『大久保利通の一生』七六頁。

(六六) 明治六年十月廿二日、岩倉具視宛大久保書翰、大久保宛岩倉具視書翰『大久保利通文書』第五八六——九二頁）参照。

(六七) 『大久保甲東、一日客と談話の際、其語氣、日本の版図狹隘なるを慨するものの如し。前島密、坐に在り、甲東に謂て曰く「前年韓国を経略するあらしめば、如何」甲東曰く「足下の見、此の如しと為す歟。日本と韓国との関繋は、予説あり。今の韓国は、猶日本の堤塘の如し。凡そ堤塘は自己の領区以外に横たわるを利とす。其堤土は、我領地にあらざれど、之を修築し之を補綴して、以て我耕田を防護すれば、則ち足る。今の韓国、即ち是なり。然りと雖も、形勢は、係りて宇内の大塊にあり。故にその形勢にして一変せば、時に応じて大に為さざる可からず。天下の事測る可からざるものあり。鬼神と雖ども其之^ゆ所を知らざるのみ。』」(『西南記伝』上卷一、七三四頁)。

(六八) 『明治政史』第六篇(前掲二〇八——一一頁)、『世外井上公伝』第二卷 一六七——九八頁参照。

(六九) 明治元年以来の貿易状態を示せば、左の如し。

年次	輸出	輸入	出超	入超
明治元年	一五、五五三、四七三	一〇、六九三、〇七二	四、八六〇、四〇一	七、八七四、六五五
二年	一二、九〇八、九七八	二〇、七八三、六三三		一九、一九八、六二四
三年	一四、五四三、〇一三	三三、七四一、六三七		三、九四八、一一九
四年	一七、九六八、六〇九	二一、九一六、七二八		九、一四八、一六八
五年	一七、〇二六、六四七	二六、一七四、八一五		六、四七一、九四九
六年	二一、六三五、四四一	二八、一〇七、三九〇		四、一四四、五〇八
七年	一九、三一七、三〇六	二三、四六一、八一四		一一、三六四、五一七
八年	一八、六一一、一一一	二九、九七五、六二八		
九年	二七、七一、五二八	二三、九六四、六七九	三、七四六、八四九	

十年	二三、三四八、五二二	二七、四二〇、九〇三	四、〇七二、三八一
----	------------	------------	-----------

（東洋經濟新報社編『日本貿易精覽』に拠る）

（七〇） 土屋喬雄『続日本經濟史概要』八七頁以下。

第二章 征台を敢行するまで

一 自ら支那【清】に使いす

征韓案について強く西郷の遣使に反対した大久保は、不思議な事情から自ら全權大使として支那に使いすることになった。明治七年八月、征韓論廟議決定の事があつてから十ヶ月後のことである。

明治七年は大久保にとつては極めて多忙な年であつた。西郷去つて後のかれは、その勤めた役割からいつても新内閣の柱石となるのは当然だつた。明治六年十一月廿九日には内務卿となり、翌七年一月十日はその事務を開始した。かれはここにおいて本来の内治主義的政治家の本領に復つたわけである。欧米の知識を詰め込んで、沸くような経綸けいりんがその脳中に畳み込まれていた。

しかし彼はそうして居られなかつた。江藤新平が士族の不平を糾合して佐賀に乱を起したという報が東京に着いたのは二月初旬である。征韓論の中堅として善戦したかれとしては、これを片附ける責任を感じないわけにはいかぬ。二月七日、大久保は岩倉に対し自ら佐賀に赴いて、暴動を鎮撫せんことを請うて許された。この時、たまたま、木戸が九州に出張する手筈になつていたが、大久保は是非にと自ら矢表に立つことを懇請した。明治の政治家は嘗て責任を回避することを知らなかつた。内政家のかれは一転して兵馬の権を握る司令官となつた。よき内政家は、よき外政家である如くに、かれはまたよき軍人であつた。よき頭脳は原則

として一方的にのみ發揮されるものではない。二月十四日にかれは東京を發し、十九日に博多に着、福岡に本營を置いたが、三月一日には官軍は既に佐賀城に入り、四月十三日には江藤新平以下刑に就いた。疾風の如き行動である。

佐賀事件を片附けて大久保は四月廿四日に東京に歸つて來た。かれの日記にいう。

『四月廿四日金曜』

今朝八字横浜へ着。〔中略〕二字汽車より歸京、ステーションへ、勝子、伊藤子、其外徳大寺宮内卿〔中略〕出迎として参りおられ候、勝子、伊藤子と暫時談話、台湾事件承り、意外の事に候。〔下略〕』(二)

大久保は余程の大事件でも『意外之事』と考えたことはなかつた。かれが台湾事件を以て『意外之事』と考えたのは何故だろうか(三)。これについて林董は、後年伊藤の直話なりとていう。

『其〔大久保〕歸京の時、之を新橋に迎へたる伊藤公は、後に予に語りて曰く、新橋にて日清間葛藤の事を侯に告げ、開戦は免れ難かるべしと云いたるに、侯は曰く、拙者は猶お干戈^{かんか}に訴えずして解決の道ありと考えると言いたるのみにて、理由を弁ずるに暇あらずして帰宅せられ、翌日、侯は自身全權大使として北京に派遣せられんこと請う旨、書面を携帯して参朝せられたり。』(三)

この林の記述はその日時において正確ではない。大久保は廿四日に歸京し、廿七日に自身、長崎に出張して台湾征討事件につき実地調査をなしたき旨を三條に申出で、廿九日に出發して居り、全權辦理大臣として清国へ差遣の命を拝したのはその年の八月一日だ。しかしこの伊藤の直話なるものの価値は、かれが自ら責

任を引受け干戈に訴えずして解決しうる確信を、そうぼう忽忙の間にも吐露した点にあらう。

明治七年一月に内政家であり、二月に軍人であつたかれは、四月には外政家の領域に入り、八月には全權大使となつたのである。大久保は今までも外交を処理したことが皆無でなかつたのは前述した通りだ。しかし従来は対外交渉においては謂わば二枚目の役割をなしたに過ぎなかつた。たとえば岩倉一行が渡米した時、岩倉使節団は米国务長官フィッシュ (Hamilton Fish 1808-93, 1869-77) に条約改正の提議をなしたが、米国側から日本天皇の御委任状を拝見したいといわれて、そうしたものが必要であつたかに氣付き、これを日本まで取りに歸つたのが大久保であつた。

『皆々旅館に歸り一同鳩首相談して、実に今日は国务卿一人の爲め我々十分油を取られ冷汗を流したと述懐し、さて如何にしても委任状を取寄せねば一国の大臣として再び国务卿に合す面目がない、但し書記官を取りに歸えた位のことでは政府に於てもおいそれと渡すまい、是れは是非大久保に立ち歸つて何しても委任状を取つて来もらわねばならぬと評議一決した、大久保は我れに行けと云うなら行きもしようが、自分一人にては成功覚束ない、是非今一人来てもらいたいと云うことにて、終に伊藤が同行することになり、そこで此二人は書記官二人を伴い太平洋を横断して遙に歸朝することに成りたり。』(四)

書記官を帰国させても成功覚束なく大久保に立ち歸つてくれと評議一決したところに、かれの説得力と、留守内閣に対し、薩派を背景にする睨みを見ることが出来るが、しかしその任務は固より外交官としてのそれではない。その大久保が今や支那人と英国外交官とを相手に、純外交的折衝をなすことになつたのである。

二 対外思想の進化

日本はアジア大陸に対して、手を挙げた人間のように立ちふさがっている。胸は朝鮮に向つて居り、北は樺太を経て西比利亜に、南は支那の動脈部に対する。それはアジア大陸を押える形ちでもあり、また太平洋諸国が無断で亜細亜に立入ることを許さない障壁とも解し得よう。

絶えざる膨脹力を内に蔵し、その上に尚武的指導階級を政治の中心に有した明治維新政府は、国内の秩序が定まらない内から、既に眼は対外発展にそそがれた。その目的の中には固より国内治安の問題が考慮の中にあつたが、しかし国内を押えるために外国に事を起すことは世界の歴史にしばしばその例を見るとある。後には征韓論を中心にして大陸派と、内治派とに分れたが、その内治派の中にも外征を原則的に否とするものは何人もなく、要するに時日と順序の問題だつた。

明治維新の功臣中最も自由主義的主張に徹したのは木戸孝允であつた。その頃の政治家はいずれもそうではあつたが、特に木戸は自己の政治的主張のためには個人的感情は常に最少限に制圧した。外遊中、感情の衝突を来した大久保を征韓論の時、最も熱心に推したのは木戸であり、大久保が西郷派の勝利を見て十月十七日参議を辞職した時も、病中の木戸は岩倉に書面を送つて『大久保参議は沈重謹慎の性質にて、不拔の志は、多年御熟知も被^{あらせられ}為在候通』と極力推挙している(五)。木戸は、後にも説くように大久保の征台論には

反対して辞職したが、更にその後、大久保の懇請に応じて再び台閣に列なつた。その木戸は、明治元年頃は極めて強く征韓論を主張した。かれは我国が韓国と旧交を復することを主張して、その方法として三箇条をあげ、『右要求の目的を貫徹せんがためには政府の一大覚悟を要する事』といつて、長州の潜養した武力を半島に用いんことを考えた（六）。これについて大隈重信はいつてゐる。

『表面上の議論として、且有力なる議論として、廟堂有司の顧慮を惹きたりしものは、明治元年に於ける木戸孝允の征韓論を以て嚆矢と爲す。木戸の議論を目し、直ちに征韓（とうかん）でふ名を以てするは、稍々妥当を欠くの嫌なきにあらざるも、根は維新の変革に由りて激揚したる人心を外に向け、以て其間に変革の善後策を講ずるの必要を感じたると、且つ……韓土を克服して我と往古の關係を保たしむる所以の策なるを思い……』（七）

この木戸が百八十度の転換をしたのは、何よりも最も欧米巡遊の影響が大きかつたであろう。

征韓論の前後の對外政策を大別して大陸派と内治主義とに分ち、内地主義は更に三つに分つことが出来よう。試みにその四つを左にあげよう。

大陸派

第一 征韓論 西郷隆盛、副島種臣、板垣退助、江藤新平、後藤象二郎、桐野利秋

内治派

第二 北門経営論（樺太問題解決論） 黒田清隆、榎本武揚

第三 南門経営論 大久保利通、大隈重信、大木喬仕（岩倉具視）

第二章 征台を敢行するまで

第四 純正内治論 木戸孝允、井上馨

右の類別は単に傾向を示すものにすぎず、仔細に検討すれば固より完全ではない。征韓論は武断的外交論であるから、その意味ではまた対露強硬論者であり、従つてまた北門経営論者であつた。副島は既に明治五年に樺太買収を露国に提議して居り、西郷も北門の固めの必要を強調している。第二の北門経営論には二種類ある。断然露国を討つべしというものと、対露協調論者とがこれであつて、鍋島直正は前者、黒田は後者である。この意味では大久保の如きも北門経営論者で、征韓論後、西郷等が退いた後、明治六年十月廿八日に岩倉に意見書案を提出して、その加筆を請うたが、それには支那及び北海道、樺太の实地検分として陸海軍両省から人員を派遣する事、北海道は要衝であるから鎮台を設ける事を述べ『樺太混雜裁判之事及経界談判之事』を至急解決すべきことを述べている（八）。また露人の暴行事件、樺太経界問題解決のために自ら露国に使節たらんことを申し出たが、岩倉が反対して実現しなかつた。

こうして北門経営は何人の頭にも存したことであるが、強硬外交論者は自然征韓論で固まり、南方論は征台論に流れて行つた。大久保と黒田とはその立場において相通するものがあるが、その結果から見て黒田を北門経営論者として残して置くことに異議はあるまい。嚴格にいえば南門論と北門論とは同幹の両枝である。更に三條と岩倉に至つては最高責任者である關係からその立場を明らかにしていない場合が多い。但し征韓論には反対であり、岩倉において特に然りだ。岩倉の征韓論反対の理由は樺太処置のためである。岩倉はまた征台論に反対しなかつたのは、本書の後にあげる大久保宛の書翰にも明らかだ。

明治の初年までは各人の対外意見は、その属する藩によるところが多かった。長州は対島を通じて韓国に關係を有していたから朝鮮問題に関心があつた。薩摩は密貿易をし、且つ琉球に近いから南方問題に熱意した。だがその後、中央権力が確立するに及んで、対外意見はその人の社会的経験と位置によつて分れた。同じ薩藩が西郷・大久保に分れ、また黒田は会津征討総督参謀、奥羽北海道御巡幸供奉といった経歴が示す通りに、自然に北方経営に興味を有して来た如くだ。最初に朝鮮問題に力を入れた長藩は、既に征韓論の頃は態度が変化していて、西郷と共に進退を共にした有名人は殆んど一人もなかった。

現実主義者たる大久保が征韓論に反対したのは朝鮮や清国が怖いからではなかつた。この大陸に手を染めれば必然に長期戦になり、その背後勢力たる魯の利用するところとなることが明らかであつたからだ。もし外国、特に魯、英が出て来ない対外事件あらば、大久保はこれを利用するに固より躊躇するものではない。失職士族の跡始末の問題が焦眉の急であることも、維新の大業が完成した後の不安な国内事情も、かれの鋭い頭脳に映じない訳はない。西郷帰県後の近衛兵の動搖、各地の騒動が続いて居る上に、明治七年一月十四日には征韓問題の中心人物岩倉は参朝の途中、刺客に襲われて負傷したのである。こうした事態にあつて最も有効な対策が人心を対外問題に転ずる政策にあることは識者を俟つて知るべきではない。

大久保の注意は自然に台湾問題に向けられた。薩藩が原則的に南方問題に関心を持つのは自然だが、その外に琉球の位置を最終的に決定するのには、台湾問題を今の内に解決して置くことを必要とする。琉球の日本帰属を断行した人として、また小笠原島回収を実行した責任者として、南方進出の先覚者は、何人よりも、

普通には内治第一主義と見られる大久保利通だ。

三 琉球帰属問題解決の必要

事實は少し前にかえるが、明治四年十月十八日に那覇を発した琉球の属島宮古島の貢船が、風浪のため台湾の南端（八瑤湾、現台湾高雄州恒春郡滿州庄字九棚）に漂着し、乗組員六十六名の内、五十四名が牡丹社の蕃人に殺戮され、十二名が難を免れて、清国官吏の保護により五年六月に漸く帰島し得た事件がある。これが報告を得た鹿児島県参事大山綱良は上書して、自ら問罪の師を興して蕃地を征し、皇威を海外に宣揚すべき事を主張した。西郷隆盛以下薩派の武人が、これに熱心に賛意を表したので、征台論は朝野の間に極めて熾ん（さか）になった。明治六年三月に外務卿副島種臣が清国に赴いたのは、表面の理由は同治帝の親政祝賀と修交条約の交換であつたが、事實は朝鮮と台湾とに対する清国の意嚮（いこう）を知らんとするにあつた。副島が渡清の途、態々（わざわざ）鹿児島に立寄つて、帰省中の西郷と会見したのは、薩派との諒解を完全にせんがためである。

だが、台湾問題で支那（清国）に打ち当るためには、琉球人が台湾で惨殺されたというだけでは不十分だ。琉球は以前から支那と日本（薩摩の島津氏）とに両属して居つたから、日本だけでその保護の責任に座する理由はない。そこでこの問題に乗出すためにも、琉球に対する日本の位置を明らかにして置かなくてはならぬ。尤も日本の膨脹力は、そうした問題がなくても、その勢力を南方に伸したのであらうことは明らかで、現に明

治五年正月には鹿児島県官（奈良原幸五郎伊地知貞馨）は琉球に赴いて日本本土の変革を告げて島治の改革を促している。しかし南方問題の出現は急速にこの足固めをなす必要があり、明治五年九月には正使伊江王子（尚健）以下を上京せしめ、琉球王尚泰を琉球藩王に封じ、華族に列し、東京飯田町に邸宅を賜わった。かくて日本との関係は明らかになったが、ただ琉球と支那との紐帯は切れて居らぬ。この点は日本側でも認めざるを得ざるところで、五年正月、鹿児島県官奈良原幸五郎等が持参した『口上手控書』にも『全体琉球国の儀、表向は支那の附屬に候え共、現実本朝附庸の国に相違これなく』（九）と書いて居る。この支那との紐帯の問題が台湾事件につながっている。

征韓論の紛議が終った後、残る対外問題は北方の樺太問題と、この琉球の帰属を根幹とする台湾問題だ。明治七年正月に、内務卿大久保と、大蔵卿大隅重信とが台湾蕃地処分問題の調査を命ぜられた。大久保としては征韓の意味する政策、即ち日本の胸体を以て、大陸へ打ちつける永久的な政策をやるのには、日本の實力は尚早であると考えた。この大久保の意見は、朝鮮問題が日清戦争で片附かず、それを解決したのは日露戦争後であつた事実から観て正しいといわねばならぬ。大久保が樺太や、琉球の問題ならば現在の潮時こそ最高の時期だと考えたことは、その何れに対しても自ら重責に当らんとしたことを以ても知れる。

大久保、大隈の署名になる『台湾蕃地処分要略』は、その南方政策の具体案を示し、かつ当日（明治七年二月六日）の閣議で、討蕃撫民の軍を発するに決した根拠をなすものであるが、左に重要な項を掲げよう。

台湾蕃地処分要略

第一条 台湾土蕃の部落は、清国政府政權^{およ}逮ばざるの地にして、其証は従来清国刊行の書籍にも著しく、殊に昨年前参議副島種臣使清の節、彼の朝官吏の答にも判然たれば、無主の地と見做すべきの道理備われり。就ては、我藩属たる琉球人民の殺害せられしを報復すべきは、日本帝国政府の義務にして、討蕃の公理も茲に大基を得べし。然して処分に至ては、著実に討蕃撫民の役を遂ぐるを主とし、其件に付て清国より一二の議論生じ来るを客とすべし。

第二条 北京に公使を派し公使館を備え、交際を弁知せしむべし。清官若し琉球の属否を問わば、即ち昨年出使の口蹟に照準し、琉球は古来我帝国の所属たるを言い並べ、現今^{いよいよ}弥々恩波に浴せしむるの実を明にすべし。

第三条 清官若し琉球の自国に遣使献貢するの故を以て、両属の説を發せば、更に顧て關係せず。其議に応せざるを任とす。如何となれば、琉球を控御^{こうぎよ}するの実権皆我が帝国に在て、且遣使献貢の非礼を止めしむるは、追て台湾処分の後^{おの}に目的あれば、空く清政府と弁論するは不可とす。

第四条 清政府より台湾処分に付論説を来さば、昨年の議を確守し、判然蕃地に政權^{およ}逮ばざるの証蹟を集て動かさざるべし。若し土地連境の故に付論すべき者生ぜば、和好を以て弁ずべし。其事件至難に涉らば、是を本邦政府に質して可ならん。惟^{ただ}推託【言い訳】して時日遷延の間に即事を成し、和を失わざるの機謀交際の一術なり。

第八条 福島九成、成富清風、吉田清貫、児玉利国、田中綱常、池田道輝右六名を先に台湾へ發遣し、熟蕃^{じふ}の地へ立入り、土地形勢を探偵し、且土人を懷柔^{すいよう}綏撫^{すいぶ}せしめ、他日生蕃を処分する時の諸事に便ならしむべし。

i 「じゅくばん」、「生蕃（せいばん）」と共に、台湾人に対する蔑称。漢人に同化した者を熟蕃、同化しない者を生蕃と言った。

第九条 探偵の心得は、熟蕃の地琅※〔#王+喬〕〔「琅璫」とも表記されている〕社寮の港より兵を上陸せしむる積に付、兼て此辺の地勢其他碇泊上陸等の便利なる事に注意すべし。』(二〇)

右大久保、大隈の意見は要するに(一)台湾土蕃の部落は無主の地である。(二)清国政府がこれに反対すれば、議論を以て遷延し、既成事実を作りあげてこれに対すべし、(三)領事(外交官)は軍事に関せず、征撫に任ずる者(軍人)は応接(外交)に関せず、その分界を明らかにし、重大事件は北京在勤公使に伝致すべきだというにあつた。即ち大久保の意志は和平を第一として、機謀交際の際に実益を得んとするにある。

四 米人顧問の進言

大久保の征台論は、国内的事情に発して、何人の入智慧でもないが、しかし征台論そのものが米国人によって最も有力に形成されたのは一奇である。

副島種臣は所謂自主外交の先駆者と観らるる者であるが、この副島外交を画策して列強に属せしめなかったのは、誰よりも米人顧問スミス(Erasmus Pesline Smith)であつた。彼は自ら日本服を纏い、またマリアルズ(Maria Luz)号事件ⁱに於ては、囂々たる世界の批難^{うしろさげ}に対し、先頭に立つて反駁し、日本の立場を諒解せしめた。駐日米国公使デ・ロング(Charles E. De Long, 1869-73)がまた副島と相得た。明治五年九月廿三日、副島とデ・ロングとは外務省において会見し、デ・ロングは日本が台湾を占領すべきことを暗に勧めている。

ⁱ 横浜港で、ベルー船から逃亡した苦力を政府が解放した事件。

(デ・ロング) 一、「上略」台湾は氣候も宜く、且膏腴こうゆの地【土地が肥えている】にして、米、砂糖、苧等あわせて、并鋤山も数ヶ所これあり、港も宜く、外国人に取りては、至極便利の場所にて、外国人中にも着目致居いたしおり候ものもこれある由。右は支那にて管轄といえども、其命令も行われざれば、則ち浮きものにて、取るものの所有物と相成申すべく候。

一、ホルマサ〔台湾〕一件に付て左の三条の手続より他これなく候。

第一、直に問罪の師を差向さしむけ候歟。

第二、土人へ掛合、我人并琉球人とも到着候とも暴挙および間敷ましく、後來の取締を相立候約をなす歟。

第三、支配所屬の義なれば、英政府へ掛合の上、所置および候歟。

右はいずれも御見込の次第もこれあるべく候得共そうらえども、思ひの俟申上げ候。まま〔中略〕

(副島) 一、右は尤も我にても所望の地にこれあり候。貴方の御見込は如何。

(デ・ロング) 一、米國にては他國の地を所有する事は致さず義に候得共、我友睦の國々にて、他國の地を所有し、広殖する義は好む所これあり候。

日本が台湾をとれといわないばかりだ。話は更に積極的になる。

(デ・ロング) 一、台湾へ貴國船艦、御差出に相成り候わば、同所海岸地図等、我方軍艦に可有あるはずですの之候間、及ばずながら御周旋致すべく候。且北京在留我國公使ロー氏へ其手続申通、万事御尽力致し候間、御見込も相立候わば御漏し下されべく候。

こうして米國公使は暗に日本の行動を促し、それに対し便宜を与えることを約して居る上に、如何になす

べきかの方策をも述べた。出兵すれば二万ぐらいの兵力を常置しなくてはならず、しかも兵が常駐すれば必ず紛擾ふんじょうを起すから、『先ず手を経て掛合、人民保護の爲約を結び、地を借り、其上兵備をなすも遅しとせず候間、直に兵を挙ざる方と存じられ候』と、事を行うに順序を以てするよう勧めている（二一）。

このデ・ロングが副島に紹介したのがル・ジャンドル（Charles W. Le Gendre）だ。ル・ジャンドルは一八六二年（文久二年同治元年）以来、厦門アモイの米国領事であるが、米国帆船ローヴァー号（Rover）が台湾において破船した事件に関し、台湾に対する米人遠征隊を組織して活動した人である（二二）。デ・ロング公使の台湾に関する知識はル・ジャンドルの受け売りに過ぎないので、副島に説いて、丁度帰国の途にあるかれと会談することを勧めた。副島としては誰か、台湾に関する専門家を得たい時であつたので、翌廿四日喜んでこれと会見した。副島が態々わざわざ、横浜出張所に行つて会見したことが、かれの熱心を示している。

（副島）一、「上略」此度、日本より懸合の次第は如何いたし然かるべき哉や。（中略）

（ル・ジャンドル）一、米船漂着にて殺され候節、米政府より支那政府へ右一件相当の処置たきこれあり度旨掛合たき候処、支那政府諾して為し得ず、故に尚督責候えは支那政府にては元来管轄はいたし居候えども、処置は行届かざる旨返答これあり。（中略）依て自分見込には「中略」米国にては土地は敢て取るを好まず候間、日本政府の管轄と相成り候は好む所なれども、成るべくは、支那政府にて右掛合丈たきの事を為し果し度。併多分は出来申す間數、さすれば兵隊を向け砲台を築き、此方にて守衛を為さず候半さうはんでは相成らず候事と存候。（二三）

超えて、廿六日更に延遼館に於て会見している。

（副島）兵隊は如何の者に候哉。（中略）

（ル・ジャンドル）ホルモサは二千人の兵あれば容易に取れ申すべく候え共、後を守ることかたし。

（副島）一万位の兵は容易に差出し申すべく候。

（ル・ジャンドル）人数は何人にも入費莫大に相掛り候。（中略）

（副島）一万の出兵容易なる訳は、是迄日本四十万余の武士いずれも勇剛御し難き者にて此等有事は喜て出兵致すべく候。（二四）

こうした会話の結果、副島とル・ジャンドルとは意気投合して、ル・ジャンドルは外務省準二等出仕として雇入れることになった。年俸一万二千円である（一五）。副島はかれを『参謀職』として支那に同伴した。

米国側の諒解するところによれば、副島はル・ジャンドル（季仙得）に約するに、もし日本が台湾と戦争するに至らば、その場合にはかれを日本軍の将官にすることを以てし、かつ日本が永遠に台湾に留まる場合には、かれを同島の知事にする事を約束したといわれる（二六）。副島が失脚した後、大久保はしばしばこのル・ジャンドルと会見して相談した。この事は彼の日記に何回となく出て来る。小さい事だが、明治七年七月二日の日記の中に『九時参朝、今日蕃地処分に付仏法律家某、季仙得召呼ばれ云々の御尋問これあり……』とある（一七）、ボアソナード（Gustave Emile Boissonade）の事を単に『仏法律家某』といい、他を季仙得といっているのも、後者に馴染の多かったことを語るものであろう。前掲『台湾蕃地処分要略』もル・ジャンドルの意見に負うところが尠くなかった。

序^つに書いて置くが、当時の米国当局者の日清交渉に対する態度は、日本と支那が同盟を結ぶに至ることを懼れた。これは駐支米国公使ロー（Frederich F. Low, 1869-74）も、駐日公使デ・ロングも、さては米国务務長官フィッシュもそうであつた。然らば何が故に日清同盟を嫌うかといえ、日本が支那の如くに反動的政策を取入れて近代化反対の傾向に出でんことを恐れたというのである。国务長官フィッシュは駐日公使デ・ロングの書翰（一八七二年十二月卅日〔明治五年十二月一日〕附）に答えて左の如く云つて居る。

『貴下が、日清国交に関し、日本政府の方針に影響を与える目的を以て、日本当局者と会談する場合には、彼等をして出来るだけ支那の排他的政策から遠ざかる事、しかして列国との自由なる商業的及び社会的交際の進歩的政策を取入れるように勧めることが望ましい。』（二八）

当時、列国は日本に対しても、支那に対しても『自由なる商業的及び社会的交際』などはして居らず、治外法権、関税自主権の否定等によつて差別待遇をして居つたのであるが、しかし米国が日本の進歩主義に対し同情を有していたことは事実である。だからデ・ロング公使は、日本の征台決定を觀るや、これを以て、日本が一層支那から遠ざかり、更にまた日本の内乱を避けることが出来、台湾と、恐らくはまた朝鮮をも『西洋列国に同情を有する国家の旗の下に』置くことに満足を感じて國務省に報告している（二九）。即ち副島の北京訪問及び台湾遠征も、多分に米国人の勧告によるところが多いと見るべきである。

もつともデ・ロング公使の言は米国政府の政策と見ることは出来ない。デ・ロング公使は日本政府に対し余り突き進んだ進言や、行動をしたので、これがワシントンに知らるや直ちに召還された。その後（一八七九

年明治十二年）前米国大統領グラント（Ulysses Simpson Grant, 1869-76）将軍が日本を訪問するや、同将軍は日清提携の必要を説き、白人国の侵略に対し日清同盟を締結すべきことをすらも勧めたのである（二〇）。

五 閣議、征台を決す

大久保、大隈の起草になる『台湾蕃地処分要略』が朝議に附せられるや、閣議はこれを承認した。大久保の日記（明治七年二月六日）に、

『上略』九字石公へ参上、参議一同会集、台湾一条相議し、凡そ決定これあり、安心いたし候。〔下略〕』（二）とある。この蕃地処分案に対して木戸孝允は断然これに反対した。その頃設けられた台湾蕃地事務局長官を兼任する大隈重信が、準備金は五十万円ある事、これ以上に超過しないことを西郷従道が死を以て誓つて居る旨をいうと、木戸はこれを反駁して、事件の終局を考慮しないで五十万円と限ることが無謀である事、国家の損失は、一従道の死を以ては償いうるものではないことを述べた。

この木戸の反対に關せず、廟議は陸軍中将西郷従道をして、兵を率いて討伐せしむることに決定した。これにおいて木戸は四月十七日左の如き書を草し、翌十八日三條に呈して辞意を表明した。

『上略』臣の言果して是なるか、廷議果して不是か、事後久遠に非ざれば之を定む可からず。故に臣敢て臣が言の用いられざるを以て、怨恨不平する所あるに非ず。但内閣は天下政令の出る所、今臣敢て政府の議に雷同せず。若し臣をして猶此に居らしめば、其勢將に終に欺心の言を出し、非志の事を推て以て天下人民に施し、天下を率

いて臣が心の安せざる所に誘勸奔赴せしめんとす。此の如きものは臣の誠に安せざる所、たとい安して之を為すも、天下の大政府にして欺心の大臣あらしめば朝廷何を則て臣を保全せん、何を以て朝廷人民に対し天下後世に對せんや。』(一二)

木戸の四月二日の日記には『上略』十字参院、今日台湾一条へ連印の事あり。依て余両大臣に対し相辞せり。其故は昨年、下問の節、余今日内地の形勢を察するに、人民貧弱、専ら内政をつとめ、此人民の品位を進め、然る後着手して、後れずの議を建つ。当年といえども其説異なるなく、依て衆と同じくして連印する能わず。『下略』(二三)とある。木戸も大久保も、議合わざれば即ち去るのであつて、事態の重大なるが故を以て、良心を曲げてその職に居るという考え方は、彼等にはなかつた。

理論的にいえば、木戸の主張は筋が通っている。昨年、内治第一主義を以て征韓論に反対した大久保が、今は何故に不急の征台派兵をなすのであるか、殊に問題は明治四年の出来事ではないか、また最近の事変をあげても、明治六年三月に備中小田県の漂流四名が亦蕃人に劫掠せられたというだけではないか、これを理由に大袈裟に事を起すことは、理論の一貫を欠くものである。しかし大久保としては、西郷とは分れ、旧主島津久光には排斥され、不平士族の暴動は各方面に起つて居り、この局面を他に転じなくては、国内政治の打開が出来ない。その上に台湾問題ならば、米人ル・ジャンドルの言によつても事後処理の確信が出来たのである。

この決心は、かれが佐賀事件が起つて、自ら西下するに当り、三條、岩倉に念を押し、一度決定した朝議

は躊躇せず断行すべき事を申し進めたことによつても知る事が出来る。政府も固よりその決心で、佐賀の乱が未だ鎮定しないに拘らず、二月二十五日、陸軍大輔西郷従道つぐみちに生蕃処分の取調を命じ、その準備に着手したし佐賀の乱が平定するに及んで四月四日西郷を陸軍中将に任じ、台湾蕃地事務都督ととくとなし、翌五日参議兼大藏卿大隈重信を新設の台湾蕃地事務局長官に任じた。大隈は間もなく長崎に赴き、同地に台湾事務支局を開いてそこで事務を見た。

西郷従道が征台のため日進、孟春等の諸艦を率い、品川湾を開帆して（四月九日）、長崎に着いた時には、大久保はなお佐賀に在った。西郷は直ちに佐賀に赴いて、四月十五日大久保と会見し、十六日に長崎に帰った。大久保が佐賀を出発したのは十七日、それから帰京したのは四月廿四日で、木戸の辞表提出（四月十八日）後一週間目である。

当時、西郷従道は二十八歳の青年であつた。大久保は最初、熊本鎮台司令官たる谷干城たてきを薦めて都督となさんとしたが、西郷が自ら重職を買つて出た。

従道は兄の西郷隆盛と分れて大久保と共に止まった人であり、また大久保としては大西郷に対する情実もある。これが西郷を都督とし、谷を参軍とした所以だという（二四）。西郷は長崎から隆盛の許に人を送つて、壮兵を募集したが、隆盛は喜んでこれを幹旋し、約三百人を徴集して長崎に送つた。これが征台の役に武名を現した徴集隊というものだが、この挙に対する西郷隆盛の態度を知るために興味がある。

西郷は陸軍少将谷干城、海軍少将赤松則良を参軍とし、兵三千六百を集めた。これを運ぶために日進、孟

春の諸艦に加えるに米国船ニューヨーク号 (New York)、英国船ヨークシャー号 (Yorkshire) を備船して準備は整えられたのである。この一行の中に外人顧問が数人あつた。一人は前述の高等顧問に当るル・ジャンドルで、第二は海軍少佐カッセル (Lieut. Commander Cassel、年俸八千円、外に旅費賄料一千百円)、第三は海軍大尉ワッソン (Lieut. Wason、年俸六千トルラル【ドル】と二千円並別段手当二千トルラル) (二五) で何れも高官であるが、この外に台湾に赴いた者の中にタイネー、ブラウン、ハウス (Edward Howard House) の名がある(二六)。この内、北海丸乗組ブラウンは英国人であり、五月七日英国公使より差止めの交渉があつたが(二七)、既に台湾に出発せしめた後で、蕃地で日本遠征軍を助けて居る。ハウスは新聞記者でかつル・ジャンドルの秘書格だ。

六 英国公使パークスの横槍

西郷従道の一行が品川から長崎へ着いた四月九日のことである。英国公使ハリー・パークス (Harry Smith Parkes, 1865-83) から外務卿寺島宗則に一通の公文書(二八) が届けられた。その書翰の日附に Yedo, April 9, 1874 とあり、明治七年になつてなお『江戸』とあるのは、パークスの無頓着のよつて致すところか、それとも他に理由があるのか、明治政府成立には何れの国よりも好意を示した英国公使だけに、不思議な感を与える。(同じ頃のアメリカ公使館からの書翰には U. S. Legation, Japan, Tokyo, 18 April, 1874 とあり、トケイと

ある)。その文章の調子も米国公使ビンガム (John A. Bingham, 1873-85) が鄭重であるに對し、パークスのものは頗る高圧的だ (二九)。

この書翰でパークスは『世上の風聞を承り候に貴国兵隊多数并に兵糧台湾へ運送致し候為め』開港場で各国の船舶を雇入れて居るとのことだが、その行先は台湾の何港であるかを知らして欲しい旨を申し込んだ。これに對し日本政府は翌日、パークスに返簡を与えた。征台に對する正式の對外声明であるから、これを載せて置こう。

『昨日附の貴翰披見致し候、然ば今般我政府より官員等台湾地方へ發遣せしめ候は、我明治四年十一月、又六年三月、我國民台湾の蕃地に漂到して、或は劫殺せられ、或は衣類器財を掠奪せられ、極めて苛酷の所為に遭いたり。此土蕃は清国の政權逮ばない所にて、曾て北米里堅合衆國政府より使を派し処分せし例に倣い、我政府も当路の官員を派し、右苛酷を行し者等を懲し、且是のごときの惡業を停止し、後患を防ぎ、嗣後我國民航海の安寧を保護するにあり、右処分に付土蕃の暴挙預防のため警卒等差送り候に付、右運輸の爲め、外国船相雇、総て台湾蕃地社寮と申す港へ差向候事に候、右は閣下の御問合に就き御答迄斯の如くに候、敬具。

明治七年四月十日

寺島外務卿

英國公使

ハルリエパークス閣下』(三〇)

寺島外務卿はこの書面を手交すると同時に、パークスの希望によつて事の内容を直接に説明した。パークスが『清国政府にては此御征伐の拳を承知いたし候哉』と質問したのに対し、寺島は、まだ知らさず、『尤も柳原公使より委曲演舌致すべく苦なり』というと、パークスは『全体前後せし様相見申し候』とて手続きが前後している旨を指摘している。しかしかれが国内事情に通じている証拠には『西郷氏は大悦喜なるべし』とか、『世間の噂には佐賀の賊徒残らず進発するとの事也』とかと聞いている。この時のパークスの語調には、前途の困難は予想しているが、これに反対な意図は見えなかった(三二)。寺島は一にも二にも米人ル・ジャンドルを引合いに出している。

続いて十三日にパークスから書翰が来た。(一) 自分の承知する限りに於ては、他の支那との締約国は、日本政府のなさんとする如き派兵をなした事なき事、(二) 英国船或は英国民を雇入れる場合には、それ以前に日本政府は、支那政府が、以て敵対行為なりと見做さない旨を明らかにする必要がある。支那政府がこの日本の行動を容認すれば問題はないが、然らずしてこの遠征を以て支那に対する敵性行為なりとなすに至らば、この遠征に携わる英国民は直ちに召還せねばならぬと警告した(三三)。これに対し寺島は翌日(四月十四日)、『抑、^{そもそも}同地方は閣下御承知の通り清国政府管轄外の地なれば、我政府に於て貴国の船艦及人民を雇用候とも我を敵視し、異論申出つべき筋はこれなく儀と存候』(三三)と答えた。台湾の生蕃地域は清国の領土に非ずとの論拠だ。

この問題について注目したのは英国だけではなかった。パークスの書面が送られた四月十三日に西班牙^{スペイン}代

理公使エミリオ・ドウ・オエダ (Emilio de Ojeda) が、外務省を訪問して台湾出師の意味を問うた。

『台湾を距る凡三四十里にしてフリップ島と申処に「バンタン」とて我領地これあり候に付、貴国兵船の求ある時は、石炭等の欠乏をも補わざるを得ず』(三四)、しかし出師の趣旨は何かというのである。応接の上野外務少輔は英国に対すると同趣旨の答えをなしたが、西郷氏が殺されたような場合には、臨機の処分に出るかも知れぬという、代理公使は

『台湾島を御領地と成され候儀これなき様いたされ度候。其仔細は全島咸く清国所領と見做居り、仮令政教逮およぶざるにせよ、是乃「スマタラ」地方、荷蘭オランダに服さずと雖も、各国にては之を荷蘭所屬と見做して手を降さず、「アルゼリー」(地名)の西班牙に於けるも亦然り。』(三五)

といい、領土的野心あらば石炭供給は出来ぬと断った。上野も清国政府の答次第によると頑張つて、『それならば西班牙政府も局外中立せざるを得ない』と喧嘩分れになったが、その日の午後二人は、また会見して、結局左の如く落着いた。

『台湾へ御出師の儀は全く琉球人等を殺害せし問罪の為に、敢て地を略する儀にはこれなくに付、我領地「バンタン」【に】於ては局外中立にこれなく、貴国人へは薪水食料を贈り方の儀は友邦の所置に致すべく……』(三六)

上野が恐らくは上層部からの注意により、台湾への出師は問罪のためであつて、地を略するためでないと言明したことが想像しうる。

西班牙代理公使との問題はそれで解決したが、英国公使は喰い下った。四月十六日に更に書面を寺島に送つ

て、日本政府が台湾出兵の地方は清国政府の管轄外と主張する理由を承知致したい、清国に廿年以上も滞在したが、台湾全土は支那領土とばかり聞いて来た、日本が左様な主張をされる以上は、定めて理由があらうという趣旨だ。

七 米国公使の抗議

英国公使の書面があつた日の翌々日たる四月十八日、今まで黙して来た米国公使ビンガムが長文の書面を送つて来た。その前日（四月十七日）のジャパン・デیلیー・ヘラルドに掲載した記事の切抜を同封し、予はこの記事により始めて承知したのであるが、日本政府が台湾に対し陸軍或は海軍の遠征をなさんとし、これがため合衆国の役人及び市民を雇入れたというのは事実かどうか、もし事実だとすれば合衆国政府の名において左様な雇入れに対し抗議せざるを得ない旨を通告したのである。

ビンガムは前の公使デ・ロングが、日本政府に対し、余り立入つて助言しすぎたため召還された後を襲うて明治六年に赴任して来た人だ。そうした関係から、かれは日本の征台問題に対しても見て見ぬ振りをしていた。しかるに横浜の英字紙ジャパン・デیلیー・ヘラルドに、かれを攻撃する論文が出た。

『然るに日本在留の亜米利加公使ビンハム氏は、独り其同僚に反して支那、日本両国に於て欠く可からざる公告を為さざる間は、半は劫掠の征伐と看做す可き事に、其国旗を揚げたる船艦の使用せらるる、明らかに許るしたるに非ざれば、暗に黙許せり。亜米利加政府は此征伐の真の目的を十分に知らざるに似たり。否らざれば何を以て

其国の官吏日本政府に使用せられて征伐に加わるを許すに至らんや。』(三七)

こういう記事が出ると、ビンガムも黙っている訳にはいかない。かれはこの英字紙の記事を同封し、前記のような照会を日本政府に発したのだ。

ここで附記して置きたいのはビンガム公使は、タウンSEND・ハリス (Townsend Harris, 1855-61) と共に、日本にとっては真実なる友人であつた一事だ。かれは一八五五年(安政二年)以来引続いて米国下院議員であり、南北戦争の時には陸軍の法務官をつとめ、また大統領リンカーン (Abraham Lincoln, 1861-65) 暗殺事件の裁判においてはその一部を担当した(三八)。明治六年九月廿五日に日本に到着するや、かれはハリス以後の米国公使がつつていた各国との共同行動が、日本のためにも、また米国の商業的利益のためにも好ましく、からずとして、米国独自の政策に帰り、また翌年(明治七年一八七四年)一月十七日には、既に不平等条約改正の必要を、故国政府に勧告している(三九)。かれは不平等条約の故に利益するものが英国であるとなし、日本は明治七年において不平等条約の故に八百万弗の負担をしなければならなかつたといい、明治十年の役(西南役)は、日本政府が関税収入を得られないので、農民に対する過当な課税をした結果の農民運動であるとの見解を有していた(四〇)。斯様な立場にあつたので、日本在留英国人、特にパークスとは正面衝突し、在留外人からは裏切り者なるかの如くに批難された。その後、パークスが東京から北京に転勤せしめられたのは、かれの弾劾が最も有力な原因であつた。ジャパン・デイリー・ヘラルドが米国公使を鋭く攻撃したのも左様な関係があつたからであらう。

米国公使ビンガムの十八日の書面に対し、外務卿寺島は十九日に回答した。その要旨は、

『今般都督を台湾生蕃の地に遣し候に付ては、万一彼より暴動の振舞これある哉も計りがたく候に付ては、保護兵差添遣し候義にて、清国政府に対し敵対するの主意毫もこれなく候。就ては貴国船舶人民相雇候とも全く平程の目的にこれあり候。』

とあり、これに附属書を添えてある。附属書は従来西洋諸国にも問罪の師を挙げたことの例あるを説き、客歳我が国の使節が行った際、『兇徒等をして至当の罰に所せられん事を談判したりと雖も、総理衙門之に答るに彼地は清国の藩属たるに非ざる旨を以てせり』と繰返している(四一)。

米国公使ビンガムは同日(十九日)、折返し書面を外務卿寺島に送り、『台湾島御出兵の儀は、清国政府より認可の証書御入手相成り候迄は、御企望の通り、米国の船民を貴国の海陸軍に附属せしめ、貴国政府にて御差送相成り候儀、拙者職掌を以て承諾致し兼候趣、余儀なく申し進み候』とて、その理由として日本が敵意を持たなくとも、支那側が敵意を持つと看做せば戦争になる。これは不幸な事だから日本はまず支那政府から出兵に異議なしとの確証をとるべきだ。それまでは米船ニューヨーク号、並にル・ジャンドル、カッセル、ワッソンの三名が台湾に赴くことを差止められたいのである(四二)。

この米国公使の申入れには、外務省は余程遽^{あわ}てた。従来の経過からいって、この拳に対して他の国は別として米国から干渉があるうとは思わなかつた。それは在留外国人にとつてすらも意外であつた。

『米国公使から何等かの干渉があるうとは、何人も予期しなかつた。かれは着任以来一貫して、日本政府が如何な

る種類にせよ、外人から監督を受くる如きことに極力反対して来たのであつて、この人がまず日本の行動に対し、最初に障礙を投げかくべしとは考え得ないところであつた。最初、カツセル少佐、ワッソン大尉を日本が雇入れんとするや、かれは自ら電報に署名し、ワシントンの國務省に対し、彼等が征討部隊に参加する許可を得んことを推薦したのであつた。しかるに紐育号が兵隊と糧食を積んで、台灣へ向う途中、かれから電報が来て、これ等の人々が、かれ自身の許諾によつてなさんとした行動を強く差止められ、また紐育号がその傭船義務を果すことを——この挙が友交關係にある支那の權利を侵犯するものなりとの理由の下に——禁止されたのである。』（四三）

そこで寺島は即日三條太政大臣に対し、『米国公使ヨリ唯今書簡到来』して、翻訳が間に合わないから明日送るが、『右船并人員差留方の儀は夫々其筋へ御達これあり度存じ奉り候』と上申した。

この英、米両国公使の申入れは政府の腰を動搖せしめた。抗議は英、米公使ばかりでなくイタリー、ロシア、イスパニアからも質問し来たり、殊にロシアは既に四月十一日に魯国人が征台進発に關係することを禁止した旨発表している。四月十八日に重臣木戸が辞表を提出しても、その決心を変えなかつた日本政府は、英米の抗議には一たまりもなく態度を一変した。続いて四月廿三日に外務省における寺島外務卿とパークスの対談になる。

（パークス）台灣島へ御出兵の義御見合せ相成り候趣右は何故に候哉。

（寺島）前以て支那政府へ照会におよび候方然るべくとの考え、且柳原公使もいまだ派遣せざる故等なり。（中略）（パークス）一体先きに柳原公使は北京へ御派遣相成候えば然るべく候。

(寺島) 柳原公使の派遣には時節の關係なし、台灣へ航するには時季の限りあり、然れども前以て支那政府へ照会
および置き候方然るべくと考へ候に付、先ず其發纜を見合せし也。(四四)

大久保利通が佐賀の乱を平げて東京に帰つて来たのはその翌日廿四日のことである。かれが日記に書いた
『意外の事』には、いろいろな意味が含まれて居つたことが想像出来るであらう。

八 西郷従道、命を聴かず出発

東京で外交団から抗議があつた時に、長崎においては既に台灣遠征の準備が出来ていた。西郷従道は十九
日に、大隈は廿日にそれぞれ長崎に到着して、台灣蕃地事務本局を根城に用意していたのが、そこへ東京
から電報があつて、出発延期を命じて来た。続いて廿五日權少内史金井之恭が太政大臣三條の本書を齎らし
て長崎に到着した。

大隈は金井の説明によつて、事の次第を諒解し、西郷に対し暫らく出発を延期して復命を待つべきを説い
たが、西郷は断として聴かない。『私が曩に都督の命を拝した時、或は廟議の変更なきかを惧れ、これを内
閣諸公に質したことは貴下の已に知る所である。今や従道、大命を閫外の任に受け、師出でて道にあるのに、
未だ数日ならずして、これを留めることが出来ようか。……従道は御璽を鈴した勅書を奉じて居る身だ。復
た前日の従道でない。それ故、今となつては太政大臣自身来つて諭されようとも敢てその命を奉ずることが
出来ない。一体、内閣の政令は朝夕にvari、天下の人々をして疑惧を抱かせる……貴下が従道を留めるのは

貴下の職分、従道の留まらぬのも亦従道の職分である。貴下若し強いて従道を留めらるるなら、従道は御璽を鈴した勅書を首にし、進んで生蕃の巢窟を衝き、死して止むばかりである。事若し清国に牽連し、葛藤を生ずる如き事あらば、わが政府は従道に負わしむるに脱艦逸賊の名を以てし、清国政府の口を塞ぐ可きのみである』(四五)というのである。

西郷はその夜(廿六日)直ちに諸艦に令して発艦の時限を定め、炭水を積ませた。翌廿七日には、急に兵士二百余名を有功丸に載せ、また領事福島九成に対し閩浙総督に与える公文を渡し、厦門に向つて前往させた。当時、長崎に在ったル・ジャンドルにも、亦前往を急がせたが、その乗船ニューヨーク号の船長が躊躇して応じない。その内に米国領事が、米国公使ビンガムの訓電によつて令を発し、同号を長崎港内に引留めたので、大隈はやむなく借入の解約を為し、積載貨物を引卸した(四六)。また英国船ヨークシャー号も英国公使からの命令を受けた(四七)。

西郷もこれには困った。英米から借入れた船艦を取消されて、兵糧運送の術を失なつてしまつたのである。そこへ東京から大久保が来る旨、電報があつたが、その前に出発してしまいたい。そこで大隈の智慧によつて、後に紐育号を買取ることにし(四八)、五月二日に谷、赤松等は日進、孟春、明光、三邦の四艦を率い、台湾の社寮港に向つて碇を上げた。大久保が長崎に着いたのはその翌日(五月三日)で、西郷だけは長崎に留つてかれを待っていた。

大久保が長崎に出張したのは、他の場合と同じく自ら困難に当らんことを買つて出たのである。かれは廿

四日、佐賀から帰京した時、駅頭において簡単に勝、伊藤の両参議から報告を受けたのだが、事態の重大性に顧みて、自身大隈、西郷と会見して事情を調査する必要のあるのを感じた。三條、岩倉にもこの事を説き、廿七日には参朝してその意見を陳述しているのは、かれの日記に見えて居る。

『四月廿七日 月曜〔上略〕一字正院へ参昇、今度長崎より台湾兵出張一条、大隈、西郷子報知事情分兼延引、四方の論もこれあり、誠に一大事の国難、小生実地に向、進退処分を御委任あらんことを乞い、條公へ陳述す。参議中へ同断。岩公へ参上同断陳述則今晚條公と御示談成されべくとのことなり。〔下略〕』

『四月廿八日 火曜 今朝昨日 久光公左大臣御拜命に付御伺、且長崎出張云々の義陳述、御異論なし。〔中略〕一字参内、條公より長崎出張願ひ通り仰付けられ御内決の旨を御論しある、則御請。岩公へ参上、猶懇々御談これあり、林内務大丞召呼び、小子長崎出張仰付けられの次第、やむを得ずの趣を岩公より御論これあり候。〔下略〕』(四九)かくて大久保は在京五日にして廿九日には再び西下した。『岩公より御招に付参上、昨夜電信の趣に付、尚御懇談これあり……二字汽車より発す……米郵船コールテン号へ乗船、五字前出帆』(五〇)とその日記にある。東西奔走、寧^{ねいしよ}処^{いとま}に違^{ちが}あらずとはこの事だ。西下に当って左の御委任状を賜わった。

『台湾蕃地処分に付、清国は勿論、其他各国交際に関係重大の儀、長崎出張の上、夫々参酌^{さんしやく}し、兵隊進退等實際に付き、不都合これなき様取り計い致すべく、御委任候事』(五一)

佐賀に赴いた時もそうであつたが、この時も大久保は、この事件に関する文武の大権を委任されたわけである。

大久保は前述の如く五月三日に長崎に着いた。その日の日記に『夜九字半、長崎港へ着船、長（永）見源三郎宅へ旅宿、則、西郷子、野津子、東郷子、武井子、林子、金谷子、県令宮川〔房之〕等入来』（五二）とある。夜間に拘らず、多数の来客を見るべきだ。

この夜のことである。陸軍少将野津鎮雄はやや活気を帯びて大久保を訪問したが、挨拶が終るや、今回も亦因循説にて終るべき乎と云った。大久保は容を正し、嚴然として、七左衛ドン、何ヂヤツチ（七左衛は鎮雄の俗名、何ヂヤツチは何をいわれるかの意味）と一言したのみであった。野津は大いに畏縮して、そのまま黙したという。この野津と同行した後の陸軍大將子爵大迫尚敏は、当時陸軍大尉であったが、後に語つて、自分等は野津將軍を豪傑の士だと崇敬して居つたのに、その様子を見て上には上があるものだと深く感じたと言った。また隨行の武井守正（男爵）も同じ感じを持ったとのことだ（五三）。

九 大久保責任を一身に負う

大久保が来ても、出征軍の大部分は出発した後で、どうにもしようがなかった。しかし大久保はそうした事態に処し、徒らに過去に執着する人ではなかった。必要なことは今後の処置に大過なからしむることであった。この辺から外交家としての大久保の真骨頭が出て来るのである。かれの日記にいう。

『五月四日 今朝八字過より大隈旅館へ訪尋、生蕃処分に付、奉命の権を以て協議決定に及ぶ。急既に有功丸を以て、厦門県令へ公然掛合に及、且昨三日、日新（進）艦其外孟春、明光、三邦丸四艘兵卒を乗せ、蕃地社寮に向け出

帆させたり。此のごとく運びに至り候上は、止を得ざるにより、此上の都合を謀り、速に西郷を出張させ、柳原を至急差出され候等の順序、小子則出帆、李仙得同船帰京云々、別紙の通り約定いたしたり。何れにせよ、大難の事故、心決いたし候、午后四字比帰宿、今晚大隈子、野津子、東郷子入来、

柳原早々渡海の事を電報す。』(五四)

大久保が『大難ノ事故、心決イタシ候』というのは余程のことである。その謂うところの約定書とは左の如きものだ。

一、「カッセル」、「ワッスン」両氏行き違いを以て、有功丸より出帆致し候に付、西郷都督到着迄は、其俟受候様電報を出す事。

一、西郷都督到着の上は「カッセル」「ワッスン」両氏の雇を放免し、早々差返し候事。

一、李仙得は早便を以て、帰東致させ候事。

一、生蕃処分済の上凶暴の所業を止め、我意を遵奉する迄は、防制の為め相應の人数残し置くべき事。

一、生蕃処分に付き清国と関係を生じ、万一事変を醸すの時宜に及ぶ節は、雇人の英人其他を免じ、同船艦を返すべき事。

右条件、御委任中にも掲載これあり候得共、更に協議一決致候事。

明治七年五月四日於長崎

参議 大久保利通 印

参議 大隈重信 印

陸軍中將 西郷従道 印

なお、次の如き一通の申合せがある。

- 一、柳原公使至急出張せらるべき様、東京へ電報差し出し候事。
- 一、西郷事、雇船或は買得船を以て、至急生蕃社寮へ出発する事。
- 一、大隈事、柳原公使当港着迄待受、篤と旨趣申含め協議致すべき事。
- 一、大久保事、明五日申出帆、実地の景況に依り進退決着の形行言上に及ぶべき事。
- 一、前条決着に付、難題を醸出し候節は、大久保始其責に任すべき事。(五五)

右によつて、この事態に処する大久保の布陣は大体三つに分れているのを見るべきだ。第一は列国に対するもので、妥協的である。即ち米国の抗議に対しては、米人三人を解備乃至帰東せしめて、これと正面衝突を起さぬようにする事。英国は米国公使のような要求はして来て居らぬが、日清關係が変転すれば英人と船とを返す事である。第二には西郷を頭帥とする派遣軍の問題で、西郷は時期を見て早速渡台し予定の行動をとる事、第三は支那に対する処置で、早速柳原公使を支那に送つて諒解を求むる仕事を始めることだ。大久保は柳原を出発せしむるように、直ちに打電した。

この時の大久保の心事は、かれの政府に対する報告書に最もよく現れている。既述の事実と、やや重複する嫌はあるが、これを左に載せよう。

『先月廿九日横浜出帆、本月一日午前八時、神戸へ着艦、同二日暁四時同港を発し、同三日夜九時半長崎へ着艦す。

翌四日生蕃事務本局に於て、大隈參議へ面会^{つかまつ}仕り、実況の顛末具さに承り候処、既に先月二十七日夜、福島領事、雇米国人「カッセル」「ワッスン」「ハウス」三名を率い、福州総督へ公告書を齎らし、有功丸にて厦門へ向け出帆、續て本月二日谷副總督、赤松少將護兵千余を引率し、日新艦、孟春艦、明光艦、三邦艦、類船四艘社寮へ向け出帆せし趣なり。依て熟考するに、一挙進退の儀何れに致せ大難事の係わる所は論を俟たず、剩え此の如く機会を誤り、終始全備の策を得る能わず、既に福州総督へ公告書を送りたる上は、止むをえずの実況故、此上成るべく清国に対しては勿論、外国交際上不都合なき様注意し、生蕃処分^{ようしき}着手^{ようしき}を得、寛急順を追ひ、其目的を達するの所断に出ずる外、考慮^{つかまつり}これなく、第一に柳原公使至急清に渡り、米人三名進退、西郷都督速に出発等の件々、別紙の通り即決^{つかまつり}仕^{つかまつり}候。且西郷都督儀東京出発前奉する所の勅旨に乖戾せる号令等は今日迄これなき積り、去りながら、万一不都合の次第もこれあり候て、御譴責を蒙り候儀は固より期する所なりと承候。

右長崎に於て、生蕃処分、兵隊進退等實際に付き、御委任の権内を以て裁定せる大略なり、容易ならぬ重き事、匆卒^{そうそう}に涉り、御旨趣に触れ候儀、恐縮仕候得共、帝國に対しては勿論、外国交際上不都合を生じ、國家の大難を醸生候節は、臣利通其責を引請候覚悟に候、此段復命仕候に付、宜御執奏願ひ奉り候、誠惶誠恐頓首。』(五六)

書中『清国に対しては勿論、外国交際上不都合を生じ、國家の大難を醸生候節は臣利通其責を引請候覚悟に候』とあるは、かれの決心を知るに足るものであり、かれの北京行もここに発するのである。

大久保は五月六日、ル・ジャンドル、通訳官平井某と共に長崎を發して大阪に立寄り、五代、税所等の諸士と会し、神戸から十五日横浜に帰着、直ちに東京の正院に出て復命書を上った。これより先、三條、岩倉

は此の事件について、清国に対する交渉に注意を欠き、且つ出師を中止せしめんとして、上は聖断を誤らしめ、下は紛議を生ぜしめたというので、共に辞表を提出したが、左大臣島津久光は之を留めて奏上しなかつた。

一〇 紛糾する英米との交渉

米国公使ビンガムは、既に四月十九日に外務卿寺島宗則に宛てて、台湾遠征に米国汽船及び米国人が参加することに抗議を申出でたが、同時にル・ジャンドル、カッセル、ワッソンの三名に対しても進往差止めを命令を發した。併しカッセル、ワッソンの兩人はル・ジャンドルに対し、『ビンハム氏より政府へ何の故障を為したるとも、夫は全く同氏と日本政府の間にある事にて、外に申出すべき事更に之なく、且つ拙者より些少の注意をみなすを望まざるなり』（五七）との書翰を提出したまま出帆してしまつた。

米国公使ビンガムは四月廿九日に、右に關し寺島を訪問して質問した。『廿七日の話にはニューヨーク号は既に御差止め相成候故、最早出帆は出来ぬ筈に候処、其差止めに構わず、出よと命ぜられたりと』というが如何というのである。寺島は出帆したのは有功丸であつてニューヨーク号ではないと弁明した。ビンガムは、その前日のジャパン・ガゼットに朝鮮において日本漂着人が殺されたとあつた記事を引照し、

『国と云ふものは容易に戦鬪は致すべからず、維持せらるる丈は軍は出ず、貴国は独見を以て政事を致され候に付、或説には誘われ、軍を出し候様の義は必これなくと信用いたし候。是は私の考丈の事に候、貴国は成丈泰平にして人民を安堵せしめ、長く富優ならしめ度、兵を用ゆれば外国は御国の為めには成らず、却て虚に乘じ、己れが

利を謀るべし、夫故兵を台湾に遣る事は宜しからず。』

とて他国に乗ぜられることの不可と、兵を用いることの不可を説いて居り、しかし『日本に権利ありて台湾へ参いられ候を、我方にて彼是^{かれこれ}申し候義には毛頭これなく』と弁解している（五八）。言裏に英国に対する警戒がある。

五月六日、ビンガムは更に上野^{しやう}少輔と米国公使館で会見して、その後の模様を聞き『何故に支那へ公然使節を御差出相成り、夫々の御応接これなきや。其順序を踏み、御処分相成り候わば、我政府は勿論、他の政府と雖も、敢て違論これなき儀にて、却て貴政府の信用も各国へ対し相増申すべく候儀にこれあり』と、外交手続の不備を今一度云っている（五九）。

英国公使パークスも、同じ様な態度に出た。五月五日に寺島外務卿へ書面を出だし、在北京英国公使からの通信によると、支那政府はこの遠征については何等知るところなく、且つ生蕃の居留する台湾の地方は支那の領土だと主張しているとのことだ。これは日本側のいうところと相反しているから、支那政府の承諾なき限り、『台湾何処にても御差向の拳に付、我国船艦又は人民御雇成なられ候事。拙者に於て許可致しがたし』というのである。そして三條は五月七日に、パークスの申出により、大隈に對し北海丸乗組のブラウンを指留めるように指示している（六〇）。

寺島外務卿は五月八日にパークスとこの問題について会談した、会談の場所が外務省ではなしに英国公使館であるのも、英国公使の威勢を示すものであろう。日本側は船艦派遣は台湾に對してでなくて、福建鎮台

であるとの建前をとった。パークスは断りに行くならば一艘の船に二、三人でよかるべき筈なのに、その様な多人数を出したのは如何なる訳かと反問する。大久保が帰らなくては、その辺の事は不明だが、兎に角『牡丹社の事件のみ、其余仔細なし』と寺島は講述している。パークスは、支那側は『拙者の考へには必ず争端を聞くべくと存候』と、戦争になるであろうといった(六二)。

英、米の公使から、こうした横槍が這入った以上は、一番いいことは、ル・ジャンドルを呼びかえして、直接に話させることである。そこで軍隊と共に台湾に赴くべかりしル・ジャンドルを長崎から呼び戻した。ル・ジャンドルは長崎出発の前(五月四日)に西郷に対し、台湾に上陸する際における軍隊の作戦及び蕃地の事情、地理について詳細開示する書面を送り(六二)、大久保と共に上京した。かれは五月十八日に、外務省において寺島と会談したが、中央部のやり方に対し満々たる不平を述べている。

ル・ジャンドルによれば、かれが同事件で出発することも、カッスル外一人雇入れのことも、米国公使ビングラムはよく承知している筈だ。元来、この事件については支那政府との交渉が整つて居らないが、それにして支那政府は見ぬ振にて黙許し居るべきところを、日本側が余りに公然と事を始めたから黙っている訳にはいかなくなったのだ。たとえば長崎などから、堂々と出発せずに、どこか『佗処わびより竊ひそかに行かばよかりしに』というのである。寺島が『私に於ては夫等の事には構わずと存じ候、米國にて罪を問ひし事と同じ手続きなればなり』という、かれは

『同じ手続にても違う処あり、夫は足下が熟知する処なれば言うに及ばず、違う処は小兒が大人の為す事を真似る

が如し』

というのである。更にかれはパークスが予め知つていたことを述べていう。

『昨年北京より帰りし頃、図面上に付てパークスにも一応話したり、其時パークスは私の見込に力を附られたり、別段私の見込をよしとは云わず候え共、早く往ねば其内に風が吹く、風が吹けば急に模様が替るといいたり。』

寺島が『余り米英などの船を雇い事が大きく』なつたのだという、かれも『私も事の大きくならぬ様にと思ひ、大隈、大久保両君と私かに談判致したり』と答えて、余りに問題を大きくし過ぎたことに同感した。寺島が支那からも英米同様の手紙が来たと話すと、左様なことがある筈なしと頑張るのである。副島種臣と意気投合しただけに、相当なる独断家であることが分る。かれはまた、その日、米国公使ビンガムと会見たことについても話した。

『私義昨年帰国せんとするに当り、デロングより此事の目的の爲め止まれと云。然るに私既に帰国の意決したれば、止まらぬ積り咄致し候処、段々我政府へデロングより申立、政府にても承知の上止まる事になりたり。然るに君より解職される筋はなき筈也。公使は云う、辞職せよとは云わず、余曰く、此目的を果たす為に止りて、夫を果す事を拒まれては、則辞職せよと云に同じ、且私の月給を奪うなり。君に於て法に触ると云うとも、私に於ては法に触るとは思わず、殊に又私平民になりて、台湾へ行は如何。公使は云う、出師に離たる上は異存なし。』(六三)ル・ジャンドルは後にも説くように、日本を代表して支那に行つて活動している。これがしばしば新聞でも問題になつたが、パークスは七月廿七日(明治七年)に寺島外務卿に対し左のような事をいつている。

『李仙得は一体、大言を吐く人なり。何か各国公使に対し威としに用いし言葉あり、一国なれば自分の口上と見做ても宜敷候得共、各国へ言い入れし上は、当人の言を貴政府の言なりと世間にては見候。』(六四)

御雇外人の進退問題をワキ舞台として、征台事件は進んで行つた。五月十五日、東京に帰つた大久保に対し、島津久光の反感があり、大久保はために辞表を提出したが、大久保なくして時局が乗り切れるものではない。岩倉の誠意ある勧告があつて、久光は大久保排斥をふくむ建白書を撤回し、大久保もまた依然として朝に立つことになつた。

(一) 『大久保利通日記』下 二六二頁。

(二) 大久保が日記に『意外之事』と書いたのは何を意味するかは明瞭ではない。徳富蘇峰氏は木戸公辞職のことなりといっている(『大久保甲東先生』二八五—八頁)。

筆者は、従来、反対的態度をとるまいと考えていた米國その他が、積極的な反対意見を表明したことを聞いたからだと解する(本書七〇頁参照【第二章第七節「米國公使の抗議」末尾】)。

(三) 林董『後は昔の記』一三一—一三二頁。

(四) 『尾崎三良自叙略伝』一三六—一三七頁。

(五) 明治六年十月廿日、岩倉具視宛木戸孝允書翰(『木戸孝允文書』第五 五九頁)。

(六) 『西南記伝』上巻一 一八三頁以下、『松菊木戸公伝』下 一二七五頁以下参照。

(七) 円城寺清『大隈伯昔日譚』六七五頁。

(八) 明治六年十月廿八日、岩倉具視宛大久保書翰（『大久保利通文書』第九 一三三—一三五頁）。

(九) 東恩納寛惇『尚泰侯実録』一八五頁。

(二〇) 明治七年二月六日、台湾蕃地処分要略（『大久保利通文書』第五 三四三—四六頁、『大隈重信関係文書』

第二 二四七—五〇頁）。

(二一) 『大日本外交文書』第七卷 五一—八頁。

(二二) 『リセンドルは曾て清国厦門駐在の領事で、米国の漂着船の水夫が蕃人に殺害せられて、アメリカから問題の軍艦を派遣した際、かれは清兵を率いて深く蕃地にわけ入り、十八社の酋長トキトリと逢い、将来アメリカ人が同地に入るとも、決して暴害を加えしめぬという盟約を定めたのである。』（『大隈侯八十五年史』一五五—二頁）。

ル・ジャンドルにつき伊藤博文から大隈に寄せた手紙（明治七年八月二十日附）がある、曰く

『横浜仏文新聞に李仙得の琉球論追々相著れ候処、過る十八日の新聞に稍我政府の処分を不当なりと記し、又支那政府へ談判の為に副島を派遣せずを不都合なる様書載これあり候趣、疾く承知の事とは存じ奉り候へ共、同人等如き東洋の事情を熟知する者より彼是政府の処分を非難候様相成り申候ては大に我の不利と存じ奉り候。御注意なし此段御内報におよび置き候間、^{ますので}篤と御取^{ただ}糾し下されべく下候。為其勿々敬具。』（『大隈重信関係文書』第二 四四七頁）。

(二三) 『大日本外交文書』第七卷 八—一三頁。

(二四) 同上、一三一—一五頁。

(一五) ル・ジャンドルの辞令は左の如し、

『 外務准二等出仕 李儼得

補台湾蕃地事務局准二等出仕

太政大臣従一位 三條実美宣

大内史正五位 土方久元奉

明治七年四月八日』

(『大日本外交文書』第七 一二二頁)

(一六) Tyler Dennett, *Americans in Eastern Asia* (New York, 1922), p. 440

(一七) 『大久保利通日記』下 二八四頁。

(一八) U. S. Foreign Relations, 1873, p. 567. See Japan Instructions, vol. I, August 24, 1871.

(一九) Japan Despatches, vol. 22, Nov. 22, 1872.

(二〇) Dennett, op. cit., p. 445.

(二一) 『大久保利通日記』下 二二七頁。

(二二) 明治七年四月十八日征台の不可を論じ辞官を請うの表(『木戸孝允文書』第八 一五四―一五五頁)。

(二三) 『木戸孝允日記』第三 一二三頁。

(二四) 『谷は急に上京して……西郷の都督を拝せしを聞き憮然たり。西郷乃ち谷を訪い之に謂て曰く「足下と共に遠征に従わんと欲す、如何」と。谷洒然^{しやぜん}として其隔心無きを喜び、善しと称す。西郷乃ち大久保に請う

所あり、谷を以て参軍となす。』（『西南記伝』上ノ一、五九六頁）。

(二五) 『歳俸六千トルラルト一千円』云々とあり、一ヶ年の契約だ。この字義やや不明だが【トルラルト】ダラー（ドル）であろう）、一千円は手当であろう『大日本外交文書』第七卷 二二頁）。

(二六) カッセルよりル・ジャンドルに宛てたる蕃地征討報告書による（『大日本外交文書』第七卷 一一五—二五頁参照）。

(二七) 『大日本外交文書』第七卷 六九頁、三條太政大臣より大隈台湾蕃地事務局長官宛電信。

(二八) 同上、二三—四頁参照。

(二九) パークスのものは自身の名前を単に Harry S. Parkes, Her Britannic Majesty's Envoy Extraordinary and Minister Plenipotentiary と書き放してあるのに対し、米国公使のものは I am, with great respect, Your Excellency's obedient servant, JNO. A. Bingham とある。小さい事だが相違を見うるであろう。

(三〇) 『大日本外交文書』第七卷 二八—九頁。

(三一) 同上、二四—八頁。

(三二) 同上、三〇—二頁。

(三三) 同上、三四—五頁。

(三四) (三五) (三六) 同上、三二—四頁。

(三七) 同上、四二頁。

(三八) John W. Foster, Diplomatic Memoirs (Boston and New York, 1909) vol. I, pp. 5ff.

- (三九) Japan Despatches, vol. 27, Jan. 17, 1874.
- (四〇) Dennett, op. cit., p. 516.
- (四一) 『大日本外交文書』第七卷 四三—四頁。
- (四二) 同上、四五—七頁。
- (四三) John R. Black, Young Japan (London and Yokohama, 1881), reprint 1940, vol 2, p. 429.
- (四四) 『大日本外交文書』第七卷 四九—五〇頁。
- (四五) 『大隈侯八十五年史』一五五—七頁。
- (四六) 日本政府は紐育号の航海破約について損害賠償の訴訟を提起し、横浜米国領事の裁判にて敗訴となり、明治七年八月十日、カリフォルニア州地方裁判所へ控訴の手続方、桑港の日本名誉領事に通達している。結局この事件は、明治十一年七月に控訴棄却となった(『大日本外交文書』第七卷 一八〇頁、三三六—八頁参照)。
- (四七) 『大隈侯八十五年史』には『英国船ヨオグシュン号に向つても同じく借入の約を解いた』とあり(同書 一五五—八頁)、これに対し外人側の記事では『最初から英国公使はヨークシャー号に關し禁止すべしと懼れられたのであるが、英国公使が為したことは、単に日本兵を載せたる場合、支那の開港場に着けることを禁止したのである』とこつこつと(Black, op. cit., p. 429)。
- (四八) 『大隈侯八十五年史』一五五—九頁。
- (四九) 『大久保利通日記』下 二六三—六四頁。
- (五〇) 同上、二六四頁。

(五一) 明治七年四月廿九日、大久保への御委任状（『大久保利通文書』第五 四九八—九九頁）。

(五二) 『大久保利通日記』下 二六六頁。

(五三) 勝田『大久保利通伝』下巻 二五三—五四頁。

(五四) 『大久保利通日記』下 二六六頁。

(五五) 明治七年五月四日、台湾生蕃処分に関する議定書（『大久保利通文書』第五 四九九—五〇二頁『大隈

重信関係文書』第二 三二—三三頁）。

(五六) 明治七年五月四日、長崎出張の復命書（『大久保利通文書』第五 五〇三—四頁）。

(五七) 『大日本外交文書』第七卷 五三頁。

(五八) 同上、五四—六頁。

(五九) 同上、六七—八頁。

(六〇) 同上、六五—六九頁。

(六一) 同上、六九—七二頁。

(六二) 同上、六四—五頁。

(六三) 同上、八七—八九頁。

(六四) 同上、一六五頁。

第三章 日清間の予備交渉

一 征蕃派軍と国内事情

大久保、大隈、西郷の話し合いによつて西郷従道^{つぐみち}は台湾に向うことになった。第三陣である。困つたのは船舶の不足であるが、大隈が奔走して、丁度その頃長崎に入港した米国商船シャフツボリー号と、英国商船デルタ号が入港したのでこれを買収し、国旗を橋頭^{しやうとう}に押し立てて、前者には社寮丸、後者には高砂丸と命名した。この二隻を得て、西郷は五月十七日に、台湾に向つた。問題のニューヨーク号の買収にも着手したが、この方は種々な問題があつて、買収したのは八月十日のこと、これに東京丸と命名した（一）。

こうした処置については、国内一部に於て相当な批難があつた。大隈はその時のことについて回顧する。

『愈々決まつた（出兵）と思うと、英米から……船を出すことを中途で止めた。サア大変、愈々絶体絶命という場合で、トウ／＼が輩独断で、その頃太平洋通いをしていた米国の飛脚船等五六艘を買う事にした。当時わが輩は大蔵卿として財政権を持っていたので専断で政府の金を恣にし、これを支出したといふので非常な憚効を被つた。危く進退伺を出さなければならぬ所だが、既に乗船の仕度整えたる間髪を容れざる場合だから、下手に中止しようものなら、軍隊内に不平内乱が起りそうな形勢である。第一西郷一向肯きはしない。平生でも此方は余り人望のない方で、そこへこの始末だから、攻撃の火の手は益々高まつたが、形勢斯くの如しで、わが輩はこの際、果断決行に如かずとした。』（二）

この台湾出兵は必然に国内において流説を生んだ。政府は既に明治七年二月、『軍事に係り候儀は新聞に出すまじき旨御達し相成り』、『郵便報知』の如きは新聞記事の差止が、却つて人心不安を増大することを説いて東京府御掛に建言し、東京商法会議所がこれに副申しているが（三）、この建言は聞かれて廿日の禁止命令が廿五日には解禁になつてゐる。台湾問罪の出兵に關しては四月十四日の『新聞雜誌』に現れた。

『台湾問罪の鎮台兵二十小隊、熊本、鹿児島両營より出發の由、隊付の士官其他蕃地事務關係の官員、昨十三日品海出帆の趣にて、十二日両国辺処々酒樓に於て盛宴を張り、別杯べっばいを催せり。又彼地陣營修繕のことは、神田三崎街有馬屋なる者請負にて、木材等昨今府下より積廻し相成る由なり。』（四）

出兵の事が決ると南方問題に興味が出て来て、四月十八日の『東京日日新聞』には『當節の台湾通信』という記事に、台湾土蕃の生活を紹介してあり、また同日『清国厦門に領事館置かれ候』旨の公告がある。『東京日日新聞』は岸田吟香を従軍記者として派遣し、更に写真師も始めて従軍することになった。

『写真の行われてより山川草木動物の類其形を蔽う所なく、數万里外の物と雖も、數千年前の人と雖も、對して少異あることなし。中橋埋立地に住する松崎晋子は久しく之を業とす、今度台湾の役陸軍省の命を奉じ、去る十二日欣然として發程す、不日彼境に達し、山河の形勢は元より、人物の類或は彼此応接の光景等に至る迄、尽く紙上に収載して歸らるべし。同日我社より發する來訪者が書載して寄るの書と照看せば、図中の人物をして或は怒らしめ、或は憂わしめ、或は喜ばしめ、或は樂しましめ、又は其水をして流れしめ、終に石をして善く點頭せしむるに至るも亦難からざるべし。』（五）

こうして問題となつていた時に同日の他の新聞は急にこの台湾遠征の事が取消しになつたと報じた。

『台湾問題として此程陸軍兵隊其外長崎まで発艦の処、外国人議論等もこれあり、御取消相成り候よしにて、去る十九日金谷〔井〕権少内史同港へ差遣わされたるよし。』(六)

越えて、五月八日には大久保が西下したのはこの問題のためだと新聞は報ずる。

『大久保内務卿の西下は全く台湾出師御引戻しの事件に係るの由なるに、卿未着の内、已に台湾行の諸軍長崎発港の噂あり追々蕃地の確報あるべし』(七)

金井や大久保が西下したに拘らず、西郷都督が断乎として出征したという新聞記事が出たのはその二週間後のことだ。

『台湾問題の挙に付て、昨今評議あり曰く、英米公使より云々物議を生ぜしは、彼の人員と船舶を借るの事に係り、遂に還旆はたをかくすの議を生じ、参謀大久保公を以て出征を止められしかども、都督西郷公は兼て勅命と特論の重旨を奉体する処あり、兵士は勇氣凛々進むの勢いあり且更に深き御算も立させられて、頃日断然出征のことに決し玉い、汽船二艘を長崎にて御買入れになり、三国号を借り上げ、士官兵員追々蕃地社寮かいらんに向け解纜すと、既に都督公も御発艦の由……』(八)

この日の新聞に、参議兼文部卿木戸孝允が五月卅日を期限に本官并兼官なわらひを免ぜられる旨を発令公表してあるのも、一般国民としては何等かの問題が、上層部にあるのを知つたに違いない。その頃の新聞に左の如き浮世歌の投書があつた。

『夕暮にながめ見わたすたまの浦、

君の仰せをよそにして

帆かけた船がいづるぞい

あれ民がなく民の声

都に名将がないかいな』(九)

民間において政府の朝令暮改の批難が盛んであったと共に、この征台事件は物価に影響して、新聞は盛んに米価問題を取りあげた。即ち東京商社相庭欄によつてこれを観ると、米価は左の如く奔騰^{ほんとう}している。

当月限 二月目限 三月目限

明治七年一月十日 五、一〇 五、一七 五、三八

二月十日 五、三八 五、四六

三月十日 五、七五 五、九〇 六、一〇

四月十日 六、〇三 六、五三

五月十日 七、三〇 八、〇八

(単位錢、一石当り)

この物価騰貴は各方面の論議の種になつたが、『東京日日新聞』はこれを以て『全く蒸気船会社船々台湾御用に付、悉く長崎へ差向られたるに付、諸港通船これなき処、過日外国船雇入許可を蒙り候に付、追々米

穀入津、自然潤滑に相成り、人氣穩に相成るべくと云う投書あり、左様の事なら嘸よろしかろと存じ、諸人安心の偽め爰記す』(二〇)とあり、東京商社の政府の下問に対する答えにも、他の理由と共に『佐賀御県下の動搖一旦人氣に危ぶみを生じ候処、引続き海外御進軍に付、市中白米御買上げ、且つ蒸氣艦等御雇入など、米価騰貴の由て起る所と存じ奉り候』(二一)と指摘している。

更にこうした事情に於ては豪商が攻撃の標的になるものだが、この時がそうであつた。

『貴社新聞第三百四十一号投書中に曰く、我国三井小野の如きは海内の豪商なり、然して未だ曾て天下有名の功を為さず孜々として只利是謀る云々とあり、噫何の言ぞや〔中略〕又曰く今府下の米価一斗一円、殆ど飢饉の如し。然して夫の二豪商米を奥州に網羅し、之を府下に蓄藏する者二十万石云々と。是亦誣妄〔作り話〕の甚しというべし。余頃曰〔近ごろ〕二豪家の業を他聞するに、陸奥の地たる一般貢租〔年貢〕金納なるを以て、米を売り金に換へんとす。故に米価低しと雖ども買う者頗る少く、金融甚だ宜しからず。依て三井小野の二家、相謀りて其米を買うは、他なし民の便利を助けん為なり。然れどもこれを売らんには素より他へ運漕せざるべからず。故に既に奥州に入るる処の米を東京に送致せんと欲すれども、郵便蒸汽船会社の汽船は、悉く台湾の御用に備えられ、且和船は用をなさずして未だ都下へ廻送するの便なく、然して即今、台湾御発向により、数多の糧食を備えらるれば、自然府下の米払底を生じたるものなり。聞く頃日蒸汽船会社より彼陸奥に蓄える米を運輸せんため、外国船を雇うことを出願に及びたりと、不日許可あるべし。』(二二)

政府は五月十九日に台湾問罪の声明書を発し、全権公使柳原前光は同日、東京を出発して支那に向つた。

二 外人記者の日本軍隊観

話しは少し前にかえるが、都督西郷従道より一足先に出帆した有功丸は五月三日に厦門^{アモイ}に到着した。同艦には、西郷が閩浙総督李鶴年に贈る照会状を持参した領事兼任の陸軍少佐福島九成（二三）が乗船した外、米国公使からの乗船中止の命を無視して急遽出発した米人も同船した。福島が米人達と肌が合わなかったことに、カッセルのル・ジャンドルに宛てた手紙がこれを証する。

『福島氏は之を遇する甚だ難く、実に同氏は其権を取る大なるに過ぎて、予辛うして我受けし指令の旨を執行うを得たることなり。故に予は以後如何なる有様に於ても同氏と共に決して何事をも為すを承諾せずと言ふべし。』

（二四）

この福島に比して西郷は流石に外人にも評判がよく、ニューヨーク・ヘラルドの特派員の資格で乗船していたハウスも西郷を讃めている（二五）。

厦門で西郷の書翰を福建総督に差出した福島以下は五月六日、台湾の社寮に上陸し、海岸に沿うて陣營を建設した。それと前後して日進、明光の諸艦が到着し、更に五月廿二日には殿軍の西郷都督が社寮港に到着した。この日、折しも清国軍艦二隻が社寮港に入り、翌日、その佐官傳以禮は西郷を訪問して、日本の出師理由を問うたが、西郷は外交々渉は一切、柳原公使と商議すべしと云って取合わなかった。

日本側の記録は、何れもこの台湾の軍事行動がうまくいったことを述べている。即ち谷、赤松等が社寮港

に着くや、米人カッセル、ワッソンと共にル・ジャンドルの紹介状を持って生蕃地に赴き、網社、小麻里、周勝来三社の酋長を招いて説明すると、彼等はよく諒解した。ただ生蕃社の内、牡丹社だけは、予ねてから慄悍^{ひょうかん}を以て知られて居り、これに対しては前記三社の生蕃を案内として、徴集隊を斥候に宛て生蕃を攻撃した。暫らくして西郷が後統部隊を率いて来着したので、六月一日、兵力を三分し、谷は楓港より、陸軍中佐佐久間左馬太は石門口より、又赤松は竹社口より牡丹社に進入した（二六）。生蕃等は大いに恐れ、家を棄てて山谷の間に遁逃した。『これより後、土蕃、我軍の勇武に畏れ』（二七）、かつ『十八社の酋長来り降るもの相踵^{つづ}ぎ、兇良勦撫營を亀山に設く』（二八）というのが、普通の征台史の説くところだ。

ここで筆者は、やや趣をかねて外人側の觀察を書いて見よう。筆者の手許には二つの材料がある。一つは征台軍に従軍したハウスの手記であり（二九）、今山つは遠征軍の幹部の一人であるカッセルの報告だ（三〇）。ハウスは前にも書いたように、ル・ジャンドルの『秘書』の役をつとめたが、台湾行きには船客として紐育^{ニューヨーク}・ヘラルドの特派員の資格で乗込んで居り、またカッセルはワッソンと共に日本船の到着地位、上陸及び蕃地への案内役である。ル・ジャンドルが直ぐ西郷と共に来る筈であったのが、東京に行つて来なかつたので、案内その他の重責はこのカッセルの肩上に落ちた。カッセル及びワッソンは現役軍人であつたが、その後米国政府はその賜暇^{しきあ}を取消した（三一）。征台事件が米人との合作であることが益々明瞭だ。このカッセルは帰国後、明治八年六月十五日に、台湾で得た病氣が原因で死去したので、日本政府は明治九年九月一日、月給六ヶ月分をその遺族に送つた（三二）。

ハウスは有功丸が五月八日朝早く入港して、兵隊と糧食との陸揚げした時の感想を書いている。ハウスは日本のために弁解的であると後の史家からいわれている者だ。

『この仕事は決して順序と規律によつて行われなかった。こうした素質は日本人がその旧習によつて事務を処理する場合には彼等の内に明瞭に存するのだが、彼等が外国の方法を用いんとする時にはしばしば失われてしまうのである。予は西洋の軍事科学が紹介されぬ以前の旧式の日本軍隊が、敏速で、清潔であつたろうことを想像しよう。しかし今や軍隊は軍として成功するに必要なところの種々な点において欠けている。一八六八年の国内戦争¹において彼等は軍人として最も必要な要素——即ち個人的勇気を、恐らくは持ち過ぎるほど持っていた。しかしこれが現れた様相は、適切な効果的であるよりも、しばしば猪突的で、また自暴的ですらもあつた。』(二三)

ハウスのいうところによると、これ等の兵隊は彼等が一段上の階級に属すると考え、土方仕事をやらない。従つて百名の兵隊に、百名の苦力を使つて、塹壕を掘るといふ有様だつた。『全然古式の方法を以て日本人が何を為しうるかは不明だが、新式の方法を部分的に採用することは、それが破壊的作用を行い、今までのところは彼等の軍隊の便利と健康に寄与することは極めて少ない。結果は将来に見ねばならぬ』(二四)と書いて居る。

更に当時の武士出身の兵隊を描いて興味がある。兵士達は本営を遠く離れることが危険であるに拘らず、援助の不可能な場合にも跋渉^{ばつしょう}するのである。五月十七日に百人の兵隊が二哩の東方に行つて、藪蔭から現れ

i 戊辰戦争を指すのだろう。

た土人に襲撃され死傷があつた。『この最初の惨事は、無暗にその辺を歩くことが、遠征隊員にとって危険であることの実物教育として顧みられることが希望されたのであるが、事實は左様ではなかつた。彼等の或者は自制については無神経であり、またそのレッスンが、どれだけ峻厳であつても、それによつて利益することが出来ないことを示した。』(二五)

ハウスは繰返し兵隊の素質はいいが集団的統制がないことをいつている。『彼等に対する監督は、嚴重な規則の適用であるよりも、寧ろ將軍(西郷)の個人的インフルエンス【influence 感化】による』といい、或はまた例の薩摩からの徴集隊については、

『彼等は武名に対する熱心なる希求者であつて、機会だにあらば常に第一線に立つことを決意して居り、またそうした機会が自然に起らなければ、これを作りあげるのである。彼等を与えられたる一定の行動の規律内に拘束し置くことは不可能であるかに見えた』(二六)

としてその例をあげ、彼等が指揮者を離れてドシドシ敵地に入込む様を画いている。しかしそうした欠点はあるが、不愉快な事態に処して一言も不平をいわない勇氣を称している。『平和時において、彼がその愛好の欠点(favorite faults)あることを以て外人は非難し、また誇張しがちではあるが』とあるのは、酒色の道を意味したのかも知れぬ(二七)。

三 台湾に於ける西郷とその軍隊

カッセルの報告はその上長ル・ジャンドルに宛てたるものを、ル・ジャンドルが更に大隈台湾蕃地事務局長官に送つたものである。かれは軍輔佐として熟蕃との交渉、道案内等の役を引受けたのだが、かれも日本人兵隊が命をきかずに前進することに不平を云つてゐる。その一例としてあげたのが「ボンタン部」(牡丹社)に入る石門で起つた事件だ。かれは蕃人案内者から、ここが要害堅固なところだと聞き知り、ボンタン人をここに誘引して、日本騎兵を以て背後より衝かせる計画であつた。

『然るに彼石門前に露営したるコムベニー隊、廿二日の朝兼て命ぜられたる如く直に退かずして、却て石門中へ進み掛け土蕃の兵に出遇い、二時間劇戦し之を退け、十五人を殺し、三十八人を傷つけ、我兵も死者六人、傷者十人、或は十五人ともいう。之を聞きし時、余の憤懣如何ぞや。しかのみならず、我兵敵の首十二級を切て陣営に帰けるに、此村の支那人等皆ボンタン部の首酋アロク的首級全其中にありと云えり。嗟、日本人彼怖しき野蠻の風に従い、死者及び傷つきて未だ死せざる者の首を切り、分取とし敵の兵器装束を褫取りし持帰り。』(二八)

かれはこの不平を赤松に云つたらしい。そこで『船將赤松命を待たずしてことを為したる者を諭し、全隊に令して直に此地を退かしめ、以て余が策の猶行わるる様に為さんと云いけれども』、しかしカッセルは『士卒此の如く血氣に猛るの時に当て進撃せざるべからず、否らざれば事なきを不足に思い必ず忽まち事を企て、之が為に患害を起さんも計られ』ずと考えた(二九)。

西郷は生蕃地が略平定したので、一方において谷、樺山を帰朝せしめて、蕃地の状態を政府に報告せしめ、他方また赤松、福島を北京に派して、その頃、清国政府と交渉していた柳原公使を補佐させた。この間、日

本兵は台灣に何をしていたか。明治初代の外交官佐田白茅編輯の『日清貫珍』に『台灣來狀より抜き記する』として左の如き記事がある。

『瑯※「#王+番」の日本兵、空く手を措てなす所なし。亦嗣て何事の起らんとするを知らず。日本兵は尽く牡丹生蕃の地を略し、内地処々に陣營を張れり。然し彼等自ら手を蕃族に出すの道なし。故に日本兵既に其業を成就せりと思うを得ず。故に独身にて一營より一營に至るを安全と思うを得ず。縱令二三の同伴あるも猶然り。出遊する者屢々砲斃せられたれども、幸にして死傷の者なし。日本人は居地甚便ならず。日本人は心の俛、蕃地に留るを得けれども。もはや此上の獲物はなかるべし。亦野蕃に対し、千数の番兵を以て保護するの不都合あるべし。此野蕃は既に数度の戦争に削り弱められて、今僅に二三百人の隊をなせり。日本にて今日錨を解て去れば、次日は蕃人又其地に帰て、再び其家屋を造るなるべし。』(三〇)。

支那側の記述には矢張り西郷が台灣において立往生した意味のことがある。即ち

『既而從道旨と違ひ進攻利なく、久く龜山にたむろし、酷暑病疫は多く、棺輓く相望み、進退維谷【進退窮まり】、又これを偵探、巡撫王凱泰は兵二万を將い、台地向かう。日本大いに恐れ、遂に參議大久保利通を以て、辨理全權大使となし、和戰の權を以て委ねる。當時英美各国の持議公平、日本急情形窘む概ね知るべき已。若使当事者、知臨機応変、以逸待勞、以主待客、不急於行成、不難使彼就我範圍【若し、事に当る者、臨機応変、以逸待勞【機を待つて事を行う戰術】、主人として客を待つ、行き成り急がず、を知りせば、彼に我が範圍につかせるのは難しくない】。乃ち利通は、陰に英國公使威妥瑪に託し、居間調停【居中調停】、彼反つて外人保護の効を収め、我乃ち彼を殼中【計すなわ

略】に入れ、遷就^{せんじゅう}【妥協】し和を求む。』(三二)

これによると、西郷が台湾で困ったので、大久保が乗出し、その大久保は英国公使ウエード(Thomas Francis Wade, 1871-83)に頼んで居中調停^{きゅうちゅうてい}をして貰ったことになっている。大久保については後にどうせ問題になるからここで言及しない。

西郷の一行の行動については支那側にも相当に情報が入っている。三月十二日の上海情報には『頃日長崎より得たる情報に拠れば、日本は有栖川宮^{ありすがわ}を総督と為し、「リゼンドル」を参謀に任じたりとの事なるも、「リ」は去年副島に随て来遊せる事あり、よく台湾語を操る。外国の新聞には其兵数一万五千と称し居るも、実数は不明なり』とて、米国船をチャーターして兵を送ったことを記載している(三三)。『有栖川宮を総督と為し』というのは佐賀の乱と混線したもののだが、本筋は伝って居る。

西郷の一行が、どれだけ蕃地の苦熱と戦って苦しんだかは別として、そこで病人が頻出したことは事実だ。六月五日思召を以て御雇ドイツ人医師シェーンベルゲルを台湾に送る旨仰出された。同人は明治七年六月十二日から向う六ヶ月の契約で、一ヶ月五百弗^{ドル}宛、その外に毎月飲食雜費代として百五十弗が支給された。かれは現地の日本医員を指揮する権限を与えられた(三三)。

後の話になるが、この征台の役において戦死が十二名に過ぎなかったのに、病死五百六十一人に達したことが、その辺の事情を物語る。凡そ出征人数は三千六百五十八人であったから、約半歳の間に七分の一以

i 第三者が間に入って平和的解決を計ること。

上の死者があつた訳だ（三四）。

四 柳原と支那側との交渉

柳原前光は全權公使を命ぜられて五月十九日に東京を出発して清国に赴いた。政府から柳原に与えた訓条には、明治四年十一月、琉球人五十四名が台湾土人に劫殺された事件と、明治六年三月、小田県下備中浅江郡の住民佐藤利八等四名が同じく土人に衣類器財を掠奪された事件とを挙げて、

『然れども清国の政權速ばずして、其化外自肆に任せしは、邇年【近年】米國政府の所行に因て徴知し、且去年特命全權大使副島種臣を清に遣し、換約の際、曾て此事に談及ぼし、該國大臣の所答に据りて、証跡判然たり。若し棄て問わずんば、後患何ぞ極らむ。今膺懲を行う意は、野蠻を化して良民を安ずるにあり。敢て罅隙【ケンカ】を隣國に開くに非ず』（三五）

といい、また琉球藩は『昔より、我控御する所にして、既に冊封を奉じ、政化に服す』（三六）ことを明らかにして両属の問題などは取りあげることすらも不可である旨を明らかにしている。柳原はまず上海に赴き、最初に江蘇布政使應寶時及び沈秉成と、後には沈葆楨及び潘蔚と面談した。

柳原が上海に行ったのとは行違ひに、清国総理衙門から寺島外務卿に宛て照会の文書（三七）が来た。その意味は、副島大臣が在清した時、台湾地方の事件は両國が好意を以て相待つべしとの意はあつたが、兵を用いるとの語はない。更に日支条約には兩國所屬の邦土侵越すべからざるを約したのに、北京の各國公使や諸

新聞紙が伝えるところでは、日本が兵を蕃地に送つたという、この事、事実ならば何故に清国政府に報知がないのかというのである。その後支那の態度は一層積極的になつて、福建總督李鶴年は西郷に書を送つて、蕃地は清国の所轄だから撤兵されたしというに至つた（三八）。

日本側としてはこれは、やや意外だつた。支那からの一応の照会くらいあることは予期していたにしても、支那が蕃地をその領土と主張するとは考えなかつた。明治六年三月、副島が清国に赴いた際、副使柳原前光、鄭永寧を総理衙門に遣わして、生蕃のことを尋ねさせたが、蕃地は化外に置いて治理せざるの言を得て、七月帰朝した。大久保が征蕃を決意したのはこの副島やル・ジャンドルの説を聞いての結果である。大隈が後にも論じたように、副島が『只、口頭を以て慥かめたるのみにして、別に外交上の公文書を徴し置かざりしこと』（三九）は遺憾であつた。

支那側は上海の柳原と、台湾の西郷との間が距離と権限の二つの点から疎隔がちであつたので、これに乗じようとした。即ち、『西郷は軍事には専権を有したれども談判の権を有する人に非ず』（四〇）、さらばとて柳原は一個の外交官だ。そこで沈葆楨と潘霽とは柳原と交渉を開始しながら、かれに無断で、台湾に行つて西郷と逢つて、撤兵方を交渉したりしている。この辺の事情については日支両国側のいうところを見ると興味がある。支那側の奏聞によると、

『臣霽〔幫辦大臣潘霽〕滬を過ぎし時、已に彼国公使柳原前光と往復議論せる処にて、同使は初め極力責任を転嫁せんとせるも、忽然西人に売られたることを後悔する処ある旨を自陳し、撤兵を応諾し、その証拠とすべき手書

有り。然れどもその着台後の情形を察するに、右は信を置くに足らず。』(四一)

といつて居り、西人の言を信じて日本が行動したことを後悔したといっているが、柳原自身は西郷が休戦を応諾したといっている。柳原より釜山駐在の森山理事官(茂)への書簡に曰く、

『下官、上海にて清国欽差幫辦大臣潘霽と談判に及び、退兵論を指斥候処、其後、同人、蕃地へ行き、西郷都督と開談に及び、西郷都督、其行懸により償金を請求したり。然るに、潘霽尚考案致すべく申聞、恰も承引せし如く云たり。仍て西郷氏、誤て其甘言を信じ、其間休兵すべしと答候。尚、償金事件は、潘より下官へ応接致すべしとて相別れたり。然るに潘、下官へ書面差越し、償金は出来ず、且、西郷氏休兵を承引したり。此上は、速に退兵致承度申出、其形蹤、実に沈惟敬と同流にて、下官、西郷、隔地に在るを幸とし、是の如く詭計を施したり。』(四二)

柳原は上海では話が進行しないので七月十七日上海を去り、廿四日天津に李鴻章と会見した。李鴻章と柳原の会談では、李が柳原を呑んでかかっている。李は副島が辞めた理由を質問し、柳原が岩倉との意見の衝突の結果だというと、

『十年の駐清公使伊達、十二年の副島共に帰国後直ちに職を退かれたるも、貴国の人事行政は総て斯く常なきものなるや、抑も、駐清公使なる職が不利なる為めなるや? 貴下も九、十、十一、十二と毎年来清され、而もその度に陞官されて、今年は公使になられ、些か御用心を要する時期となりしには非ざるや。』(四三)

といった調子であり、また柳原が西郷は朝廷の命を受けて出征せるもので、余は令旨を奉じて通好を求めに来れるものに過ぎずというと、李鴻章は

『一方にては我國領域内に出兵し、一方には人をして好みを通ぜしめむとす。即ち口に通好和平を称えつつ、その実を挙げざる、思うに日本なる国が二つあるに非れば、斯く一方には出兵し、一方に通好を求むるが如きことは不可能に非ずや』(四四)

と詰つて居り、『日本は無条約時代には二百余年一兵だも我領域を犯さなかつたのに、今締約するや忽ち兵を以て我國に臨みたるは、貴方の不信たるは勿論、もし締約各国斯くの如くんば天下は挙げて大乱に到らん』といつて居る。李鴻章は柳原到北京に行つても無駄だといつて阻止せんとしたが、柳原はこれに服せず、廿七月遂に天津を發し、三十日北京に入り、總理衙門【當時の清の外務省】と交渉した。總理衙門も日本の撤兵を促すことは同じである。

五 廟議積極論に一決す

日本内地においては、台湾から歸つた谷の報告を中心に征蕃の役の後始末が問題になつていた。政府のある者は既に生蕃が平定されて、出師の目的が達せられたのであるから、宜しく兵を撤退すべしといい、これに対して大久保、大隈、大木の如きは強硬論であつた。柳原の私信によると、『武官の内意は、清と戦うを最も冀うなり、即ち來論に言、条理も義務も暫く問わず、大に十八省に横行せんとする也』(四五)とあつて、武官の強硬論を伝えている。大久保の説は、談判交渉が終らないのに撤兵するのは甚だ不可である、清国政府をして之を弁償せしめねばならぬ、しかも李鴻章の如きが激論を主張し、その意志は戦にあるようだから

ら、先んずれば人を制し、後るれば人に制せらる、宜しく朝議を確定して、支那に対すべきだということにあつた（四六）。

政府に在つて既に絶大なる勢力を有する大久保の意見が朝議を指導するのは云うまでもない。大久保の日記に曰う。

『七月二日 木曜〔上略〕九時参朝。今日蕃地処分に付、仏法律家某、李仙得召呼ばれ云々の御尋問これあり。〔下略〕』
 七月三日 金曜 今朝條公御出、蕃地云々のこと見込御承知相成り度御内談これあり、是非此上は断然の御確定これなくては相済まず、利害得失を御返詞申し上げ候。〔中略〕條公亭へ参上、蕃地処分に付、今後の御目的議論これあり、断然見込申し上げ置き候。〔中略〕伊藤子入来、今朝御評議の末に付て異論これあり、愚考十分を論じ、終に此上は公評に決し、何く迄も退かず、尽力はいたし候云々のことにて別る。わかれ

七月四日 土曜 今朝條公へ参上、岩倉公参議一同出席、蕃地の事件御評議これあり。〔中略〕八時條公召に依り参上、蕃地の事件に付御談これあり、議論分立に付、別て御心配これあり故、小子確然申し上げ候。

七月五日 日曜 今朝七時條公御出これあり、今朝條公亭に於て会議に付御内談これあり。九時前野津子を訪留主。るす〔中略〕四字より條公へ集会、岩公、参議一同、山県子なり、蕃地事件御評議これあり、頗紛論なり。〔下略〕

七月六日 月曜〔上略〕九字より條公へ参上、岩倉公一席にて猶蕃地処分結局の事を御談これあり、愚意確然言上、陸軍将校へ山県より見込尋問の義申し上げる。〔下略〕

七月八日 水曜 今朝野津子兄弟入来。九時参朝。一字山県陸軍卿参朝、台湾処分結局云々の義、将校評議の始

末言上これあり。今日猶又御評議、止をえず戦に廟議相決す。四字帰宅。野津子、石原子、五代子入来、囲碁。山岡〔鉄太郎〕子入来。』(四七)

右によつて如何に大久保が廟堂の群議と、軍人間の区々まちまちの意見を纏め、積極論に廟議を一決せしめたかが明らかだ。七月九日、左の訓諭を陸海軍の両卿に達して出師の準備をなさしめた。

『今般、台湾蕃地処分の為め、都督発遣候に付、清国へ公使派出おおせつけられ、精々両国和親を破らず様談判及ぶべく候えども、若し彼より罅隙きんげきを設け候哉も測り難し、やむを得ずに出れば戦争にも及ぶべく旨廟議一決候。方今陸海二軍創立日久からず、固より其充分を望む可からずと雖も、我力に随い、緩急に応じ、不慮を戒むる等の設備無る可からず。宜く斯意を体し、篤く省議を尽し、其方略籌画〔計略〕致すべき事。』(四八)

場合によれば清国と一戦を交えるべく廟議は決定したが、それならば如何にして戦うか。ここに柳原と、赤松海軍少将、福島少佐が相謀つて作製した作戦がある。柳原の手記によると左のようだ。

『清と決戦の策は、先ず只今より後援の精兵二大隊を蕃地に送り、総計四大隊、外に甲鉄艦一隻を厦門に碇泊し置き、此海陸軍は、北京にて破裂の報を聞けば、直に台湾を襲撃し、並に甲鉄艦にて福州の往来を絶し、傍ら近傍諸島を蹂躪す。是、南部の戦術なり。扱、北部は、南部戦争の始る時分、後援と称し、陽に大に宣言して、清兵を悉く南方に向けしめ、筑紫海より直に転舵てんた〔船の向きを変え〕して、一万の精兵及軍艦数隻にて直に北京を陥落し、清帝を窮迫して、一時に十八省を瓦解せしむ。右一万の兵を送るには運送船人用ゆえ、在来回漕船を当今頻に修覆し、又『ニウヨロク〔ニューヨーク〕』船外に良舟二隻御買入相成り候間、又差支えなく。此両策は下官、赤松海軍少将、

及福島少佐と密談。大隈氏へ建白し遂に登庸せらる。自ら想う、今般の大事、遺算なしと。』(四九)

こうして対清強硬決意が出来たので、政府は外務省四等出仕田辺太一を清国に派して、我朝議を柳原に通じて新訓令を与えた。その内容は『台湾事件に付、今後支那政府談判の儀、更に深く熟議を遂げ候処、近來新聞紙中並外人の伝説等に抛り候得者、李鴻章等激論主張、意志戦争に帰し候趣、就ては万一彼より先せられ候ては、容易ならず不覺にて、実に国家の大患これに過ぎずとぞんぜられ候、依て内には兵備調製の儀、ゆるがせに相成り難く、外には談判貫通の事、遅々すべからざる時態に候条……』(五〇)とて、談判要領書を添附している。

『(上略)再び蕃民の猖狂を恣にせしめざる方法を立るは、日本政府の志すところ既にかくのごとし。故に清国政府、その疆場【戰場】を固せんか為に、我この地に在るを以て、危懼不安の情あらば、その地を拏て之に与えるも固より吝惜せず、但爾來の処分如何にあるのみ。即ち潘霽照會書中に云える如く、營汛を設け【洪水を防ぐこと】、兵船を派し、望楼燈塔等以て不虞を戒め、通航を利するの備え充実して、我日本政府の義務に代るべきものあるを期し、將た今日に至るまで、清国政府其接壤の地に在りて、其人を化するの義務に怠りたるにより、我日本政府やむを得ず、これを勦撫懷柔するに至り、我日本政府にて糜する所の財貨、所費の人命も亦清国政府より、これが相当の償を出さしめんことを要す。』(五一)

以上を要約すれば蕃地はこれを返還して差支えなし、併し償金を要すというにある。これについて同時に柳原に与えた心得書が政府の意志を極めてよく現しているから、少しく長きに過ぎるが左にこれを採録しよ

う。

『清廷談判に付き心得るべき条件』

第一

清国委員と蕃地処分を談判するは都て別紙要領の趣に照し毫も屈撓くつとう【屈服】する処あるべからず。且力めて談決を促し、故なく立約蓋印の期を遅延すべからず。

第二

談判の要領償金を得て攻取の地を譲与するに在りと雖も、初より償金を欲するの色をあらわすべからず、是毎に議論の柄を我に取らんを欲すればなり。

第三

談判漸く償金に涉り其額数を論ずるに至れば固より所費の外を要せずといえども、かねて我より其額を言出す事なく、彼の云々する所を我政府に電報して其若干額を伺い定むべし。

第四

談判の要領其欲する所の如きを得ば速かに約を立つべし。尤立約の大旨既に定まらば、或は人を以てするも、或は書を以てするも、一応政府へ通報し、其答（尤用電信）を得て之を決すべし。

第五

前文の約成りて公然これを政府に通知せば、政府乃ち都督に命じて台地に在る兵を退かしむる事に手を下すべし、故に約成るの日は必ず速に電信を以て預報すべし、但其兵退了の期限は預定すべからざるものあれば其旨を伺い

出すべし。

第六

潘蔚公然の照会書を得ば、乃ち談判の端緒を開くものと看做し、先ず面論を先にし、書通を後にし、臨機制變の都合を図るべし。但し右照会書は近便を以て必ず政府に上るべし。

第七

沈潘応接の為に別に一重官を派するも其益なきが如し、矢張最前の引合懸りを追いて前書公然たる照会状を得る時より談判を初むるを可とす、但し其地は双方の便宜に撰定する所たるべし。

第八

謁帝礼畢おむつて台地処分の事宜稟奏りんそうの爲一時帰京の命ありといえども、現地事務如是上は勢談判を措て謁帝を先にするを得ず、且此事極めて神速談決を尚ぶなれば、猶更然らざるを得ざるなり。就ては一時帰京の事も要用たらざるは、必しも前令に拘らざるべし。

第九

今者李仙得を派し福建地方へ往かしめ、総督其他の官員に游説せしめ、周旋勤事の任を授く。就ては双方の事情隔閼かくがい【わだかまり】不通は必ず互に参差さんし【食い違い】を生ぜんを恐る。依て両間実地の形況は毎に相電報して氣脈の相通する事を要すべし。

第十

今回しやかい【この度】の機会を以て琉球兩属の淵原を絶ち、朝鮮自新の門戸を開くべし。是朝廷の微意当職の奥計なり。

第十一

命令に準拠し達意談判するに因り万一兩國の交和相保たざるに至ると雖ども、注意尽力の上は責を公使に帰せず、政府其責に当り自ら便宜処分あるべし、必らず爰に顧慮する事勿れ。』(五二)

田辺は右の書類を携帯して七月十六日横浜を出発し、八月三日北京に到着し、朝議を柳原に伝えた。柳原はそれによつてその態度が『夫迄は只弁解を事とし、天津にて、李鴻章に逢しも態と爪をかくし居しが、其後正々堂々開談に及ぶ』(五三)だが、支那側は依然として自説を維持して屈しなかった。

柳原がこの書を得て、急に強硬になつたことは支那側の記録もいうところだ。即ち『柳原前光は旋いで北京に赴き、総理衙門と種々交渉を重ねたが、彼は悉く前言を翻して形勢甚だ穩かならざるものがあつた』(五四)とあり、これに対して清国側も『又急いで戦備を整え、澎湖諸島に砲台を築き、台湾厦門間に海底電線を引き、新式の小銃を独逸より購入し、海陸の兵を台湾に向て動員し、且デンマークより甲鉄艦を購入せんとする等、形勢甚だ急なるものがあつた』(五五)。しかし清国は対外戦争については全く自信がなかつた。『所謂戦備というも、単に威虚仮の張子の虎に過ぎざるを以て』(五六)機会を見て事件を解決することを考えていた。李鴻章と総理衙門の意見は台湾をして日本のみに独占せしめないで、通商港として開放する事、また相当の金額を撫恤慰勞金(ふじゆらうきん)の名目として支出することにあつたようだ(五七)。これについては後に出て来る英国公使ウェードの意見も与かつて力がある。明治七年、日本は明治維新を繞る内訌がなお完全に片がつかない間に、対外的には既に優に支那を圧迫する實力を有するのを見るべきだ。支那が事の対外問題に及んで紛議が生ず

るのを見ると、まず責任を回避して譲歩する姿勢を示すに対し、日本は極めて積極的だ。

- (一) 『大隈侯八十五年史』一 五六二頁。
- (二) 松枝保二『大隈侯昔日譚』一八一―一九頁。
- (三) 『郵便報知』明治七年二月廿五日号。
- (四) 『新聞雑誌』明治七年四月十四日号。
- (五) 『東京日日新聞』明治七年四月廿三日号。
- (六) 『郵便報知』明治七年四月廿三日号。
- (七) 『新聞雑誌』明治七年五月八日号。
- (八) 『郵便報知』明治七年五月十六日号。
- (九) 『新聞雑誌』明治七年五月十八日号。
- (一〇) 『東京日日新聞』明治七年五月十五日号。
- (一一) 同上、明治七年五月三日号。
- (一二) 『郵便報知』明治七年四月十二日号。
- (一三) 『四月二〇日(明治七年) 陸軍少佐福島九成。今般領事に兼任し。清国厦門港に在留し。福州事務兼務仰付けらる。』(佐田白茅『日清實珍』上一頁)。
- (一四) 『大日本外交文書』第七卷 一一六頁。
- (一五) Black, op. cit., p. 438.

(二六) 『西郷都督は此月二十九日〔五月〕 参軍参謀と会し、総攻撃に就いて軍議した結果、愈々六月一日を期し、兵を三道に分ちて攻撃することとなった。(聖代四十五年史、国史講習録、明治史要、明治歴史等に我軍五月廿二日、竹社、風港、石門等より進撃するというは、六月一日、三道攻撃の誤である。又国史眼に牡丹社の降伏を五月廿二日の戦に依ると為すも亦誤である)』(落合軍医監回想談、東亜同文会『対支回顧録』上巻 一一四頁)

(二七) 『西南記伝』上巻一 六〇七頁。

(一八) 『処蕃趣旨書』(明治八年一月蕃地事務用より発刊、『明治文化全集』【吉野作造編】第六巻 外交篇

一五六頁)。(『明治文化全集』は戦後日本評論社が再刊し外交編は1992刊では第7巻。なお『処蕃趣旨書』自体は『大久保利通文書』第10巻 p415-で公開されている。当該文章は p417]

(一九) Black, op. cit., pp. 429-38.

(二〇) 『大日本外交文書』第七巻 一一五—一二五頁。

(二一) H. B. Morse, The International Relations of the Chinese Empire (London and New York, 1910, 1918,) vol. 2, p. 227.

(二二) 『大日本外交文書』第七巻 一二五頁。

(二三) Black, op. cit., pp. 430-31.

(二四) Ibid. pp. 431-32.

(二五) Ibid. pp. 432-33.

(二六) Ibid. p. 435.

(117) Ibid. p. 438.

(118) (二九) 『大日本外交文書』第七卷 一二〇頁。

(119) 佐田『日清實珍』上 六頁。

(120) 吉田『倒叙日本史』大政維新編 三九八頁、

(121) 王芸生(長野勤、波多野乾一編訳)『日支外交六十年史』第一卷 八六頁。

(122) 『大日本外交文書』第七卷 一五一―二頁。

(123) 『征蕃の役、兵数凡そ三千六百五十八人、内、将校下士官七百八十一人、軍属百七十二人、兵卒二千六百四十三人、従僕六十二人。軍艦五隻。運送船十三隻、内、買入船七隻、雇船四隻、外国雇船英仏各一隻、死者凡そ、五百七十三人、内、戦死者十二人、病死者五百六十一人、負傷者十七人。』(『西南記伝』上巻一七八二頁)。

『我軍が蕃地に入ってから二三箇月は、南台湾の雨期に当って霖雨が続き、暑熱烈しく、而も昼夜温度の開きが大きい季節である……六月、七月と患者は激増し、八月中旬以後は、全軍殆んど就寢【就寝】した状況であった……此頃に至り、侯も遂に弛張熱の襲う所となった。……九月十日前後になると、都督府の官員から使丁に至るまで全員枕を並べて呻吟するという惨状を呈したが、其時などは、使丁の薬取に、侯自ら薬瓶を提げて病院に行かれたことが兩三回もあった。』(山中樵『西郷従道小伝』(『西郷都督と樺山総督』所収、四九頁)尚、山中樵『明治七年征蕃の役』(同上書所収)参照。陸軍軍医監 落合泰蔵談『センベルゲル氏が腸チフス及弛張熱に対する治療は、まず三十九度以上の熱にありては、チフスと弛張熱とを問わず、水治法を主張し、

其方法は風呂桶に水を漲らしてこれに患者を入れ、十五分乃至二十分間全身浴を行い、尚降熱せざれば一日に二回でも三回でも之れを反復した。衰弱の甚しきものでも努めて之を敢行した……私が在陣中に於て同氏が預つた患者にして順調の経過を辿つたものは一名だも見なかった。故に一般の患者は同氏の治療を受ければ皆死ぬといつて、同氏の治療は絶対的に欲しなかつたので院長も閉口した……センベルゲル氏という人物は性頑急にして事を為すに協商しても兎角円満ならず、終始院長との間が疎隔して居つた。』(『対支回顧録』上巻 一三三—三四頁)。

(三五) (三六) 『大日本外交文書』第七卷 二一頁、『岩倉公実記』下 一七〇頁。【特命全權公使柳原前光清国政府ト応接ノ事 1218p】

(三七) 『大日本外交文書』第七卷 七二—七頁参照。

(三八) 『処蕃趣旨書』(前掲、一五六頁) 【『大久保利通文書』第10巻 p418】

(三九) 円城寺 『大隈伯昔日譚』五一九頁。

(四〇) 『処蕃趣旨書』(前掲、一五六頁)。

(四一) 『日支外交六十年史』第一巻、九二頁。

(四二) 明治七年八月廿三日、森山茂宛柳原前光書翰(『西南記伝』上巻一 六一九—二〇頁)。

(四三) 『日支外交六十年史』第一巻 九七頁。

(四四) 同上、九九頁。

(四五) 明治七年八月廿三日、森山茂宛柳原前光書翰(前掲、六一〇—一一頁)。

- (四六) 勝田『大久保利通伝』下巻 一二八二頁。
- (四七) 『大久保利通日記』下 二八四—八六頁。
- (四八) 『大日本外交文書』第七巻 一五〇頁、『岩倉公実記』下 一七八—七九頁【別紙陸海軍両卿〈訓諭 p1227】。
- (四九) 明治七年八月廿三日、森山茂宛柳原前光書翰（前掲、六二—一二二頁）。
- (五〇) 『岩倉公実記』下 一七七—七八頁 [p1226]。
- (五一) 『大日本外交文書』第七巻 一五五頁、『岩倉公実記』下 一七九—一八〇頁【別紙清国政府談判要領書 p1227-81。
- (五二) 『大日本外交文書』第七巻、一五五—一五七頁、『岩倉公実記』下 一八〇—一八二頁 [p1229-31]。
- (五三) 『西南記伝』上巻 一 六二二頁。
- (五四) 『日支外交六十年史』第一巻 一〇五頁。
- (五五) (五六) (五七) 同上、一〇六頁。

第四章 全權辨理大臣として

一 大久保の決意と重臣の反対

柳原公使は既に北京に在り、これに對し政府は田辺を派遣してその方針を傳達した。大久保は、しかし考えた。柳原の報告によつてみるも、支那側の戦争準備は進んでいる。このまま議論を上下し、柳原の報告を待つて廟議を決定するというのでは、外交上の好機を逸してしまう懼れがある。そこでまず廟議を確定し、更に重臣を派遣して清国政府と交渉談判をする必要があると。

直接談判に當る重臣は何人か。それは彼れ自ら以外にはない。元來、征台論はかれが最も中心の責任者だ。大久保の征蕃論の動機を以て『木戸は、窃に大久保の私情に徇するを含み、必、西郷・前原等を斃して、其内治主義を貫徹せんと希望せるに似たり』(一)と評して『私情』を以て觀る者もある程だ。木戸が郷里に去り、また三條、岩倉もそれほど氣が進まないのを、ここまで引張つて來たのは大久保である。繰返して言うが、明治の政治家は決して責任を回避しない。況んや五月四日台灣に派兵することを決した時『前条決着に付、難題を醸出し候節は、大久保始其責に任ずべき事』とその責任を明言してあるにおいておやだ。

大久保は柳原を北京に送つて支那と交渉せしむると同時に、内を整えることの必要を痛感した。對外問題を考える時に、かれは嘗て国内の整備を忘れたことはなかった。明治七年七月かれは左の如き覺書を三條に

提出した。

『一、諸省長官或は輔院使長官召され、征蕃の挙粗平定の功を奏し御満足あらせられ候といえども、清国談判の結局未か如何んをしらず、実に内外危急国家難の秋というべし、汝等一層憤発勉勵鞠躬^{きつぎくう}尽力あらん事を希望すとの御趣意を以て親輔勅語を玉わり度

陸海軍両卿は分けて懇々^{こんこん}勅語を玉わり、万一有事の日着手の目的其方略如何、即ち今兵員、大小銃、器械、彈藥、船艦、水兵等の備え如何を問わせられ度。終て一同へ陪食おさせつけられ、御打解け御懇話あらせられ度。

一、大臣参議の内より御用の有無に拘わらず日々皇居へ参仕すべき事。

一、今般柳原公使より報知を見るに、彼の譎詐^{げつさ}狡猾言語に絶えず、必らず平穩を伴つこと能わざるべし、固より廟堂止を得ざれば戦わんと一決の上なれば、敢て驚くに足らずといえども、政府信に戦に決するの事を挙げ、夜以て日に継ぎ、憤発勉勵軍国の政を行うべし。

一、軍事の方略上に於ては陸海兩卿に断然督促すべきこと。

一、大蔵省金穀有高を調査すべき事。

一、諸省切要の事件を除くの外、入費に關すること廃止すべく事。

一、参議の内より龍驤艦にて清国派出の事。

一、軍艦、大小銃、彈藥等外国へ調文の事。

軍艦は明日川村より伺出の筈に談じ置き候事。

一、字漏生^{プロイセン}、米利堅^{アメリカ}へ至急公使派出のこと。

一、各国派出の公使へ征蕃の始末、清国關係の順序巨細に急報すべきこと。

一、新參議を命ぜられ候事。』(二)

大久保が国内整備に鋭意すると同時に、國際關係を重要視して、プル^マシャ、アメリカに公使派出、各国との諒解等というように眼を四方に配っているのを見るべきだ。

果然、大久保は自ら清国に赴き、交渉せんことを三條に申出でた。大久保が正式に申出でたのは七月十三日で、田辺が横浜を出発したのは十六日だから、大久保は朝議を『止をえず戦に』(三)導いて行く間に、この決意が生れたのであろう。これに対し三條は、この際、大久保を東京より去らしむることに反対した。この点は岩倉、伊藤、大隈等も同意見であつた。これにつき大久保日記にいう。

『七月十三日 月曜

今朝條公へ参上、小子支那行の事を内願す。八字内務省出席。十一字正院出仕。台湾一条支那關係のことに付御評議これあり。〔下略〕

七月十四日 火曜

今朝七時條公へ参上。支那行内願のこと御勘考、岩公へ御談、何分今日内輪紛々の時、小子御出しこれあり候ては然かざる云々の御答これあり、やむをえず承諾。去りながら、約^{より}り重臣より御差出これなく候ては相済まず時宜に至るは案中【想定内】故、其節是非御差出下されべき旨申上げ置き候。内務省へ出席。十字正院へ出仕。田辺へ支那行仰付けられ候に付、柳原公使へ差送らるる談判順序結末の義に付御評議これあり。〔下略〕(四)

一時中止した大久保の支那行は、しかしその念願を断つたものではなかった。一度、熟考して思い立つたことは、飽くまで熱心に貫こうとするのがかれの特長である。かれは十二日間を経た廿六日に再びこれを内願した。

『七月廿六日 日曜

今朝條公へ参上。岩公御出にて小子清国行の事を内願す。〔下略〕

七月廿八日 火曜

〔上略〕十一字参朝。小子清国行内願のこと、條公より切に止らんことを御論解これあり、猶勘考つかまつるべく申上、二字退出。〔下略〕

七月廿九日 水曜

今朝七字條公へ参上。八字内務省出席。〔中略〕林子長崎より帰り、東郷より報知の次第云々承る。〔中略〕六字過より岩公へ参上。條公御前にて猶又小子清国行のこと切迫内願、機会の失すべからずを申上る。明朝同僚中御示談これあるべくとのこと、是より川村子へ訪、篤と示談いたし候。

七月卅日 木曜

〔上略〕十一次参朝、小子清国行のこと、今朝御会議、凡そ御内定の旨、御内達これあり〔下略〕（五）

大久保を清国に特派することに内定はしたが、それに対してはなお内部に異論があった。殊に大隈は大久保にして海外に去る如きことあらば、政府は殆んど何事をもなしえない、止を得ずかれ自身断然解職の外な

しと主張した。

『七月卅一日 金曜

今朝、黒田子入来、伊藤博文子入来。小子清国行のことを異論あり、云々弁解承知あり。高島子、野津子入来。八字大隈子を訪い、云々のことを論ず、同人小子清国行に付き異論これあり、当人辞職云々の事あり、小子見込十分を論じ、終に承伏なり。條公へ形行を申上る。参朝。小子清国行未表向御達これなく、御内意のみなり。伊地知、黒田へ云々の上と申すことなり。二字より伊地知氏へ訪、参議御請のことを談ず、異論なし。松方子、河村子を訪い、黒田氏に至る、参議御請云々を談ず、異議少しく有といえども終に承伏。條公に参上、形行言上歸る。〔下略〕』(六)

伊藤、大隈の反対を説得するため山県、黒田、伊地知を参議に任ずることを以てし、これを自から奔走して臍立したのだ。柳原はこれを以て、『山県陸軍卿、黒田開拓長官、伊地知議長の三名参議兼任命じられたりと聞く。此三人は征清論を發し、大に勉励すと。蓋し大久保出使中、或は廟議の中変を慮かり三氏を入れて、強く維持せしむる策と存じられ候』(七)とあるが、後にも示すように山県や黒田は必らずしも積極論者ではなく、この任命は寧ろ内政的意味から大久保留守中の内閣保強政策であろう。こうした奔走の後、八月一日大久保は全権辦理大臣に任じ、清国派遣を命ぜられた。

『八月朔日 土曜

今朝伊藤子へ訪。山県陸軍卿云々の義等示談。休暇といえども八字参朝、今日全権辦理大臣として清国行命じられ候。右に付御委任状等の御評議これあり候。〔下略〕

八月二日 日曜

〔上略〕十一字前參朝、伊地知、黒田、山県、參議拜命相成候。二字退出。山県子へ訪、種々示談歸。〔下略〕

八月三日 月曜

今日山田少将入來。小子清国行に付、種々議論これあり。〔下略〕』(八)

国内政治に対する大久保の布石も、重臣の危懼も当然であつた。地方においてはなお不滿の徒充滿し、西郷隆盛の行動も目を離つことが出来ぬ。

『甲戌の春、征台の役起るや、旧藩士坂元鼎輔歸郷して西郷南洲に説くに、此出軍を機会とし、鋒を転じて東京に突出し、姦魁木戸・大久保・大隈等を除き、政府革新を行わん事を以てせしも、西郷其奸計を覺り、笑いて對^{むか}うる所無かりしと云う。』(九)

こうした事態に処して大久保一人の存在は九鼎の重きに比すべきものであつた。かれを東京から去らしむることに、重臣殆んど悉くが強く反対したことが、かれの位置を示すものであり、同時にまたこの強い反対に拘らず、断然清国に赴いたことが、かれのこの日支事件に関する態度を語るものであろう。

二 広大なる権限と準備

三名の參議任命により対内布陣は整つたが、一層肝要なのは清国との交渉に関する準備である。大久保はまず事件解決の責任を一身に負うだけに、広大なる権限を得た。

八月五日聖上は玉座に大久保を召させ給い優渥なる勅諭を賜わった。大臣、参議、諸省卿等は悉く参内して列席した。その節、三條から大久保に授与した委任状は左の如くである。

『天佑を保有し万世二系の帝祚^{ていそ}を踐^ふみたる大日本国皇帝此書を見る者に宣示す。往歲我人民難船の爲台湾島に漂到し、土人の暴行を受けたるを以て、其罪を問わんが爲に我委員を命じ、且不虞^{いまし}を警^{きま}むるを以て之に兵士を附属して送たり。此一挙に付両国間に不都合を生じ交際の障碍とならざる様深く注意し、曩に我清国駐劄^{ちゅうちやう}全權公使柳原前光に命じて大清国政府と平穩に商議せしめたり、然るに爾後種々の論端^{ろんたん}を啓くことを致す。朕又思えらく、事至重に属す、宜く更に朕が切近に望む所の意を熟知せる貴重^{えうじゆん}の大臣を簡で、委するに全權を以てし、其事に任せしむべしと。朕深く参議兼内務卿大久保利通の才幹忠直能く其任に堪えるを信じ、乃ち全權辨理大臣と爲し大清国へ遣し、大清国皇帝より任ずる右同權の大臣と朕が希望の趣を達すべき条約を約定し、又は約書を締成し、而て朕が名を以て其決議したる書面に調印し、右事件を充分に結落すべき權を与えたれば、凡そ這般^{しやはん}の事は朕躬^{みづか}ら其地に臨み親^{みづか}ら之を処すると異なること無きを証す。』

又、委任權限訓条に、

『

今般全權辨理として清国へ差しつかわされ候に付ては、左の件々御委任候事。

一 全權公使柳原前光へ内勅の次第及び田辺太一を以て仰遣わされ候件々綱領不動の要旨に候えども、實際やむを得ずの都合に依ては便宜取捨談判するの權を有する事。

- 一 談判は両国懇親を保全するを以て主とすといえども、やむを得ずに出れば和戦を決するの権を有する事。
- 一 時宜により在清国の諸官員以下一切指揮進退するの権を有する事。
- 一 事実やむを得ざるときは武官といえども、指揮進退するの権を有する事。
- 一 李仙得へは御委任の次第これありといえども便宜進退使命するの権を有する事。』(一〇)とある。

大久保は断じて責任を回避しなかつた。しかし責任をとる上からは充分なる権限を与えられることを期待した。佐賀の乱において、かれは兵馬の権を与えられた。今回の北京行きにおいても、和戦の権を有した上に、清国における諸官員以下は勿論として、武官といえども指揮進退するの権を得たのだ。ル・ジャンドル【李仙得】に対する命令権を一項として挙げたのは、かれが、台湾蕃地事務局お雇いとして対支工作をする任務を持つていたからでもあるが、また宣伝その他に関しても一切を大久保に統合したのを語るものだ。政府は直ちに西郷従道、柳原前光に訓令を發して大久保の指揮に従うように訓諭した。

こうした広大なる権限を得た大久保は、その方針等についても他に相談しなかつた。伊藤博文が『我々皆な心配しているんだから、大体の方針でも御話を願いたい』という、『私は全権である、全権を以て臨む以上は何人にも予め相談しない』と云つたという。これは後の外相林董たけすが、しばしば他に語つたところである(一一)。伊藤は大久保を横浜埠頭に送つて、いよいよ別れるに臨み、大久保が早く事を処置して帰朝する旨を語るに及んで、初めてその意が和平にあるのを知つた有様だつた(一二)。この事は伊藤自身が後年高

島鞆之助に自ら語ったところである（二三）。

大久保はただに広大なる権限を得たばかりではなかった。かれは充分な交渉が出来得るように、場合によれば開戦する一切の準備を完了した。八月一日に全権辨理大臣に任命されるや、陸軍卿山県を對手にこの点は、特に入念に用意した。伊藤その他が、この決意を見て、大久保の意中を知らんとしたのは無理のないことである。かれの日記にいう。

『八月四日 火曜』

今朝山県子入来。過日相談置き候変を聞き候臨機の順序の事に付、目的相立かね候に付、小子発足迄の内治定いたし度云々の義談これあり、小子云々の愚考申入。猶今夕伊藤子、伊地知子、黒田子入来、會議の約束いたし置候。内務省出席。参朝臨御あらせられ候。二字過ぎ退出。伊地知子、黒田子、川村子、伊藤子、山県子入来。段々山県子の論これあり、畢竟一発の時宜に臨み候得ば、人心の取押へ六ヶ敷むすかしとの懸念、且兵を台湾に出すを難ずる論にして、到底治定致さず。今夕は猶勘考、明日御談に及ぶべくと申し置き候』（二四）

山県の兵に慎重なことは、この場合にも現れて居る。かれは責任者として、台湾に出兵することが不可能だと主張するのである。しかし大久保としてはこの問題について一層確定的な話し合いがなくては、支那との交渉が困難である。かれは翌日も相談した。大久保日記にいう。

『八月五日 水曜』

〔上略〕伊藤子へ訪、山県子云々の事を示談す。一応帰宅。今日十一字三十分皇居へ召しなされ、両大臣、参議、

諸省卿迄参内す、初め小臣一人玉座に召しなされ、大政大臣殿侍坐、今般使臣として派清の義、容易ならず国家の大事、別て苦勞被思食候。精々尽力致すべく云々勅語を賜り、感佩に堪えず謹て御請申し上げる。次に一同を被為食、蕃地事件に付、粗平定に及び候えども、清国関係の談判、結局如何を知らず、実に国家困難の秋に候間、各一層憤発勉勵すべし云々勅語あり、一同謹て御受の義、大臣殿より御拝答これあり、終て陪食おおせつけられ。三字比相済退散。

昨日よりの談掛りに付、山県、伊藤、伊地知、河村等入来。尚反復議論におよび候。尤事急に破れ候一報次第には、二三大隊は臨時繰出し候都合致すべく云々の趣意なり。事十分に至らずといえども、凡そ大体相付き居り候得ば宜しくと存に付、先其通にて結局といたし候。〔下略〕(二五)

事急に破れ候一報次第には、二、三大隊は臨時繰出候ように都合するといふのである。これだけでは大久保が『事十分に不至』と考えることは当然だ。彼の話しになるが、大久保の北京談判が破裂に瀕して、いよいよ引揚げることを決意した時、それでも直ちに對支戦争に突進することを躊躇したのは、この事が頭にあつたからであろう。大久保と山県が政、軍両部の中心に居れば決して猪突はしない。

だが大久保が北京に行くに当つては、背後の準備はこれだけではなかつた。既述の如く七月九日、朝議は出師の準備をなすことに決し、田辺太一をしてこの旨柳原公使に通ぜしめたが、その後、海外出師の議を定めた。これは長文に互るものであるが、当時の外交論の傾向を示すものとして興味があるから、その一部を掲げよう。

『上略』夫れ兵は凶器、戦は危事なり、固より我が欲する所に非ず。然れども理勢既に此に迫まり、兵権以て彼を壟制するに非ざれば、何を以て彼の驕氣を破り、又、帝国の帝国たる所以の体を立つることを得んや。且試に彼我の利不利を以て之を言うときは、即ち今日国論を戦に決するや、終に不戦に帰す、若し今日国論を不戦に決するや、終に戦に決す、其故何ぞ哉。今日戦議一決し、現に兵急進海陸并迫る、彼兵備未だ充実せず、周章狼狽為す所を知らず、遂に彼より和を請い罪を謝するに至らん。惜い哉数月遷延、彼をして多少の備設を為さしむるの時を与える。然れども今日早く之を図る、尚未だ晚しとせず。是れ所謂戦に決するは終に不戦に帰するものなり。
〔下略〕（二六）

『今日国論を戦に決するや、終に不戦に帰す』というのは西洋的論理からすれば一つの逆説である。併し武士道の論理から観れば、それは説明の必要のないほどな自明理だ。ただ戦に決して不戦に帰するのは大久保の手腕と見識があつて可能であつた。右の『海外出師の議』と共に、宣戦発布の順序が左の如く議定された。

『宣戦発令順序条目』

- 一、宣戦に決したる時は、其旨趣判然と詔書を以て布告すべき事。
- 一、各国公使へ、公然と宣戦の旨趣通報す可き事。
- 一、海外駆割の我が公使、領事等同断の事。
- 一、地方官へ別段に訓令を発し、土族其他取締を嚴重に立つ可き事。
- 一、在清の我が公使、領事等引払い、并我が国人去留等^{あわせて}に関する事。

- 一、西郷大將、木戸三位、板垣四位速に召さる可き事。すみやか
- 一、軍用の郵便電信を別に取設く可き事。
- 一、天皇陛下大元帥と為らせられ、六師を統率し、大坂へ本營を設けらるべき事。
- 一、親王、大臣の内、先鋒大總督として、直に長崎まで進軍すべき事。
- 一、進軍大条目を定め、陸海軍大参謀へ授与せらる可き事。
- 一、戰略は大参謀の籌図に属するは勿論たりと雖、其枢軸は内閣と協議を為すべき事。ちゆうず
- 一、先鋒大總督閫外【域外】の事件も、奏聞を経べき条項と、委任せらるべき条項を決定する事。こんがい
- 一、船舶、銃砲、彈藥、糧食其外軍用の器具始め、一切、陸海軍兩省に於て準備を為す可き事。
- 一、進軍の海路陸路、并攻守の土地を決定する事。
- 一、軍費支出の用途、及其金額概算を予定すべき事。
- 一、諸官庁緊急事件を除くの外、入費に関するものは、総て中止すべき事。』(二七)

右の如く背後の準備を了し、かつ自らは廣大無辺の権限を有して大久保は、責任を一身に負うて北京に使せんとするのである。丁度その頃、英人ブラウンはクライドに於て製造されたる軍艦を受取るため英国に赴いた。『ブラウン氏は力の及ぶ丈け急速に乗り出し、日本、支那戦争に其功を顕さしめんと勸めり』と『東京日日新聞』は報じた(二八)。

三 大久保の出発と国内事情

大久保利通が東京を出発したのは八月六日のことである。

本戸は左の如く^{はなむ}餞けた。

国難之日送大久保甲東

刎頸男子約 何関多別離 相逢談未尽

両心自真知 一船解纜垂柳下 千条万条仕風吹

聖上は侍従片岡利和を遣わして慰勞の勅旨を賜わった。随員は左の如くである。

鐵道權頭

太田 資政

陸軍大佐

福原 和勝

三等議官

高崎 正風

租税助

吉原 重俊

内務五等行走

岩村 高俊

權少内史

金井 之恭

内務七等行走

池田 寛治

司法七等行走

名村 泰藏

司法七等行走

井上 毅

開拓七等行走

小牧 昌業

陸軍中尉

関 定暉

陸軍中尉

坂本 常孝

内務權大録

萩原 友賢

租税九等行走

平川 武柄

内務十等行走

川村 正平

陸軍十等行走

黒岡 季備

陸軍十等行走

岸良 謙吉

陸軍十五等行走

園田 長輝

外

海軍少將

伊東 祐磨

海軍樞秘書官 百 永享

海軍大尉

隈崎 守約

右の随員の内、岩村高俊、井上毅は同行したのではなく、後発して北京に大久保と同日に到着した。井上毅は後に文部大臣となった人だが、大久保が東京を出発するや時局に関する意見書を呈出し、これが大久保の注意を引いて特に随員に加えられた（一九）。この外に政府の御雇仏人ボアソナードが顧問として同行した。この行が機会になつて大久保はボアソナードとは最後まで親交を続けた（二〇）。

大久保一行は米國郵船コストリカ号に乗つて横浜を出発し、十日長崎に入つた。横浜出発に際しては各國軍艦が十九世の祝砲を放つた。ここで諸般の準備を整えたが、まず高崎正風、小牧昌業をして、上海及び北京に先発させた。大久保が軍艦龍驤に乗船して長崎を抜錨したのは八月十六日であつた。

大久保が全權辦理大臣として清國に派遣されるに當つて、国内の輿論はどうであつたか。木戸孝允はその日記（八月廿一日）にいう。

『上略』終に支那と兵端を開くときは、大挙して天津より北京を衝撃するの方略一定せりと、余深く憂えるものあり、其故は大兵を以天津、北京を一衝撃する譬え可能とも、其地に抛有する元より難し、然るときは大に国力を費やし、人命を尽し、尚其決局に至るべからず。此の如き大事一兒戯に属す、後來全國の進歩を妨害する容易か

らず、又推知すべきなり。〔下略〕（二一）

民間においても固より諸種の説があつた。政府は台湾問罪については最初は新聞に掲載を許したが、中途でこれに箝口令をした。その結果、種々なる風説が街に横行した。七月廿六日の『新聞雜誌』はいう。

『台湾問罪の師起るや天下騒然たり。続て六月六日の進軍竟に蕃賊の巢窟を一掃し、凱旋近きにあるの信報を得て、万衆欣躍邦家の爲めに賀せざるものなし。然るに近日の新聞紙を閲るに、蕃地事務局の口達に、台湾軍機に涉る事件記載を許さず云々とあり。廟議の深奥測るべからずと雖も、蕃地の奏効屈指日を期するの今日に當つて比禁の出る、天下復た物情恂然として、曰く、台湾の進師一敗地に塗れ為す所を失い、更に海陸軍に命じ、幾万の兵を海外に出さしむと街説紛々たり。然れども此固より途聞途説〔道聽途説・受け売り話〕の無根妄謬なる言を待たず。』（二二）

その翌日（七月廿七日）の『東京日日新聞』には『台湾信報』として相当詳しく台湾遠征軍の消息があり、更に八月六日の同紙には『支那北京雜記』とて『日本の兵を台湾に用いし事に付ては、支那朝廷に於ても、議論囂々たること日本よりも甚しく、閭巷の間に在ても頃日紛々として只此一事をのみ談じ合えり』（二三）とあつて、日本側に議論囂々たるものありしことを語るに落ちてゐる。

華族会館は明治七年八月廿三日に開館して、その宏壮なる規模は衆目を驚かしたが、翌日、太政大臣、左右両大臣に対し台湾事件について建言するところがあつた。『近聞支那政府我征台湾の師を嫌忌し、兵力を

一「恂然」驚き恐れる様。底本では「恂」ではなく、「勺」の中が「人＋」である。ここは中公文庫に従う。

以て我師を攘はらわんとすと。設もし此説の実なる、誠に国家の大事と謂わざるべからず』とて『応分の力に尽さんと欲す』といひ、

『故に願くは征台の始より今日支那政府との応答に至るの事状を詳に垂示し、以て其議を尽すを得しめ賜わんことを。是れ一に愛国の衷情に出でて之を措く能わず、仍て其庸劣ようろうを顧みず、伏て惓願けんがんす。』

と結んでゐる(三四)。後半の文章によつて、華族が政府の秘密主義に不満のあつたのを知るべきである。

こうした国内事情を後にして大久保は八月十八日揚子江に入り、十九日上海に到着した。馬車で郊外を見物し、廿二日再び龍驤艦に搭乗して天津に向け出発した。乗艦が芝罘チヨウに入ると、折しも碇泊中の仏国軍艦が祝砲を發した。この時、在清仏国公使が避暑のため同地に在つたが、ボアソナードを通じて大久保に会見を求めたので、仏国公使を訪問した。廿九日軍艦孟春を従つて解纜かいらんし、天津に到着したのは九月一日であつた。埠頭には柳原公使から差遣された田辺太一在り、柳原と北京政府との交渉について報告を受けた。

柳原公使は、それまでしばしば総理衙門に赴いて交渉をなしたが要領を得なかつた。『処蕃趣旨書』によつて計算してみると柳原が七月卅一日北京に入り、八月三日交渉を開始してから九月三日に至る一ヶ月の間に、面接及び書面を以て十二回に及んでいる(三五)。その論点は要するに日本側が蕃地は無主の土であるから征蕃の事は義挙であるというに對し、支那側は屬地であるというに歸する。そして日本を以て『不和好を以て言を立つ』(二六)とした。

柳原は九月四日、書を大久保に贈り、更に高崎と樺山を天津に派遣して大久保に説いて言つた。支那側の

回答は要領を得ないから、大久保はそのまま暫らく天津に逗留されたく、その間に柳原が強硬に談判する。それでもなお清国政府が回答を為さなければ、公使以下を撤去する意向を示せば譲歩するだろうから、大臣は当分天津で待機されたいと。併し大久保としてみれば自ら辨理大臣として来て、交渉を柳原に託して置くことが出来るものではない。それならば最初から来ない方がいいのだ。大久保は九月六日天津を発して十日北京に到着し、日耳曼ホテルに投宿した。

大久保の日記いう。

『九月五日

〔上略〕六字樺山、高崎両士着、柳原始終談合の旨趣、小子滞津、断じて公使始を引云々の事を承る、且書面もきたる、
全意どういせずして、明北京行を決す。』(二七)

この時、大久保は直隸總督李鴻章が天津に居るに拘らず、これを訪問しなかった。これは慣例に悖るもので、普通は各国使臣が、北京に赴くに当つては、まず李鴻章に敬意を表するのを常とした。柳原の如きも、まず李鴻章と談判している。大久保は全権大臣として、直接に北京政府を目がけ、李鴻章を無視したのだ。日記にも別にこの事について書いてないから、大した問題としていなかったともいえるが、しかし大久保ほどの注意深い政治家が、こうした形式に気がつかなかったと考えることは到底出来ない(二八)。これについて思い出されるのはル・ジャンドルとの問答である。明治五年九月廿六日、延遼館において副島外務卿がル・ジャンドルと応接した時に、台湾事件について左の如く問答している。

(副島) 此度の儀は李鴻章に掛合然るべく歟。^か

(ル・ジャンドル) 同人は日本との条約取結の儀、特に委任丈のものに付、矢張政府へ直に御掛合の方と存候。(二九)

四 外人顧問ル・ジャンドル

ここで征蕃事件、北京談判を通じて挿話的色彩を添えるル・ジャンドルの行動を書いて置こう。前にも書いたようにル・ジャンドルは、西郷従道の案内をして、台湾に行く筈であつたのが、米国公使と直接交渉の必要があつて東上し、ビングム(米国公使) パークス(英国公使) 等とも会見し、先月十八日(明治七年)には寺島外務卿と会見し、報告している(三〇)。七月二日には参朝して大久保その他と(三一)、また七月十三日に大久保と会談した旨、大久保日記に見えている(三二)。この頃朝議は止むを得ずんば戦うことに一決し(七月六日)、大久保は七月十三日に自ら清国に赴くことを三條にまで申出でた。

このル・ジャンドルが八月六日には厦門^{アモイ}の米国領事館によつて拘留されている(三三)。かれが何日に東京を出発したかは不明だが、その資格は辨務公使である。かれは大久保渡清の事を支那において聞いたのだから、大久保とのその辺の話しはなかつたろうが、政府がかれを外交工作の一翼として厦門方面へ送つたことだけは明らかである。ル・ジャンドルの支那行が問題になつたのは七月廿七日にパークスが寺島外務卿と左の様な問答をしていることでも知られる。

一 (パークス) 李仙得と云人は新聞紙上にては此行特権を持ちし様見え候。全く貴政府より其権を与えられしや。

一（寺島）否、其地方を管轄する上官の人多く李仙得は其中懇意の人もあり、且其地方を熟知の事なれば、其人に談判の為に行きし也（三四）

ル・ジャンドルが拘留されたというので寺島は八月十二日、米国公使を公使館に訪うて抗議した。ル・ジャンドルは福州鎮台と懇意なので『此度の一件の情実等を弁解等の為差遣候義に候』だけで軍事には関係がない。それを拘留するのはどういう訳かというのだ。米国公使は権限外だから書面を以て申込んでくれといった（三五）。越えて十五日には正式に抗議した（三六）。

この拘引事件については、その後、特に二つの現地からの報告によつて問題の真相が明らかになった。一つは廈門在勤呉外務一等書記生からの報告（八月十四日附、九月十五日到）（三七）と、他はル・ジャンドル自身からの報告（三八）である。右によるとル・ジャンドルは一八七四年（明治七年）八月一日香港に到着し、そこで南支方面における支那の兵備の模様を探り（報告によるとそれは必ずしも与えられた使命ではなく、ル・ジャンドル自身の発意であるようだ）、それから五日廈門に寄航した。然るに六日、かれが香港の安藤太郎への暗号電報によると、

『予は支那に敵し日本を助けて戦うの告訴を受け、米利堅公使の求めにて海兵の為に捕えられ、朋友等より十二万五千弗の保証金を出して赦さる、尤も右の趣を委した大隈君に報告せり、田辺及び鄭を直に廈門に來らしむ可し。』（三九）

といつて居る。ル・ジャンドルの立場は『李氏は現下日本の公卿に準位し在れば、今米国の管束に制せらる

謂れなきを以主張弁論あれ共、米領事は一途我公使の命已を得ずと而已^の申張り』(四〇)とて要領を得ないので、結局十三日に上海に向け出発し、同地の米国総領事館の裁判所で争うことになった。

ル・ジャンドルはこの間、前述の如く支那兵備の模様を調査して大隈に報告し、また米国領事館の旧部下を使用して、生蕃事件に関する清官との旧往復文書を写してこれを併せ報告した。それには支那側が、かれを雇入れんとしたのを断った旨があり、また、

『右の諸事に由て之を考れば、日本にては延引するときは聊かの利もなし。支那は陽には和議を好むの状をなすと雖、陰に事の延引するを喜び、実は時間を得て以て何事起らんとともに当るの備をなさんとせり、因て予思うに今に方て日本の上策は急に事を決し、何れにも台湾事件を決議し、其返答次第断然の処置をなすに在り。』(四二)といつて居る。支那が甲鉄艦購入に奔走していることは各方面から情報が頻々として這入つて居り、八月末にかけて在ロンドン本野臨時代理公使からも、その事を通報して、寺島外務卿から三條太政大臣へ転送している(四二)。

ル・ジャンドルは更に、近く新任米国公使が横浜を通過するので、同人に今回の拘留事件を洩れなく話し、『又此に一策あり、彼れが日本に滞留致し候間、殊に意を加えて之を待遇致し候わば、支那にては薄遇を受け候事必然に候間、彼地に至て後も事に触れて日本の厚意を念起致すべくと存じ奉り候。』(四三)

と勧告している。かれは最後に日本に対する熱情を記して曰く、

『目^{もつこ}今余自由の身に候得ば、此地に在て貴国政府の為に尽力する事を得。且つ余若し亜国政府の羈絆を脱して縦^{ほし}

ままだに余が意を行うを得べくんば、悉く亜国政府の保護を失うも亦厭う所に非ず。是の如くにして閣下を助け、或は大久保公を助けて、方今諸公の胸中に貯うる所の大事を行う事を得せしめば、亦以て六ヶ月来余が嘗みる所の艱難を慰し、胸中の不快を破るに足るべし。』（四四）

かれは上海において許され、大久保と天津で落あつた（四五）。その頃大久保はル・ジャンドルよりも、遙かに相談相手としてボアソナードに接近していた。ル・ジャンドルは副島種臣、大隈重信などの口添いがあつて東京において松平藩（福井）の池田いと子と結婚した。明治廿三年（二八九〇年）に李載純外務大臣の下に韓国政府顧問となり、明治卅二年九月一日に京城で死去し、揚花津の外人基地に葬られた（四六）。

（一） 吉田『倒敍日本史』大政維新篇 三九四頁。

（二） 明治七年七月、三條公へ呈せし覚書（『大久保利通文書』第六 一九―二二頁）。

本書は月日を欠いているが、七月中旬より三十日迄の間に提出したことは明らかだ、当時利通が如何に対支問題を重大視し周到に画策したかが解る。

（三） 『大久保利通日記』下 二八六頁、本書一〇二頁参照【第三章第五節の七月二日から八日の日記 p187】。

（四） 同上、二八七―二八八頁。

（五） 同上、二九一―二九二頁。

（六） 同上、二九二―二九三頁。

（七） 明治七年八月廿三日、森山茂宛柳原前光書翰（前掲、六二三頁）。

- (八) 『大久保利通日記』下 二九三—二九四頁。
- (九) 『市来四郎自叙伝』(吉田『例敍日本史』大政維新篇 三九三頁)。
- (一〇) 『大久保利通文書』第六 二六—二九頁。
- (一一) 幣原喜重郎男談(朝日新聞社『日本外交秘録』四二頁)。
- (一二) 勝田『大久保利通伝』下巻 三〇四頁。
- (一三) 勝田『甲東逸話』一一九—一二〇頁。
- (一四) 『大久保利通日記』下 二九四—二九五頁。
- (一五) 同上、二九五—二九六頁。
- (一六) 明治七年七月九日、海外出師ノ議(『大久保利通文書』第六 三〇—三四頁、『岩倉公実記』下 一八九—九二頁【p1238-40】参照)。
- (一七) 『大久保利通文書』第六 三四—三五頁、『岩倉公実記』下 一九二—一九三頁【p1241-2】。
- (一八) 『東京日日新聞』明治七年八月十九月号。
- (一九) 大久保利通の次男牧野伸顯伯は、井上毅の文部大臣当時、次官を勤めた。牧野伯は筆者に語る。『井上は肥後人、元田永孚の高弟で漢学出身である。頭脳が鋭敏であり、読書力において優れ、常に海外の著書を漁った。その要領をつかむに天稟の才を有していた。当時大久保の調査その他には役立った人であり、また伊藤の憲法制定についても貢献する所多く、その点について、余り世に著聞せられないのは、同氏に対し不公平かも知れない。』

(二〇) 牧野伯曰く『ボアソナードの官邸は麹町区三年町の角にあり、大久保邸から一丁ぐらいいしか離れていなかった。ボ氏が、しばしば来邸して話し込んでいたのを記憶している。両者相許した仲であった。』

(二一) 『木戸孝允日記』第三 六九頁。

(二二) 『新聞雑誌』明治七年七月廿六日号。

(二三) 『東京日日新聞』明治七年八月六日号。

(二四) 『新聞雑誌』明治七年八月廿四日号。

(二五) 『処蕃趣旨書』(前掲、一五八一六一頁)【第2〜4款『大久保利通文書』第10巻 p423-433】。

(二六) 明治七年八月卅一日、文祥の柳原に答えし略書にある文字、同上、一六一頁。

(二七) 『大久保利通日記』下 三〇八頁。

(二八) 『利通は以為く、余は天命を奉して北京に到らんとす。先ず清国政府の当局者と交渉談判を開かざるべからずと、遂に李鴻章を訪わざりき。流石の李も後之を聞知して、心密かに驚きしと云えり。』(勝田『大久

保利通伝』下巻 三〇六頁)。

(二九) 『大日本外交文書』第七巻 一五頁。

(三〇) 同上、八七—九頁。

(三一) 『大久保利通日記』下 二八四頁、本書一〇二頁参照【第三章第五節の七月二日から八日の日記p118】。

(三二) 同上、二八八頁参照。

(三三) 廈門在勤呉外務一等書記生の報告(八月十四日附、『大日本外交文書』第七巻 一八九—九一頁参照)

には八月六日米領事館に禁錮されたとあり、寺島・ビンガム対話書（八月十二日、同上、一八三―一八五頁）及び同上書、一九四、二〇四―一三頁参照。

（三四）『大日本外交文書』第七卷 一六三頁。

（三五）同上、一八四頁。

（三六）同上、一九一頁。

（三七）同上、一八九―九一頁。

（三八）同上、二〇六―一三頁。

（三九）同上、二〇六頁。

（四〇）呉一等書記生の報告。同上、一八九頁。

（四一）同上、二二一頁。

（四二）同上、二〇二頁。

（四三）（四四）同上、二二三頁。

（四五）Black, *op. cit.*, P. 441.

（四六）ルジャンドルを東京において松平藩（福井）の池田いと子と結婚させたのはかれの足を止めるためでもあつたであろう。声楽家関屋敏子の母愛子はル・ジャンドルの実子に当り、俳優羽左右衛門とも関係ありといわれる。かれは一八九〇年（明治廿三年）に李載純外務大臣の下に米人グレート・ハウスと共に韓国政府顧問となり、明治卅二年九月一日に病死、京城市外揚花津の外人墓地に埋葬された。その石碑には左の如く

刻されてゐる。

Charles W. Legendre

Brevet Brigadier General United States Army

Adviser of the Imperial Household Department of the Korean Government

Died at Seoul, Sept. 1, 1899. Aged Sixty Nine Years.

R.I.P.

ル・ジャンドルが副島と交つてよかつたことは、現に閑屋家に残されている副島の遺書その他によつても明らかだ。副島正道伯の語るところでは、ル・ジャンドルは、副島外務卿に対し樺太買収をしばしば進言したとのことである。なお晩年の同人に関し昭和二年に、京城在住の俳人エミール・マールは左の如く語つた。『ル・ジャンドル將軍は米國に國籍は持つていたが、英語は不充分で、私とは仏語で話していた。社稷洞の朝鮮家屋に住まいお互いに往復していた。世話好きな円満な人格者で、鮮人から人望も高く、殊に外務大臣李載鉅氏や、御附武官で上海で死んだ李学均氏らとも昵懇の間柄であつた。誕辰日に宮中に招かれて毒藥を呑まされたという話もあるが、これは全然無根で、老衰して居り、自宅が朝鮮家屋で低かつた鴨居で頭を打つたのが原因となり、一週間ぐらいで逝去された。將軍の死によつて韓国外交界には一頓挫を來したものの如く、少なからずその死を惜まれ、葬儀は明治町のローマ教会堂で執行されたが、日韓両國政府から儀仗兵をつけ、韓國皇帝は勅使まで差遣された位である。記憶はしないが韓國政府からも最高勲章を貰つていたと思う。几帳面でいつもやさしく、老齡にも拘らず、引しまつた顔、純白な頭髮、小さい眼鏡をかけてい

たが、度が進むにつれて、朝鮮で新しい眼鏡が買えずに困ったことなど昔の俤が今にも目にちらついている。』
（『京城日報』昭和二年五月十九日号）
ル・ジャンドルはその功勞に対し二回勅語を拝している。

第五章 北京談判の行詰り

一 大久保の交渉政略

大久保は東京を出発する時から外交交渉に関して種々工風した。そしてその最も相談相手となったものが仏人ボアソナードであった。かれは武人の出、また内政問題に専心していたものとして、国際公法等について暗かった。渡清の船中においても（一）、また北京においてもかれはボアソナードを師とする国際公法の一生徒たるの観があつた（二）。かれの相談相手は行動派のル・ジャンドルから公法学者のボアソナードに変わつて行つた。北京に到着して、来るべき談判の内容についても相談した。

『九月十二日

〔上略〕法律家ボアソナードを呼び開談の三ヶ条を陳し、意見を問、彼れ異論なし、尚同氏見込もあり、名村〔泰蔵〕訳官をして筆記せしむ〔下略〕』（三）

大久保は北京に来て柳原と総理衙門がもんとの往復文書を熟閲し、これ以上に反覆するも益ないことを思い、直ちに論点をつくところの疑問を最初に発することにし、井上毅をして文案を作らしめた。

第一回 日清会談（四）

明治七年九月十四日、案を練つた大久保は、公使柳原前光と共に、始めて総理衙門を訪問した。太田資政

(鉄道権頭) 筆記し、鄭永寧(外務一等書記官)が通話した。支那側は衙門大臣恭親王、文祥、寶璽、董恂、沈桂芬、崇綸、崇厚、成林、夏家鎬が列座し、総辦周家楣以下四名が筆記した。大掛りな外交談判だ。

互に皇帝の安康を祝賀し、寒喧かんけんの礼【氣候の挨拶】畢おわつてから談判は開始された。まず大久保は派出された趣旨を述べ、大久保が来ても柳原公使は依然本権を有する旨を明らかにした。對手が『貴大臣の言は都て貴朝廷の意なるや』と質問したに對し「然り本大臣の言は皆我が朝廷の言なるを信ぜらる可し」と答えた。大久保は從來の相互の主張が、『之れを要するに、貴国政府は生蕃を属地と云い、我國は之れを無主野蠻の地と云うの兩三句に止まる』点にあるを述べ質問を發した。

大臣(大久保以下同じ) 然らば問う所の者は、貴政府生蕃に於て実地幾許の処分ありや。

文祥 実地の処分を問われるれば一時細に悉す能わず。一句に約すれば、台湾の地ありて生蕃あり。譬えば広東省に瓊州けいしゅう有るが如し。其島中開港場有れども、周圍生蕃の如き者多く住せり。

大臣 既に属地と謂えば、官を設け兵を派し、多少の処分無きを得ず。故に実地施行せらるる処分の詳細を領せん【知らず】ことを希う。

文祥 中国地広く、是等の事、坐上に於て細かに悉す事能わず。貴問に応じ難し。(五)

支那側は中国地広いから坐上に於て悉す能わないというのだ。大久保の舌端はこの辺から鋭くなる。

大臣 貴命の如くにては本大臣甚だ了解し難し。抑も生蕃の事今日卒爾そつじとして起るに非ず、五月より以来今日に至る所。今苟かりそめも本大臣使命を奉し公然面商す。固より宜しく判然明白の答辞ある可し。然るに貴大臣等答え

る能わずと云えば、今日の商議固より無用に属す。且つ從來柳原公使と論弁せられしとき蕃地を属地と謂われし事、決して信じ難し。

文祥 我政府事繁^{しげ}きを以て、各官分職して各司る所有り。故に我に於て一時即答する能わず。唯証拠とすべきものは台湾府誌有り。既に照会文中に詳明なるを以て別に点検する所有らず。

大臣 府誌を引きて照会せられし事既に之を閲せり。然れども実地上何等の証跡有りや。公法に云う荒野の地を有するとも、其国より実地之れを領し、且つ其地に政堂を設け、又現に其地より益を得るに非ざれば、所領の權及び主權あるものと認むるを得ず（六）

大久保がボアソナードによつて勉強した公法論が出て来るのを見るべきだ。ここで支那側は行詰つた。そこで沈桂芬が口を出した。

沈桂芬 古は同地より歳々餉税^{しやうぜい}〔関税の一種〕を納むるを以て、大清国の属土なる事判然なり。

この時、筆官から大臣へ一書を出したりして敵陣頗る慌てた形ちだ。文祥はホツとしていった。文祥 貴大臣の問う所虚辞を以て答うべからず。故に必ず出処を分明にするなり。

大臣 此輸税の事、今日に至る迄官有りて之れを司^{つかさど}らるるや。

沈桂芬 頭人より征して、包括して之れを納む。

大臣 何所に納むるや。

沈 府県に納めり。

大臣 例えば牡丹社の如きは何県に納むるや。

崇厚 鳳山県に納めり。

大臣 本大臣蕃地に至る者に就て実地探偵の状を聞くに、其土人の説に拠れば曾て税を納むることなし。其証茲に一書有り。一覽を賜う可し。(七)

大久保はその場で台湾の車城人と借地に関する筆談の謄本を示した。それは蕃人と福島参謀との筆談で『借納朝廷国輸正供』とて租税を納めたことなきを示すものである。大久保は斯る問題が出ることを予想してこうした証拠書類を準備していたのである(八)。支那側では『我が中国は生蕃の地のみに非ず、内地に於ける亦此類多し』とて、租税は所管村長から包括して之を納むるから百姓はこれを知らぬのだという。大久保は、右は村人のいう所ではない、頭人の所言ではないかと駁する。大久保は続いて対手の矛盾を衝いていう。

大臣 本大臣再び審問せざる可らざる所以は、既に貴国の属地たれば派官の定則、賦課租税の常例有る可きを以て之を問いしに、貴中堂初め答えて具備せりと云い、後又民庄の説を以て収税せずと云えり。貴中堂説く所前後符合せず。本大臣尤も解せざる所なり。

文祥 言語錯雑する時は或は解せざる所有る可し、然れども貴国は同文の国なるを以て、文字を分疏ぶんそすれば自から分明を得べし。(九)

ここまで突込んで置いて、予て用意していた二つの質問を、別々に出した。原文は漢文であるが、ここでは大久保の復命に附した摘要を掲げよう。

『第一、既に版図と云へは必ず官を設け化導するの実あるべし、今生蕃に何等の政教あり乎。

第二、万国往来し、各国皆航旅を保護す。今蕃人海路の障を成し屢々漂民を害す。之を度外に置いて懲辦せず、他国の人民を憐まずして唯生蕃残暴の心を養う。此れ理有る乎。』(一〇)

大久保は右の質問に対し明日或は明後日を限つて答弁を与えられんことを要請した。大久保の日記には、
『九月十四日

今日柳原公使、訳官太田、鄭同行、午后一字総理衙門に到る。恭親王、文祥始め九人出會、開談。周章の体、実に笑うべし。三字過ぎ退館。』(一一)

とある。最初の日に既に対手を呑んでかかっているのを知るべきだ。元來、理論からこれをいえば、台湾の蕃地を以て無主の地というのはやや無理な解釈だ。だからこそ駐日英国公使パークスも、後に出て来る駐清英国公使ウェードも、左様な説は初耳だと必ずしも驅引きでなく云つたのだ。大久保としては無主の地だというならば、日本が自由に処分する権あるを主張し、支那の属地だというならば支那が野蠻行為に対する責任を負えという議論に移る伏線である。しかもその談判において攻防、その処を異にしたのは大久保が徹底的に準備したのに対し、支那側の準備が皆無にも等しかったからである。

大久保がこの二条を中心として説き起した所以については、談判終結後、西郷従道に示した書において明らかにしている。即ち曰く、

『抑も此二条を主腦とし説き起せし所以は、彼をして我が義挙たるの旨趣を貫徹せしめ、万国公法の至理に基き彼

我の曲直を明らかにし、仮令い議論協あわす事破るるに至ると雖も、我が名声を損する無く、後世に至る迄異議無からしめんことを庶幾しよきすればなり。』(一二)

かれは苟くも日本の言動が大義名分に悖もとつて、日本側が徒らに事を起すかの印象を列国に与えることを恐れた。この点は西郷隆盛が征韓論において名分を尊ぶ建前に似ていた。その事は、後の引続く談判に出て来る。英米公使との往来

第一回談判の翌日(九月十五日) 大久保は米国公使を訪問した。一応の挨拶の後、『前年支那福建總督より貴国厦門領事に照会せし公文(台湾の支那版図外たる証拠となる可きもの)現に貴公館に存する有らば、借覽せんことを希う』旨を申込んだ(二三)。引続く談判に備えるためだ。

十六日には英国公使ウエード(二四)が大久保を旅館に訪ねた。表面は挨拶のためで、氣候の話をした後でウエードは云った。

公使 当日存問そんもんの爲め修謁すれども、妨け無くんば一事を問はんことを欲す。

大臣 之れを領す可し。

公使 台湾の事、我がスイルパークス氏より来信の旨に拠るに、日本外務卿の説に、支那に於て若し日本征蕃の事を非理とせざらんには、兵を退く可しと云えり。此事實事じじつなる可きや。

大臣 此説は大に異なれり。

公使 大意何等の異同なるや。

大臣 日本発程前曾て是等の事を聞かざりき。

公使 此の如くなるや。明後日は本国に幸便あり。こうべん 故に方今の景況を知らしめんが為め、本国に通報せんと欲す。

邦人の支那地方に滞留する者夥しきを以て、形勢に因り多く船艦を致し、之れを保護する等の備え有り。故に尊慮を顧みず尋問する所なり。

大臣 貴慮宜しく然るべし。

公使 明日は家族の許に至り、晩間帰京す可し。明後日は速かに書翰を本国に致さんとす。故に存問の次で遽かにわかに前件を尋問する所以なり。

大臣 貴眷【あなたの一族】何れに住居せらるるや。

公使 本京より西方山際に於て凡そ十四マイル許りの処寺有り。其寺に住せり。

大臣 貴息ハ幾位ナリヤ。(二五)

右の問答によつて分る通りウェードは、相当に踏み込んで大久保の意を知らんとし、大久保は話頭を外らして、家族の事を聞いていることが意味深長だ。談判が山のものとも海のものとも分らない以前に、当方の方寸を第三国に知らすべきではない。しかしさらばとて全然、繋がりを断つべきでもない。別れに臨んで大久保は云った。

大臣 下顧を辱うし【かたじけなく】感謝す。滞留中再会を希う。

公使 鄙意びい【愚考】之れに同じ。(二六)

第二回日清会談（二七）

第一回の会談後の翌々日（九月十六日）午後一時、総理大臣董恂、沈桂芬、崇綸、崇厚の四名が大久保の旅館に來訪した。大久保の質問書に対する回答を齎らしたのである。議論の順序として支那側の回答を掲載するの必要があろう。

『第一条 台湾生蕃地方は其風俗を宜くし、其生聚【人々】を聽るし、其力の能く餉を輸する【税を納める】者は歳々社餉を納め、其性質の較秀良なる者は遴んで社学に入る。即ち寛大の政以て教養の意を寓し、各歸して近州府の分轄に就かしむ。官を設けざるに非ず。特に我國の政教は漸に由て施し、毫も勉強急遽の心なし。広東瓊州府生黎（せいれい、せいらい）（瓊州島内に生黎と唱える一種の蕃人あり）の如きも亦然り。我國此の如き地方甚だ多し。況んや各省各処の弁法相同しからずして、蕃黎等の弁法尤も同じからざるをや。此即ち条約中に所載両国政事禁令の各異同あるの義なり。

【査するに台湾生蕃地方、中国其風俗を宜くし、其生聚に聽かず、其力の能く餉を輸する者は、則ち歳に社餉を納める、其性の較々秀良なる者は遴んで（よく考えて）社学に入る。即ち寛大の政以て教養の意を寓し、各近州府の分轄に就て歸す。かつて官を設けざるに非ざるなり。特に我國の政教は漸に由て施す、毫も勉強急遽の心なし。広東瓊州府生黎（せいれい）のごときも亦然り。我國此の如き地方甚だ多し。亦瓊州台湾等の処にとどまらざる、況んや各省各処の弁法（ぶんぽう）均く相同じからず、而して蕃黎等の弁法尤も同じからざる有り。此即ち条約中に所載両国政事禁令の各異同あるの義なり】

第二条 我国各国と通商交好すれば、各国官商民人の船隻意外の風に遭い、及び交渉の案件、各国商民の害を受
i 『大久保利通文書』第一〇卷所載の文を読み下しにした。底本とは若干相違している。次の第二条も同じく。

くる等の事ありて、一たび各国大臣詳細に事由情形を將て本衙門に照会せば、必ずや查明^{ぎんみのうえとりあつかう} 妥弁^{あつぱん}を爲し、難易遲速の不同ありと雖も置^{うちておき}擱して弁せざるの件なし。即ち生蕃の案の如きも、貴国若し向^ききに詳晰^{つぎひらかに}の照会あらば、本衙門査弁せざることなし。且つ本衙門甚だ比等の情事あるを願わず。此後尚お法を設け、妥籌^{ふつちうなぐ}保護、以て将来を善くすべし。』(一八)

【査するに中国各国に与し通商交好し、各国官商民人の船隻意外の風に遭い、及び交渉案件、各国商民の虧^きを受ける(損する)等の事あるに遇う、一たび、各国大臣詳細に自由「事由」情形を將^あつて本衙門に照会するを経ば、必ず立つ為に即に文を行ひ查明妥弁す、難易遲速の不同ありと雖も、卻^{かえ}つて擱^{おい}て弁せざるの件を置くまたくなし。この案件生蕃の如きも、貴国若し詳晰の照会前來するあらば、本衙門査弁せざることなし。且つ本衙門甚だ比等の情事あるを願わず。此後尚^{すべから}お須^{すべから}く法を設け、妥籌保護、以て将来を善くす】

大久保はその場で回答を一読し、何れ熟読して更に申告するところあらうと保留してから、直ちに一事を指摘した。

大臣「上略」答書中、蕃地は広東の瓊州に於けるが如しとの事あれども、右等の地同様に見做すことは素より貴意に従い難し。抑も蕃人我が人民を殺害せしより起りたる事なれば、他の内地の蕃地に似たるものを引きて論弁せらるるとも我が承認する所に非ず。

諸大臣 事々書面を以て示さるれば、之に応じて答覆【返信】すべし。(一九)

大久保は更にいま一つを質問した。生蕃を支那の属地とするのは府志の二十両を納むるを以て確証とすること。これに対し支那側は『此一条を以て証とするに非ず。此他累々証拠あり。只其一端を挙ぐるのみ』(二〇)

と。

この日はこれだけで議論を打ち切つて相携えて食場に赴いた。

翌十七日に駐清魯国公使ビュツツォフが大久保を旅館に訪問して敬意を表した。普通の挨拶について『従前の経験によりて能く之を知れり。支那政府との議論は頗る煩難に苦しむ。奉使の意は知る所に非ざれども、終に志を遂けらる可し』といつて別れた(二二)。

第三回 日清会談(二三)

九月十九日、第三回日清会談は総理衙門に於て開かれた。列席の顔触れは大体同じだ。問答筆記者は金井之恭(樵少内史)である。この日、大久保は支那側の回答に対し、更に疑問二条を持参して、これを会議の劈頭^{へきとう}に示した。前回の議論を詳説したもので第一問を六項に分ち、第二問は相手の矛盾を指摘し『向きに官を設け兵を設けざるの語あり。今は官を設け分轄すと云う。前後符せず、未だ何れに従うを知らず』といった文字がある。長文のものである(二三)。

第二回の会談まで支那的外交辞令で受流した支那側は、第三回目からはその態度が相当に硬化して来た。大臣「上略」夫れ版図たらば確乎たる証跡有る可き理なるに、曾て其政權の及べる実跡なし。公法上に於て、政權及ばざる地は版図と認めずと云えり。我は決して貴国の版図に非ざるを信ず。

文祥 前日拜晤【顔を合わせ】詳細陳述せし如く、互に難詰を以て弁論すれば到底結局なり難きを以て、茲に之れを約言せん。和約中に、兩國の政事禁令は異同有るを以て互に予り聞くこと無きを載せたり。此の条約に基き

互に其治を為す可し。是れ我論談の旨趣なり。貴大臣も亦和好の趣意なれば、和談に至る可き商議有らんこと緊要なる可し。

又 万国公法なる者は近来西洋各国に於て編成せしものにして、殊に我清国の事は載すること無し。之に因りて論するを用いず、正理を以て熟く商談すべし。若し生蕃の地に於て我が政令の及わざる云々の事を言われるれば、即ち我政事を咎むるに似たり。生蕃の事は我国に任せらるべし。且つ政事及ばざるの故を以て中国の管轄にあらざるとする等は、幾回弁論あるとも我れに於て拌答する能わず。

大臣 我に於ても弁論を好むこと無し。抑も奉使の主意は和好を欲すること素よりなり。生蕃の件に於ては、向きに既に柳原公使を派し、今我又此地に来るは、猶一層和好を重んずるの意なり。然るに貴国は依然生蕃を版図と云う。今日の事は実に其属地か否かを以て是非を定めんとす。故に反覆論ぜざるを得ず。条約中、政事禁令は互に予り聞かざることは素より知る所なれども、蕃地の件は之れと異なり。過日来再三陳述する如く、蕃地は其人民凶暴極りなく、他国の人民を害するを常とす。是れ関係の大なる者にして、今日の事起る所以なり。我国は其貴属に非ざるを知つて着手せしに、貴国確然之れを版図と称すれば、之れが証跡を問うは止むを得ざるところなり。(二四)

ここで支那側がしばしば持ち出す和約というのは前年(明治六年)三月九日に批准され、副島外務卿によつて齎らされた日清修好条規を指すもので、それには第一条に両国は邦土を侵越することなしと規定し、第三条には『両国の政事禁令各異なれば、其政事は己国自主の權に任すべし……土人を誘惑し、聊違犯有るを許

さず』とあるを指すものだ(二三五)。それを引用するは正しいにしても、万国公法なるものは西洋で編成せるものであるから、清国に適応しないというのは、支那的論理である。支那は日本の武器とする万国公法を以て充分に日本に応酬しうべき筈であつた。

大久保の蕃地無主論に対し、支那側はまた支那内地にも同じようなところがあり、それを以て一々支那版図に非ずということは出来ないとの理論を繰返し、大久保はこれを駁して堂々めぐりをして果しがない。

大臣 互に旨意の齟齬する所あり。貴国に於ては版図内と云い、我は無主の野蕃なりと云う。故に再三論せざるを得ず。若し政權及ばずとの答辭あらば一言にして足れり。

文祥 政教及ぶ及ばずの事は、貴国の審問は恐らくは当らざる所。生蕃は我管轄版図の地なり。譬えば貴国の長崎に於て政教の及ぶや否やを我が清国より問うが如し。比貴問は決して答えること能わず。

【「次のやり取りは『大久保利通文書』第10巻には記載なし。右のやり取りの一つ前に近似していて不自然と見える。」】
大臣 貴答なきときは、我れ生蕃を以て断じて無主の野蕃とす。如何。

文祥 然らば我亦如何ともするなし。(二六)

大久保が、昨年副島が貴政府に告げたではないかというと、支那側は、副島は派兵の事はいわなかつたという。帯兵等の事は素よりいう必要なく、ただ連接の地の事だから告げたのみだと大久保は返す。

文祥 「上略」本日討論する処のものは憑【拠り所】とするに足らず。恐らくは反訳伝話の誤りあらん。故に示す所の書に就て詳答すべし。

【「このとき左の文書を出せり」と文祥が今述べたことに近い一文が入る。】

大臣 苟も大任を奉し貴大臣と応接弁論するに、今日の討論は憑とするに足らずと云うは何の言ぞ。本大臣の言う所のものは悉く我朝廷の言う所にして、一々確拠とす可きものなり。

文祥 挙げて憑となさずと云うには非ず。反訳の誤り有らんを恐れてなり。(二七)

大久保が時にとつて激語をすら用いる攻勢的態度の当るべからざるものあるを知るのであらう。

英国公使来訪

九月廿六日、英国公使ウエードが再び大久保を旅館に訪問した。ウエードは『從來台湾全島、我が見る所を以てすれば、支那に属するが如し』、それだのに日本が属地にあらずというのは何等の根元なる哉と質問した。これに対して大久保は正面から答えず、何れ近く解決するから、その上で告げる所あらうといった。

公使 唯聞くを願う所のものは、台湾の兵は永く之を駐めらる可き哉、或は事情によりて退兵せらる可き哉。若し決して退兵せられざれば、両国間ふんじょう是より紛擾に及ぶ可し。此の如くは我れに於ても備える所有らんと欲す。

故に之を聞かんことを希う。

大臣 決して退兵せずと云うに非ず。商議の結局による所なれば今に於て詳答し難し。

公使 若し事情によりて退兵せらるる事、日本政府決定の事なるに於ては、我れ其意を体し、此件の結局に至ることを以て支那政府をして之を肯がえんぜしめんと欲す。

大臣 厚誼辱し【かたじけなし】。是れ前陳の如く不日ふじつ両国政府の間に於て決定す可くと思えり。故に勉めて配意を

煩わさざらんこと我が希う所なり。(二八)

大久保はこの時においても英国公使の介入を排して、両国の直接交渉によつて解決せんことを決意していたことが分る。しかしかれは充分の余裕を残していたのである。この頃、後に載せる岩倉の大久保への書簡にも示す如く、日本においては駐日英国公使パークスは日本政府に対し和平解決を勧めていた。

ウエードは卅日に大久保を晚餐に招き、大久保は之を承諾した。

第四回 日清会談(二九)

明治七年十月五日午後一時、大久保は柳原公使と共に第四回の談判をなすために総理衙門に到った。列座する者は前と同じである。

第三回会談と第四回会談との半ヶ月の間、大久保は無為に過ごしたのではなかった。支那側は大久保の二ヶ条の質問に対し、九月廿二日にこれに答えた。大久保は更にこれを反駁して、九月廿七日総理衙門に照会するところがあった。長文のものであるが、この外に、公法彙抄いんぽうをこれに添えた。公法彙抄はボアソナードの提供になる国際公法の摘録であつて、仏、英、独の四権威者の学説を網羅している。例えば、仏人ハッテルが『一国新に曠地を佔めてんゆう』、實力の佔有てんゆうにして、即ち其地に就き館司を建設して実益を獲るに非ざれば、公法上其主権を認めず』という如き章句だ。これに対し支那側は九月卅日『本大臣前次声明せし言を以て弁理ずべし』とて多くをいわず(三〇)、大久保は十月四日に更に、支那側の無誠意を詰問した。その翌日、第四回の会見となつたものだ。大久保が一度び、力を用いるや徹底、残すところなきを知るべきだ。

支那側は事を曖昧に附することが利益だ。文祥は『病中なるを以て多々弁論の事は苦悩する所』と最初から迷惑気である。大久保の言に對し、

諸大臣 瞭然奉答せざるを以て責めらるれども、此の如くにては総理衙門の言を信ぜられざるなり。

大臣 然り、信じ難し。

諸大臣 此件に於ては幾回答覆するとも信ぜられざるべし。(三二)

双方の言論にやや殺気がある。大久保は、支那側が外国の知照により査弁するというが、米国の知照に對しては査弁しなかつたではないかと、台湾府吏から廈門駐在米國領事に贈る照會書を提示した。米國公使館から得た材料であろう。これに對し支那側は、右は地方官の怠慢だつたからこれを処罰したと答える。大久保が前年支那側の副島に語つて、無主の地としたことを信ずるといへば、支那側は『副島大臣よりは此の說話無く、柳原公使より説話せらるれども、生蕃の事而已に非ず、朝鮮其他の事有り。謁見前の事なり』と屈せず、『此の如く大事件に及ばんとせば、副島大臣より固く協議有る可し。特に一場の説話を以て無主の野蕃とせらるるは、我に於て決して受けざる所なり』(三三)という。

調子が激越なので文祥は通訳官鄭に向つて、談論かくの如くなれば徒らに和好を破るに至るから、遺すことなく説明してくれと依頼した。

大臣 昨年副島使臣に答えらるる所を以て窮竟信用せり。貴大臣等と幾回談論に及ぶとも決す可きなし。因つて近く帰朝す可し。

毛昶熙 昨年の事を証とせらるるとも、我より無主と答えし事曾て之れ無し。

文祥 我れに於て貴問に応ぜざる等の事無し。然れども帰国せらるる事は強いて駐める所に非ず。(三三)

大久保は茲で最後の切札を出して帰国すると云い切つたのである。時に既に暗黒、咫尺を弁じない。燈を点して旅館に歸つた。かれの日記に『彼の模様中々折合付き候勢にこれなく、止を得ず断然申し切り候。井上、小牧、田辺入来、段々示談に及び候』(三四)とある。

二 談判、破局に瀕す

大久保が帰国することを云い切つて、日清談判は一段落ついた。これだけ反覆してその立場を述べれば、事破れても我が努力の足らないのでないことは中外に明らかになつた筈だ。だが彼は支那側にも、進んで日本と事を構える決心のないことは、それ以前から觀取していた。かれが九月廿七日に三條に与えた書翰に曰う。

『上略』小臣着以来、意外時日を移し、定めて御旨趣に触れ候事と恐縮仕候えども、和戰兩条の歸着は、名義判然相立申さず候ては、外国の公評もこれあり事故、決して輕易の所断に及ぶ候訳に至り難く、着以来焦慮配神、唯我道理の有る所を以て、百方不撓【くじけず】論弁を尽し、彼をして是非服従せしめ度、仮令屈撓【屈服】するにいたらず、終に破談に相成り候とも、道理上に於て勝を取り候處を一大眼目とし、初発より談判往復に及び候義に御坐候。〔中略〕支那政府終に戦に決し候か、或は平穩に成局の意か、未だ其実を得申さず候えども、英米公

使の語氣を以て考慮するに、何とかして無事に収め度との意はこれあり様推察いたされ候。就ては今一度の照会談判は十分理を詰め、是非凡の結局を付き度との愚考に付き、両様何とか相分れ申すべくとの心算に候。彼暴に出で候得ば、固より我政府に於ては戦を決せられ候事は、論を待たず候えども、彼より戦を啓き候迄は、我よりして戦を起し候条理これなく、因て小臣談判破裂に及び候ても、彼の来るを待ち候より外致し方これなく候。尤もつとも熱あつ、実地の事情を察するに、逆も彼より急卒兵を起し候事は、決してこれなきのみならず、談判調わず、使節引払い候場に至り候ても、彼よりは容易に蕃地の我兵を攻撃する等の事はこれなくと見据え候。若し我より暴にかかり候事これあり候得ば、則ち彼が術中に陥り候訳に候間注意せざんばあるべからずと愚考仕候。且又厚鉄船御調文相成り候由、彼地において引渡の手順に条約これあり候半、左すれば十一月中頃には相請け取り、乗出し候都合かと相察候。西郷都督より一報これあり、児玉利国、河合某当地へ着、事情具に承り候、流行病にて西郷始め相悩み候由、甚だ以て関心仕候えども、氣候も追々宜く候に付き、最早格別の事もこれありまじく候。前条の次第にて、仮令事を急ぎ候ても、則ち戦端を啓くと申す訳に至らず、甚だ困難の一事、小臣に於て苦心する処に候間、御高察下さるべく候。』(三五)

外国の公評、支那側の態度、日本国内の準備等八方に目を配つて、外交々捗を進めるところ、政治家大久保の面目を見ることが出来る。文中、西郷軍の流行病についていうのは、他の文書に『我兵の蕃地に在る日久し。熱病陣中に伝染し、将士以下患に罹るもの十其九に居る。客月以來報告日に繁し』(三六)とあつて、現地報告によつてこれを知つていたので。

かれが断然帰国を支那側に云い渡した後においても、それが彼の最後の手段ではなかった。かれは次に打つべき手を苦慮した。この経過についてはかれの日記をして、これを語らせよう。大久保の帷幕いぼくの諸僚は、何れも和戦好むところを主張して衆論紛々たり、それに対して如何に処したかの経過をも明らかにするものがある。

『十月六日

今朝井上、田辺、小牧入来、ボアソナード氏と種々質問に及。午后柳原入来、再度照会遣候に付、結局の見込云々承る。
十月七日

今日照会に付種々議論これあり、井上草案を作り、田辺之を修正す。然るに、此結局に付、黑白分明決絶に及候趣意云々を論ずるあり、或は其ままにて引き払い候趣意云々論ずるあり、実に小子進退此に谷きまり候一大事、固苦の至り、依て反覆熟慮、此上は義の有る所理の有る所を以て相い決し候外これなくと決定す。併し衆論を聞て未だ可否を言わず。柳原公使其外入来。今晚ボアソナード氏へ公法上戦の名義、且日清今日の景況を以て、段々質問に及ぶ、通弁池田。

十月八日

今日田辺、井上両子入来、照会草案成。尚少々愚考を以て添削。午后柳原公使入来、李仙得氏入来、質問に及。今晚柳原公使等入来。

十月九日

今朝ボアソナードへ質問。田辺氏の見込これあり照会の草稿持参、猶勘考及ぶべく旨申し入れ置く。午后柳原公使入来。〔中略〕今般支那政府と談判の結果、五日総理衙門面晤〔面会〕に既に帰国の旨を述べて帰れり。就ては、今次照会に付、和戦の両道に係り候大事故、各々異同の見込を以て、議論端あり、到底此決に於ける、小子方寸にあり、豈に輕易に之を断ずべけんや。併、今次照会の文意、則ち其奥意の有る処に由て、趣意を述べざるを得ず、是非其結末の意を聞かざれば能わずと、再三聞くといへども敢て之を云わず。先井上草案稿に付て之を補綴すべしと、終に今日其稿成る。然るに、猶種々の説あり。殊に田辺子別に稿を成し、平穩の趣意を以て、普通の別を告去るに如ずの意なり、小子之を拒まず、今日中熟考すべしと答える。柳原公使論あり、云く、断然和親を破り、戦を以てするに如かず、其名義とする所は、彼れ照会中無礼の語あり、疆土を侵越し一矢加遣せず等云々を鳴らし、且謁見のこともあれば十分名義の存するあり、名なきを憂えずと。井上、高崎等大同小異の論なり。一には戦の名義十分ならず、先ず半途のままにて引くに如かず。或は之を、蕃地に十分手を伸し、彼地に於て必ず事端を啓くべしと、是福島参謀等の論。田辺、鄭此際先ず平穩を保つて余地を残し、図るべきの機に投じ、再び手を尽すべしの意あるに似たり。福原、岩村は名義十分ならず、暴に戦を啓くべからず。吉原も又大同小異なり。此際に當り、殆んど一身に迫り、苦慮云う可からず、深思熟慮するに他に手段なし。若し照会の答覆依然曖昧を以て来る時は、小子断然去るに如ず、是和交を破らざれば止むを得ざるの勢なればなり。然りといへども、談判の纏らざる而已にて決絶を以て、表面戦を期して帰るは宜しからず。小子発途間もなく柳原公使も亦帰るべし、然る上宸断以て之を決せらるべし、是上策なり。如何となれば、当地に於て決絶の形を露わすときは、各国公使の論を

i 『大久保利通文書』第十卷 p.235 第二十号総理衙門の答覆「貴国の兵吾土地に渉る、中国並に未だ一矢加遣せず」とある。

来し、多少の害を醸す、且支那に於て弥相決し、其用意も十分を尽すべし。我情況を考えるに、用意稍調といえども、軍艦の都合其余実地の手当十分と云うべからず、綏急弛張の権を我に於て有するを以、上策とす。且時季の都合も大に注意せざる能わず。

右の旨趣粗相決し候に付、照会明日送るべきに決し、今晚柳原公使へ密談す、公使異論なく、弥内定す。是一大事機密に関する故、決して他に示さざるを約す。』(三七)

右によつて大久保一行中において和戦両派に分れたことが明らかだ。これを大別すると左の如くだ。

主戦論 柳原前光、井上毅、高崎正風、福島九成、樺山資紀、児玉利国

非戦論 吉原重俊、福原和勝、岩村高俊、田辺太一、鄭永寧

この両論に対し大久保は最後までその意志を発表せず、固く決意を内に秘した。その日(九日)、英国公使ウエードは紛争を国際仲裁々判に附託する意向あるかどうかを柳原に問うたが、柳原はこれを拒絶した。今は大久保のみが断の字を下す位置にある。大久保は今一度、五日間を限つた最後通牒を発することにした。かれの日記に曰う

『十月十日

今朝照会を総理衙門に送致す。午后柳公使入来。是結末の照会にて、十分に相認するに五日を以て、一刀両断決着なく、若し曖昧に出れば断然発途。』(三八)

十月十日に大久保の発した照会は、いま一度、日本の立場と、支那側の矛盾を責め、強い文字を使用して、

事の破れる日に備えている。だが大久保はここまで押して来て、少し体を躲した。即ち『兩便の弁法』をいつて妥協の道を開いたのである（三九）。該照会の最後にいう。

『乃ち誣言相加え、多辞相擾し、実に意外に出ず。侵越と云い、犯約と云い、実案未だ具せず、人に加えるに容れざるの罪を以てし、其反覆討論情事漸く露るるに及んでは、猝かに又諉して弁論を好まずとし、斥けて煩洩に堪えずとし、柳原大臣の請覲【謁見の求め】に至りても許さずして、貴国を輕侮する等の語あり。本大臣は明かに貴王大臣の好意を以て我國を待たざるを知る。本大臣亦何の求める所ありて久しく都門に蜘蹰せんや。抑も我國再三使を派す、恪まざるとせず。本大臣誠を輸し【誠意を持つて】歎を致す、竭さざとせず。衅を啓き【不和を開く】端を滋す【そのきつかけを増やす】、其咎孰れか任せん。今五日を期す、貴王大臣果して好誼を保全せんとせば、必ず翻然図を改め、別に兩便の弁法あらん。我國素より土を貪り兵を住するに非ず。兩國人民の慶は本大臣固より深く望みあり。去るに臨み兩國の和好に惓々【つくす】たるは、以て其分を尽すに非ざるなし。』（四〇）ⁱⁱ

大久保がこの最後通牒において柳原公使の謁帝事件を持ち出したのは、所謂和戰兩条の帰着に於て名義判然たらんと目的からだ。かれの心事に關しては、当日、三條に贈った書に明らかである。

『上略』小臣着以来、日夜苦心、負荷の任を徹底いたし度、百方肝胆を砕き、今日に至り候処、彼れ中流に在て種々の遁詞を拵え、忌避し我意を達する能わず、終に五日の談判結局に至り、遺憾至極、畢竟微力短才の然らしむる所、唯々恐縮の外無御坐候。併茲に回つて、最期の照会を送致いたし候に付、此答覆【返信】を待ち、而て有無を決め

i 「ちちゅう」クモのように待つこと？

i i 照会の全文は『使清辨理始末』あり、それによれば文が省かれており、細部に相違がある。注四〇にしるす。

候心底御坐候間、夫迄は御宥量成り下され度願ひ奉り候。何共図り難く候えども、察するに、彼れ激発に出るか、二には曖昧に出るか、三には図を改て弁法を談ずるか三つに過ぎず、第一第三に出で候得ば、少しは面白候えども、多くは二等に出で候半かとぞんぜられ候。我一步を譲り、去るに臨みて、両国和好の誼に慍々【つくす】として送致するの一言をも取らず候得ば、最早術計尽と言ふべし。然るときは手段もこれなく候に付、今后蕃地を占有し、凶暴を開導し、恤内憐外【内を憂え外を憐れむ】の義務たる我政府の目的を益す拡充すべくの旨趣を明瞭に記載したる照会を送るを以て結末とし、帰装発途の心算にこれあり、さりながら、尽すべくの道に就、粉骨碎身するは小臣の分上に付、五日内、彼より返詞の模様依り、其機に投じ、猶此上従事勉励仕候義は、預め何共期し難く候に付、其段は御了得下さるべく候。追々申し上げ候通、和戦両条の帰着に於て、名義判然たらず候ては、容易に所断に及び難くは勿論に候処、茲に一大緊要なるは、柳公使謁帝の事件に候。支那政府より断然拒み、剩え中国を輕侮するの文言これあり、実に屈辱を蒙らせ、和約を破るの所為、差置き難きの大事と愚考仕候。照会書柳公使より差進候事と相考候に付、夫にて御承知下さるべく候。就ては若し、小臣談判愈相破れ、帰朝の期に至り候えば、表面は談判纏らざる而已を以て、当地引揚げ、追て柳公使謁帝の故を以て、発程の順序に取計いつかまつるべく候。如何となれば、小臣断然決絶に及び柳公使共に引上げ候ては、忽ち騒然と相響き、多少の障碍これあり、大に考慮する所御坐候間、蘊奥の秘意と相決し居り候。最も緩急弛張の權を我に有し、軍機の一大事に係仕候に付、隨員中にも決して談し申さず候に付、其段厚く御注意御体認成り下さるべく候【中略】再白【追伸】、本文に付五日内支那政府より何とか答覆これあるべく、其模様付、有無相決候間、相分次第則隨員の内、急に差立候に付、静に御待下さるべく候、各国公使より何とか申出で候事もこれあるべく候えども、少しも取合

ざる様、外務卿御注意肝要と愚考仕候。』（四一）

右によつて大久保としては、支那側の回答次第によつて、かれのみまず北京を引揚げ、つぎに日本側の準備次第によつて柳原を謁帝の故に引あげしめる決心であつたことが分明だ。

翌十一日に総理衙門から前後二通の書翰が来た。一つは四日の大久保の照会に対する答覆書で、これは米国の行動は支那政府と照会請弁を経たものであるに對し、日本のそれは自ら兵船を以て前往したもので相違があると論じたもの。他は十日附最後通牒に對する回答で、恭親王以下清帝に扈從^{こしやう}して南苑に赴くので、五日の期限以内に覆答するのは不可能だというにある。大久保は十二日、書を送つて三日の延期を諾した。

三 英仏米その他の動き

大久保は列国の動きに對しては深甚な注意を払つていた。米國側にはル・ジャンドルを使い、仏國側にはボアソナードが動き、また英國側に對しては英人ピットマンを通じて画策した。これ等の外人によつて、大久保は併せ支那側の動向も知ることが出来た。かれの日記にいう。

『十月十一日

今日総理衙門より去る四日送致せる照会に答覆の照会来る、并昨十日送致の照会答覆は、皇帝南苑行幸に付、五日内に答覆調わず、延期の旨申来る。午后柳公使^{あわせて}入来。ピットマン氏英公使へ内探索を以て、事情具に相分る。今日の模様、支那政府狼狽、英公使も之を助け、是非兩國の仲裁に立ち、戦を止んと慾す。然るに小子より内々

にて一言頼むとの事あれば、説諭尽力して償金を出さしむべしと。且償金にて小子承知致すべくか、是非、戦の決着なるべきか、其意を知らんと慾するの趣なる由。小子之に答えるに、仲裁を頼むの趣意決してなし、我國の情実危急切迫、中々人心押し難くの勢にて、禦せず、尤今日、本国より至急汽船を以て報知の趣に付、時日延引いたし候ては別て困難の実況に付、談判纏らざれば早々引取るべく旨申送れり。我今曖昧の所置に出、復命致候ては、日本政府の趣意、且人民の意に適せず、是戦になるは事実^{じじつ}に於て見易き処にして、曖昧たる和に附し候ては甚だ難んずる所以なり云々の意を伝致せり。是深く慮るところあるなり。英公使の言に、實に此度は日本の威權を支那政府に振いたり。是迄日本の事は、新聞等にて伝聞する而已^{のみ}なりしか、初て小子にも面会、實に感伏、此節は必支那政府償金を出すのことに至るべし、夫にて結局に至り、和好調候得ば、是より日本の日本たる名譽歐洲にも輝き、誠に可れ賀の至りなり云々。

又云、支那政府実に憐むべくの次第故、必ず此度和好にて相濟みなす、今后日本は朝鮮に手を出すべし、夫なれば英第一に助力致すべく其方日本の為には上策なるべし云々。今晚教師の見込書を訳す。』(四二)

英公使ウェードは既に二回も大久保を訪問してその意志を伝えた。大久保をして『頼む』といわしめんためである。しかし大久保はそう云わねばかりでなく、却つて国民が昂憤して抑え切れないから、成るべく早く帰国する旨を伝致した。大久保の言によれば『是深く慮るところあるなり』である。

この辺の事情について大久保が十三日に三條に贈つた書面が興味がある。

『(上略)公信を以て申上候通り、五日期限延引の儀申参候間、今三日猶予致置候。段々探偵仕候得ば、去る

五日談判、翌日は仏公使、英公使へ衙門大臣各尋問、別て狼狽の様子。英公使は屢衙門へ出、既に去る十日に照会送致の日は、英公使は両度衙門へ出候由に御座候。仍て考るに、茲回の返詞は支那に於ても容易ならず国家の大事、安危存亡に關する際に當り、必死困難の内情に相違御坐なくと察され候。英公使は頻に仲裁いたし、是非兩國の戦を止め度趣意にて小臣より一言頼を受度との事、内々承り候えども、勘考の次第もこれあり候故、相斷り置き候。全体公使仲間にも種々議論もこれあり、字魯の如きは兩國共独立の權を以、談判相成り居候事故、何く迄も相任せ置方宜くとの事、英米は自國利害に關し候故、仲裁に入り戦を止め度との意、仏は双方に拘わらず、稍日本を助け候意味これあり、是も頼を受け度との意は十分これあり候、右の次第に候間、英公使にても外へ対し、彼より仲裁を求め来る事は、調え難き内情もこれあり由に相聞得申候。是は別て我幸にこれあり、仍て先ず傲然動き申さず候。昨日中の模様を承候得ば、第一英公使支那政府へ尽力致し候趣に相聞き候えども、同公使は十余年当留在公使にて、十分相助け候事情もこれあり趣に相聞き候間、此上如何衙門の答覆これあるべき哉と屈指仕候。再三申し上げ候通、此上曖昧の答覆これあり候得ば、決定の通、帰装發送の心算にこれあり候故、左様御承知成り下されべく候。今三日の内には、必ず成否相分り申すべく候付、則ち隨員の内より至急出立し形行御報知つかまつるべく候。去る十日玄武丸天津へ着、調所、松村兩人差しかわされ候由、昨日申し参り候付、則入京致し候様返詞仕置き候に付、明日は着つかまつるべく、其上御用筋も承知つかまつるべく候。』(四三)

英、米は何とかして戦争を止めさせたく、これに対してドイツ、魯國は戦争を始めさせたく考えていることが明らかだ。この事は後に載せる岩倉の大久保宛書簡によっても知られる。英國は南方に於て事を起されては迷惑だから、日本をして朝鮮の方に力を用いしめたがっている。それから約三十年後の日英同盟の萌芽

が、既にこの頃からみられるのである。

英国公使の心情と、支那側の動静は、大久保の利用しているピットマンによつて齎らされる。大久保日記にいう。

『十月十三日』

今朝本邦へ書信を出す。公使館よりの公信に托してなり。條公へ私書を出す。福島子入来。昨日ピットマン氏、英公使進めによりハート氏へ至る。是支那雇人なり、英人にて支那政府信用せらる。全氏咄はなしにて、愈償金いよいよを支那政府に出させるとの話これあり、ピットマン氏は、モ一軍にならぬと云えりとぞ。尤、恭親王も如何して宜きやと相談に参りたる旨なり。支那政府は、別て狼狽むだの由、全氏も日本は朝鮮に手を付るが利益なり、若し、日本此挙あれば、歐洲に異論するものなし、我英に於ては則ち助力する云々。

今朝ピットマン氏英公使に至れり。猶此方の内意を移すに、英公使大悦せり。此上は頼むとの一言なしといえども、談判の形行を一通り御咄おつこれあり候は、至つて大幸なりといひしと。

公使云く、日本の権を振い、此度は支那政府随分眠を醒すべし、内情歡喜いたし候由。午后柳原公使入来。今夕福原、高崎入来。』(四四)

英国公使は今や頼むと大久保が云わなくても、調停に動き出す形勢になつて来た。大久保は、十三日にピットマンを英国公使に差出して、一層強硬な決意を披瀝させた。尤もこれは大久保の伝言ではなくて、ピットマン自身の發意の如く見せかけ、日本側に帰装発足の決意出来たようにいわしめたのである。英国公使は、

兎に角、一通りの咄を聞きたいと間接に申込んだ（四五）。

これだけの下工作をしておいて、十月十四日に大久保は英、仏兩國公使を訪問した。まず英国公使ウェードに会見して、前日来訪された時には『支那政府と商議の次第を問われるけれども、爾時不日【その時近日】結局の目的あるを以て詳答に』（四六）及ばなかったが、今日はその報告に來たと切り出した。そして一応その経過を語った。

英公使 副島公使北京に於て告示せらるる所は書翰なりしや。

大臣 否、代理をして総理衙門に面晤を以て告知せしなり。

英公使 然りしや。（四七）

外交官としては当然質問したい点であろう。日本側の議論の弱点は実にここにある。

英公使 先日貴寓に至りしとき、事情に因り退兵せらるべき哉を問いしに、事情に因りては退兵せざるに非ず、然れども其事情は即ち今言われ難き由貴答ありたり。今日其事情を聴くことを得べき哉。

大臣 此回の挙、素より我國の義挙にして、蕃人を懲し且つ之れを開化し、我が國民を始め宇内航海者の安寧を保ち、将来の患を除くの本意にして、敢て土を貪るに非ざれば、我れ其名譽を保つことを得ば退兵す可きなり。英公使 名譽に触るる事あれば退兵せられざるは尋問を須たざる所なり。事情と云わるるは外に望まるる所ありやを問うなり。

大臣 知らるる如く、此挙の初め、我が政府國民に誓うに此義挙を遂ぐるを以てせり。且つ彼地に於て我が兵士

しつぷうちゅう
櫛風沐雨の大難苦を受け、死傷する者有るに至る。殊に莫大の経費を用いたり。故に我が国政府の満足する所と、

人民に対し弁解すべき条理あるに非ずんば、未だ退兵し難し。

英公使 至当の説なり。如何せば満足の地に至る可きや。

大臣 是れ支那政府に於て定めて思慮有る可し。

英公使 彼れの主張に任せらるる哉。

大臣 然り。

英公使 帰国せらるる時は柳原公使も共にせらるる哉、又は公使は滞留せらるるや。

大臣 是事未だ決せず。其期に臨んで決す可し。(四八)

大久保はこの日初めて間接に賠償の問題を持出したのである。だが一切の条件は支那側より持出すことを期待した。柳原の帰国問題の如きは、大久保の胸中に決定していたのは三條への書翰によつて明らかだ。当日、仏国公使の会談においては、

仏公使 凡そ幾許の経費を用いられし哉。

大臣 莫大の経費なり。(四九)

とだけいつて内容には触れなかつた。

この日の大久保日記にいう。

『十月十四日

今朝福原入来、昨日、猶英公使へピットマン氏参り、此方の旨趣、具に伝致いたし候処、英公使別て歎び、此上は小子尋問に及ぶ、大要形行御咄下され候得ば、夫にて十分満足いたし候旨申し居り候由。伝致の趣意は、英公使仲裁の義、希望の由故、中人を頼み候ては、我独立の権を枉げ候故、是を防ぐの術を以て、御国内情切迫、今般態々玄武丸差立、談判纏らずば其俣帰朝すべく云々申し来たり候。因て今次総理衙門答覆、依然頑固を唱え候得ば、断然帰装発足の決心なりと云々の旨をピットマン氏の考を以て、申入れさせ候。

午后二時、英公使を尋問、是迄の談判初終を大略相咄し候。「中略」仏公使に尋問、同様の談話に及び、是も応接書これあり候故相略し候。両公使共満足の模様にて、都合宜く安心いたし候。「下略」(五〇)

四 支那に妥協の色

果して支那側から十六日に返書があつた。日本側の議論に答え、かつ『貴大臣若し真に両弁法を求めんとせば、詳細熟商すべし。貴大臣一日時を函定せば、貴館に赴き面談すべし。若し果して定議せば、従前往返弁論の詞は彼此掣回し【引つ込め】、痕跡を存するを免る亦不可なし』(五一)と云つて来た。大久保は十七、十八両日内を指定した。従来（せいがい）の議論を変更するも差支えないというのであるから、大久保の勝利である。

第五回 日清会谈 (五二)

十月十八日、総理衙門大臣董恂、沈桂芬、成林、夏家鎬の四名が大久保をその旅館に訪れた。大久保は『今日晤談【会谈】の事は両国和好の存否に係る重大事件にして、本日の談論を以て可否を決し、且つ其事の動

かす可らざる事は、貴大臣等の権に在るなる可し』(五三)と止めを刺したが、四大臣に左様な大きな権限のある筈はない。

大久保は所謂両便の弁法について支那側から口を切らせようとした。先頃、『両便の弁法あらば来臨せらる可し』といって、今諸大臣が来られたのだから、支那側に意見があらうというのである。ここで両者共、執拗に相手をしてまず提案せしめようとする。

沈桂芬 貴大臣両便の説は両国便利の事なる可し。

大臣 我れに於て両便と云うは必ず両国の便宜と考えらる。貴国に於ても異議なかる可しと思えり。然れども先ず貴大臣等の弁法を領することを得ん。(五四)

對手が何といつても切り出さないので大久保はその論を進めた。

大臣 文中堂より柳原公使への書面に日本撤兵あらば将采の処分を為す可しとあり。今日も右の趣意なれば決して両便の法に非ず。貴政府の偏便なる可し。此れ確答あらんことを欲する処なり。

諸大臣 撤兵せらる可しと云うは本政府に於て言う可きことに非ず。又貴国の公使に対して命令すべき權なし。只和好を重んじて来るとの趣旨なるを以て、然らば我が管内に派兵ありては和好に至らざる可しとの意を以て商議する処なり。(五五)

蕃地がその主張する如く属地ならば、日本に対し撤兵を要求するのは当然ではないか。支那側の立場が動搖して来たのを観るべきだ。そこで大久保はいよいよその賠償に関する要求を提出した。

大臣 貴国に於て我れに撤兵すべしと云うは、管轄内の見を以てするならん。我れに於て承允しやういんせざるは我が所見あればなり。我が政府討蕃の旨趣は、我が人民を保護し、蕃民を開導し、将来航海者の安寧を保するの大義にして、我が將士兵卒等露宿風餐ふうさんの艱苦をなし、殊に幾多の生靈を殞おとし、加えるに我が政府莫大の費用を惜まざるは是の目的を達せしが為めにして、決して廃す可きことに非ず。今我れ此兵を撤せんとするときは、蕃民より必ず我れに尽す可きの義務有らん。今貴政府之れを有せんとせば、貴政府我れに尽す可きの義務あり。即ち亡者の祭資は勿論、蕃地は百事不便にして我が需用に供する者一として之れ無し。陣營の造営、修築及び兵士の食料等に至るまで其費用莫大なり。之れ貴政府の我に償う可きこと当然なり。然るを貴政府之れを拒むときは、我が政府に於ては、徹底当初の目的を達するが為め益々着手するは終始変らざる確乎不動の大義務にして、豈に地を貪るの意ならんや。

董恂 貴国討蕃の旨趣に於て、我が政府に於て従前より不是なりと云いしこと無し。(五六)

討蕃を不是と云ったことがないというのは非常な讓歩だが、こう云つて、支那側が再び版図論を持ち出すのを大久保は抑えて、今日は最早属不属の議論をなすべきではない、便法について返答をせよと主張して屈しない。

大臣 去る五日論弁既に尽き帰朝の事に及べり。故に今日兩便を以てするは、図を改めて和好を重んずるの趣意なり。然るを、今日に至り遭害の件を査弁する等の事を以て談ぜらるるは、我が弁法に於て肯んぜざるに似たり。沈桂芬 一たび生蕃を査弁せし順序を経るに非ざれば、我れに於て面目を失する所なり。

大臣 然らば如何為さるや。

沈桂芬 生蕃實地に就て査弁し、後來の難民を保護する方法等を設くるなり。

大臣 然る後にあらざれば前陳のことは為され難しと云わるる哉。(五七)

この談話において支那側は賠償を原則的に承認したが、しかし左様な重大な事件を決定すべき権限は内大臣にはなく、恭親王、文祥に協議することになった。大久保は十九、廿日兩日の間に明答を要求して『此他の議論は一切聴く可らず』(五八)と附言した。大久保は今や事を曖昧に附するを許さない。

この時の事情については、大久保がその翌十九日三條に送った書面が要をつくしている、左の如し。

『上略』昨日の談判結局に至らず候えども、明廿日迄決答の期限を約し候間、今回は必ず真の成局を見るべく候、談の模様は此一会に於ては大に従前と相違し、一步を進め候かと覚え候、總理衙門の内、周家楣といえるもの、我外務大丞の如きものにて、談判の度毎大臣へ随從相助け候ものにて、昨日諸大臣去るに臨み、同氏より鄭訳官へ申入れ候には、今日辨理大臣より御談の件、猶拙者と御内談におよび度とのことに候由、必ず今明日中に鄭方へ参り申すべく、何様の趣意に候哉、予知すべからずといども、金額の数を偵知する為か、或は名義上の事に付て事共かと察され候、何も信憑する能わず候えども、若し右辺の事に出候わば、臨機の所断に及ぶべくと考慮仕候。一、英仏公使へ尋問の次第は、公信を以て申し上げ候通にて、我趣意篤と吐露いたし候處、随分徹底いたしたる趣にこれあり、内々探偵するに、即ち今の処にて日本政府の議論正理にて、能き位置を保てりと、英公使申し居り候由。仏公使は固より異論これなし。其余在住公使一鉢の論も、日本を不可とは言わず趣なり。兼て追々申し

上げ候通、談判破裂に及び候ても、道理の上に於て趣旨明瞭相貫き度、初終苦慮いたしたる処、当分の景況にては前条の通にて真に我幸とすべし。

一、今両日の内には成否相分るべく候に付、幸玄武丸を以て、急報つかまつるべきに付、それ迄は御待下され度、其内種々紛論も百出致すべく候えども、御動搖これなく様誠に願ひ仕候、小臣出發后数旬を経、未だ了局に至らず、彼是と在^{じんぜん}再機会を誤り候事、万死の罪遁れべくもなく、然といえども、国家和戦の一大事に關し候得ば、無理に処断に及び候事は、我奉命の重に對し、小臣衷心に於て安んぜざる所なり。何れにせよ、其責は初発より負荷する処なれば、他日必期する処あり。閣下、夫是を諒し玉わらんことを〔下略〕。(五九)

これより先、また一行の引あげ準備のために玄武丸は、十月十日を以て天津に來り、今は芝罘^{チーフー}に在つて待機している。大久保の舌鋒益々鋭く、支那側が歩一步、後退しつつあるのは、その決意の相違からである(六〇)。

五 日本国内の動搖

日本国内においては第一の場合に備えて、海陸軍備を修め、大久保からの飛報を待つていた。當時、岩倉から大久保に宛てた書翰(十月十五日附)はこの辺の消息を示すものがある。

『(上略) 聖上倍御安寧に涉らされ、定日政庁御親臨、且大臣參議隔日皇居參入、万機の政被^{まさしめ}聞食、別て外務上に就ては御専務遊ばされ恐縮此事に候。條公始め新參議に至る迄一同励勤、決して異論枝梧^{しご}【食い違い】の憂これなく御放慮給わらるべく候。山県、川村大奮発緩急に応ずる必死の用意重^{ちやうじやう}置至極、御顧慮これあるべからず候。

内地も異状これなく、只々兩國開戦に立至る可くやと人氣相振上下一致、貴卿の報信を屈指企望の姿に候。鹿兒島は至て平穩、高知は一時志願兵とか相唱え大兵募集すべく由に候処、右出願は素より陸軍にて許可これなく、其後格別懸念の筋相見ず候。貴卿北京着到後の景状は書信にて熟知致、今更申すも愚の至に候えども、今回の御出張は其任至重至大、殊に盤根錯節頗る御苦慮の程千万【この上なく】遥察令候。此上御尽力を以て和戦一決、一日片時も早く其成局專要と日夜渴望に堪えず候。英公使パークス氏時々入来、頻に平和に帰し候様忠告、又調停致し度口氣もこれあり、他の各公使も略同意の様に推察致され候。独り魯公使は窃に開戦を速かにするが御国の利なり、魯政府に於ては必ず御国の為に尽力致すべく云々との語あり、畢竟魯国は自国の為に別に謀る所これあり儀と思料致し申し候。此辺御含み迄に内啓致候、御聞置給わるべく候。何分前途の利害得失は筆頭に尽くべからず候。』(六一)

各地において義兵を志願の者続出したのは左の新聞記事によつても見うる。

『日支葛藤を生じ、和戦の機已に今日に在り、邦内憂国の士、慨然身命を致し、国に報ぜんと従軍のことを切請せる者、旧水戸、旧下妻、旧笠間、宍戸、松岡、館林、宇都宮、河越等前後競い起り、各軍備を調して一大号令の下るを待つ。中にも旧下館士族二百名計總代を以て頃日左の表を出せり。〔下略〕』(六二)

更にまたその頃の新聞には石川県士族斎藤定之なるものが、憤起徵令に応じ体格検査に合格せず、『露霜の白きをおのが心にて、今朝くれないにそむるもみじ葉』との辞世を残して割腹した記事がある(六三)。十月二日には、日本政府は特に居留支那人に告諭して、左の如くいっている。

『仮令事已むを得ざるに出て、開戦の時に至ると雖も、汝寄留人民等何の咎がある。苟も其間諜、探偵、戦事に關係して、我國の妨害を為す者に非ざれば、之を捕縛し之を剥奪する等のことは、我大日本政府の為さざるところなり。』(六四)

十月廿三日に、陸軍卿山県有朋は、陸軍諸將校に内諭書を与え、台湾事件の顛末を記して軍隊の決意を促し(六五)、また同日、河村海軍大輔は随員と共に品川から筑波艦へ乗組み長崎に向つた(六六)。この日、蒸汽船高雄丸は海軍兵半大隊と小銃六万挺を装載して九州に向い、更に、この頃政府が外国蒸汽船二艘を買入れ、これを瓊浦丸たまうら、豊島丸と改名したことも、時局の逼迫を思わせた。

第六日清会谈(六七)

大久保は約によつて十月廿日、柳原公使と共に総理衙門に赴いた。十八日の提議に対する回答を得んためである。

第五回会谈において、既に支那側は原則的に、日本の征蕃を義挙と認め、また賠償についても暗々裡に、事件調査の結果を条件として承認した。大久保の議論は自然にそこから出発する。大久保は、日本は巨額の費用を費消したのであるから、これを撤兵せんとするには充分な理由がなければ、人民に対して弁解の辞がないという。これに対し支那側も人民を持ち出していう。

文祥 貴大臣撤兵に於ける貴按【言葉】は既に之を詳にすれども、昨日稟告ひんこくせし如く、生蕃の地を查弁するに非ざれば我に於て不便とする所なり。貴国既に義務を以て来れば、我に於ても亦我が人民に対して義務なかる可

らず。今支那の属地とする所の地に於て貴国より派兵したるに、我より償金を出して退兵を乞うは、実に我政府に於て面目を失う所なり。故に我政府より一たび査弁を経るに非ざれば、人民に對し出金する能わず。然れども貴国討蕃の挙の大義たることは我が政府に於て認可する所なれば、貴大臣豈に義によりて來り義によりて去るの意を以て撤兵せらる可き賢慮なき哉。(六八)

支那側のいうところは、日本はまず撤兵せよ、支那はその後において報いんというにある。大久保はこれに對し査弁とは何か、報いとは何かを詰問する。

沈桂芬 貴国退兵の後査弁するとは、我が人民に對し外面を修むるなり。勞兵の爲めには出金し難し。我が大皇帝より貴国の難民に償うなり。能く此義を領せられ、勘按せらる可し。撤兵を乞うの後に至り異議する等の事は、我が政府の決して為さざる所なり。(六九)

出兵に對しては出金せず、難民に對し慰問金を出すというのが支那側の条件だ。大久保がこれを書面によつて示せというと、これは皇帝の償う所だから書載し難しと答える、大久保は、それでは『上は政府、下は人民に』弁解の辞がないから撤兵は出来ぬという。両者押問答して屈するところがない。この時に支那側は四條の案を出した。しかもこれを二回に分けて提案したのは相手の顔色を見ていい出したのである。

第一 貴国の兵、従前台灣蕃境に到る。既に台蕃を認め無主の野蠻とす。並に是れ清国地方たるを明知し兵を加ゆるに非ず。夫れ清国の地方たるを知らずして兵を加えるは、之を明知して兵を加えるに同じからず。此一節は日本の不是とは思わざるべし。

第二 既に地の清国に属するを説明す。将来清国は、貴国退兵の後に於て、断じて従前加兵の事を再提せず。貴国亦清国に譲るの事に係ると謂うべからず。

第三 此事台蕃漂民を傷害するが為めより起る。貴国退兵の後、清国仍お査弁をなすべし。

第四 貴国従前被害のものは将来查明し、清国大皇帝の恩典を以て酌量撫恤す〔めぐむ〕。(七〇)

この支那側の提案は一步進めていることは事実だが、大久保はこれでは承認出来ない。今支那側の言を信じ、後それがわが人民の意に満たなければ、必ず難事あるべく、それこそ和好を破る所以ではないかと大久保は論ずるのである。

しかし大久保はただ頑張るだけではない。当方も考えるから貴方も考えろといい、具体案をといわれて、公文上は四ヶ条の如きでよいから別紙を以て確証を明示することを希望した。別れに臨んで支那側は、明日日本側通訳官鄭の来臨を乞うた。会談が終えた時は、もう燈が点ぜられていた。

六 談判不調、帰国に決す

翌十月廿一日、鄭は総理衙門に赴いたが、右は支那側が日本の要求賠償額の瀬踏みをするためであつた。鄭は支那側の質問に答えた。征台の費用は五百万弗で、右の内戦艦、機械買収費が二百万弗、蕃地の実費は三百万弗である。名義のことは何れ相談するけれども、三百万弗は増減できないらしいと。支那側は『風聞には貴国の実費五六十万と云うに非ず哉』と質問した(七一)。支那側がその辺に目安を置いていたのを見る

べきだ。これより先西郷従道は現地において支那側に対し可なり正直に種々話している（七二）。

第七回日清会談（七三）

第七回目の日清会談は十月廿三日に総理衙門に開かれた。この日の年前、英国公使は大久保を宿舎に訪れて意見を交換したが、これについては後に説こう。会談において首席大臣文祥は前から病氣を以て、談話中にも不快を訴えていたが、今日は心地殊に不快を覚えるというので、沈桂芬が大久保の矢表に立つた。沈は支那全権中の論客である。

支那側はいう。日本は撤兵するのに報償を要するというから、撫恤ということにして支出しようというのだ。撫恤と兵費とは同じからず、撫恤ならば相当であらうのに、兵費には少なからう。その額において双方に相当な相違があり、殊に金額を明示することは出来ない。大久保は負けてはいない。出来ないというならば強いて乞わない。撫恤ということすらが当方として非常な譲歩なのだから、書類で明示することが不可能ならばそれまでだと突っぱねた。

大久保が断乎として譲歩しないので、沈桂芬は思い出したように大久保に問うた。

沈桂芬　茲に別事を問わんとす。貴大臣に於ては、蕃民処分の事を以て、支那に於て当然の事を受くと思わるるや、又は受くべからざるものを受たると思わるる哉。（七四）

別言すれば日本の要求は無理と御自身考えないかというほどの意味であろう。大久保は撥ね返して左様な属不属の議論は過去の事だ。今は便法を議しているのではないかと問題を他に転ずるを許さない。元来、支

那側としては属不属の議論について、更に徹底的に法理的に論じて置くべきであつた。不属の地だというならば、日本がそこに兵を出して置いて、支那から賠償をとることが議論としては無理がある。が今は既に遅い。

ここで談判は破裂した。

大臣「上略」然るに過日四ヶ条の書辭に至りては、我が独立の權利に拘わるを以て直ちに返却す可し。然るときは去る五日の談判に復り、不日帰朝す可し。弁法の議は今日を限りて止むべし。然る後は、我れに於ては蕃地の処分始終貫徹せんが為め、愈当初の用途を拡充す可し。此事先ず稟告す。

沈桂芬 元來、此の兩便の弁法なる事は、我れより稟請せしに非ず、貴大臣より示諭せらるるを以て、斯く迄商議せし所なり。「中略」我が政府に於ては四条の外、經費の名目に於ては些しも協同する能わず。蕃地を無主の野蕃と見做すの説は、我れよりも陳述せし如く、蕃地は我が支那の属地に非ざる無し。此れ又稟告する所なり。大臣 四条の弁法は貴国の便にして我の便に非ず。殊に皇帝陛下撫恤の説のみにして、茫漠として其数目を書せず。本大臣信用するに由なし。蕃地を属地とせらるることは之れを領せり。我に於ては到底貴轄と為さず、当初の目的を貰かんとす。此旨固く通告する所なり。(七五)

正面衝突だ。一時樂觀した大久保も、廿一日以来は支那側の強硬態度を知つて、悲觀的に傾いた。廿一日のかれの日記に、

『十月廿一日

今日午前井上を呼び、条約等の取調を托す。柳原公使入来。鄭書記官総理衙門に至り、内談これあり趣、いよいよ弥事成ならぬ模様候。』(七六)

とあるによつても知られる。しかしかれは斯くの如く正面衝突するとは予断しなかつた。その日の日記に云う。

『十月廿三日

今朝十一字、英公使来、其後の模様承り度とのことに付、大略の談に及び候。一字総理衙門に至る。談判結局に至らず、彼両便の弁法我便のみを謀り、殊に書面条約いたしがたきとの断然たる答に付、此上はいたし方これなく、破談に及び候。此に至り和好調わざるは実に残念に存じ候えども、十分に歩を譲り、是をまとめ度百方談し候上、此の如くにいたり候上は、誠に人力の及ばざる所と愚考決断いたし候。今晚来人多し。今晚柳原公使へ示談、来る廿六日発途帰朝を決す。最玄武丸芝罘に在る故、同船へ乗組の筈に決す。〔下略〕(七七)

既に談判は破裂した。廿四日には各国公使を訪問して別れを告げた。廿五日には福原を上海に、樺山、比志島を厦門及び台湾に出発せしめた。またル・ジャンドルも北京を離れた。

だが大久保の外交官としての真価は、その議論の周到と共に、かれのねばりにある。かれは尽すべきは総べてを尽さなくてはやまない。前記の如く同じ論点を何日となく繰返したに拘らず、かれは最後に、井上毅に命じて国際公法と實際上との論拠によつて照会書を作り、総理衙門に送つた。

『〔上略〕仁義の挙変して寇讐こうしゅう【かたき】の名を得たり、是を曠古こうこの遺憾とす、我国自ら我民を護す。已むを得ずし

て懲蕃の挙あり。今より以往、山内山後將に益々榛莽開拓し、服者は之を撫し、梗者〔邪魔するもの〕は之を鋤き、以て吾事を終えん。〔中略〕嗣後縦令千万の弁論あるも、断じて教を領せず。即ち善巧の弁法あるも亦聞くを願わず。本大臣倅こうそう惣たつぽん「いそがしく」起程、貴衙門に踵り告辞する能わず。』(七八)

事破るるに至らば、清国に対し、また世界に対し、わが国の立場について、一毫の誤解なからんことを期する用意を見るべきだ。

(一) 渡辺国武談『明治七年全權辨理大臣として支那に行かれたときに、天津よりの舟中などでも、碁を打たれて、大難問題が前途に横わっているにも拘らず、其手筋が分毫も乱れるところがなかったというて、一緒に同行した随員の甚好きの人が感服恐縮して居ったということである、鉄心石腸というのは、実にこの人の事であると思うのである。』(鹿児島県教育会編『甲東先生逸話』四三二頁)。

(二) 勝田『甲東逸話』一二六頁。

(三) 『大久保利通日記』下 三二〇頁。

(四) 『使清辨理始末』(『明治文化全集』第六卷、外交篇 八四―七頁【『大久保利通文書』第10巻p213-】参照)。

(五) 同上、八五頁。

(六) 同上、八五―六頁。

(七) 同上、八六頁。

(八) 同上、八七―八八頁参照。【第10巻では224頁にある。「無シ借ニ納朝廷ノ国輸正供ヲ」を中公文庫は「無シ借ニ納朝廷ノ輸正供ヲ」と読んでゐる。「朝廷国の輸正供を借納すること無し」。「正供」とは賦税。】

(九) 同上、八六一九頁。

(一〇) 『使清始末摘要』(『明治文化全集』第六卷、外交篇 一四八頁)。[【日本外交文書デジタルアーカイブ](#)明治期第7巻「台湾生蕃討撫一件」p330-1

(一一) 『大久保利通日記』下 三二一頁。

(一二) 『使清趣意書』(『明治文化全集』第六卷、外交篇 一五〇頁、『大久保利通文書』第六 一八五頁)。本書附録参照。[【日本外交文書デジタルアーカイブ](#)明治期第7巻「台湾生蕃討撫一件」p334-1

(一三) 『使清辨理始末』(前掲、八八頁)。

(一四) ウェード (Sir Thomas Francis Wade, 一八一八—一九五年) は一八三七年極東派遣軍に従軍して阿片戦争に参加した。後註支公使館に勤務し、エルデン卿 (James Bruce Elgin) の支那に來たりたる時にレイと共に選ばれてその通訳となった。一八七一年公使となり(一八三年)、一八七六年芝罘協定を支那政府と結んだ。帰英後、一八八八年ケンブリッジ大学教授として、第一回支那學講座を担当した。所謂 Wade System は彼の翻案に係る。

(一五) (一六) 『使清辨理始末』(前掲、八九頁)。

(一七) 同上、九〇頁。[【大久保利通文書](#)第10巻p239-1参照。

(一八) 『処蕃趣意書』(前掲、一六二—三頁)【第5款】、『使清辨理始末』(前掲、九一頁)。

(一九) (二〇) 『使清辨理始末』(前掲、九〇頁)。

(二一) 同上、九二頁。[【大久保利通文書](#)第10巻では文末は「志ヲ遂ケサル可シ」となっている。】

(一二) 同上、九三一六頁【『大久保利通文書』第10巻 p239-】参照。

(二三) 『処蕃趣旨書』（前掲、一六五頁）、『使清辨理始末』（前掲、九六一七頁【第10巻 p250-】）。

(二四) 『使清辨理始末』（前掲、九三頁）。

(二五) 日清修好条規（明治四年七月廿九日調印明治六年三月九日批准）の第二条、第三条全文は左の如し、

第一条 此後大日本国と大帝国は弥和誼を敦くし、天地と共に窮まり無るべし。又両国に属したる邦土も各礼を以て相待ち、聊^{いささ}侵越する事なく、永久安全を得せしむべし。

第三条 両国の政事禁令各異なれば、其政事は己国自主の權に任すべし。彼此に於て何れも代謀干預して禁じたる事を行わんと請い願う事を得ず。其禁令は互に相助け、各其商民に諭し、土人を誘惑し、聊違犯有るを許さず。（『旧条約彙纂』第一巻第一部）。

(二六) 『使清辨理始末』（前掲、九五頁）。

(二七) 同上、九五—九六頁。

(二八) 同上、一〇〇頁。

(二九) 同上、一〇六一一〇頁【第10巻 p281-】参照。

(三〇) 『処蕃趣旨書』（前掲、一六七頁）。

(三一) 『使清辨理始末』（前掲、一〇六頁）。

(三二) 同上、一〇九頁。

(三三) 同上、一一〇頁。

〔三四〕『大久保利通日記』下 三二六頁。

〔三五〕明治七年九月廿七日 三條実美宛大久保書翰（『大久保利通文書』第六 八一—二頁）。

〔三六〕『処蕃趣旨書』（前掲、一六九頁）。

〔三七〕『大久保利通日記』下 三二六—一九頁。

〔三八〕同上、三二〇頁

〔三九〕随員小牧昌業は語る。『大久保公も宿に居て時々「どうも支那の奴はヌラクラでかなわない」と言つて苦笑して居られた。遂に公は……それは両方に便宜な方法を取る事である、と言つて暗に最後の通牒を送られた。初めは条理を立ててやり、敵の屈するを待つて、相当の条件を持ち出す筈であつたが、相手が支那人だから遂に露骨に出られたのである。』（『甲東先生逸話』二四七頁）。

〔四〇〕『処蕃趣旨書』（前掲、一六九頁【第七款】）、『使清辨理始末』（前掲、一一〇—一二頁）。『大久保利通文書』第十卷、第三十「第三照会」pageによると、「乃ち」は文外で『誣言相加え、多辞相擾る、実に意外に出ず。【中略】侵越と云い、犯約と云う、実案未だ具せざるに、人に加えるに不容の罪を以てす、其反覆討論するに及んで情事漸く露われ、猝かに又^{むすらわす}誘るに弁論を好まざるを以てし、斥くるに煩流に堪えざるを以て、【中略】柳原大臣例により觀を請う至りて許さず、中国を輕侮する等の語あり。本大臣明かに知る、貴王大臣已に好意を以て我国を待たざるなり。【中略】本大臣亦何の求むる所あつて久しく都門に蜘蛛せんや。抑も我国再三使を派す、^{うや}格まざるとせず。本大臣誠を輸し歎を致す、^{くさ}竭さずとせず。衅を啓き端を滋す、其咎孰れか任せん。【中略】今五日を期し、貴王大臣果して好誼を保全せんと欲せば、必ず翻然図を改め、別に兩便の弁法あるを知らんと欲す。【中略】我国素と土を貪り兵を^う佳う者に非ず。

両国人民の慶は本大臣固より深く望むあり。【中略】去るに臨んで両国の和好に倦々す、以て其分を尽すに非ざるなきなり。】

(四一) 明治七年十月十日、三條実美宛大久保書翰（『大久保利通文書』第六 九三一―六頁）。

(四二) 『大久保利通日記』下 三二〇―二二頁。

(四三) 明治七年十月十三日、三條実美宛大久保書翰（『大久保利通文書』第六 一一四―一六頁）

(四四) 『大久保利通日記』下 三二二―二三頁。

(四五) 同上、三三三―二四頁、本書一六〇頁参照【p.182 第五章第三節末の十月十四日の日記】。

(四六) 『使清辨理始末』（前掲、一一四頁）。

(四七) 同上、一一五頁。

(四八) 同上、一一五―一六頁。

(四九) 同上、一一七頁。

(五〇) 『大久保利通日記』下 三三三―二五頁。

(五一) 『処蕃趣旨書』（前掲、一七〇―七一頁）、『使清辨理始末』（前掲、一一七頁）。

(五二) 『使清辨理始末』（前掲、一二一―一二四頁）【[大久保利通文書](#) 第10巻 p.329-1】参照。

(五三) 同上、一二二頁。

(五四) 同上、一二二頁。

(五五)、(五六) 同上、一二三頁。

(五七) (五八) 同上、一二四頁。

(五九) 明治七年十月十九日、三保実美宛大久保書翰（『大久保利通文書』第六 一一九—一二〇頁）。

(六〇) 大久保の顔色は常に同じだ。随員小牧良業は語る。『いよいよ明日北京を立つ事になった。本国へも其旨を言い送つて戦争するより外に仕方ないと決心された。こういう場合には、流石の公でも顔色が穏かではあるまいと思うだろうが、公は人が驚いたり、急込んだりするような事に逢えば逢う程落付かれた。此時でも平気なもので顔色は曇つても居なかつた。』（『甲東先生逸話』二四九頁）。

(六一) 明治七年十月十五日、大久保宛岩倉具視書翰『大久保利通文書』第六 一〇四—一〇五頁、『岩倉具視関係文書』第六 二三五—三七頁）。

(六二) 『新聞雜誌』明治七年九月廿八日号。

(六三) 同上、明治七年九月卅日号。

(六四) 同上、明治七年十月二日号。

(六五) 『朝野新聞』明治七年十月廿四日号。

(六六) 『東京日日新聞』明治七年十月廿四日号。

(六七) 『使清辨理始末』（前掲、一二五—一二九頁【[『大久保利通文書』第10卷p34-1](#)】）参照。

(六八) 同上、一二六頁。

(六九) 同上、一二七頁。

(七〇) 『処蕃趣旨書』（前掲、一七三頁）、『使清辨理始末』（前掲、一二九頁）。

(七一) 『使清辨理始末』(前掲、一二九—三〇頁)。

(七二) 『大日本外交文書』第七卷 一二九—三二、一三三—三四、一三六—四〇頁参照。

例えば、次の如き談話を試みている。

『潘(幫辦潘霽)曰く、此行の費用其数凡若干なるや。

(西郷)曰く、即今兵を徹せば許多に至らざれども、此上曠日持久に及んでは兵員の俸給其他百般の費尠からず、今之を算すれば凡そ二百十余万弗なるべし。

潘曰く、是迄の現費若干なるや。

(西郷)曰く、全く消却する所の失費現在凡そ百二十万弗なり。

是に於て潘、夏(台湾道台夏獻綸)に問う、清国銀に比較して若干なるや。

夏曰く、一百弗を清銀七十両と見做し、凡そ八十万両余なるべし。』(同書、一三八—三九頁)。

(七三) 『使清辨理始末』(前掲、一三一—三三頁【『大久保利通文書』第10卷p362~】) 参照。

(七四) 同上、一三二頁。

(七五) 同上、一三三頁。

(七六) 『大久保利通日記』下 三二六頁。

(七七) 同上、三二七頁。

(七八) 『処蕃趣旨書』(前掲、一七五頁)。

第六章 交渉妥結に到る

一 英国公使ウエードの調停

英国はその通商主義の立場から、東亜が戦禍を蒙るのを好まない。その事は一貫して、英国極東政策の基調だ。駐英公使ウエードは八月十三日既に柳原公使を訪問して征蕃事件に対する日本の態度を打診し（二）、またしばしば大久保を訪問し、日清談判が破裂に瀕した第七回会議当日（廿三日）午前にも大久保を訪問したことは既述した。

大久保は過日來の談判の経過を話した。支那は皇帝の恩典として支出するといふけれども、確証とすべき書面無くんば承知しがたきことを説明し、また鄭書記官が三百万弗と切り出したことをも告げた。

公使 然して若し支那に於て、貴大臣請求せらるる如く此旨を書面に記載して呈する時は、直ちに撤兵為さるる事、閣下の権内に在る哉。

大臣 然り。若し支那に於て此意及び其他巨細の事判然書面に記載し、亦我が望に随い条約を結ぶ時は、則ち撤兵の権は拙者奉する処の使命の内に在り。（二）

大久保に撤兵権があるや否やを問うは、調停の底意を有する英国公使として当然であろう。英国公使は更に撤兵に要する運送船の費用はどうするか等の質問を出した。その総額を減ずる名義を立てる工夫である。大久保は船は日本が用弁するが、名義の問題ならば、支那の情実にも同情するから方法があろうと答えた。

この会談は第七回会談に赴く日午前中の出来事である。大久保としては、こういった立入った英国公使との話しの後、支那側の態度が強硬だったので、やや意外に感じたであらう。

いよいよ廿六日に出発するに決したので、廿四日、大久保は英国公使を訪問した。英国公使の話によつて、昨日の会談後、衙門大臣の内五名が、英国公使を訪問して会談内容を報告したことが明らかになった。

公使〔上略〕抑も彼等〔支那側〕に於ては二箇の故障あり。其一は面目を汚さん事を恐れ、其二は金額の事なる可く察せらる。因つて爰に貴意を候するの一事有り。是れ素より彼等の意に出ずるに非ず、只拙者一己の意を以て問う処、閣下に於て妨げ無き事と思えり。右は衙門に告知せらるる金額より多少減ずれども障礙しょうがい無かる可き哉。

大臣 是れ素より実費の額を告げたるなれば不動の所にして、之より減少するは不便なる所なり。然れども〔中略〕万一支那に於て後証の書面を出し、相当の条約を結び、且つ其減少にも相当の限界ありて大に徑庭を生ぜざれば、其金額は不動の者と確守せざる事有る可し。然し拙者の所見を以てすれば、彼等到底改図の意無きを信ぜり。公使 高諭の如し。我に於ても昨夕彼等と面晤の時、此事件の結局十分に至ること保たれ難く覺えり。因つて問う、柳原公使にも退京せらる可き哉。

大臣 是の事未だ確定せず。

公使 両国の議論相協わざるは甚した遺憾なり。未だ布戦の場に至らざれども公使館等相繼いで退京せらるる順序なれば、我に於ても上海に至り海軍都督に会晤し、諸事の備えを為す可きこと緊要と思えり。(三)

大久保と英国公使が前途を悲観したのは決して駆引きからと思ふべきではない。最早、實際施すに策のないのを感じたのだ。

大久保は翌廿五日ドイツ公使館に行つた。ドイツ公使は従来、事件について関せず焉の態度をとつていたが、会談が決裂したことについては却つて慶賀した。

公使「上略」在北京各国公使始め日本在留各国公使に於ても、日本政府其当務を尽されん事を深く冀望せり。今

日此始末を聴くを得るは、日本政府の利益のみならず、又西歐洲各国の利益と思ふ可し。(四)

日清交渉が決裂して戦争になることが、日本政府の利益となるべしというドイツ公使の言葉は大久保を鼓舞するためか、それとも他に理由あるか、固より明らかではない。

十月廿五日午後五時頃、英国公使ウエードが大久保を訪問した。通訳は例によつて太田資政だ。ウエードの云うところによれば、かれはその日総理衙門に行つて長談した。その結果、伝言を囑せられた。『固より衙門大臣来りて我に請うに非ず』と注意深く断つて話しを進める。

公使「上略」何故日本の望に応し証書を出さざるやを以て廻りし処、衙門の大臣答えて、貴公使只日本の論を助けて何ぞ我が論を助けざると云いしにより、日本在留の英国公使は固より日本政府に対し交際上より利害を説くことは妨げなし、然れども我は支那在留の公使なるを以て、只両国の和を謀り貴政府へ斯くの如く勸むれども、日本公使は即ち我が同僚の人にして、之れに如何の議を加えるは全く権外なることを説明し、漸く熟語せし後、支那政府に於て十万両は難民の給とし、外四十万両は日本諸雜費用として出す可く、証書も亦与える可

き由、然れども十万両は一時に償い、四十万両は退兵後に償う可くとの議に至れり。此事我より閣下に申述することを囑せられたり。此の如くにては尊意如何。

大臣 事々懇篤の次第かたじけな辱かたじけなく感謝せり。(五)

右の談話によつて英国公使が、相当に支那政府に圧力を加え、結局五十万両(十万両は即日、四十万両は退兵後)を支出することを承諾せしめたことが明瞭だ。大久保は即答を避けて、熟考の後、参上拝答しようという。

公使 今夜なる可きや。粗餐を奉せんと欲すれば、七時に来駕せらるることを得可きや。

大臣 七時には障碍あり。願わくば八時に参堂す可し。

公使 然らば八時に光臨せらる可く翹望せうぼうする所なり。(六)

大久保は約によつて午後八時、英国公使齋らすところの和議案に答えるべく英公使館に赴いた。大久保はその談話を開始するのに、一応過去の経緯を簡単に叙述するのを常とする。この場合がそうであつた。そして回答の内容に入ろうとすると、英国公使は忙しく口を挟んだ。

公使 其一条を聴かざるに及んで先ず一言を陳ぶべし。支那政府に於て最も嫌忌の処は即ち出銀の名義に在り。

難民撫卹がじうくと称するも三百万弗の額に至りては言わずして兵費の償いたること顯然たり。然れば面目を失うを免れ難きとの事なり。此条過刻詳告せざりしを以て今更に稟陳するなり。(七)

支那の面目を尊ぶは従来の談判においてもしばしば経験したところだ。大久保は最早、そこにこだはつて

いることの愚を知つていた。かれは談話を進める。

大臣 尊諭之れを領せり。告げる所の一条は、懇談の余熟思する処なるを以て、銀額の多少は更に論ぜず、支那政府の述べる処五十万両^{すん}にて可なり、因つて第一に征蕃の事支那政府に於て認めて義拳となす事、第二には征蕃の事に関する従来の紛論を消除する事、第三には十万両を難民撫卹、四十万両を修繕、建宮、開榛【開墾】、鋤梗の諸費として退兵前に支那政府より出す可き事、支那政府に於て此三条を承諾せば、余の事は和好を重ね、又足下に対し相譲る可きなり、此内一条と雖も欠くる所あれば止むを得ざる所なり。

公使 愚^{あん}按ずるに、征蕃を義拳と認むれば蕃地は支那版図外の地に属する故、同意すまじくと思わる。

大臣 面商の時義拳の言あり、又公文中に不是となさずの字あり。支障無かる可しと思わる。若し異議有らば破談の外無きなり。

公使 外国人は過半支那と親誼深からざれ共、誰も蕃地を支那版図と唱えざる者は無し。版図外の論は近日始めて聞く所なり。又支那の属地に非ざれば支那より銀を出すの謂われ無きとの論に帰すべし。(八)

属不属の問題が再び英国公使との間に繰返されそうになった。大久保としても話しを纏めるにはこの問題に余り煩わさるべきではなく、事実主題は一步を進めているし英国公使はそこでその旨を記載することにした。即ち

公使 然れば征蕃の事は日本の義拳に出て、支那政府是を不是とせざるの意なれば、書載すべきことなり。此の如くにては如何。(九)

英文の草案が出来、それを太田資政が訳読した。大久保は大切な点だから今一人の書記官も呼ぼうというので吉原重俊を呼び寄せた。英国公使も同じく書記官メイヨルを招いた。その間に英国公使は語る。

公使 拙者斯く焦慮する者は、日清両国の間若し兵事起る有らば、其隙を窺い、幸いとして自己の利を図るもの多く、外国政府に非ざれば其人民なり。加えるに兵止むの日を期し難し。然れば清国而已ならず、日本国も其損害至らざる処なきの憂いあらん。我英国は、日本国近來^{しんしん}髪々開化に進み、外国交際の道より百般の事に至る迄、新に利益の道を開くこと盛んなるに、此の難事より終に画餅^{がべい}とならんことを深く患^{うれ}えるより、偏に両国の和を謀るなり。

大臣 其の懇篤の事は詳かに之れを領せり。(二〇)

英国の利益が極東平和と並行するからでもあるが、英国が和平を専念し、また保守の支那に対するよりも、進歩の日本に同情を有していたことは、後掲する同公使の報告によっても見得るところである。そう話している間に英国書記官メイヨルが来、吉原租税助も来た。公使が作った文按を示した。一同これを読む。

公使 漢文に翻訳して後貴覧に備えるべき哉。

大臣 是の如くは最も妙なり。(二一)

大久保が漢文を立どころに解するのは、日清談判中も、書類を出されて、その場で批判反駁したのである。漢文の草案が出来あがつて相談の上それを改削^{かいしん}【改削】した。

大臣 此文にして妨げ無し。

既に明朝八時当京を發するの心算なるを以て、人を諸方に派して其旨を伝え、諸事の備え悉く成れり。今に至りて延引するは実に困惑する所なれば、十二時を限り支那政府より可否の答詞有ることを得可き哉。

公使 切迫の事は我に於て之れを察せり。又其理有るを知れり。然れども十二時と云えば条目の改正而已にして時間既に終るべし。恐らくは及ばざる可し。

大臣 高喻理あり。然れば午後二時に至らば必ず決答有らんことを欲す。此に至りて猶お議定まり難く延引すること有らば、我真に之れに困^くしむ。

公使 我が心算には、明日詰朝より衙門に至り大臣等と商議す可きを以て、二時に至る迄の間、可否の報先ず我より之れを為す可し。

大臣 支那政府よりも別に可否の報知あらんことを欲す。是亦二時に至る迄と定む可き哉。

公使 切迫せらるることは能々之れを察せり。然れ共我よりの報答、纔^{むす}かに二時に及ぶ可き哉と思えり。衙門の答は今少く時間を緩^{ゆる}うす可らざる哉。

大臣 然らば更に二時間を延し四時と定む可し。若し右時限を過ぎ衙門より何等の報知なくんば、彼に於て不同意なるを認め発程す可し。

公使 此旨具さに衙門に通告すべし。報知の書は必ず照会に非ずんば不可なる哉。又は啓文なるも可なる哉。共に妨げ無かるべしと思えり。

大臣 共に妨げ無し。

又 過刻の書、文字改正の事は妨げ無しと雖も、動かす可らざるの文字有るを以て側に圈点を加えたり。注意

せられんことを乞う。

公使 之を領す。(一二)

問答によつて大久保が、徹頭徹尾積極的であつて、当方から和を乞う如き態度は毫^{すこ}しもないことを知るべきだ。圈点を附して動かす可らざる文字とは左の如くだ。

条約 三条草案

惟因各国人民有应保護不致受害之処。宜由各国自行設法保全。且以台湾生蕃曾将日本国属民等妄為加害日本国本意為該蕃是問遂設義拳。遣兵往彼向該生蕃等討責。今議数条開列于左

【惟^{おもひみる}に各国人民^{ままと}心に保護して害を受けるを致さざるとすべき処あり。宜く各国に由し〔任せ〕自ら法を設け保全を行うべし。且つ台湾生蕃曾て日本国属民等を將^{もつ}て妄に害を加えるをなすを以て、日本国本意該蕃是を問う。為に遂に義拳を設け、兵を遣り彼に往き該生蕃等に向かいて討責するに因つて、今、数条を議し左へ開列〔列拳〕す。】

第一

日本国此次所辨義拳。中国不指以為不是。

【日本国此の次弁ずる所の義拳、中国指して以て不是となさず。】

第二

所有前經遇害難民之家。中国議給撫卹銀欸十万兩外。又以日本国修道建房及在該処各項費用銀四十万兩亦議補給。至該処生蕃。中国亦宜設法妥為約束。以期永保航客。不能再受兇害。

【有る所前^さきに害に遇うを経る難民の家、中国議して撫卹銀欸十万兩を給する外、又日本国修道建房及び該処

に。在。る。各。項。費。用。銀。四。十。万。兩。を。以。て。亦。議。し。て。補。給。す。該。処。生。蕃。に。至。り。中。国。亦。宜。し。く。法。を。設。け。約。束。を。な。し。以。て。永。く。航。客。を。保。し。〔守。り〕。再。び。兇。害。を。受。る。能。わ。ざ。る。を。期。す。べ。し。】

第三

所有此次往台之拳。兩國一切來往公文彼此撤回注銷。以為將來罷議之拋。其所議給銀合共五十万兩。內將一半先行立為付交。其餘一半即應妥立憑單。一俟此項銀款付交及憑單給過後。遂將日本在台之軍師立行撤退回國。

【有る所の此次往台の拳。兩國一切來往の公文彼此撤回注銷〔取消〕して、以て將來罷議〔議さない〕の拋と為す、其議給する所の銀合共五十万兩。内一半を將つて、先ず立ところに付交を為すを行い。其の余一半は即ち^{まだ}應に憑單〔証書〕を妥立すべし。一に此項銀款付交し及び憑單給し過ぐる後を俟つて、遂に日本在台の軍師を將つて立ところに撤退し國に回るを行う。】（二三）

談は更に支払いの方法及び撤兵の時期に及び、大久保と英國公使の間に左の如き問答が続けられた。

公使 銀兩交付の事は如何の尊意なるや。

大臣 願わくば一時に收受するを得ん。

公使 一時には行われ難かるべし。

大臣 一時に行われ難くば、半額に分ち二次にするも可なり。

公使 何れの地にて收受せらるる順序なる哉。

大臣 天津に於て收受すること便宜なり。然れども上海に於てするも可なり。

公使 上海の方便利なる可し。半額收受の後は退兵せらるる哉。

大臣 半額現貨を以て收受し、半額は固く抵当有る証書を出さば之れを實貨と視做し、退兵す可し。

公使 退兵の事は凡そ幾十日を用いる可き哉。

大臣 凡そ一ヶ月を用いる可し。勿論今日の議局を了え約書調印の後は、急に退兵の備えを為す可し。

公使 然れば半額の現貨何れの日收受を望まらる哉。

大臣 十一月廿日に半額を收受し、十二月廿日に半額を收受する事に定められんことを欲す。尤も半額現貨收受

の時、残り半額の証書は確然たる抵当品、譬えば上海税関の収額より渡す所の正金と視做さる可きものを要す。
公使 比旨具さに衙門に商議す可し。

大臣 深夜に至るまで貴体を勞し、我が意殊に安からず。只和を好むに因りて事々相譲り、閣下の懇篤に対し件々
相恕する所、我が意中の事亦亮察せらる可し。(二四)

その具体的処理案に対し、大久保の回答は流るる如きものあるを知るべきであろう。辞して帰つたのは午
前一時頃であつた。大久保の日記にもあるように、右の決定は全く大久保の独断であつて、柳原はこれにつ
いて異議があつたけれども、これを容れなかつた。

二 ウェードの本国政府への報告

大久保の当時の心事をその日記によつて知る前に、英国公使ウェード自身の筆になる事件の経過を読むこ
とは興味がある。右は外相ダービー (Edward Henry Stanley Derby) に宛てた報告書であつて、北京を十一

月十六日（一八七四年明治七年）に発し、ロンドン着、翌年一月卅日となっている（二五）。

『本日附前便に於て、予はその前夜（五日）総理衙門に於て署名されたる約書の本文を正式に発表したところの、六日附恭親王布告の翻訳を封入した。予はここに五月以来、協約成立して終結したる論議の経過を簡単に報告したいと思う。それ以前までの経過報告は、既に閣下によつて承認されたところである。』

予は、日本の台湾への派兵及び日本政府の態度について予が受領する確実なる情報、如何なるものであれ、これを注意深く総理衙門に通告した。しかし総理衙門の或る大臣達が、自発的に台湾問題について予に語るために来たのは、予が海岸港へ向け北京を発する意図を発表した七月末のことであつた。彼等の目的は明らかに外国の意見と、外国に於て船舶と弾薬を獲得する可能性ありやを知らんとするにあつた。予は彼等にこの問題を仲裁に委すべき希望を述べた。しかしこの点で、その後の経緯が示すように予は誤つていた。』

右によつて支那が最初において相当に強硬であつたことを知りうるであらう。ウェードの報告は続いて、外国一般の同情が進歩的の日本にあつたことを云つてゐる。

『予がここ繰返さざるを得ざることは、その事件の内容が何であれ、外国人の同情は支那にあつたということはお出来ぬ事実である。これは支那が条約を遵守しないからであり、また日本に於ける進歩的傾向に対比して、支那の反動的な精神が、支那をして明らかに外国人の意見に不利なる位置に立たしめるのである。全体的にいつて、予は支那の目的が外国に於て援助さるべしとは考えざる旨を明らかにし、該会談は何等の結果を齎らさなかつた。その後、予は或る公文書に於て、日本の問題に関し不注意なる (unguarded) 文字のあるのを見て、大臣の注意を

喚起したことがあつた。支那は日本と確かに戦争を好まないものである以上は、徒らに刺激を生むようなことを書き、或は語ることほど愚かしいことはない。

この事は再び我等を接近させた。そして長談の後、支那大臣は再び外国代表者を招いて仲裁せしめんとし、予は八月十二日にこの問題について覚書を提示した。』

大久保の東京出發は八月六日、長崎出發が十六日であるから、右はなお大久保の支那到着の前であり、支那側において遅滞きながらこの問題に注意したことが分る。

『日本からの情報は益々戦争的になつたことを伝えた。台湾に於ては衝突の報があつた。日本將軍と支那使節の間には、予の知る範圍では賠償のことが論ぜられたが結着を見なかつた。柳原公使は北京に向け上海を出發した。支那側のいうところでは、それは交渉の最中に於てである。日本に於ては大々的に戦備を修し、支那側も亦抵抗のために兵備した。予は戦争が目前に迫つたことを認むるに至つた。しかして、若し左様な衝突があるとすれば、それは商業及び宣教師關係をふくむ總べての外国の利益に最も重大なる結果を与えるであらう。そこで予は総理衙門に提案するに、支那が列強に対し、支那の沿岸と河川を一定の期間中立化すべく訴えるべきことを以てした。しかし、予が考えたところでは、この事は、訴えられた列国が共同動作をとる諒解を必要とし、また相当なる手数と費用との犠牲を払わねばならぬ。従つて列国としては何等かの代償物を与えられずんば、斯かる誓約はなさないことも確実だ。英国の利益は、総理衙門の大臣も知つていたように、全然通商的である。

その後更に論議の後、予は九月廿八日に恭親王に書簡を与えて、過去及び現在の予の忠告を説明した後、五つの質問を提議した。第一は支那は實際、仲裁を望むのであるか。もし然りとすれば如何なる点を仲裁者に附託するや。

日本が仲裁を承諾すると信じている根拠ありや。支那政府に提案ありや、もし然りとすれば日本に対し如何なるものなりや。もし交渉破れば支那政府は如何なる道を取らんとするや。

これに対し、予は支那政府からここに封入するところの短い、かつ鄭重なる回答を受領した。それには大臣が説明のため公使館を訪問するとある。彼等は約束の如く来訪したが、結局予の質問には答えなかった。』

大久保一行の北京到着は九月十日であるから、右の英国公使の報告によつて、かれが日清談判中に支那側に働きかけていたことが分る。英国公使が五ヶ条の質問を支那に提出した廿七日の前日（廿六日）、かれは大久保を訪問して日本側の意志を知らんとするにつとめ、大久保は交渉が順調に進展しないに拘らず、英国の調停申入れに対してはこれを謝絶している。この時、ウェードが『日本政府が事情により退兵の決定あらば、我れ其意を体し、支那政府を肯んぜしめんとす』といったのは、支那側からなお左様な言質をとつていたのではなく、単なる見透しとして日本側に申出でたのだ。

『今やドウ・ギオフロイ氏 (de Geofroy) (仏国公使) が歸つて来た。かれは仲裁を持来すについて完全に協力する準備ある旨を言明した。かれもまた支那が仲裁を希望する意志あるのを信じた。その上に予は一時提案はドウ・ギオフロイ氏を通じて可能であると信すべき理由があつた。辨理大臣大久保は仏国法律学者にしてボアソナードと称する人を随員とした。予はこの紳士とは会見しなかつたが、かれに關して予の聞いたところは総べてかれに有利であつた。そして予は、かれが有するところの勢力が何であれ、その努力は平和の方面に払われるべきを信じた。しかしながら我等は問題の解決に近づかなかつた。十月十日大久保辨理大臣が五日の期限を附して回答を

要求し、これを得ざれば北京を去る旨の通告を致したと知るに及び、予もドウ・ギオフロイ氏も、それが単独にしても、或はまた他の同僚の援助があるにしても、論議の平和的解決の希望を放棄せざるを得なかつた。恭親王が不在だったので大久保はこの条件を延期した。』

大久保が最後通牒を投げつけた時に、英、仏両国公使も、最早匙^{さじ}を投げていたことを見るべきであつて、事態は決して樂觀すべからざるものがあつた。英国公使の報告は続く。

『戦争が起つた場合、わが港灣、居留地を保護する必要から、予は凡ゆる場合に於て、日本の両代表から情報を得んことを努めた。しかし、予は両代表から、日本の要求のステートメントと見らるべきものを得ることが出来なかつた。両者共仲裁について考えることを嫌惡するようであつた。日本辨理大臣が予を訪問し、始めて要求について詳しい説明をなしたのは十月十四日であつた。

通告期限は三日後に満期になるのである。その間辨理大臣と總理衙門との交渉はなお繼續中であるが、それは余の諒解するところによれば、要するに二つの問題に対する回答を要求するまでに縮められて来た。その二つの質問とは既報の如く、要するに下の如きものだ。即ち支那は何故にその領民を教育することをしなかつたのであるか、また既に教育無き結果、彼等が罪科を冒した場合、何故にその領民を罰しないのであるか。もし支那がこれ等の蕃人をその国民なりというならば、支那は日本が出兵して此等の人民に期することに對し、満足を与える責任を有するではないかと。

予はこの会話によつて辨理大臣が開戦の不動なる決意を有するのでないことを推断し得た。日本は遠征により、既に該加害蕃人をひどく膺懲^{ようちやう}したのであるから、その声明したる遠征目的の一つは完成したわけであり、従つて

開戦の理由は少ない筈である。事実、賠償問題については、暫らくの間、間接的に交渉中であつたのであるが、予はそれについては公式に知るところがなかつた。』

この英国公使の報告は、日本側発表の交渉経過と照合して謬りも、誇言もない。大久保が英国公使と会談して、断然たる態度は示したが、また決して戦争を好むものではないことを言動を以て示したので、英国公使は調停可能に一縷の光明を発見したので。

『要約すれば、支那側は銀を支払うことにある程度の意志を示したが（兵費に対してでなく、蕃人に殺されたる者の家族に対する撫恤費として）、なおその額を明白にすることを拒んでいと辨理大臣はいふ。かれは約三百万ドルを要求したが、これを拒絶され、また如何なる支出に対する保障も不可能であることが明らかになつたので、北京を去る準備をしたのである。柳原公使は清国皇帝の覬見が延期されたことは、日本に対する非友情的感情の現れだという点を理由として、かれの僚友と共に去ることになつた。』

辨理大臣自身が十月廿四日、土曜日、訣別のために予を訪問した。それはドウ・ギオフロイ氏が離京した二、三時間後のことである。ドウ・ギオフロイ氏も予と同じく、仲裁或は調停について絶望していた。かれは何れにしても年内には歐洲に帰る筈であつた。それがかれの健康の故に、考えたよりも早く南行せざるを得なくなつたのである。予も亦毎日、上海に赴くことが予の義務ではないかを思い煩つた、というのは予はサー・チャールス・シャドウエル (Sir Charles Shadwell) に書面を与えて、日清衝突が不可避と観らるるに至らば、かれと会見することを約束したからである。

辨理大臣の説明を聞いて、予は直ちに秘書長邸に赴き、かれが恭親主に勧めて、支那が即刻銀を支払うべき事（辨

理大臣がこれを兵力に対する支払いとして明記することを主張しなかつた点に注意すべきだ、また支払いは如何なる方法で保障さるべきやについて恭親王を動かすべきを要請した。他の方法にして失敗せば、そして辨理大臣にして承諾せば、予は自身その支払いを保障せんとしたのである。』

英国公使が一時調停について絶望した事、また大久保の態度を観て、直ちに支那側に要請し、場合によれば自己が支払い保障を為して、戦争を防止せんとしたことを観るべきだ。

『翌日、予は辨理大臣に対し五十万両を提案することの権限を委託された。その額の五分の一は殺されたる琉球人の家族へ、残りは戦争賠償ではなく、日本の遠征によつて生じた小雑費（後には明記されたところの）に対するものである。』

予が安堵したことは、辨理大臣はその出発を延期し、予を仲介として総理衙門と交渉を再開したことである。

我等の前に横たわつた困難は、第一には形式であつて、その協定をして、支那及び日本の何れもの行動が、他の命令に従つたという如き外観を呈さないような文章を以てしなくてはならぬ。次には内容であつて、基本的行動の期日、即ち日本による台湾からの撤兵、支那による銀支払い——しかしてこれ等の行動の完成に対する保障だ。六日間に亘る論議の後、ついに約書は大久保辨理大臣及び柳原公使によつて、総理衙門に於て署名され、その写しは既に閣下に送致したところである。

この長文の報告を閉じるに當つて二つの注意を乞いたい点がある。最初予が調停者として協力せんと希望して招いたところの予の僚友が離れ去つたことと、しかして日清両全権によつて署名されたる書類の一つに、予自身の名が現れたことである。

予の敘述が示したであろうように、後半の交渉の第一歩に於て、予の秘書長訪問が直ちに行動に導かれたのは、予として寧ろ意外としたところであつた。辨理大臣は予を土曜日午後訪問し、月曜日朝早くには北京出發の筈であつた。

予の名が現れたことについては、予は提示された書類に、予の名を挿入することを二回反対した。予の名が現れたものは最終的に下準備されなかつたもので、最後にその文字を変更するのには既に遲過ぎたものである。』

以上の報告によつて英国公使の立場がよく現れて居る。公文の關係から大久保個人に対する批判はないが、大久保日記に現れているように、大久保に対し充分なる尊敬を表している一事は、これをそのまま受取るべきであらう。

日本政府はウェードの努力に感謝し、寺島外務卿は十一月十二日附を以てパークス公使に感謝の書簡を送つて英国政府及びウェードに伝達方を乞ひ（二六）、また十一月十五日にはパークスに対し内廷に於て謁見を賜ひ、特に御満悦の旨の勅語を下し、英国政府と北京英国公使に伝達すべきとの御言葉があつた。パークスは謹しんで叡慮に奉答した（二七）。

三 支那側の経過報告書

英国公使記すところの経過を見た我等はここで支那側の報告を一瞥する必要がある。左は恭親王、奕訢等より奏請して勅許を得たる奏文である。その内容は既述のものと重複する嫌いがあるが、日本側の記述、

英国公使の報告とよく合するものあるを以て全文を掲げよう。

『日本国、使節を続派して来京せしめ、臣等と屢次^{るじ}に互り台湾蕃社へ出兵の件に關して面談せるも、局勢未だ端倪^{たすい}すべからざる情態なる趣は臣等本月十日附を以て密奏致したる処なり。査するに日本使節大久保利通は、九月二日照会を寄せて執拗に狡弁を弄し、数日内に弁法を講し得ざる時は直ちに帰国すと言ふるを以て、我方より照覆弁駁を加え、且つ同使節の照会中に両得策云々の語有りしを以て、別函を以て、真に両得策を講ぜんと欲するならば来署の上詳細熟議すべしと通告せしに、旋^{いそ}いで同使節より來函あり、期を定めて面議せんことを申越し、同期日に至り臣等と会談せるも、同使節は我方より發議すべしと言ひ、臣等は又同使節照会中に在りし両得策を先ず説明すべしと爲し、彼此相讓ること再三に及ぶ中、同使節は覺えず真情を露わして、日本の初志はもと生蕃を無主野蛮とし、一意徹底を期したるも、清国之を屬地なりとし自ら弁埋せんとしたるを以て、日本若し初志通り遂行せば和好の道に反すべきを以て、本国兵を撤回し中国の自主弁理に委ねんとするも、^{おもんみ}惟日本国民並に軍兵の心庄^{おそ}え難く、必ず相当の名目を得るに非ざれば撤兵する能わず、此次事件に於て財力尽きたるを以て台湾より賠償を取らんとするも台蕃もその力無し、清国は如何にして日本兵をして空手帰国するに至らざらしめんとせらるるやと謂えり。是より先、日本中将西郷従道は台湾に於て藩司潘霽と会談して費用の弁償を求めたること有り、同国使節柳原前光着京後臣等屢々切々理を説きたるに、同使節も日本をして徒勞に終らしめざる様請う処あり、明言はせざるも意は猶此に在るものの如し。今、日本の大久保利通を続派し来るを聞くに及び、各新聞紙には同使節を派し来れるは軍費四百万兩を要求し、得ば兵を退くべきも、否れば兵を進めて清国各海口を亂し、或

は天津をも攻略せん等の無稽の謠言【デマ】紛々として伝えられたり。臣等は惟理に拠りて力争し、些たりとも之に乗せられざらんことを期すのみ。大久保利通着津するに至り、曾て米國副領事畢德格は李鴻章に対し密函を以て、使節の来意甚だ平和ならざるを以て、清國より先ず照会を發して査弁方を承認し、該國の所謂屬民の被害に對しては相當の撫卹^{ぶじゅつ}をなしたる上臨機に開導すべしと申越せる趣を以て、李鴻章より畢德格の所論を録述して密報し、臣等之が對策を講すべしと謂えることあり。同使節の來京せし時は清國の政教の蕃境に施す処如何、等と問ひ居たるも、千廻百折【曲がりくねった様】、今に至りて遂にその真実を吐露するに至れるなり。臣等當時、兵費の一件は体面に關するを以て万々応じ難き處にて、且兩得の策とも全然相反するものなりと謂えるに、同使節は若し然らずんば本國に撤兵を勸告する能わずと稱し、旋いで又、中國の兩得の策とは如何なるものなりやと問えるを以て、遂に清國は切に和好を念ずるを以て、日本の此挙の非を責めざるべく、同國の兵撤退を待ちて清國より自ら査弁し、その被害者に對しては適宜撫卹を加えるべきを告げしに、同使節は仍おも兵費の件を固執したれば、臣等も断然之を駁し置きたり、翌日となり文書を以て面會期を詢^とい來り、我方よりも同使節の抛る所の方策に礙難【しかねる】の点有るを以て期を定め再び議せんと約し、其期日に至り直接種々申聞けたり。初め遽かに、清國の礙難と稱する点は已に諒解せるも、撫卹に關してはその數目を明かにし置く要有りと謂いたれば、臣等より、日本撤兵するに非ざれば我國にては査弁する能わずと告げ、又その撫卹を兵費の名に代えるものなるを誤解せんことを恐れ、重ねて前議の通り清國の自ら査弁する各節を概要説明し、只此の結案あるのみなることを伝えたるに、同使節は更に撫卹銀數目を認めたる別書を要求して止まず、一二日内に確報を与えるべきを約して歸らしめたり。臣もと同使節の欲する所如何を知らず、因て同國書記官鄭永寧を來署せしめて実情を詰問せんとせしに、同書記官は來

署するや、詳詰するに及ばず直ちに、同使節の意は洋銀五百萬元を要求し、少くとも銀二百萬兩を索めるものにて、之を下る能わずと謂えるを以て、前同様反駁せしに、同使節は十五日臣の衙門に来訪し、切々所要銀数目の許与を謂い、その言中総て軍費を指し居り、殆んど撫卹の二字の満足なる能わざるものと看破したるものなる如く、臣等嚴に答覆し置けり。尚同使節は去るに当り、議未だ成らずして帰国せんとす、斯くては台蕃は依然無主野蠻なれば、日本は一意徹底を期すべしと謂い、臣等も台湾は清国の地方なれば^{まき}庇に清国に於て自主すべしと答へ、彼此妥協を見ずして別れたり。大久保利通着京以来、同国の駐京使節柳原前光は台湾事件を議する際は常に同席し、其説に参与し来り、台湾事件の議合わざること有るや、必ずその翌日は照会を寄せ或は来署面会し、専ら^{きんけん}觀見を説きたるものなり。此次大久保利通と議論合わざりし翌日も同使節は我署に訪れたるも、^つ觀見を許されざるを以て来使を拒絶せるものなりとし、大久保利通と共に帰国せんと欲する旨申し居り、嗣で^つ両使節より各々照会し越したるに抛れば、何れも決裂の辞を述べたるものにて、その意は、前者にては、日本の台湾の地に永踞する基礎とし、後者の説は後日我海港を擾乱する名目の基礎とせるものにて、臣等悉く之を聞き及びたるも、其の去留に委せ置けり。誠に同国は貪狡飽く無く、其の要求する所は我方として、如何にする能わず、撫卹として弁理せんとするも要求額多きに過ぎ、兵費の名無くともその実を取らんとするものにて融通妥協の余地無きものなり。比役に当り沈葆楨は外交聯絡を要義と為し居り、李鴻章は^{福理}天津より来京せる際然るべく談合し、同使節も居中調停し度き旨述べ居り、上海道の沈秉成より上海の官紳等の建言として上れる中にも、各国使節を^{ようせい}邀請【招請】して曲直を評論せしむるを上計とせり。而して英国使節トーマス・ウェードは尤も此事件に始終関心を有し、調停の任に当らんと欲し居れり。臣等亦曾て日本との間の往復文書を全部に互り鈔録して各国使節

に照会し然るべく応酬し、不即不離の間に在るものにて、各使節等をして調停を為さんと欲せしむるも、そは彼国の求むる処なるべく、素と我方の意に出ずるものに非ざるなり。十六、十七兩日に互り、日本使節は已に倅々然として【怒るように】帰途に就かん氣勢を示し、ウエードは臣等衙門に來り、最初は関心を示したるも、繼いて恫嚇【恫喝】の言を發し、日本の要求せる二百萬兩は断じて多きに過ぎず、之に応ぜざれば結了を見る能わざるべしと謂い、臣等は専ら鎮靜を以て之に応酬せる処、ウエードは辞去するに至る迄尚お堅く清国の許すべき數目を聞かんと欲したるに依り、臣等利害の輕重を權衡し【計り】、其の情勢切迫せるを思い、若し茲に些か轉換策を講ぜざれば、独り日本をして暴拳に出てしむることの明白なるのみならず、我が武備未だ充実せざるに際し憂慮すべく、且つウエードをして面目を施さず歸らしむるは、却て彼国の援を堅くし、我敵を益する所以なるを思い、遂に、清国は既に撫卹を允し居り、只撫卹として実行し得る處にて、更に些か讓歩するとするも十萬兩を愈ゆる能わす。同国は本事件に於て輕拳妄動し、今に及びて退く能わざるに立至り、自ら亦実に苦境に有り、清国は人の急に乘することを為さず、更に同国の蕃社に於て修築せる道路家屋等の全部を留めて清国の用と為し、銀四十萬兩を与えんことを承認せるも、所詮合計五十萬兩を愈ゆることを得ず、その諾否は之を彼國側に聴くべしと答へたるに、ウエードは同使節の寓所に赴きて談判すること長時に及びたる後、撫卹等の費用の數目は日本使節も已に承諾せりと回答越し、嗣て解決弁法三条を議定し、別に附屬書類一葉を作製交換せり。同使節は該金交附後撤兵せんと欲するも、臣等撤兵後に非ざれば交附するを得ずと謂い、互に譲らず、又ウエード中に入り始めて議は成立せるなり。その附屬書類中には先ず撫卹金、銀十萬兩を交附し、其他の道路家屋等に対する費用四十萬兩に關しては十一月十二日即ち日本国の十二月二十日を期し、日本軍は全部を撤退し清国は銀兩全額を交附する旨、並に同国

の兵全部撤退を了せざるに於ては、清国も銀兩全部を交附せざる旨を声明し、上奏を経て彼此署名捺印の上、各一葉を保有することとし、本月二十一日議定まれり、伏して査するに、本案は日本の背盟興師に発せるものにして、我海疆^{きやう}の武備にして恃^たむに足るもの有らば弁論の要も無く、決裂を虞るるが如き事無かるべきに、今や彼の理由を明知し、我備えの不足を悲しむものなり。台湾事件突発以来屢々甲鉄鑑を購入せるも尚充分と為し難し。沈葆楨の所謂戦端未だ開かれざる前に防ぐべくして且防ぐべからざる所にて、李鴻章は閩省の防備は必ずしも武を用いんとに非ず、総て目前の大局を統籌^{ちゆうちゆう}し絶えず牽制を示さるべからずと謂えり。且一面日本に就きて見るも、同国に江藤新平の乱有りて以来、招撫せられたりと雖も乱民多く安穩たるを得ず、新聞紙上屢々同国は將に此等の人民を台湾の境内に安置せんとすと伝え居り、仍て同使節は常に軍隊の服し難きを謂い、その間実に言い難き隱意あるなり。今若し一も得る所なくんば措置甚だ難かるべく、此輩尚清国の辺境に留るに於ては我災患亦言に勝^たふ【堪える】べからず。然して同使節の原意の要求せる各情の如きは、或は国体に関する或は名のみ然らずして其実は取らることとなり、之に応じて取返しのかざる悔を招くは為し能わざる処なり。然れども既にして英国使節ウエード居中調停の任に当り、給すべき撫卹銀の数量も我欲する範圍内に止りたるものなれば、此の議に就きて解決せざる能わず、我自強の計は、一日も緩にすべからざるものなり。』(二八)。

右において支那が讓歩したのは英国公使ウエードが圧力を加えた事、また日本に『云い難き隱意』あり、これに對し支那の備えが全からざることが明らかにされている。

四 談判中の大久保の心事

さしも難関を極めた日清交渉も、英国公使ウェードの仲介によつて原則的に諒解した。この辺の事情については大久保の日記をして語らしむることが最も適當であらう。多くは簡潔なるかれの日記が、この日（十月廿五日）のものが特に長いのは、その心持ちを示しているものといえよう。英国公使官邸を辞したのが午前一時だというから、それから帰つて書いたものである（日記は註一九参照）。牧野伸顯伯の談に、大久保はどんなに遅くとも帰宅後日記を書いたもので、夏の如きは家人が日記を書いている大久保を、団扇を以て煽いでいたのを記憶するとの事だ。

十月廿六日

今朝柳公使入來、昨夜英公使談判の形行を話す。今朝隨員井上、田辺、高崎、福原、小牧等を招きて、昨日独決を以て英公使に談判せし趣きを示す。

英公使來館、昨夜談せし趣、總理衙門相示し候處、退兵の後金額を払云々のことこれあり、其外文章上のことに付少々異論これあり、弁解いたし置き候。今日十二字の期限を二字迄と延引いたし置候得共、猶公使より断りこれあり候。〔下略〕（二〇）

頭腦の優れていた大久保は、この独決に対する批難と問題の焦点が何處にあるかを知り、それに自問自答している。第一には大義名分の問題だ。大久保は日清戦争における勝敗の数は問題にしていなかったが、常に名義に対し深い考慮を払っていた。かれがその俚帰れば、日本国内の人心は纏るに由なく開戦になるのは

明らかだが、それが日本に利益であり、また名分が正しいかどうか、それを常に顧みた。第二には金額の多少の問題であり、第三は英国公使を仲介にした問題だ。これについては大久保がいう通りに、大久保は嘗て自ら英国公使に仲裁を依頼したことがないのである。最後にかれが最も懸念したのは撤兵の事だ。『殊に兵隊等に於ては必ず不平を唱える者あるべし』と考え、帰朝前に厦門と蕃地に到り、川村と西郷に説諭せんことを決心した。

廿六日から廿九日までの日記は処理文案に関する手続き上の交渉経過だ。償金も十万両は直に支払い、残額四十万両は期日を定めて支払うことに決定した。

十月廿七日。

今朝英公使へ吉原、太田を送り、猶金額払方の事申し含み遣り候。午后英公使書記官を以入来、種々示談、我趣意草案相渡し候。午后書記官を公使より送り、三ヶ条は総理衙門異議なく、追付書翰送致なるべしとの報知あり。三字頃総理衙門より略啓来る、本文三ヶ条の趣は同意の趣にて、明日面晤【面会】のことを申来れり。柳公使入来、田辺を招、条約草案を製せしむ。

十月廿八日

今朝吉原、太田両子を英公使に遣し、尚条々を申送れり。午前英公使来館、金両渡方の事に付、総理衙門異議あり、因て其段を示談あり、公使も考の趣を示さる。予答て曰く、勘考の上、追刻返詞に及ぶべしと。此の上勘弁を加え、外に二策を立て、二字過ぎ全公使を訪ひ陳して曰く、閣下の配意に対し、此二策見込を付けたり、外に一切考慮なし、

是件迄は御通し下されたしと。全公使諾して云く、愚慮に対し御見込を替えられ候趣、別てわけ忝かたじけなく歆うび入り候、猶十分尽力すべくとの事なり。

柳公使入来、今晚十字后英公使書翰を以、総理衙門の模様ようように付、少々文章上の論これあり、明早朝恭親王へ差出筈の由云々。

十月廿九日

今日無事。午后柳公使入来。六字項英公使使を以書記官来る、今日総理衙門へ談合の趣、且公使の書翰持参。其趣は、十万両を何時にても相渡すべく、四十万両は互に期日を定め、全時払うべく云々。由て勘考候得ば、格別不都合にもなく候に付、委細承知の旨を以て返詞、明朝公使館に至り直談に及ぶべくと申入れたり。

右治定の上は、明日書記官を衙門に遣し、条約草案を総衙と内談いたさせ、明後日調印の運にいたし、十二月朔日に発足と取究たり。

福原大佐、岩村高俊、小牧昌業を調印出来次第先発、本邦へ報告すべきと決したり。尤芝罘滯舟玄武丸を以直行、小子は飛脚船より上海へ参り、十万両収手の運を付、蕃地へ廻歴、西郷都督へ撤兵のことを談じ候含。尤厦門滯船、河村中将へも全断なり。是我職掌を尽し、長崎にて大隈参議、西郷都督約束、若此件に付、国難を生ぜば、小臣其責に任ずべきと復命せし言語あれば、退兵のこと迄も運び付かざれば任を終ると言う可からず、由て此に決する所以なり。諸事都合能退兵よくに至れば、始て小子の責任を全うすと云えし、若退兵の事に於て不都合あらば、少子内外に対し、天地の間に立つ候事能わざるべし。(二二)

ここでも彼はまた退兵の事を最も重視している。『退兵のこと迄も運び付かざれば任を終ると言う可から

ず、由て此に決する所以なり。諸事都合能退兵に至れば、始て小子の責任を全うすと云えし、若退兵の事に於て不都合あらば、少子内外に對し、天地の間に立つ候事能わざるべし、その心事は極めて真劍だ。

卅日に大久保は田辺、太田を總理衙門に送つて條約案を携帶せしめた。清国政府は同夜奏聞して皇帝の裁可を得、翌日調印すべき旨を答えた。これに關する大久保の日記は例によつて、極めて簡潔にして、精密だ。

十月卅一日

今日午前鄭書記官を總理衙門に遣し、調印の都合、且台地へ陣營引渡方の手順を聞しむ。四字前歸る。條約書伺濟相成候に付、今日にても差支なくは參るべくとの事故、則ち柳原公使、鄭書記官、太田鐵道頭全行、總理衙門へ至る。條約調印相濟互に取換し候。是迄往復公文互に返却相濟候。上海税関に於て資銀相払候書面相受取候。今日は既往は話せず、今般議論合同調印の運びに相成り、兩國の大慶、人民の幸福、實に満足に堪えず、爾後益親睦を厚うせん事を希望せんとの意を述べたり。答に御同様満足、兩國の大幸と存候、是迄の事仮令ば浮雲のかくるが如し、忽ち晴て是より益輝くべしと云々。別に臨み、彼より李鴻章に此度は尋問いたし吳との意、并互に疆土【國境】を侵越せずとの義を守るべし云々の意を書面にて示せり、小子之を諾す。

列席文祥、董恂、沈桂芬、毛四人の大臣列席なり。小子容易ならず重命を奉じ、八月六日横浜を發し、九月十日北京に着、数度往復談判、兩度破に及び、終に今日和議成り、條約調印相濟み、實に安心此上なく。且聊任命を全うするを得、只々國家の爲賀すべくの至り。是迄焦思苦心言語の尽す所にあらず、生涯又此のごときことあらざるべし。顛末は弁理始末に明かなれば委事は記さず此日終世忘るべからずなり。六字別れを告げ、互に兩

国の祝賀を述べ、欣然として手を分てり。

帰館食事を終り、則、吉原子を伴い、英公使を訪れ、段々厚意の忝を謝し、漆器を送る。書記官へも全断。公使大に歓喜せり。〔下略〕（二二）

冷静なる大久保が『生涯又如れ此のことあらざるべし……此日終世不可忘なり』と書くところに、かれの当時の心境を写しえて余りがある。卅一日、かれは陸軍大佐福原和勝を帰朝、報告せしめることにし、自らは十二月一日北京を出発した。福原に託した黒田への書面には、刻苦して得た償金五十万両の内、四十万両は無条件で支那に還すことを提案したのは後に書く如くである。

五 パークスの征台観

明治政府の征台事件に対し第三者たる外国側はどう見ていたか。米国については我等は既にデ・ロング公使とビンガム公使との立場の相違を見て来た。ここでは、駐日英国公使パークスの意見を紹介することは興味であろう。パークスは久保の力量を最も高く評価している。パークス伝の著者が、

『薩摩の、位置の高からざる武士にして、当時における他の如何なる政治家よりも——恐らくは木戸を除けば——明治維新の終局的達成に功労ある大久保市蔵は……』（二三）

と形容し、或はまた『維新革命の他の凡ての政治家よりも、その手腕において、また道徳的勇氣において遙かに傑出しているところの木戸と大久保とが……』（二四）といっているのは、やがてパークスの大久保に対

する考えとも見ることが出来る。

パークス伝の著者は、柳原はその態度が強硬だったが、『大久保はより平和的な（併し秘密の）訓令を持って舞台に現れた。日本政府は事実、台湾事件が蠟燭の価値もないことを発見したのである』（二三）といっているが、大久保の使命が平和的であったかどうかは、その人の解釈によつて分れるにしても、別に秘密訓令を携行しなかつたことは、既述の経過によつて明らかだ（二六）。

パークスはその頃、しばしば支那に在る友人ロバートソン（Brooke Robertson）に書翰を送っている。ロバートソンの息子がパークスの下に働いていた関係もあつて、その考えを遠慮なく書いて居り、従つて日本の征蕃事件にも好意を有していない点を露出させている。書翰は四月十四日附に始まる。

『上略』日本人は彼等について語られること全部を信じ、これを彼等自身の想像で増大するの誤り侵している。そしてこの結果、彼等自身の小島が、彼等を入れるのに小さすぎると信じている。この事は、この愚かな征台事件を例にとることによつて、字義なりにも、形容的にも事実なのである。この問題について、彼等は自己の自惚れと、そして丁度この自惚れに当て嵌まる勧告、即ち主として例のル・ジャンドル（that man Le Gendre）によつて供給されたる勧告によつて誘導されたのだ。〔中略〕かれはこの征台軍に最高顧問として同行した——なぜならかれを司令官にすることについては彼等は警戒していたからだ。この計画は昨秋、大使一行が北京から帰つた時にあつたのだが、他の大使が同じ時歐洲から帰朝し、かれ——岩倉——がその愚策であることを感じ、この問題と、征韓論とを踏み潰したのである。

然るに最近の一揆と、かれ自身に對する暗殺の企てが、その確信を動搖せしめた。かれは朝鮮に對する戦争は、日本が完成しうる実力以上のことであるのを知つて、依然反對したのであるが、やむを得ぬ次善の策として、日本は征服の道に進むべきであると主張する強硬連中 (hot blood) を抑えるために台湾に讓歩したのである。對話全部を所有することが、その目的であるが、しかし予は彼等が支那がこれを黙視するであろうと考えるならば、お目出度いと云わざるをえない。それは李鴻章と、そして支那がその多くの工廠で造りつつある船に對し好機會である。日本は国外遠距離の地に於て戦うに足る準備は充分でない。彼等の船は總て使い旧してしまつてゐる。ストーンウォール号 (Stonewall) は航海出来ないし、アバーデン号 (Aberden) も大した価値はない。彼等が有しているのは凡てで六隻とはなく、その武器も上海及び福州で造つた新支那船のそれ等に此し非常に劣つてゐる。それにそこには最も優良だといわれる貴君の砲艦がある。

予は日本の遠征軍は支那がその眼をこすつて何事が起つたかを驚いてゐる間に、上陸はするだろうと思う。併し早く解決に到達しなければ、予は支那は日本人の滞在を不愉快なものにするだろうと思う。日本は作戦の根拠地がなく、港灣がない。彼等が支那人を友人にし打狗^{たか}を使うのでなければだ。彼等はその現在の兵力を運輸することが出来ないで、その目的のために外国船を雇つたほどだ。彼等はその兵隊の装備はよくしたようだ。〔中略〕この酔狂^{しやうきやう}の費用は非常に大だが、それに対する報酬を得ることは出来ない。尤も彼等は大砂糖地——第二のキューバを得、かつ支那沿岸と支那海を支配することを目かけてゐる。予は彼等が、ひどく失望するだろうと思う。そして失望することは充分に当然なのだ。彼等はこの事を支那に何等の通知なくして断行し、しかも来月の始めに

北京に公使を送るのは軍隊を送つたことの理由を説明するためだ。』(二七)

パークスの右の書面により、かれは日本の実力を見縊^くつていたことが明らかだ。同じ對手に対する今回の書面は六月廿三日附である。

『この台湾事件に関し、日本人と支那人は双方共に對手を欺こうとしている。彼等が戦争を避けることが出来れば不思議であろう。支那が少しでも胆力があれば、断乎として台湾よりの撤退を求めるであろう。戦争になれば彼等は日本を負かすことは容易だ。しかし彼等は胆力がないから、少くとも極端な方策に対し嫌悪すること甚しいから、姑息の態度を持するであろう。勿論、日本には立派な理由はない。それは単に便宜主義から台湾へ行くというだけのことだ——それ等はサムライを満足させるためである。何人も彼等(武士)が朝鮮に行くことを遮ぎるものはない、彼等自身を除いてはだ。彼等は朝鮮人を脅かす。そしてまた彼等が朝鮮に行けば結局は蹴倒^けされることは疑いなからう。併し支那に於て外国人は支那人に怒っているから日本人に同情し、ここに居る外国人は同じように日本人に不満を有しているから、かれ等の自惚れの鼻を折られることを悲しいとは思わないのだ——世界はこうして動いて行くものなのだ。』(二八)

パークスが皮肉で、冷笑的な態度は、この書面によく出ている。こうした態度が、かれをして到底日本に友人を作らしめなかつたのだ。かれの次の手紙は七月廿一日に書いて居る。

『早速だが、ル・ジャンドル「將軍」は秘密要件を帯びてこのグレート・レパブリック号(Great Republic)で出発する。かれは広東と福州の總督及び他の地方官に働きかけ、乃至は嚇^{おそ}かすためである。同時にまた軍備の程度を観測す

るためである。日本官界におけるかれの位置は全然不明で、不規定である。かれは自ら凡ゆる名称を以て呼んでいる。二等官ともいつているが、それが何を意味するものであれ、かれは単に冒険者にすぎない。「中略」そして今や台湾遠征が予期されたようにならないので、聊か信用を失つて来ている。予は支那人が日本人の歓心を買わんとするほど馬鹿でなかるべきことを心から信ぜざるを得ない。

日本政府は台湾に止るべきか、撤退すべきかについて意見が二つに分れている。予は彼等が止まるだろうと考える。尤も彼等は支那が、彼等の少数兵力に対し突然襲撃し来て、おうきう襲殺【皆殺し】する如きことなきかに怯えて居るのであるが。』(二九)

九月十五日附の手紙には、

『予は箱館に行つて歸つて来た。政府は大久保の結果に対し、息もつかずに見守っている。そして今頃までには支那が譲るか、それとも彼が旅券を請求するかの結果を待っているのだ。「中略」延びれば延びるほど支那には有利であり、日本にとつては不利益だ。従つて日本は解決か、衝突かについて急いでいるのだ。予は衝突に結果するだろうと思う。その場合には日本は何処を先ず攻撃するだろうか。上海か、それとも北京か、素より北京であろう。何故なれば英国も仏国も、そこに行つたからだ。但し季節の遅くなつたことが、左様な行動を不可能ならしめる。』

(三〇)

パークスの右の手紙の中には箱館に行つて対岸の露国と朝鮮を思い、『朝鮮がいつかは彼等の手に落ちないだろうか』との疑問を起している。また台湾事件については談判が破裂するだろうと考えている。その次

ぎの手紙は十一月十六日に書いた。

『予は君の五日の手紙を拝見した。それ以前に問題がウェードによつて解決されたことを知った。彼の成功は慶賀されねばならぬ。日本は自ら創造したる最も重大なる困難から逃れたることについて彼に感謝しなくてはならぬ。併しながら予は如何にして支那のために喜ぶべきかを知らぬ。支那は惨めに失敗した。予は支那は結局、日本が台湾から撤退することを条件として、その泣声をやめる可能性のあることは考えたが、しかし支那が侵略されたことに對し、償金を支払うことを肯んずるとは、確かに期待しなかつたのである。

併しながら現在においては、我等はこれで諸種の紛争から救われた。予は国交が断絶した後において、ウェードの努力によつて問題が解決したのを喜ぶ。』(三二)

パークスが『支那が侵略されたことに對し償金を支払うことは期待しなかつた』とは、一つの名言である。かれの台湾問題に関する最後の手紙は十二月十四日に書かれている。

『幸福は、確かにそれに値しないところの日本にあつた。予はこの老大国が、その正当なる主張を持ちながら、国家群中の最も若い国に譲つたのを悲しまざるを得ない。予は戦争のなかつたのを喜ぶ。しかし日本は償金を得なくとも、和平を喜んだであらう。償金については日本自身が、左様な請求権がないことを知つてゐるのである。』

(三三)

右の数次に亙る書面によつてパークスは日本政府の行動に反對してゐたことを知りうる。パークス伝の著書はこれを弁解して、政府の多くの閣員の間にも反對意見はパークス同様にあつたのであるが、ただ彼等は

サムライの意見と歩調を合せざるを得なかつたに過ぎない、と云つてゐる（二三）。

六 在支外人の交渉批判

然らば北京に在る外人及び後世の西洋史家はこの事件をどう見るか。まず征台事件そのものの理由については、充分な根拠がないと考えているものが多い。「The Foreign Relations of the Chinese Empire」の著者モースは

『最も薄弱なる口実の下になされたる台湾派兵は…』と形容し（三四）、又前掲パークス伝には左の如く書いてある。

『台湾への派兵が単なる海賊的襲撃であることは疑う余地はない。琉球人が果して日本の国民であるかどうかというその事が問題である。もしそうであればその是正は、まず外交的方法を以て進められねばならぬ。しかし遠征は何等の通知なくして行われた。』（三五）

日本の征台理由に対する疑問は右によつて二つあることが分る。一つは琉球が日本領土であるかどうか不明である事、他は仮にそうであつても何故にまず外交交渉によらなかつたかという点である。第一の琉球の帰属については史家はいう。

『この日本の属領としての一線をなす島は、何世紀にも互つて支那と日本に貢物を納めて来た。貢物は西暦一三七二年にまず支那に送られ、それから一四五一年に日本に送られた。琉球王は一四〇三—一四二五年の時より、

支那皇帝により冊封を受けていたのである。しかしまた一六〇九年には薩摩藩主によつて征服され、その時から歴代の琉球王は日本からも冊封を得ていた。』(三六)

『琉球はその支那との古い聯絡から、地図には普通に Linchiu, Luchu, Loochoo, Lewchew 或は Linkin と呼ばれている。現在の所有者たる日本人はこれを Rinkiu 云つてゐる。』(三七)

しかし正面の理由如何を問はず、支那における外人はこの日本の征台の挙に対し必ずしも反感を有していなかった。それは支那がこれによつて懲り、外国に対し門戸を開放することを希望していたによる。それは多分に外人自身の利益のためであるのは云うを要しない。外人の意見を代表するものとしてハート (Robert Hart) からその友人に宛てた書簡がある。

『(一八七四年「明治七年」七月三日附) 日本人 (Japs) は台湾に居る。総理衙門はこの征蕃行為を否認する。日本は進むべきか、退くべきかを知らぬ。支那人は日本と戦うべきか、それともどうにかして追い出すべきかを知らぬ。これが現在だ。その結果として生れたのは今までのところ福州の總督が、シャープ・ビークから福州まで電信線の敷設を許しただけだ。いま一つ云つて置きたいのは日本における外国公使は、遠征が日本に益する所なしとしてこれに反対であり、これに対し支那における外国使節はそれが支那に利益するであろうと考えて悉く遠征に賛成であることだ。何れにしても遠征は既に事実でありそしてそれが支那の長い眠りを揺り動かしていることは事実だ。』(三八)

『(一八七四年八月六日附) 日本辨理公使は今や当地にあり、そして冬までには二国が戦争か平和かの問題を解決

するだろう。今までところ征台遠征は支那の利益になったことは疑えない。福州の陸上に電信を敷設したことだけでも、支那の閉鎖されたる門戸を開放したのである。予は我等の面前に閉された他の扉も、同じ圧力によつて開かれることを望む。』(三九)

右の在支外人の希望に反し、支那は依然として、その政策を変更しなかつた。そして結局、日本に対して譲歩した。支那の外交は、従来、圧力を加えられればこれと正面的に戦う代りに、まずその中に引入れられて紛争を惹起することを懼れ、その関係を断つ方に進んだ。征台事件に関し支那側の誤謬は何れにあつたか。モースはこれについて論ずる。

『支那政府は誤謬を敢てした。その一理由は軍隊派遣の費用を惜んだからであるが、他の理由は、政府の組織が国家問題を政治家的に処理し得なかつたことであつた。天津にある李鴻章は、より賢明なる道を予見し、その忠告は健全であつた。かれの兄弟は福州の総督であつて、台湾はその支配下である。もし恭親王が李鴻章に相談すれば、かれはよりよき忠告を与えたであらう。期日が遅くなつてから、支那政府はその態度を変えた。西郷が厦門から台湾に赴くことを通知して来たのに対し、福州総督は「台湾は支那の領土であるから、これ等の生蕃を懲罰するのは偏に支那の責務である」といつた。二、三日の後、恭親王は江戸政府にコミュニケを送つた。〔中略〕支那政府は今や、前の態度の誤つていたことを覚るに至つた。彼等は台湾に軍隊を送つたのであるが、しかしその場合にもなお戦争を恐れていた。』(四〇)

(註) 八月廿五日から十一月十七日の間に於て一万九百七十名の支那軍隊が南台湾に上陸した——Report on trade

of Takow, Custom Reports, 1874.

右によつてみると、支那は台湾に兵一万九百余名の兵力を送つたのを観るべきだ。しかも支那はなお三千に満たざる日本兵力と戦うことを懼れていたのである。

ここで、その「進言が健全」だったという李鴻章の対日態度について一言する必要がある。J・O・B・ブランドはロバート・ハートの秘書をしていたことのある英人著作家であるが、その李鴻章伝において論ずる。

『李鴻章はその初期外交官時代においては、日本の使節に対する関係は、西洋諸国のそれとは、甚しく異なつた主義の下に行わねばならぬことを認めた。かれの政治に対する誤らざる本能は、一八七四年（明治七年）以前においてすらも、英国や仏国の軍事的冒険と、日本の必然的膨脹の底に横わり、これを決定する人種的、経済的力との間には重大なる相違があることを認めたのである。支那が大日本の最初の力と野心とを認めるべき機会を有したのは一八七四年であつた。その時李鴻章は日本が最も薄弱なる根拠を以て台湾を侵略したのに対し、日本兵力に償金を支払つて解決し、支那の無防備の状態を世界に隠蔽したのである。その年また、かれはかれが歐洲人と交渉するに當つて、その目的を貫徹するのに効果のある遁避と婉曲の方法が、日本人に対しては無用であることを発見した。日本人自身が東洋外交の技術においては大家である。日本大使副島は台湾問題解決を政府に託されて来たのであるが、かれは李と交渉することを鄭重に、しかし断乎として拒絶し、中央政府を対手にすることを主張した。その後に北京に赴いた大使（大久保の事）は天津総督を訪問するの勞をすらも惜んだ。日本人との最

初の経験によつて李は、かれの本能的嫌惡と、恐怖を増すに充分なる侮辱を感じた。かれの後半生においてかれが制圧的武力を広告することにより彼等を侮辱せんとした絶えざる努力を試み、また重に日本の野心によつて脅威さるる領域における權益を、他の列強に譲つて、日本を牽制せんとしたのは、こうした原因によるところが多いのである。

かれの外交生活の凡ゆる面を通じ、我等はかれが東洋から来る危険は、西洋からのものよりも、遙かに恐るべきものであるという事実を認識した証跡を発見することが出来る。かれは欧州列強の權益と野心は、日本のそれと異なつて、支那の費用において領土的膨脹をなすべく中心化して居らないと考へたのである。(四一)

李鴻章の一生の政策が、その時に日本から受けた印象によつて決定さるるの一大原因をなしたとするならば、征台事件は征台事件に終らなかつたのであり、大久保が償金を返却してまでその国交を整調せんとした意味も解し得よう。

然らばこの北京会談の処理について外人史家は如何に観るか。前掲のモースは論じていう。

『この解決についてウェード氏は總ての方面から、凡ゆる讃辭を得た。日本はまた、日本がなお準備なく、不注意から陥つたところの紛争から逃れ得たことを慶賀された。支那は憐まれた。

「如何にして支那に祝賀の意を致すべきかを予は知らぬ。〔中略〕予は支那が侵略されたことに對し償金を支払うことを、確かに期待してはいなかつた」と、パークスはロバートソンに書いた。最も鋭敏なる觀察は、恐らくは、この事件の特徴が、支那の次の四分の一世紀の歴史を規定したとしたものにある。〔中略〕これより、もつと重

要なることは、この償金を支払うことは、過去五世紀に亘つて貢物を納めたところの琉球を暗々裡に捨て去つたことである。そしてそれは総ての附庸国 (Tributary dependencies) 即ち雲南、朝鮮、緬甸^{ビルマ}を次ぎ次ぎに捨て去り、更に満洲、蒙古、西藏の位置にまで及ぶところの先驅をなした点にある。』(四二)

即ちこの征台事件の結論は (一) 日本が準備整わざる戦争に捲き込まれざりし事、(二) 支那の実体が世界に暴露された事、(三) 支那がその附庸国を捨去ることの端緒を開いた事の三つが、この史家の教えるところである。

(一) 『大日本外交文書』第七卷 一八七頁。

(二) 『使清辨理始末』(前掲、一三四頁【『大久保利通文書』第10巻 p372-3】)。

(三) 同上、一三五—一三六頁。

(四) 同上、一三六頁。

(五) (六) 同上、一三九頁。

(七) (八) (九) 同上、一四〇頁。

(一〇) 同上、一四〇—一四一頁。

(一一) (一二) 同上、一四二頁。

(一三) 同上、一四二頁。

(一四) 同上、一四一—一四二頁。

(一五) Correspondence respecting the settlement of the difficulty between China and Japan in regard to the Island of Formosa. Parliamentary Papers, issued by the Houses of Parliament of Great Britain and Ireland.

(一六)『書翰を以て啓上致し候。然ば台湾蕃地の兇徒問罪の儀に付、我政府と清国政府の意見齟齬を生じ、談判鬱結遂に好和保存し難き場合に立到り候処、北京駐劄貴国全權公使閣下我辨理大臣と彼諸大臣の間に御周旋これあり、別紙の通り協議相整い互に條款を交換候旨、右辨理大臣より官員帰朝を令し、昨日到着、今日具狀に及び候間、御内覧に入り候。右は我政府の趣意貫徹致し両国の幸福に至り候儀、右貴国全權公使閣下の御尽力少なからず儀と存候。之依り取敢えず一応陳謝に及び候条、貴政府并北京貴公使閣下へ然るべく御伝致下され度、右謝詞申進度斯の如く候。』(『大日本外交文書』第七卷 三三〇—三二頁)

(一七)『公使へ』

台湾蕃地の兇徒問罪の儀に付、我政府と清国政府の意見齟齬を生じ、談判鬱結遂に好和保ちがたき場合に立ち到るの処北京在留貴国公使我辨理大臣と彼諸大臣の間に周旋これあり、協議相整い互に條款を交換候旨大久保より官員を以て報知せり。朕が和好の趣意貫徹し両国の幸福に到候儀貴公使の尽力少なからず儀と深く満悦致すの意を貴政府并北京貴公使へ伝えん事を望む。

公使奉答

厚き勅を蒙り臣に於ても感喜勅旨を詳かに北京在留我国公使へ伝達すべし。

北京在留我国公使の周旋叡慮に叶い玉し事、我国皇帝陛下聞き及ばは満足いたすべし。

台湾一件八ヶ月の後是の如く平穩に纏り、貴政府は勿論貴国臣民の幸福なるべし。

茲に至て外国との交誼の裨益ある事を陛下了察し玉う事と信ず、之を以て尚両国の交誼精密に至り疑を容れざるなり。』(同上 三二二—三二頁)

(二八) 『日支外交六十年史』第一卷 一〇九—一四頁。

(二九) 『十月廿五日』

今朝樺山子、比志島子、児玉子、福島子発足。福島は上海へ、樺山、比志島は厦門より台地へ赴く筈。午後
字^{プロシヤ}公使、仏公使へ尋問暇乞の爲なり。字公使へは形行の談に及び、本国へ申送るとのことなり。仏公使は
留守中なり。柳原公使入来今夕五字比英国公使来館曰く、昨日閣下御入来、支那政府の談判到底彼証書相認
るを拒み候より止をえず破談に及ばれ候趣承知仕り、若し両国の交際相絶ち候時は如何成行くべく哉、両国
の大事は勿論我人民上利益に係り候故、総理衙門に至り只今迄大臣へ弁論致し候。就て各大臣より頼を受け
参館いたし候。其趣意は金額五十万テールを出し書面を認る事に決定せり。閣下の許可せらるべきや如何と
の事故答て曰く、御厚意 忝^{かたじけなく} 存候。従来此案件当五月以来の引続を以て談判往復を重ね終に去る五日破談
に及び、其後猶弁法の談判に及び候処、是以去る廿三日議論纏^{かた}り兼破談に及び候末、最早断然発途の用意
に及び帰朝明日に迫れり。何分容易ならず大事件に付勘考の上参上御答に及ぶべく旨返詞せり。別^{わか}るに今晚
八字を以て約す。就て熟考するに今般奉命の義実に容易ならず重大事件、談判纏^{かた}らずして此俟帰朝に及び候
得ば使命を終らざる論を俟たず。只至憂するところ内国人心事情切迫戦を朝夕に期するの勢あり、是を纏る
に術なく、終に戦端を開かざる可からざるの期に立至たるべく、然るに勝敗の上は勿論恐るべくにあらず候
えども、名義上に於て我より宣戦の名十分ならず。柳原公使覲^{きん}を拒むのことあるも、是を以て戦を交ゆるの

訳にいたらず。然るときは無理に交戦を開くに至るべし。此時に至り人民の議論は言うに及ばず、外各国の誹謗を受け意外の妨害を蒙り、終に我独立の権理を殺ぐに至るの禍を免ざる虞なしと謂うべからず。然れば和好を以て事を纏るは使命の本分なれば、断然独決し左の条を以英公使に答える。

金額は望に任せ五十万テールを受納すべく、皇帝の恩典の名義を止め、我在台湾陣營建築、道路築造、難民等の為金額を払うべき事。

我台征を義拳と見認る事。

台蕃事件にて起れる両国間の紛議取消の事。

金額を払い在台の兵を撤すること。

此ヶ条を以て論述して云く、今日厚意を以て来館を忝うし、支那政府より談の趣熟考せしに因り、十分の満足にいたらず候えども、拙者和好を保存するは本分の職掌故金額の事は彼意に任すべし。因ては名義上の処に左の件々を請求す。此旨總理衙門に伝えられ度云々。公使之を諾し、横文に訳し漢文に作れり。就て明十二字迄に支那政府より有無の決答あるを約す。

太田書記官、吉原子同行、共に一字比辞して帰る。此独決に付ては柳公使も異論ありと雖も、畢竟金額の少きに止まらむ故に断然之を容れず。

愚考するに両国の和好の存否は重大なるは言に及ばず、生靈の始末に關し容易に決すべからず。殊に我征台の挙に於ては人民保護上に起、航客の安寧を保たんとこの一大美事にして他念あるなし。然るに此金額多少の論を以て若し事破れ候節は大に名譽に關し義拳の意を傷^{いと}うに似たり。況んや彼十分意を曲げし上なれば、我

独立の権利に於て敢て欠ことなし只重んずるところ名義にあつて金額の多少にあらず。此二つの者を以て軽重を酌量し一刀両断の決を以てする所以なり、英公使仲間に入るを以て必らず批難あるを免れざるべし。然といえども我一言彼れに依頼せしことなし。前条総理衙門より依頼を受け内々我に通せしものなれば、我之に答えざる能わず。尤公使は我意を彼れに通し、文章上のことに付て往来するのみ。数多の論を免ざるは固より期する所、殊に兵隊等に於ては必ず不平を唱えるものあるべし。因て今般和議調い帰朝復命の序、上海に至り金傾を收受し、厦門に至り川村中将に面晤帰艦せしめ、続て蕃地に向い西郷都督に面晤、全じく退兵のことを説諭せんことを心決せり。然る後天皇陛下に復命せば是聊か我奉命の旨趣を貫徹するに近からん。』

『大久保利通日記』下 三二八—三三二頁

(二〇) 『大久保利通日記』下 三三二頁。

(二一) 同上、三三二—三三五頁。

(二二) 同上、三三六—三七頁。

(二三) E. V. Dickens and S. Lane-Poole, *The Life of Sir Harry Parkes* (London and New York, 1894), vol. 2, p. 86.

(二四) *Ibid.*, p. 164.

(二五) *Ibid.*, p. 187.

(二六) H. B. Morse, *The International Relations of the Chinese Empire*, vol. 2 [The period of submission], p. 227. 以下パークス伝を引用して、大久保は秘密訓令を携行した旨を書いて居る。

(二七) Dickens and Lane-Poole, op. cit., pp. 190-2.

- (一八) Ibid., p. 192-3.
- (一九) Ibid., p. 193.
- (二〇) Ibid., p. 193-4.
- (二一) Ibid., p. 194-5.
- (二二) Ibid., p. 195
- (二三) Ibid., p. 196.
- (二四) Morse, op. cit., p. 271.
- (二五) Dickens and Lane-Pooles, op. cit., p. 190.
- (二六) (二七) Morse, op. cit., p. 270.
- (二八) R. Hart to E. D. Drew, July 3, 1874.
- (二九) R. Hart to H. Kopsch, Aug. 6, 1874.
- (三〇) Morse, op. cit., pp.271-2.
- (三一) J. O. P. Bland, Li Hung-chang (London, 1917), pp.157-8.
- (三二) Morse, op. cit., p. 275.

第七章 大久保の心事と政策

一 天津にて李鴻章と論ず

十一月朔日、大久保は北京を出発した。この朝、八時前英国公使、総理衙門大臣等が暇乞のため来訪した。通州から乗船したのは午後二時であつた。九月十日、北京に到着してから滯留正に五十二日に及び、焦心苦慮の結果、媾和条約を締結するに至つたのである。心軽く、気爽かな心情がその日記に溢れている。

十一月朔日

今朝八字前、英公使暇乞のため入来。総理衙門大臣賈衛、夏愍大臣【日記では「賈夏愍大臣」】名代と為し暇乞として来尋。八字旅館を發し、公使館に至り、是迄の勞を謝し告別、輿こしを發す、隨員には太田鉄道權頭、吉原租稅助、井上毅、高崎正風、金井權少内史、ボアソナード氏、池田、名村判任、川村、萩原〔友賢〕等、田辺外務大丞一行に列す。福原大佐、岩村高俊、小牧昌業は、今朝陸地先行（文を欠く）二字過通州へ着、船用意調居たれば、直に乗船、四字解纜。九月十日北京へ着、滯在凡そ五十日余。実に重難の任を受け、困苦言うべくもなく、幸に事成局に至り、北京を發し、自ら心中快を覚え。嗚呼此の如く大事に際す、古今稀有の事にして、生涯亦無き所なり。舟中無事、此日天氣殊に平穩、秋天高く霽はれ、四望浩浩海の如く、往事を思い、将来を考え、潜に心事の期するあり。晚景登岸、行歩里許。（二）

『往時を思、将来を考、潜に心事の期するあり』とは、かれが四望浩浩海の如き日本の将来と、その政務に

当る決意とを、支那の風物に対して新たにしたものであろう。

十一月二日は船中であつた。その日記にいう。

十一月二日

今朝夢覚、蓬窓寒透、昨夜来船行速なり。吉原子来船閑話す。

舟中偶成

星使乘龍馳北京 黒雲堆裏蹴波行

和成忽下通州水 閑臥遊窓夢自平

又

国運元有興隆期 偉業十年終不違

一夜涛声西海響 猶鳴球上立皇基（二）

後に最初の詩の起句は奉勅単航向北京と改められた。星使乘龍というのは龍驤艦に乗ったことからの思い附であろうが、これを訂正したのは控え目の大久保として、使節に成功した後、星使乘龍という如き華々しい文字に自ら忸怩たるものがあつたが故か否か（三）。

十一月三日、天津に着して米國領事館に投宿した。そして太田諷官を伴うて李鴻章を訪問した。前にも書いたように往行には李を訪わなかった。然るに卅一日の調印の時に、今度は李鴻章を尋問してくれとの支那側の希望があつた。大久保は素よりそれを心得ている。門内に入ると天津道台孫子（士）達その他が出て

案内し、李は階前に出て迎えた。この時の会談を大久保日記によつて掲載しよう。

大久保 今般滯京中諸大臣の厚意を蒙り、殊に和議相調満足に堪えず、今日大人を見る、歎び何物が之の如し。

李 両国の為に賀す、我何の用を成ものにあらず、又云、北京滯留数日、御心中如何。

大久保 厚意を受、快然消光せり。

李 笑云 閣下量大なるが故なり、又云、伊達（宗城）、副島公へ別て厚意を受け、副島は材あり、氣量あり、さ

りながら閣下の御手涯遙に増れり。

大久保 赧顔に堪えず。

李 貴国と我国は、唇齒の国にして離る可からず、我見る所あり、条約互款の時、種々の論ありといえども、

断然論破して終に条約成れり。今後信を厚うし、親睦を固うせん、是我が初めよりの素志なり。

大久保 固より全意なり、既往は姑く置、是より一層の信を結ばんと欲す。雨降地固の俗語あり、此事あつて却

て両国の幸ならん。請見よ、我為す所、果して信あるか、信なきか。

李 此の如くならば則ち両国の一和疑を容可からず、然らば貴国の事は閣下之を任せよ、当国は我之を任せん。

事を為すは一人に任ずるに非ざれば、貫徹するものにあらず。

大久保 諾。

李 貴国着眼速にして万事の運齊成す。我国は御承知の通り、国古うして旧弊固結、改革容易にあらず。直

隸州の如きは我意に任すといえども、十分を成すこと能わず。

大久保 之を察す、然といえども閣下任じて今後を着手、一度翅を揚ることあらば、何物か之を敵す。我小国な

りといえども、協力同心せば、亜細亜の勢を東方に及ぼさんこと、又難きにあらざと思う、是我真に希望するところなり。

李 然り、閣下能く之を欲せば、実に歓喜に堪えず、近を親、遠に疎なるは自然の理なり。貴国と我国万事途を殊にせず、親まずんばある可からず、既に、今般台湾の事件の如き、歐人種々の説を以て、日本の為す所を否とし、小銃、彈藥等を頻に進めり、実に益を彼に与う、豈拙ならずや。

大久保 固より、是注意せざる可からざるなり。

李 貴国船舶幾艘なるや。

大久保 全国大小の蒸汽船百五十艘ならん、貴国は如何。

李 五十余艘なり。

大久保 貴国煤炭鉞如何。

李 莫大なり、貴国銅山は如何。

大久保 夥多なり。

李 我国銅山なし、甚窮する所なり。
はなはだ

大久保 銅は沢山なり、若し之を要することあらば、我之を弁ぜん。

李 大幸なり、然らば入用の節、閣下へ書を呈し相願、然るや。

大久保 諾。

李 閣下之を諾せば、則代価等閣下の言に任せて可なり。

大久保 弁ずる所は之を弁ぜん、就ては我必ず貴国に求むるの品あらん、然らば閣下に書を呈し之を求めん。

李 是有無相通ずるの道にして、固より望む所なり。

大久保 之を弁ず。

李 速に貴国へ領事官を送致せんことを期せり。

大久保 是固より望むところなり、是非速ならんを欲す。之有らば氣脈を相通ずること速にして、大に親睦を厚うするの一端なり。

李 然り、則ち台湾事件の如き之れ氣脈を通せざるより起る所以なり。(四)

今まで火花を散らして相争つた日清両国の両雄は、一度条約によつて握手するや、その目標は相互に日清提携にあるのである。しかして李鴻章は支那の事は一人で背負う抱負あり、大久保もまた『諾』といつて、日本の事は自から責任に座する決意があつた。同日の日記は続く。

五字、孫子達外両人来館、李氏続て来館雑話。今日天長節に当る、我杯を把、シャンパンを勧め云、今日我皇帝陛下の降誕日に當る。此日に閣下に相逢、実に偶然にあらず、和好永遠の徴とするに足る。幸に閣下祝し玉わんことを望む、彼云、妙なり、実に閣下の逗留日少きを恨む。

畢て告別婦館、我階前に送る、把手久し。(下略)(五)

かくて天長節の晩、十時に大久保は郵船マビン号に乗込み、翌四日天津を発し、五日芝罘に到つた。同行にはル・ジャンドル、ボアソナード、吉原、高崎、井上、金井、太田その他があつた。芝罘で神奈川丸に転

乗して七日上海に到着、わが領事館に投宿し、十日に償金十万兩を領收し、次いで軍艦日進をしてまず台湾に赴かしめて媾和の事情を西郷に通ぜしめ、自からは神奈川丸で上海を發し厦門に向つた。

二 成果に対する賛否の対立

ここで我等は再び日本内地の事情を顧みる必要がある。北京談判については国内においては各自の立場から、種々の観測が行われていたし、また大久保の失敗を望んでいた者すらも少くなかった。明治七年九月、大久保が清国に赴かんとするや、大山〔綱良〕鹿児島県令は当時在京中であつたが、密かに書を篠原、淵辺に贈つて、その興起を勧告した。

『支那との大難、海軍省の用意一方ならず候。陸軍にても同様と伺われ候。唯今好機会と見留け申し候間、速に突出これあり、遅々なく破裂相成らず候ては、再恢復の期御座あり間敷存じ奉り候。』(六)

大久保の使命の成否が如何に国内情勢から観ても重大であつたか。篠原国幹〔冬一郎〕はこの書面に添えて鹿児島に在つた西郷に書を送つたが、これに対し西郷は左の如く答えている。

『上略』支那の景況熟考致し候えば戦には相成り申す間敷、唯外より見るものと談判役との両説、何れか慥成やと引分候えば、柳原は最初より引受の人にて、支那の情実も委敷見留め候処これあり候故、副島迄も申し越し候処を以て相考え候えば、弥仕濟候胸中言外に相顯れ候。余程文面上にも余地これあり候故、破談に及び候氣遣いはこれあり間敷と相考申候。夫故大久保も出立候はん。支那の方方に六ヶ敷成立候わば事を左右に托し、遅引致

たすべく候処、不思議の事と相考え居り候処、果て柳原一左右弥十分遣付すべく見留これあり候故、速に腰を揚候ものと相見得申候。将又償金を言掛候筋に相見得候故、尚又金を取賦にて是を見付候わんか、此金は取れ申間敷と愚察仕候。金になる賦なれば今一層兵力を増し、十分に戦と決し、勢い相付候わば金にも成り申すべく候。談判中に懇親の言葉多し、其間にて金談は借金の場合に候得ば覺束ない事と相考申候。柳原の談判、只一局の都合は宜敷候得共、第二局の談判如何哉と相考え候中に早一方にて金談に及び候儀は、実に事機を知らずものに似たり、武官の方にて兵勢を張り立今二三大隊を取寄せ、十分兵威を嚴重に致すべき処、却て金談を言掛ては、兵威全く減じ、勝を人に譲り候ものと相考申候。和魂の奴原何ぞ戦闘の事機を不〔可〕知いわれこれなくと相考申候。

〔下略〕（七）

鹿兒島に満控の不平をいだいて蟄居する西郷が『和魂の奴原、何ぞ戦闘の事機を知る可きいわれこれなく』というところにその態度を知ることが出来る。

談判進行中、国内における動搖は相当に激しかった。左の一文がその一例だ。

『近頃討台の一挙より遂に日支の争論を生じ。曩に朝廷大久保大臣を清国に派出せし後。久敷く其消息を欠くを以て。世人引領待報の間。紛議百出。或は和議既に成れりと云い。或は戦端既に開くと云い。妄想妄像底止する所なし。彼の三井小野組合の如きは窃に政府の預り金を。引上げられんことを恐れ。彼の先取蓬萊〔蓬萊〕の会社の如きは。間に投じて。船舶兵器を売附せんことを謀り。彼の米商賈は、奸図を運らし。其利を奪せん〔はかる〕とし。而して田舎武士は。従軍を仮て。名を徴めるに至る。殆んど此十旬日間甲乙呼。其混乱云う可からず。乍ち一電信

報あり和議既に成り、支那政府償金を出すと。〔下略〕』(八)

斯かる時、和議の報があつたのだから日本政府当局者の喜びは勿論である。この喜びは、特に責任の一部を分担する岩倉において然るものがあつた。十一月十二日附の岩倉の大久保宛の書翰がこの辺の消息を伝えるものがある。

『一輪拝啓、時氣弥寒冷に向い、殊に異城水土の変換動靜如何と懸念罷在候処、愈御清健の趣、在清書信及び過日帰朝官員の口頭に由り詳悉承知し抔喜〔手を打って喜ぶ〕に勝らず候。聖上倍御安泰渡らせ、御国内至つて靜謐御降心これあり度、從て迂生旧依頑健奉職罷在候間御省念下され度、然ば今回皇清両国の事案古来未曾有の大困難、結局如何の形勢に立至るべき哉と日夜苦慮罷在候処、頓に平和に歸し、且御国威益隆盛を表し候運びに立ち至り候事、是れ偏に祖宗の御冥護今上の御稜威に依る所とは申しながら、足下憂国の赤誠、愛君の忠純は前きに丁卯復古の際に現れ、今復大に斯に發揚する者にこれあり、上は宸襟を慰安し奉られ、下は蒼生〔人々〕陷溺の苦を免れしめられ候段、前古無比の大功にて叡感殊に浅からず、迂生の如き曾て死生を共にせん事を誓約せし輩に於ては、国家のため大慶は申す迄もこれなく、今日の如き大愉快はこれなく候。其実績は数回の信書中に詳悉にして、始終御遺算これなく段真に感伏に堪えず候。今夕勅使將に解纜せんとす、匆々寸楮を裁し以て国家の大慶を称し、併せて動履〔どうり〕の日常生活の安寧を祝し申候、聞道〔聞く所によると〕蕃地は瘴癘の郷、強健を化して羸弱と成すと、暫時の御滞在とは申しながら、頗憂念に堪えず候。千万邦家のため御自愛これあり度希望致し候。遠からず拝顔を期し、既往を顧み将来を慮り、千言万語相述べべくと存候。先は擱筆致候。頓首再拝。』(九)

岩倉が満悦したのは無理がないとして、大久保と議合ずして山口に引あげた木戸孝允が、自分事のように喜んだのは、国家のためには常に私情を顧みざるかれの真骨頭が現れている。かれの日記にいう。

『同〔十一月〕十八日〔中略〕伊藤博文、井上馨より書状到来、対話一条終に平和に帰し、支那より五十万テールの償を出せり〔此金七十万円に当ると云う〕、台湾一条の費格に比するときは十分九の不足を出し、纔十分一の償なりしと雖も、一端讐を開くときは、幾千万の費に至るを知らず、人民の大不幸、実に患うべく。幸にして平和に帰し。人民の大幸、真に悦々べし。〔下略〕』（二〇）

木戸は大久保に対してその後左のような書翰を出してその成功を祝った。

『上略』然ば昨年来容易ならず御苦慮の末、当春重ねて又外征の仰せ出されこれあり、一旦啓讐の上は全国の人民各々対国の務め、元より免がれ難き義に御座候得共、事の難易長短に関係候ては、国勢の退歩実^{たんぽ}に如何と旦暮深く煩念罷在申候処、頃日老台の御尽誠にて平の場に落着、名義も明らかに相立ち候趣に伝え承り仕^{つかまつり}、実に国家億兆の幸福此上なく次第と雀躍の至に堪えず、天下の為慶賀奉り候、従来兎角止をえずの情態より終に艱難を醸成し、容易ならず御苦慮と相成実^{じつ}に恐入候事少なからず、宇内の大勢已に御一視被^{あらせられ}為在候通り、各国亦強弱貧富大に鼎隔、然して此強弱貧富を問わず、真に其間に独立の權利保有^{つかまつり}仕^{つかまつり}候事は、必ず其実績これなくては相成らず、熟我皇国の有様を想思仕候に、民未愚にして国亦貧し、其内都鄙の形勢も同日の論にあらず、前途また甚悠遠、何卒今日の機に投じ将来不動堪忍沈着百年の御目的立ちなされ候わば国家後世の幸此上なくと只管遙に仰ぎ願^{なほぞ}い仕候。〔下略〕』（一一）

政府はまたその一同の名を以て、帰途にある大久保に書を与えて感謝の意を表するところがあつた。即ち左の通りである。

『上略』今日より追想い候ても、其困難千状万態筆記の外に隠然これあり、然る処大事結果此に至り候は、全く足下尽力の致す所と一同感賞に堪えず候。御渡清後は毎信申し入れ候通り、朝野とも開戦の覚悟に日を送り、就中去月中旬以来は、海陸軍省其他処蕃關係の向々は諸般取調、寸時を争い來信を相待ち候処、去る八日上海の電信到着、殆んど隔世の思をなし申し候。国家の隆運人民の洪福之に過ぎず。〔下略〕（一二）

併し大久保の北京談判について上下一致してその成功を称えたと見るのは素より当らない。當時、北京に在った樺山資紀の如きは、北京談判の模様を目撃し憤慨措く能わず、書を桐野利秋に与えて『大久保の近状見るに忍びざるものあり』といった（一三）。大久保を暗殺せる島田一郎の斬姦状に挙げた五罪の内に『外国實際の道を誤り以て国権を失墜す』とあり、台湾事件をあげて、

『台湾の役の如き抑も何の所為ぞ、徒に武を流し、兵衆を傷残し、国財を耗費し、竟に支那の寵絡する所となり、道路修繕等の費と名け僅かに金額を收取し、反て内国に広布するに償金と号す、其人民を欺く何ぞ一に斯に至るや。』（一四）

といつてゐる。所謂對外硬派は何れも、こうした立場を代表していた。

當時の『評論新聞』はそれ等を代表して最も辛辣なものであつた。政府の事に不可解なものあるを列挙してその中にある。

『去年、政府既に征韓の議を沮格^{そかく}す、則・穩和の謀を以て彼を甘服せしむる処置なかるべからず。而して彼は益^{ますます}我を侮慢^{がまん}す、甘服を謀る所置何にか在るや、是時事不可解第五也。征韓の議を沮格するものの曰く、我内治未^{あまね}治からず、外征未急にすべからず、況・此際金穀欠乏の憂ありと。然り而して、前の沮格者・卒然征台の師を起す、失う所殆^{おほ}一千万円にして、得る所僅に五十万丁銀（六十万円）に過ぎず、金穀欠乏を憂えるものの為す所、何すれぞ此の如き乎。而して征韓非なれば、征台も亦非ならん、況や朝鮮は君主あり臣民あり、台湾は野蛮無主なり。嗚呼、野蛮は討つべく、君国は征す可らざるか、是れ解す可らざるの第六条なり。兵事は一国民命の関する所、之を容易にすべからず、先・大軍を出さんとすれば、宜く其征討すべき条理を告諭し、民心を感孚^{かんぷ}し、然る後に師を起すべし。去年四月、出師前一の公布なく、十一月に至り突然清国と和議成るの事由を公布す。始は兵士の私戦の如く、後は政府の公戦に似たり、是れ解す可らざる第七也。征台の軍・長崎に屯するや外人異言あり、内使を馳せて其軍を止めんとす、而も軍人命を奉ぜず、大久保参議も亦長崎に臨み、其事を整頓したり。復命の略に曰く、『清国に対し候ては勿論、外国交際上不都合を生じ、国家の大難を醸出する節は、臣利通その責を受くる覚悟に候』云々と。爾後、清国と諍論を生じ、大久保北京に使す、幸にして和議成りしも、其条約書を熟視するに、事理○○○○のこと明文なし。此の如きは、先の大難の責を受くると云ものは、難民撫恤、道路を開き、房屋を建つる費用を、清国に○○するのみか、是れ其の解す可らざる第八也。』（二五）

更にまた我国の歴史家は、多くは対外硬に属する人々であるが、大久保の処置に対しては不満である。その代表的なものとしては『清国の違言の如き顧るに足らず、聴かずして可なり。宜く台湾領有の目的を此時に逐ぐべかりしなり。而して彼れ若し異議あらば、我は平然坐して其談判を我国に受けるの得策たりしや明

なり、然るに事此に出でずして我より彼国に至りしは策の最も拙なるものなり、乃ち自ら筭に陥りて大いに進退に窮したる所以にあらずや』(二六)という如きである。他の史家も大体に同様なる論旨で『僅に五十万両の金額を得て空しく撤兵したる』(二七)ことを遺憾としている。

一般外人は大久保の交渉を成功なりと考えたようだ。殊に支那人との外交交渉において日本が勝利を得た点を特記している。ここでは横浜ガゼットの説を紹介しよう。

『竊かに私利を挿さみ或は深く私見に惑える人は姑く論ぜず、昨日支那より達して今日に至り始めて詳確と為りたる報を見て雀躍慶賀せざる者は蓋しなかるべし。大久保の談判平穩の結末に赴むきて終に能く日本の国威を殞さず、従来台地の一件は其直全く日本に在ること支那政府にて承認したればこそ五十万テールの償金を出して其五分の一は既に大久保公に交附し、其余は数週の中を期して之を送らんことを約せしなり。又是のみならず支那政府爾來台地の民を制して、凶暴を行うことなからしめんと約せり。然れども日本は悉く其主張せし所を伸べ、悉く其請求せし所を得たる者にして、大久保公北京の談判に於ける功は決して諸子の蕃地に於ける軍功に下らず。其成績の著しきは迥かに西郷公の右に出ずと謂て可なり。中外の人最も疑懼に深き者に至るまで大久保公の斗胆なること曾て之を疑う者なしと雖、彼狡猾詐術のみを以て勝利を得んとする政府に對して、日本果して能く其欺く所と為らざるや、否人皆之を疑い、外人の中或は日本の失敗を庶幾する情に掩うわれて明らかに、贏輸【勝ち負け】を見ること能わざる者あり、又日本の宰臣其智支那と鋒を争うに足らざるを危ぶむ者ありしが、此に至て此等の衆疑一朝に氷積し、更に日本の東海に雄視し万国に推重せらるべき一証を加えり。』(二八)

三 樺山資紀の交渉観

大久保が最も意を用いたのは、しかし世論であるよりも寧ろ部下の強硬論であつた。その所信を断行する場合にも絶えずこれを顧みた。大久保配下に於ても、大久保の政策に最後まで危惧と反感を有していた例として、かばますけのり樺山資紀（初代台湾総督、海軍大将、伯爵）を挙げよう。樺山は幸いにして、毎日、日誌をつけ、それが樺山家に、残されている。

樺山は廟議が対清強硬策を採用するに決定したので、これを在支の柳原公使に伝達すべく、外務省出仕田辺太一と共に北京に派遣された軍人である。この時、大久保は大隈に宛て、樺山少佐を上海に派遣することを通知すると同時に、旅費支給方を依頼する書面を送っている（一九）。これによつて樺山は旅費として洋銀五百元を得た旨その日記に見える（二〇）。これによつても樺山を派遣したのは、郷里の先輩である大久保であることが察知される。

大久保が天津に着いた時、樺山は柳原公使の命によつて、大久保を天津に出迎えた。かれは最初からその態度が強硬で、柳原公使の腰を押していた。

八月十二日 晴

午前公使館に出頭して、柳原公使に、談判上に付ては清政府の優柔不斷に陥らざる様果敢の動作を為されんことを、陳述書を提出し置きたり。北京の精兵は十六万にて、李氏の天津兵は二万なり、北京兵は旧式等にて強兵とは云

う能わず。併し体格等耐忍力は侮るべからざるなり。清廷の離宮を造築するに国庫の闕乏^{けつぼう}して僅に二十五万両を支出することに決したりと、或る西洋人の説なり。(二二)

こうして彼は大久保に対してもこの強硬論を進言して、もし大久保がこれを聴かない時は北京に帰らない決心を以て下津したのである。

九月三日 晴

午前七時頃大久保公使着津せらるる報知あり、爾來の談判書を一閱したしとの柳原公使へ来翰あり、因て該書類の如きは公使館主務員に属し、余と高崎氏、益満氏同行して午前九時出発して、天津に赴く。其主義とする処、清政府の交渉上、境界を侵越せしとの無礼を責め、最初より果斷方針を取り、交和の破裂するを以て得策とする意見を提出して、大久保氏肯んぜざれば再び出京せざるとの決心を以て下津することとなり、〔下略〕(二三)

樺山は右の趣旨を以て大久保を説いた。かれの日記にいう。

九月五日 陰

〔上略〕直に高崎氏同袖にて大久保辨理公使を伺い、従来政府交渉の状態を具陳し、終始一貫、柳原公使の意思に依り断行主義を取り、彼れの無礼を責め、交和の破裂を以て得策となさんことを談論せり。果して肯んぜられず、未だ名分充分ならず、我れ考慮もあり、又在留柳原公使とも篤と面談せんとす、因て軍機の得失に関せず、弥縫^{びほう}策に出て一步譲与となり、破裂は到底望みなし、併し極点に至り解決の結果を視るものの如し。此の時機に於ては大久保公使も確認の成竹は疑なく、必ず短刀直入の手段は予等と同一なべし、刺撃の攻略に間髪を容れざる所

なりとす、予等の陳言は尽せり、退去に如かず。〔下略〕（二三）

樺山は天津に滞留せんことを乞うて許された。かれの日記（九月十三日）に拠ると台湾の征討軍には病床につくもの多き上に『又内地より一大隊を交代せしめ、加奈川より廻送せしめしと。招集隊の将校等、物議を生じ、相互調和を失い遺憾の状況に立至りしと』（二四）とある。かれは天津に在つて、北京談判の進行模様に注意しつつあつた。北京の同僚からの内報により、

九月廿三日 晴

〔上略〕大久保氏の議論には文祥等は困難なる景況なり。唯蕃地は版図のみと例の瓢箪に鯨の如き捕捉に苦むの優柔不断にて、公使の緻密秩序的の筆鋒論には、彼れも窮迫する氣味もありて、結局遷延は免れ難き状態なりと。（二五）と観測している。翌日（九月廿四日）は好便があつたので、高崎に宛て『例の優柔不断に弄せられ、瓢箪にて鯨を押ゆるが如きは一刀兩断に若くはなき趣を以て』（二六）大久保に勧告するよう意見を送つた。随員中に強硬論旨の多かつた証拠には、

十月六日 晴

北京滞在中の磯部艦長より談判の状況未だ解決変態の模様なしと雖、随行員当局中尽瘁憤励（じんすい）にて必ず果敢の結果に及ばんとの報知ありたり。（二七）とあるのも知れる。

北京談判の事情が切迫して來たので樺山は十月八日に北京に赴いた。途中の風物を見て『現今、高梁、胡

麻、大豆類の收穫最中にて軍事の動作には其時機を得るものとす』(二八)とあるは流石に軍人だ。九日に樺山は日耳曼ホテルに大久保を訪うた。大久保は五日の第四回会談で帰朝を言明し、十日には五日間を期とする最後の通牒を發した。九日はその日記に随員の意見が二つに分れ、『苦慮云う可からず』と大久保が書いた日である。大久保日記には樺山進言の事はないが、その日の樺山日記には『其の大義名分は充分ありと前議の主意にて持論を提出せり』(二九)とある。

十月十日に對支最後通牒案を提出した日の樺山日記は、日本使節の内面的意図を語りて興味がある。

十月十日 晴

〔上略〕大久保公使断然引揚げらるる場合に於ては、在留柳原公使には十五日内外は滞京ありて帰国せらるるに内決せり。因て大久保公使の意思決断のある處を親しく質議せしに、前夜柳原公使と論議せられしに稍々反對なり、併しながら断然帰国に及び陛下に伏奏する以上は聖断に依て大軍外征の挙は、決意のある處は冥々中に察知せられ、其場合には大本營を大坂に設け、親征の詔勅渙發せらるるならんか、併ながら両公使の談判不調に際し、去就進退の動作に於て、稍々曖昧模糊して頗る狐疑なきに非ず、姑息なる外交政略は鞏固なる平和を保維すること能わざるは常情なり。今日は國家未曾有の大難千載一遇危機一発の際、我が皇國の前途盛衰隆替の關係至大至重、大久保公使の一身双肩に負担し、大任の責めは宜しく予等に於て輔翼とならざるを得ず、因て屢々所思を惜まず提言せり。(三〇)

大久保日記においては十月九日の内決は『柳原公使へ密談す……是一大事機密に関する故、決して他に示

さざるを約す』(三二)とあるが、右の樺山の記事には大体の決定事項が記載されて居り、そこに柳原と樺山との関係を推知することが出来る。

北京談判は、ここで英、仏両国公使が大久保を訪問して、妥協せらるるやの懸念があつた。樺山は大挙遠征の時機を誤ることを憂慮した。

十月十五日 晴

〔上略〕両公使の意思のある処、何れかの名義を以て清政府より賠償金を以て、交和維持を謀らんとする機発なきにしも非ず、殊に仏国公使は出兵の費用等巨細質議ありたりと。前件の両国公使干渉の場合ともならば、愈々遷延悠々に陥り、我が大挙遠征の時機を誤り、千載の遺憾となるべし。今夜児玉氏と同袖にて大久保公使を訪い緩話に及ぶ、該談判書類も閲覧を経たり。(三三)

故国に於ては海軍の準備が出来ている旨を、参議黒田清隆の書翰を持参して来た海軍大佐松村諱蔵其他も語つて居り、川村海軍大輔の書面にもその旨がある。

十月十七日 晴

〔上略〕川村海軍大輔より来翰あり、談判の急速なるを上策とす、海軍に於ては此十五日頃には艦隊作戦の準備は整頓して出動せんとす、海軍の軍機士気旺盛なりと称すべし、然るに公法論にて悠々不斷弁幫策^{べんぼう}に出て時機を失するが如きは遺憾の至りなり。〔下略〕(三三)

なお同日の日記によると参議中、伊地知、黒田等は強硬論であるに對し、海軍卿勝は自重論者であり、軍

艦が長崎港内で暴風のため坐礁した時、勝が悲觀のことを云つたのに対し、伊地知は激昂して『東一艦を沈没せしむとも、毫も海軍の勢力に関せんや』と喝破したという。

樺山の主戦論は日一日と熾烈になつて行つた。かれはこの際、一戦を交えるに若かずと考へた。

十月廿日 晴

〔上略〕名義正しく事行わるるは頗る難きに歸す。寧ろ三千万の生靈賭すとも、大義名分を明かにして戦端を開くに若かず。業に既に両会の弁法も不調となり、従て本邦の氣勢も意外に敵愾心を起し、軍費を献金せんと欲するの人氣となり、此の機失すべからざる、若し機会を過らば国家安危の歸する、何れの時にか強国の班列に加えるを得んや。(三四)

こうした考へ方であつたから十月廿三日に至つて談判が決裂に瀕し、大久保一行引揚げに決するや非常に歡喜した。

十月二十三日 陰 午前微雨

〔上略〕大久保公使、柳原公使と共に来る二十六日帰朝復命せらるることに決す。〔中略〕茲に於て予等の宿志を遂げんとす。千載一隅我が皇国の将来隆盛の基礎確立して国民の幸福之れに過ぎんや、雀躍の至りと云うべし〔下略〕(三五)

談判がいよいよ破裂した以上は、『陛下の宸断を以て愈々宣戦を布告し、来月中と明晩を立んと予じめ決心せらるる』(三六)と樺山は書いてある(十月二十四日日誌)。しかも斯く意気込んだが、日清談判妥協に至つ

たというのであるから、かれは喜ぶべき理由を発見しなかった。

十月三十日 晴

午後八時北京より大久保公使よりの来翰達到せり。〔中略〕故に結局和誼に決せりと、実に国家生靈の為め大幸なりと云わざるべからずと。然りと雖、之れ将来に平和を維持することを得るや否、一喜一憂に堪えざる所なり。〔下略〕（三七）

大久保日誌は簡明にして名文、一字として苟くも曖昧なところはないが、樺山は武人であり、その日記には読んで明らかならざるところが少なくない。上記のものも『国家生靈の為め大幸なりと云わざるべからず』は大久保の来翰の趣旨で、『然りと雖も』以下が、彼の意見であろう。これは天津に待機していた連中の意見を代表していよう。

この対清強硬論者は蕃地の日本軍に流行する病状を知っていた。十二月八日の日記に『蕃地は風土病の為め多数の死者を生し、惨状の景況を聞くに忍びず、当港より帰朝するも然るべきかと考慮することもありたれども、前件の始末にて辞する能わず、又交代兵の報知等の件もありたればなり』（三八）とあって、自身も出来れば蕃地へは行きたくなかったのである。

十一月八日 晴

〔上略〕和議の報知を松村氏より電報到着せしならば川村氏失望愕然たるべし、和議は将来の為め幸か不幸か、姑息偷安は免れざるべし。〔下略〕（三九）

十一月十六日 晴

午前九時打狗に着港せり〔中略〕平和克復とはなりくるものの、軍隊に於ては失望せり。(四〇)

右の樺山資紀の日記を比較的詳細に紹介したのは、半数に分れたところの大久保幕僚中の強硬論者が如何なる意見を懷き、かつ大久保の決裁に不満な事実を知らんためである。しかもこの樺山は大久保と同郷の後輩であつたのは前述の通りだ。

四 償金の返還を主張す

上海から随員の大半を帰した大久保は、樺山、福島、川村、金井等を従えて、十一月十一日再び神奈川丸に乗船して厦門に向つた。大久保が最も懸念したことは、繰返し日記にも書き、また黒田に宛てた書翰にも書いた如く、首尾よく台湾から撤兵しうるかどうかの問題であつた。英国公使及び支那側に対する総ての交渉は撤兵を必須条件としたものである。もし『兵士の末々に至りては意外の齟齬を生じ候も図り難し、万々一左様の義出来候ては……小子何の面目あつて天地の間に立んや』(四二)というのである。こうした点については後の陸奥宗光も日清戦争後において深甚の注意を払っている(四二)。大久保が台湾行きに随員として選んだ福島参謀、樺山少佐の如きが台湾事件に関係ある強硬派であつたことも、撤兵手続きのためであるが、またその辺の考慮があつてのことであらう。

大久保を載せた神奈川丸は十四日には厦門に到着、上陸した。かれの日記に曰う。

十一月十四日

今朝十字上陸、領事館に至る。福島（九成）より饗応あり、当所風景絶妙、一湾緑水、奇石怪巖、雅趣極りなく、暫く散歩山を繞る。

偶成

秋色海光（長天）望裏清

一湾緑水（遶）厦門城

樹蟠石秀多風趣

天造（造化）奇巧画不成（四三）

（一）は後に修正したもの

十六日には九時、打狗港（高雄港）へ、午後四時琅瑯【※「#王+喬」】山へ到着した。谷少将、佐久間大佐、池田大尉、日高中尉等と一席して、北京談判の経過を報告し、かねて準備して来た『使清趣意書』を示した。ここで説明して置きたいのは大久保の眼は、北京談判が成立すると同時に、自然に二ヶ処に注がれていたことだ。一には現地の台湾であり、他は東京である。この二方面が旨くいかなければ、北京談判の苦心は結局水泡に帰する。そこで彼は東京方面に対しては、黒田清隆に書を送って心情を述べ、台湾へは西郷従道に示す書翰を書いて自らこれを持参した。理論的にいえば大久保は兵権をもふくむところの極めて広汎なる権限を与えられたのであるから、そうした気遣いは無用のようであるが、そうしたもののだけに頼るのには、かれは余りに注意深い政治家だった。

西郷に示した『使清趣意書』は、西郷及びその幕下をして撤兵に同意せしめんことを主眼として書かれた

ものだけに、交渉の経過を客観的に敘述して明快である。これは大久保が帰朝後、翌年一月に金井之恭をして稿せしめ、要路の者だけに煩ったところの「使清辨理始末」(四四)の巻末に採録してある。重要文書であるから本書の巻尾におさめた。

黒田に送った書翰は、その性質からいって個人的であつて、大久保の立場と主張が極めてよく出て居る。大久保が数ある友人の中から、特に黒田を選んで重要な書を送った理由は、素より大久保のみが知つて居る心事である。しかし黒田は征韓論当時から、大久保の手足となつてよく働き、しばしば『秘策』さえ授けられたことは『大久保利通日記』にも書いてある通りだ。黒田の立場も、たとえばかれの奔走の結果として明治五年岩倉一行と共に婦人留学生を海外に送るとか、樺太処分論において内治主義をとるとか、開明的であつて、大久保のそれと相通ずるものがあつた。更に黒田は、大久保と同じく、決して単なる内治主義ではなかつた。明治七年八月十二日、即ち大久保が東京を出発した(八月六日)直後、かれは国事について申奏するところがあつた。その建白書においては、大久保の談判の結果、二国の関係はどうなるか分らないが、これに対応するためには海陸二軍を整頓するの外はない。しかも之を為すのに、軍資より急なるはないが、事実は佐賀征討及び台湾出師で国家は疲弊しているといひ、そこで、

『夫れ本使〔開拓使〕の如き創置以来、歲月久しからざるを以て、諸般の事皆新創に属す。是を以て經費欠乏余力なしと雖も、國家の急務一日も忽にすべからざるを以て、百万省略用度を節し……本年定額の内未だ支消せざる所の者に就き、拾万円を還納し、之を軍費に供せんとす。自今益々勉励し、其忍ぶ可からざるを忍び、専ら力を

猛省に用い、贏余えいよある又將さに之を獻ぜんとす。且つ臣の官俸も亦此事の決定に至るまで、毎月四分の三を獻じ、併せて軍費の万一に補うあらんと欲す……』(四五)

と云っている。この中の拾万円還納の儀は御聞届けになつたが、月俸の四分の三の奉納については『申出之儀は寄特の事に候え共御詮議の次第これあり』許されなかつた(四六)。そうした事からか、三條の如きは黒田を目して『まことの忠臣というのは斯くの如き人だ』とよくいったものである(四七)。

更に黒田は自ら大久保の補佐として支那に派遣せられんことを政府に請うたが、許されなかつた。そこで黒田は松村諄藏海軍大佐、調所の兩人を北京に送つて書翰並に伝言を致した(四八)。この黒田に対する大久保の書翰が、その心情を吐露しているのは自然である。その書面は十月卅一日、日清交渉が妥結に到つた時、福原、岩村、小牧等を帰朝せしむるに當つて託送したものが、一方、交渉を一人で引受け、他方入念に日記を書き、更にこうして西郷、黒田への長文の書翰を書く大久保の精力は驚嘆すべきものがある。黒田に与えた書面の全文は左の如し。

『拝啓、益御安固成され御事務敬賀奉り候、陳は^{ますます}当方談判の都合、意外じんぜん荏苒、折角、玄武丸も差立てられ候得共、何分心底任ぜず事のみにて終に今日に推移、心外の至に候、爾來の形行は公信を以て申し上候に付、別に贅なく候。一、去るに十五日晩景に至り、英公使来館、總理衙門の依頼を受け、五十万兩の金額を差出し、証書相認むべき故、御承知下さるべく哉、拙者より相伺呉とのことにて参上候、如何の御趣意にこれあるべく哉との事にて、此返詞は実に両国幾万の生靈の命脈に係る事は無論、我人民保護上に起り、義挙たる趣意の成否にも関する大事にて、

小子にも熟考の上、一刀両断を以て、公信上の通り独決に及び候、尤も至理至当の所分と見据、小臣一己の見にては天地俯仰恥る無しところなり。

一、支那政府我征台の挙をして義拳と見認、是迄両国間に起りたる台地に関する紛論今後取消し、資銀五十万両を差出すべしとの事に至り候得ば、十分彼の権利は殺ぐるところあつて、我の権利に於て聊も傷かず、且我人民保護上に起りたる義拳の盛名は、宇内に対し、千載に互り、磨滅す可からず、然れば此上何をか求めん。

一、償金の論に至り候ては、固より要求するは十分我に道理あるところなり。去りながら彼譲るところあつて、義務たるを証認したる上、只金額の多寡を以て論を破り、両国の交際を絶ち候は、我本来の趣意を失うに似たり。是小子名義を重しとして他を顧みず、断決する所以なり。

一、彼暴に出、戦を開き候得ば我戦を以て応ずることは固より宸断以て決せらる、処なれば、一步も退くべからず、且戦の上に於ては敢て恐るべきなし。然るに彼和好を主とし、談判上に於て未戦の意を以て口を開くことなし、是れ大に意あるところなり。談判破裂のままにては戦の名義なし、唯公使謁帝の事に於て其名ありといえども、段々教師へも調べさせ候得共、公法上に於て十分ならずとの論なり。因て小子にも甚困苦当惑したる事に候。

一、前条の大意にて両国の為後図を慮り、且道理の上に於て疑う可らざるを信じ、独断に及び候間、其責を受候ことは甘んずる所なり。

一、前条に就て条約書写を以て、今般玄武丸より福原大佐、岩村高俊、小牧昌業を以て報知^{つかまつり}仕、奏聞の御運び相成、則ち退兵の勅命を下され度との趣を上申いたし候に付、御尽力下され度願ひ奉り候。

一、退兵の神速を欲する趣意は両国和好に帰着したる以上は、飽く迄信義を示し度ことに愚考いたし候。併しな

から撤兵と出金との先後は十分に相争い、撫恤銀十萬兩は神速に相渡し、四十萬兩は期限同日に相渡との事に決し候故、十萬兩を先に受取候得ば、我權利は相立候事にこれあり、此上は満足して一日片時も早く退兵相成候方、支那に対して信義を厚うするに当り、各国見て以て我義拳の義拳たるを感伏するに至らん、随て小子も期日には相違なく退兵することを支那政府に約し、且英國公使へは期限前に退兵すべしと申放ちし故、若し前条の運びに至り候得ば、小子面皮も相立ち、何の幸之に如かず。

一、退兵の勅命を西郷都督に下され、一艘なりとも速に出艦相成り、順次に船を相送られ然るべくと存候。且此に希望するところは蕃地出征の將校兵士、当五月以来、櫛風沐雨、艱難を経、功を奏したることに付、勅使を送られ其勞を慰し、且支那と和議調いたる上は、一日も兵を置かれ候事は、友誼に於て聖慮に背かせらるる訳に付、神速に引揚ぐべしとの趣を伝えらるれば、將士も感銘して凱陣すべし、然らば帰国の上、之を御するに其術も難からざるべし。

一、小子上海に至り金子受取の手順を付、厦門に至り河村中將に面晤し、夫より蕃地を経、西郷都督に事情を申述べし、撤兵の降命次第、速に退陣の事を約束し、然る后帰朝復命の所存に候。全体神速に復命すべきは勿論に候得共、千里隔絶の地、兵士の末々に至りては意外の齟齬を生じ候も図り難く、万に左様の義出来候ては、第一御旨趣に触れ候ことは言に及ばず、小子使命を全うせざるの責亦免かるべからず、因て復命に汲々たらざる所以の素志なり、之を察するを請う。

一、前条の事、若し全きを得ず、清国と再び和好を破るのことに至らば、小子何の面目あつて天地の間に立んや。右奏聞の上叡慮の所在、廟議所決にて、小子使して外に在れば、敢て喙くちばしを容るべきにあらず候得共、畢竟、国

を忘れざる一片の衷情を以て黙する能わず、私書を送致して

貴下に呈す。唯採択に任す。勿々不尽。

極密副啓【追伸】

征台の義挙たる、内外人民の保護上に出、蕃民を化して人道に導き、将来航海者の妨害を除かんとの一大美意にして、是我条理の撓屈せざる眼目の趣なり。此道理を有するが故に、支那政府も終に屈伏するに至り、各国公使等に於ても、我に左袒するの情を来せしなり。故に此道理は、失すべからざるの至宝にして、益之を貫徹せざるべからず。然るに彼より資給するところの五十万両の金額、将来如何に使用して可ならんか、此処分に依て大に日本国の名誉に係るれば、厚く図画するを要すべし。小子聊慮るところの旨趣を左に掲ぐ。

一、十萬兩の金額は、難民撫恤の名目といえども、名を仮りたるは衆人の知る処なれば、死者の家族へ相当の扶助金を給与し、難を受、資財を奪われたるもの等へ同断分配すべし。其余金を以て、従台の將士死者に施し、且功勞ある者に酬ゆるには不足なかるべし、因て十萬兩の額は其用に供し可なるべし。

一、四十萬兩の額は 奏聞の上宸断を以て受用せられざる旨を清国皇帝へ謝却あるべし。如何となれば、到底我趣意人民を保護し、内を恵み、外を恤むの他に出てざれば、建房道路の費も亦之が為なり、故に此額を以て支那政府、我意を意とし、我為すところを為し、一番民開学の用、航客の安寧を護するの資に充てば、聖慮に於て満足あらせ玉うは疑う可からず。因て此四十萬兩の額は、受用せらるるを欲せざる處なり。

右英明に非ざれば之を視ること能わず、大断に非ざれば決すること能わず、幸に我皇帝陛下、英明絶倫に在し、大量果斷の天資を具せられ候得ば、若し一たび宸断此に出ては、清国之が為に氣を奪われ、各国之が為に胆

を抜かるべし。

実に千載の美談、古今の勝事と謂わざるべけんや。曾て我馬関の償金英米蘭へ払うべく、の残額あり、当春政府断然之を消却して、英国の貪心を殆んど恥しめたり。米國、議院に於て謝却の公論あるといへども、外各國に對して之を實行すること能わず。然るに我國亞西亞の一小島にして、文明各國の未だ為さざる處を為し、近清國の歎心を取り、遠く欧米の意表に出ては、我國の盛名赫々として輝くべし、豈宇宙間の快事ならざらんや。劍を提て敵國を退治せしよりも、此大斷に於ては、其功其利、一層の高處に居る可し。去りながら小子其任を十分に尽すこと能わず、反つて措大の事を説て之を掩うに似たれば、他に向て公言すべからざるの情あり、然といへども、國權の上を論じ、利害の間を謀り候ても、僅々たる四十万の額に万倍すべし、是眼前の益にはあらざるなり。

再本文の趣意は、之を行うといへども、西郷都督復命の上、一言示されし上ならでは、然からず候に付、それまでは先御含み置き下さる可し。』(四九)

大久保の書翰による黒田へ依頼の件の最重要なるポイントは、退兵の神速ならんことの奔走である。既に福原大佐一行に託した書翰によつて退兵に関する勅命を下さるよう奏聞する手続きをとつたが、これに対する内部からの尽力を希望したのである。

福原等の随員は十一月十一日帰朝、十二日聖上正院に出御あらせられて、随員携えて歸つたところの奏上書を読み給うた。十三日、侍従長東久世通禧を蕃地に遣わし、西郷都督に全軍を將い凱旋するよう、の勅旨を

伝えしめた。其勅旨に曰く、

朕嚮に汝従道に命じて都督と為し兵を率いて罪を蕃地に問わしめ三条を勅し十款を諭す、汝遵奉懈らず克く其功を奏す、然るに清国異議を其間に生じ事務月に弥る、今や全權辦理大臣大久保利通等同国政府と互に條款を換え、彼れ已に我義拳を認め以て我兵を撤し更に和好を全くするに至る、乃汝をして全軍を將て凱旋せしむ、汝其れ此旨を奉ぜよ（五〇）

大久保の対支態度は黒田に与えた書翰の最後に最もよく現れている。即ち、『極密副啓』がそれであるが、大久保は支那から得た五十万両の償金の内、十万両は死傷者及び功勞に酬うる費とし、残る四十万両は清国皇帝へ謝却して、蕃民開導の用、航客の安寧を護するの資に充てよと主張している。かれは歐洲列強の政策に顧み、『我国亜西亞の一小島にして、文明各国の未だ為さざる處を為し、近清国の歎心を取り、遠く欧米の意表に出ては、我国の盛名赫々として輝くべし、豈宇宙間の快事ならざらんや』と提唱したのである。

大久保の態度は、これによつても明らかな如く日支の緊密なる提携であつた。その強硬不屈なる外交の目標は実に日支親善にあつた（五二）。即ち仏人史家クーラン（Maurice Courant [1865-1935]）がいう如く『極東の二大国家が接近すべき途を切り開いておこうと大久保は考えたからだ』（五二）。この事は李鴻章との会談でも明らかだ。故にかれは交渉中の不快なる記録の如きは一切撤回して、不愉快なる記憶を残さざらんことをつとめた。この事は協定の中に明記されて居る（五三）。三條太政大臣は十一月十三日附を以て外務省に左の如き達書を送つた。

『全権辨理大臣大久保利通清国政府と互換條款中に、処蕃關係兩國一切往來の公文は互に撤回すべき旨訂約相成り候に付、總理衙門照會書は彼国駐劄全権柳原前光を経て同国政府へ返却せしめ、其省照覆書は取戻すべく此旨相達候事。』(五四)

四十万兩の返還問題については、大久保の意志は実行されなかつた。何が故に実行されなかつたかは、今のところなお徴すべき資料が見当たらない。その当時の国家財政が非常に苦しかつたから、その方に廻さねばならなかつたのか(五五)、それとも政治的理由があつたのか(五六)、兎に角廟議にも問われずしてやんだ。

五 故国の熱狂的歡迎

大久保に『使清趣意書』(本書附録参照)を示され、これを一読した西郷以下は大久保の処置に異議を申し出でなかつた。かれがどれだけ安心したかはその日記によつて知ることが出来る。

十一月十六日

今朝九字、打狗港へ着す。天氣平穩。当所より福島領事、吳書記官、支那人二人上陸、為に三時投錨、十字揚錨開帆。午后四時、琅璫【※「#王+喬」】山へ着。樺山、兎玉、比志島等先に上陸、續て小子上陸。西郷都督途中へ出迎これあり、則ち本營に至る。谷少将、佐久間(左馬太)大佐、池田(道輝)大尉、日高中尉等一席にて北京談判に付、旨趣書、辨理始末節略、日表等一覽に供す。都督始め一同熟覽、異議なく、各安心、為に賀を述べられ候。小子態と蕃地へ参り候趣意他にあらず。初発より征蕃の挙、齟齬の義多く、中止の模様ありし節も甚だ不都合。小子

長崎へ出張、大隈長官、西郷都督更に条約いたし候こともこれあり、此結約にいたり若しや退兵緩急の事に付異議を生じ候節は、太はなはだ相済まず、支那政府へ対し、小子一分も相立たずことに付、先に蕃地へ至り都督へ相談し、若し異議ある時は決して承知致さない含みに相決し候処、何も異議なく、実に安心此上なく候。既に本邦の都合も、東久世（通禧）侍従長勅使のため、東海丸より台地へ御発し、退兵の御沙汰相成り筈、運送船も五艘、去る十三日夜、東京出帆の趣、電報これありし故、何事も残る処なく、上都合にて、唯復命するのみ。今夜営中へ一泊。（五七）右日記中に『先に蕃地へ至り都督へ相談し、若し異議ある時は決して承知致さない含みに相決し候処』とある文字に、かれの秋霜しゅうそうの如き決意を知ることが出来る。前述の東久世侍従長が来着したのは、十一月廿六日であつた。

大久保は重荷が下りて気も軽く、戦迹を巡視した。かれは路傍に仮埋葬してある数多い将卒の墓標を見て一々丁寧に礼拝した。墓標の倒れ、傾きたるものは、炎天の下一々それを立直しては礼をして進んだ。随行者は涙を流して感激したという（五八）。十七日の日記にいう。

十一月十七日

今朝飯後、金井、川村、平川召列し、田中盛知嚮導にて、石門一覽に至る。途中、社寮川を渡り、新溪の人家を過、夫より車城川を渡り、頓領蒲を見、又車城川を渡る、五月五日進撃の節、斥候一名狙撃せらるると云う。又四重溪の南にて、小渠を渡る、此地にて同十日斥候を討たる。是れより又川を渡る、石門に出ず、実に千尋せんじゆんの巉巖せんがん双立一奇景なり、双巖の間に川流あり、五月廿二日の進撃には、洪水にて溺死の者ありし由。石門を少し出過る処に、

埋伏蕃人狙撃せし趣なり。是より川を渉り、五六丁を過、牡丹山を望み、石門に帰り、暫時馬に秣まぐさい、休息して馬を進む。当所迄守兵来る。午後二字帰營。

王師一至懲兇〔頑〕酋

戰克〔貔貅〕三千兵氣雄

請見皇威及〔覃〕異域

石門頭〔堡〕上旭旗風

午后四時後龜山麓の小山に登る、西郷、樺山、高柳等同道なり。今日瓊浦丸大砲隊を乗せて着船。

大海波鳴月照宮

誰知万里遠征情

孤眠未結還家夢

遙聽中宵喇叭声〔五九〕

（一）は後に修正したもの

十一月十八日、大久保は神奈川丸に乗つて台地を出発した。谷、比志島等がかれに従つた。

十一月十八日

今朝九字、都督始へ別を告げ出発。儀伏兵營前へ整列、捧銃の礼を行う。都督始め海辺迄見送りあり。儀仗兵海辺迄行軍。端舟を発するに臨み、捧銃の礼あり〔下略〕（六〇）

二十二日、愈々長崎に帰着した。当日の日記にいう。

十一月廿二日

今日睡覺遙に山を見る、則ち長崎地方なり。船中皆飲を催す。十二字長崎へ着、丁卯艦より迎船来る、則ち上陸。丁卯艦并に台場より祝砲あり、魯西亞軍艦より祝砲あり。今町松屋半次郎宅へ旅宿。県令宮川【房之】津畑へ出迎

これあり。横山租税助、林等、旅宿へ待迎これあり、其外見舞客これあり。(六二)

神奈川丸は廿三日午前九時長崎出港、横浜に入港したのは十一月廿六日夜半であつた。その夜は上陸せず、船中において先著の吉原の来訪を受け、また式部頭坊城俊政は勅命を奉じて慰勞の勅旨を傳達した。

廿七日は早朝から訪問客が来た。この間に宮内省から小蒸汽船が差立られて、県令中島信行、参事大江卓が出迎えに来了。波止場には伊藤博文(六二)が出迎え、朝野の歡迎人で立錫の余地のないほど盛んであつた。『東京日日新聞』には『横浜の商賈三百余人皆一齊に礼服を着し、御迎いとして波戸場集ること山の如し、街衢は軒ごとくに国旗を翻がえし球燈チヨウサンを張り、或は処々に飾り物等を出し人民皆欣然として相賀せり』(六三)とある。当日の景況及び感想は、例によつて大久保日記をして語らせよう。

十一月廿七日

今日早朝、黒田子、調所子、西村子、堀子(基)其外野口等尋問これあり。小蒸汽船迎船を賜る。県令中島(信行)、参事大江(卓)出迎にて、太田、金井同船にて上陸、波止場へ着船、御馬車を賜り、参議伊藤、式部頭坊城どの出迎これあり。岸上へ見物の貴賤内外人民群を成す。当所惣代始数百人、礼服にて出船脱帽の礼あり、予答礼、則ち御馬車に伊藤参議、式部頭坊城どの同車、大蔵省出張所に至る。当港の景況戸毎に国旗を飄ひるがえし、種々の飾り物を拵え、人民歡喜の体、誠に意外の有様なり。大蔵省出張所へは華族伊達(宗徳)侯、亀井(茲監)侯、山内(豊範)侯其他壬生(基修)どの御出迎これあり、程なく太政大臣殿御使として御着、御慰勞の御口上あり、御食事を賜る。十一字比町会所へ伊藤子同行にて至る。惣代始め当港人民二百人余、礼服にて広間へ列し、拙者中央に席を設く、

令参事左右に侍し、高島嘉右衛門賀頌の文を読む、余之に答う。山梨県より人民惣代として兩人出港、全じく賀頌あり。委曲は別冊にあり。式終て酒宴饗応あり、則ち退坐、又高鳴屋へ至る。内務省官員奏任以上二十人余待迎これあり。暫くして大蔵省出張所に至る。一字汽車より大臣殿始一同ステーションに至る。同所当港人民惣代始め、見送として出張す。礼を述て乗車、勅奏任一同と帰る。二字新橋ステーションへ着す、同所へは宮内省大丞杉等御使にて出迎これあり、其外警視庁総代出迎これあり。是より又御馬車を賜り、大臣殿、伊藤参議同車、騎兵一隊、警衛儀仗一大隊整列、捧銃の礼あり。太政官迄騎兵隨行。御門より昇殿。皇上階上に御迎あらせられ、拝礼、御跡に隨正院に出御、坐を賜う。勅語あり、別に記す、一応入御にて休息を賜わり、程なく三職一同食なされ、復命の式あり。終て御酒肴を玉わる。還幸、御座前御見送り申し上げる。四字退出、御馬車、騎兵帰宅玉わる。嗚呼人民の祝賀、御上より御待遇の厚、誠に生涯の面目、只々感泣の外なし、終生忘却す可からざるの今日なり。今晚、客来群を成し、記す^{ひま}違なし。(六四)

東京に着くと、宮内大丞杉孫七郎は御料の馬車を以て迎え、大久保は三條、伊藤と共に同乗した。儀仗兵はその前後を護衛し、進むままに途上には一大隊左右に整列して捧銃の礼をなした。

聖上には太政官代に臨幸あらせられ、畏くも階上に親迎し給い、大久保は伏して御跡に従し奉った。やがて玉座に着御あらせ給うや、直ちに拝謁を賜わったが、大久保は復命書(本書附録参照)を奉呈した。聖上が大久保の労を慰め給うた勅語は左の如くである。

汝利通台湾蕃地の挙あるや、清国と大に葛藤を生ずるに^{あた}方り辨理大臣の重任を奉じ^ゆ往て其事を理せしむ、汝能く

朕が旨を体し反覆弁論遂に能く国権を全うし交誼を保存せしむ、是に汝が誠心を竭し義を執て撓まざるの致す所なり、啻に朕が心を安んずるのみならず実に兆庶の慶福たり、其功大なりと謂う可し朕深く之を嘉尚す（六五）

廿八日は参内して前日の礼を奏上し奉り、更に皇后宮も謁見を給わつて、懇篤なる令旨を賜わつた。廿九日から三日間は英国、ドイツ、米国の各公使を訪問した。英国公使パークスは当時横浜にあり、大久保は石橋を同行して同処に赴きウェードの好意を深謝したのである。パークスは、万一日支戦争起らば一時の戦争には勝利を得るであらうけれども、中々の大国のことだから急速には征服出来ず、その間に各国との葛藤を生じたであろうに、今回の処置は慶賀に堪えないと、英仏の対支戦争の例をひいて祝した。当日以下の日記は左の如くである。

十一月廿九日

今朝、金井子、吉原子入来。十字伊多利公使^{イタリ}入来。午后一字汽車より石橋同行、横浜へ至り英公使を訪い、清国在任英公使^{ウェード}威氏の懇意に預りくる謝礼を述べ、同氏大に賀頌これあり。且談判の大略を聞かんとのこと故、十月五日以来の順序概略を話す、再三質問の廉一々答弁す。同氏云、閣下、今般の尽力両国人民の爲質するに余あり。余両国の爲深く痛心せしが、此の如く至当の処分に及び、誠に安心す。万一戦争に及ばは、貴国の爲必ず禍害たらんと、如何となれば英仏との戦争すら容易ならざりし。一時の戦に於ては勝利あるにせよ、中々大国のことなれば、急速には遂げ難かるべし、時日延引する内、種々の故障起り、各国の關係を生ぜん、然る時は難事くること必せり云々。酒をすすめて賀すること再三なり、凡そ二時間にて帰る。

十一月三十日

〔上略〕三字前、^{アロウ}李国公使へ尋問。同氏も亦清国事件を賀して云く、実に感服に堪えず、閣下帰朝后、天氣快晴なるは自ら天地に感ずるところなり、北京の談に及んで、我彼地の図画を所持せり、閣下の思出の為進呈すべしと出されたり、余之を謝す、〔下略〕

十二月朔日

〔上略〕午后三字、石橋子同行、米公使を訪。清国談判結局、両国和平の処分実に至当にて感ずるに余りあり。則我國に報じて曰く、若し外国に対して事あらば、此始末を龜鑑とすべしと。誠に今般閣下の御尽力、両国の為賀頌するに堪たりと云々酒を進めて待遇あり。〔下略〕（六六）

一方、西郷都督も十二月二日いよいよ兵を率いて蕃地を出発し、廿七日東京に凱旋した。歸るに先ち、遭難した琉球藩民の墓碑を建立し『大日本琉球藩民五十四名の墓』と題し、文を碑陰に刻した。

聖上は勅語を賜うて、その労を慰め給うた。

六 御^{かし}下賜金で新築

十二月九日 聖上は大久保及びその随員を御學問所に召させられ、今回の交渉に関して優渥なる勅語を賜わりまた控所において大久保に錦三巻、紅白縮緬四匹を、随員にもそれぞれ御下賜品があった。十三日には聖上は左の内旨と共に金一万円の御手許金を御下賜相成った。十四日の日記には左の如く記してある。

十二月十四日

〔上略〕 昨十三日、皇居へ召しなされ、宮内卿代理万里小路殿より、当春佐賀県騒動、引続清国事件、容易ならず骨折致候訳を以て、別段の思食にて、御手元金壹万円下され候趣にて当坐御請、御礼申上、退出。(六七)

大久保はこの御下賜金を拝辞した。十八日に上った表は左の如くである。

今般清国の談判、詔旨貫徹、帰朝復命仕候処、不料も莫大の賜金を忝うす。聖恩の隆渥、肺肝に銘刻し、感激の至に堪えず。然り而して、竊に惟るに、其功績は必竟皇上の明威と廟堂の謨猷とに藉るものにして、臣利通微力の能く及ぶ所に之無く況や臣目算の如く、運籌、国家充分の光榮と為す事を得ず。殊に台蕃問罪の事件、起りて以来、經費巨大にして、上は宮中の用度を損殺せられ、下は官省の定額を減少す。誠に国家多端の秋に際し、皇居及び太政官の再興をも未だ土木に着手するに至らず。臣等、日夜憂慮措ざる所以なり。故に国民も往々献金の挙ありて、多費の万一を裨補せんと請うものあり。臣利通の如きは、居る所の位地既に高く、享る所の秩祿も亦少からず、無窮の天恩に浴して、衣食の奉自ら余裕あり。之に依り重疊惶悚〔恐れ入る〕の至に存じ奉り候えども、今般の恩賜還し奉り仕候。伏して冀くは、之を以て国家有益、人民救済、其余目下の急務に属する補足に施用あらんことを。聖明臣利通の微衷を垂憐し、其不敬を寛恕せられ、允可を賜わば、幸甚の至に堪えず。誠惶誠恐謹言。(六八)

聖上は右の辞退を允許し給わなかつた。即ち廿二日に左の如く慰諭し給うた。

恩賜金再三固辞衷情の趣被聞食尤の事に被思召候得共、佐賀県不逞の徒暴動の節出張。引続支那北京派出。談判首尾克相済、拔群尽力の功深叡感被為在取敢えず御手許金の内下賜候儀に付、辞表の次第御聞届難破遊候事。

(六九)

大久保はこの御下賜金を以て麹町三年町に邸宅を新築した。現に白耳義大使館^{ベルギー}になつて居るのがそれだ。翌八年に工を起し、九年一月に落成した。日記に、

一月十五日〔九年〕 土曜日

〔上略〕今日家作凡そ落成に付引越候。(七〇)

とある。明治九年四月十九日には 明治天皇はこの新邸に行幸あらせられた。

この新築は予算を超過して、其の親友税所篤から不足分を借用している。九年二月五日附の書翰に曰く、

『〔上略〕兼て申上候通の員数の金子、一昨日迄にて岩瀬方より相請取用弁仕候。家作は無類の結構にて何れの来客にても驚嘆して帰らざるものなし、時に家作模様替等に付、此節大工方より意外の金額申出、是等に就て矢太郎〔當時の家従〕不在に付、大に差支候事少なからず。〔下略〕』(七一)

と云い、また前年(八年)三月廿三日附にて

『〔上略〕去る十四日御出の貴翰^{たしか}に落手、忝く拝読。扨三千円の義、早速吉田便より御遣下され、是又落掌仕候。種々御面倒懸上候事、何共恐縮申訳なく候。〔下略〕』(七二)

とある。この借金が、東京の実業家より借入れないで、大阪の親友より借入れた事、しかもその返済が月賦五十円づつの約束であつたことは注意すべきだ。即ち明治十年五月十九日、その妹婿石原近義に与えた書翰

i 底本は「驚歎」だが、『大久保利通文書』第七巻では「落胆」となっている。「落胆して帰らざるものなし」

の一節に、

『上略』税所方へ月々五十円づつの返金、相滞居候付、入付下されず候ては困り候由承候付、当月迄の金高、家内へ御申聞下され候て返金候様、御取計下され度、御面働ながら御頼申上候。〔下略〕』（七三）

とあることでも分る。かれが死んだ時には遺財百四十円だけしかなかったという（七四）。

だが、こうした新築も大久保に快らざるものの攻撃の材料になった。話しは少し違ふけれども、薩摩の郷里においては西郷に同情が集まれば集るほど、大久保に対する攻撃は甚しかった。

『當時薩人の郷里に在りし者は、其私有物視する政府の権を專にする大久保を敵視し、之を目して嬌奢に長じたる者とし、紙幣寮（印刷局）の写真を西郷に示し、是れ大久保の邸宅なりと欺きて憤怒を促す等の事あり、遂に西郷をして心を動かしめ、共に事を挙ぐるに同意せしめたり、是れ西郷の名望を仮らずんば事を挙げ難きを以てなり。此等の故に県民婦人児童に至るまで、大久保及び川路を憎悪すること甚しく、郷里に存在せし二人の家宅を破壊するに至れり。』（七五）

大久保としては恐らくは、その書翰（明治八年三月二十三日附）にあるように『たとえ仮令外人に見せ候ても誇るに足るとの公論に決し、大に安心仕候』とか『中外の雅賓、目属する処に候得ば、めったの事は出来申さず、是余が徐々たる所以に候』（七六）といつて、将来、国家の柱石として中外の雅賓との交際のためであつたであらう。

七 外政家大久保の存在理由

台湾征討の意味は膨脹力を内に貯えた明治の新日本が、南へ伸びるための一段階であつた。政府は既に七年七月、西郷の征蕃のほぼ一段落を告げた時、琉球藩を内務省の所管とした。大久保は帰来、十二月十五日、三條太政大臣に建議し、琉球をして清国との關係を絶たしむべきを論じて左の如くいつた。

『今般清国談判の末、蕃地御征討は同国より義拳と見認め、受害難民の爲め撫恤銀を差出し候都合に立到り、幾分か我版圖たる実跡を表し候え共、未だ判然たる成局に至り難し、各国より異論これなくと申場合に到り兼ね、万国交際の今日に臨み此假差置候ては、他日の故障を啓くも計り難く事に候。』

とて、まず同藩の官吏兩三名に上京を命じ、事の事情を藩主に伝達せしめ、ついで藩主自身上京謝恩すべく、また官吏上京に當つては那覇に鎮台分營の設置、刑法、教育等諸制度の改革を命じ、清国より交付の撫恤銀を被害者に配分するの至当なるを論じた（七七）。廿八日には琉球藩に三司官の内一名及与那原親方に上京を命じた。この命令に應じて翌八年三月十八日、池城親方（安規）、与那原親方（良傑）、幸地親雲上（朝恆）等着京したので、内務大丞松田道之は前記処分案の箇条を伝達した。しかし彼等は清国の思惑に遠慮してこれに應じないので、松田は自身琉球に赴いて直接に藩主と交渉した。その後、諸種の経緯を経て、清国政府の抗議となり（明治十一年十月）、折しも来朝した米國前大統領グラントの調停となり、明治二十七年の日清戦役が起るに及んで一切が現実には解決されたのであるが、しかし事実上の解決は大久保の北京談判によつたのである。

日本政府はポアソナードに対し琉球島見込につき法的解釈を質問し、これに対しポアソナードは明治八年（一八七五年）三月十七日附で左の如く答議している。

一千八百七十四年日本支那両国間に取結びたる条約の最幸なる結果の一は、琉球島に日本の権あることを暗に認得したるに在り、夫れ台湾蛮人の惨害を蒙りたる航海者は琉球島の人民なることは支那に於て知る所なり、而して条約面中に其人民を日本臣民と名称したり。

今や日本は琉球島に一層其政權を拡張するの時なり。然るに条約面により此島に付き、日本の権あることを支那にも既に認得したりと日本にて言わんと欲するを、支那にて異議を述ぶるの場合を予め考究せざる可らず。

予今爰に左に掲げる所の三条の問題を設けて以て之を説明せん。

第一条

台湾を遠征し条約を取結びたる後、引続き琉球島に日本の権を一層拡張するの権あるや如何。

第二条

琉球島住民の風俗慣習及垂王の状態に付寛優に取扱ひ、以て第一条の目的を達するに最も適當の方策は如何なるや。

第三条

福州に設けたる琉球の公館、及び琉球より支那帝に従来奉したる貢納及礼際に付自今支那に対し施す可き方策如何なるや。（七八）

この見込案においてポアソナードは『本地図界限中には必ず琉球島を加えしむ可し』とか『垂王を促し

て東京に來らしめ、日本政府の琉球に与えたる保護に付き謝辭及敬礼を為さしむ可し』とかと種々なる具体策を提示し、大久保はこれに聴いている。

この北京談判によつて得たところは、啻に琉球帰属問題の解決のみではなかつた。列強は日本の實力を認め、その結果横浜在住の兵を撤するに至つた。大隈重信はいう。

『征台の役に日本の費す所七百八十万円なりしかば、得失相償わざるの感ありと雖、清国は間接に、琉球人が日本の臣民にして、隨て琉球群島は日本の領土たることを認めたるのみならず、各外国は、我が兵力の有効なるを認めたる結果として、英仏二国は、幕末の外人迫害以來、横浜に駐在せしめたる兵を撤したるに因り、明治外交の上に受けたる間接の利益は甚だ大なりき。』(七九)

この事はまた支那の内情を世界に暴露する役目をなした。英国歴史家は書く。

『この取引(北京交渉の成果)は實際、支那の運命を封ずるものであつた。この富める帝国では賠償金を支払う用意があるが、しかし戦う用意がないことを世界に広告したのである。』(八〇)

最後に著者は大久保が明治日本につとめた役割について仏人史家クーランの言を引いて、結語としたいと思う。かれによれば、大久保の生涯は、一言でつくせば、十ヶ年足らずの間に、極めて複雑なる封建制度の日本を、中央集権化した近代国家としてしまつた点にある。固より、これには種々の要因があつたのは無論だが、丁度ヘンリー四世(Henry IV 【アンリ四世在位 1589-1610】)の仏蘭西からルイ十四世(Louis XIV 【在位 1643-1715】)の仏蘭西になつたのと同じシリュウ(Armand Jean du Plessis de Richelieu 【1585-1642】)が必要であつ

たと同様に、旧い日本から新らしい日本を作るには大久保を必要としたのである。一八六〇年の支那はアジアの三分の一を支配して、数世紀に亙る統一された国家であり、種々の点で劣弱なる日本よりも遙かに犯し難きものであつた。然るに、その日本が、我々の鼻先で前代未聞の進展をなし遂げたに拘らず、支那は旧態依然たるものがあつた。支那は泰西【西洋】の科学と機械を排斥し、同化することを知らず、^{エスプリ・パブリック}公共精神【esprit public】を欠如していた。これ等の要素なくして、近代国家への進展は望み得ない。日本を成功せしめた素因こそ、これ等のものであり、これをリードしたのが我が大久保なのである。こういつて来て、この史家は結論するのである。『大久保が斃れたのは、過去と争い、急進な将来と争い——久光・西郷と争い、板垣と争つた結果であることは一点の疑もない。』（八一）

(一) 『大久保利通日記』下 三三七—三八頁。

(二) 同上、三三八頁。

(三) 徳富蘇峰氏は『寧ろ初めの方が、公の本色は現れている……何れにしても公の作中の庄巻であろう』といっている（徳富『大久保甲東先生』三三九—四〇頁）。

(四) 『大久保利通日記』下 三三九—四二頁。

(五) 同上、三四三頁。

(六) 明治七年九月、篠原、淵辺宛大山網良書翰（吉田『倒敍日本史』大政維新編 四〇四頁）。

- (七) 明治七年八月卅一日、篠原国幹宛西郷隆盛書翰（『大西郷全集』第二 八一八—二〇頁）。
- (八) 佐田『日清實珍』下 一三頁。
- (九) 明治七年十一月十二日、大久保宛岩倉具視書翰（『岩倉具視關係文書』第六 二四三—五頁）。
- (一〇) 『木戸孝允日記』第三 一一三頁。
- (一一) 明治七年十一月廿一日、大久保宛木戸孝允書翰（『大久保利通文書』第六 二二〇—二二頁、『木戸孝允文書』第五 四二五頁）。
- (一二) 明治七年十一月十三日、大久保宛大臣參議公翰（『大久保利通文書』第六 一七七—七八頁）。
- (一三) 桐野利秋宛樺山資紀書翰（『西南記伝』上卷一 七八三頁）。
- (一四) 渡辺『大久保利通之一生』二〇二頁。
- (一五) 吉田『倒敍日本史』大政維新篇 四〇六—〇七頁。
- (一六) 渡辺『大久保利通之一生』一〇〇—〇一頁。
- (一七) 『西南記伝』上卷一 七八三頁。
- (一八) 明治七年十一月九日ガゼット抄訳（『郵便報知』明治七年十一月十九日号）。
- (一九) 明治七年七月十六日、大隈重信宛大久保書翰（『大久保利通文書』第六 九—一〇頁）参照。
- (二〇) 『樺山資紀台湾記事』第四稿（『西郷都督と樺山総督』三三八頁）。
- (二一) 同上、三三五頁。
- (二二) (二三) 同上、三四二頁。

- (二四) 同上、三四四頁。
- (二五) (二六) 同上、三四七頁。
- (二七) 同上、三四九頁。
- (二八) (二九) 同上、三五〇頁。
- (三〇) 同上、三五一頁。
- (三一) 本書一五二頁参照。【p174第五章第二節、明治七年十月九日の日記】
- (三二) 『樺山資紀台湾記事』第四稿（前掲、三五三頁）。
- (三三) 同上、三五四頁。
- (三四) 同上、三五五頁。
- (三五) 同上、三五六頁。
- (三六) 同上、三五七頁。
- (三七) 同上、三五九頁。
- (三八) (三九) 同上、三六一頁。
- (四〇) 同上、三六三頁。
- (四一) 明治七年十月三十日、黒田清隆宛大久保書翰の一節、本書二二七—二八頁参照【p267】。
- (四二) 『蹇蹇録』の一節に、

『戦勝の狂熱は社会に充満し浮望空想殆ど其絶顛に達したるに於て、若し講和条約中特に軍人の鮮血を濺そそぎて

略取したりと云う遼東半島割地の一条を脱漏したらむには如何に一般国民を失望せしめたるべきぞ、豈に啻に失望せしむるのみならむや。氣勢の馴致する所、是の如き条約は当時の事情に於て殆ど之を事実^{じじつ}に施^{おこな}はざるを許したるや否やを疑うべきものなり。斯く内外の形勢互に相容れずして之を調和すること甚だ難く、若し強て之を調和せむとせば、当時必然内に発したる激動は其危害却て他日或は外来すべしと推度する事變よりも更に重大なるを慮らざるべからず。政府は実に此内外形勢の難きに処し、時局の緩急輕重を較量し、常に其重く且つ急なるもののために軽く且つ緩なるものを後にし、而も内難は成丈^{なり}け之を融和し、外難は成丈^{なり}け之を制限し、全く之を制限する能わざりしも尚お其禍機の発するを一日も遅からしめむことを努めたるは外交の能事亦尽さざる所ありしと謂う可からざるが如し。』(岩波文庫版、二九七頁)とある。

(四三) 『大久保利通日記』下 三四七—四八頁。

(四四) 『使清辨理始末』は征台事件に関する日清両国間の外交談判の大詰の記録で、特派全種辨理大臣大久保利通卿と清国政府との折衝の詳細を、その時の対話筆記や往復書簡其他の公文書によつて跡づけたものである。黒布張の厚表紙を附した菊版の活版刷洋本で、字は粗いが本文前後四百二十頁に互る。冒頭には、編纂者金井之恭が大久保卿の命に従つて、本書の取扱方に関する太政大臣の指令を仰いだ上書と、明治八年一月十七日附の太政大臣指令とを載せ、本書編纂の由来と其の性質とを明示している。それによれば、本書は原と大久保卿自ら編纂して要路の官員に頒布し、日清両国安危の関わる所たる此の重大問題の詳細を報じて参考^{かんがへ}に供せんとしたものだ^{こと}が、適々病氣静養の必要があつて此仕事を金井之恭に依嘱した。その時の注意に、曩きに清国政府と締結した条約の中で本問題に関する彼我往復の公文書は一切棒引きにして了うという一項

があるので、若し本書が一般に流布する様なことがあれば違約の譏を免かれないことになる。だから「須らく厳に授受の際を戒め、之を秘藏するに非ずんば不可なり」と云われた。之に対する太政大臣の指令にも「頒布の外猥りに漏泄の弊無之様厚注意可致事」とある。以て本書が久しく官省内の秘密文書として留り管外間に伝わらなかった所以〔中略〕全部で六十七項に互る本文と附録から成り〔中略〕附録の「使清趣意書」は大久保斯理大臣から蕃地時務都督西郷中將に送ったもの、談判の苦心の跡を告白している〔下略〕。〔早坂四郎『使清辨理始末解題』『明治文化全集』第六卷、外交篇所収〕

（四五）（四六）『郵便報知』明治七年九月十八日号。

（四七）牧野伸顕伯の談、なお黒田がその末年において振わない観があつたのは、その酒癖が一原因をなしていた。

（四八）『樺山資紀台湾記事』第四稿（前掲、三五二頁）

（四九）明治七年十月三十日、黒田清隆宛大久保書翰（『大久保利通文書』第六 一五二―一六一頁）。

（五〇）『岩倉公実記』下巻 一二〇頁。

（五一）大久保是北京談判後、常に日支提携を目がけた。それがためには語学を習得せしむことが第一と考えて、支那公使何如璋と計って学校を造ったが、かれの死と共にその企ては挫折した。この辺の事情につき元老院議員宮島誠一郎が明治十三年興亜会の発会式で左の如く述べている。

『（前略）余〔宮島〕偶々欽差大臣何如璋の来るに及んで自ら其和交を修め、互に相往来し、漸次親睦大に得る所あり、故大久保氏頗る此事に感ずる所あり、何如璋君と議して東京中央に日支両国の語学校を開き、互に

四名の教師を延き、両国の生徒六十名をして語学に従事せしめ、大に両国の洪益を謀らんとす。元来日支の両国は同文の国にして、而して却て親密ならざるは要するに言語の通ぜざるに由らざるはなし、然るに不幸にして大久保氏斃れ、爾来此の事中絶し、余輩【原文は「輩」】頗る長大息に堪ざるものあり〔中略〕今後會員協同して興亜をして真に其名に背【原文は「負」】からざらしめば贈右大臣大久保公亦地下に瞑すべし云々。』
『甲東先生逸話』二六五—六頁)

(五二) Maurice Courant, Okoubo (Paris, 1904), p. 165.

(五三) 交換條款に、『所有此事。両国一切来往公文彼此撤回註銷し。永く論を罷むと為す』とある。『大日本外交文書』第七卷 三二六—一七頁参照。

(五四) 『大日本外交文書』第七卷 三二二頁。

(五五) 当時の財政は左の如し。

公債未償額（紙幣を除く）は次の如し。

明治六年十二月 三一、五四〇、〇〇〇

明治七年十二月 三七、四一〇、〇〇〇

明治八年 六月 四七、四八〇、〇〇〇

（竹越与三郎『新日本史』一九四—九五頁）

會計年度		自 明治六年一月 至 十二月	自 明治七年一月 至 十二月	自 明治八年一月 至 十二月
歳入	經常部	七〇、五六一、六八八	七一、〇九〇、四八一	八三、〇八〇、五七五
	臨時部	一四、九四五、五五七	二、三五五、〇六三	三、二四〇、五〇二
	合計	八五、五〇七、二四五	七三、四四五、五四四	八六、三二一、〇七七
歳出	經常部	五〇、六三九、五五二	六〇、〇〇一、九一六	五二、八四二、三四八
	臨時部	一二、〇三九、〇四八	二二、二六七、六一二	一三、二九二、四二四
	合計	六二、六七八、六〇一	八二、二六九、五二八	六六、一三八、七七二
歳入の歳 出に對す る過不足	經常部	一九、九二二、一三六	十一、〇八八、五六五	三十〇、二三八、二二七
	臨時部	十二、九〇六、五〇九	一九、九一二、五八九	一〇、〇五一、九二二
	合計	三二、八二八、六四四	八、八二三、九八四	四十〇、一八六、三〇五
決算の予算 に對する増 減	歳入	十三六、七七〇、三六二	十一七、八〇二、八四二	十六、九八八、八三八
	歳出	十一六、〇八二、九八三	十二〇、一〇〇、一八四	十二七、一一二、七〇一
	合計	二十、六八七、三八九	三、七〇二、六五八	一三、八〇六、一八七

【単位は、円】東洋經濟新報社『明治大正財政詳覽』二一三頁

なお三井と相並んだ豪商小野組が破綻閉店したのは十一月二十日であつて、大久保の帰朝一週間前であつた。財界の不安定を知るべきである。

（五六） 黒田清隆に関する文書が最もこの辺の事情を知るに必要なと思うが、黒田文書はなお充分整理されて居らない。黒田は当時参議になつていた。

（五七）『大久保利通日記』下 三四八—四九頁。

(五八) 勝田『甲東逸話』一二四―五頁(小牧昌業談話―小牧は当時上海から帰り、この話しは同行した金井之恭が小牧に語ったものという)。

(五九) 『大久保利通日記』下 三四九―五〇頁。

(六〇) 同上、三五〇頁。

(六一) 同上、三五―五二頁。

(六二) 大久保、伊藤、大隈の調停につき、一史家という。『伊藤の一生を通じて、木戸、大久保在世中は、兩者の間に跨がり、先ず当初は木戸七分、大久保三分であったが、やがてそれが顛倒して、大久保七分、木戸三分というところであつたらしい。嘗つて西園寺公が予に向つて、「大久保の盛んな時には、大隈、伊藤は、その股肱であつて、大久保が馬車に乗る時には、大隈が車の戸を開けてやれば、伊藤が膝掛けを広げてやるという様に、二人ながらよくつとめた」と云われたが、事実或はその通りであつたかも知れぬ。』(徳富蘇峰『我が交遊録』四二―三頁)

(六三) 『東京日日新聞』明治七年十一月廿八日号。

(六四) 『大久保利通日記』下 三五三―五四頁。

(六五) 明治七年十一月廿七日、大久保に賜いし勅語(『大久保利通文書』第六 二〇五―〇六頁)。

(六六) 『大久保利通日記』下 三五五―五七頁。

(六七) 同上、三六一頁。

(六八) 明治七年十二月十八日、賜金辞退に関する大久保上書(『大久保利通文書』第六 二四〇―四一頁)。

(六九) 明治七年十二月廿二日、大久保への御沙汰書(同上、二四二頁)。

(七〇) 『大久保利通日記』下 四六六頁。

(七一) 明治九年二月五日、税所篤宛大久保書翰『大久保利通文書』第七(二五頁)。

(七二) 明治八年三月廿三日、同上書翰(『大久保利通文書』第六 二九一頁)。

(七三) 明治十年五月十九日、石原近義宛大久保書翰(『大久保利通文書』第八 一八八頁)。

(七四) 『集合雜誌』第二十一号附録、『大久保利通公之伝』三七頁。渡辺修二郎は必ずしも大久保に好意を有せず、しかし同じ事を書いて『清廉寡欲なる、殊に貪婪を通性とせる薩人に其類を見ず』といっている(『大久保

利通之一生』一四七頁)

(七五) 渡辺『大久保利通之一生』一一四頁。

(七六) 明治八年三月廿三日、税所篤宛大久保書翰(『大久保利通文書』第六 二九一九二)。

(七七) 明治七年十二月十五日、琉球処分に関する建議書(『大久保利通文書』第六 二三七―三九頁)。

(七八) 平塚篤『続伊藤博文秘録』【伊藤博文秘録・続】三二―三六頁。朝日新聞社『図録日本外交大観』六五頁。

(七九) 大隈『開国大勢史』一二二頁。

(八〇) Alexander Michie, *The Englishman in China during the Victorian Era*, as Illustrated the Career Sir Rutherford Alcock (Edinburgh, 1900), vol. 2, p.255.

(八一) Courant, op. cit., 202-3.

大久保辨理大臣ノ復命書

臣利通曩さだきに全權辨理の重任を蒙り、使清の天命を奉じ、実に八月六日を以て闕下けつかを辞し、路を上海に取り、九月十日清京に安抵【到着】す。同十四日其總理衙門がもんに至り、諸大臣等と議を始む。是より以後談判照會往復する数十回、而も彼れ頑然動かざる始の如し。於是十月五日に臻いたり、決然帰国するの意を告げたり。既にして臣復た以為おもえらく、我が朝廷臣の無似【不肖】を以てせず特に大任を命ずる所以のもの、誠に友邦の信誼を重んじ、妥議だぎ【穩当に協議】局を結ばしめんとなり。今議協かなわらずして歸る、是深く朝意に背くと。乃ち更に十八日に及んで兩便の弁法を議す。然るに繼いて廿日、廿三日の応接に至りて猶お未だ成局を見るなし。是に至りて臣事の終に協わざるを察し、速かに帰装を理め、將さに程に上らんとす。此時に至りて彼れ始めて図を改むるの色あり。遂に三十一日に至りて和議全く成り、条約交換の結局に及べり。抑も臣が此行は實に國家の重事にして、臣等微力の能く任になうる所に非らず。況んや和戰の事國家名分權利の關する所、之を決する亦豈に易からんや。且つ夫れ清國政府の意、銳意勝負を決するに非ずして専ら和好を主張し、動もすれば我に曲名を負わせんとす。故に議合わずと雖も蕃地屬否の論決せざる而已のみにして、彼の啓釁きん【爭い始め】を待つに非ざれば我國より開戰の名義なし。蓋し我が征蕃の挙義務上より出て、而して其為さんと欲する所のもの已に了ればなり。是れ臣が遽にわかに戰に決する能わざる所以なり。又彼和好を以て口に藉しぎ【言い訳

し、速かに我が兵を撤し、将来の処分を己に任せんことを乞う。是れ彼が前來柳原公使に談ずる所にして、臣繼いて之れを論ずるに至り遽かに償金を開説するの機無し。是れ問題二条を基本とし、公道正理に服さしむるを要せし所以にして、臣が遽かに和に決する能わざる所以なり。此二者あるを以て、応接照会筆禿し【筆もちび】唇焦るるに至り、而も速成する能わず、遂に荏苒^{じんぜん}今日に至れるなり。然りと雖も此れ全く民か不肖^{せうれつ}譎劣^{げんれつ}【つたない】の然らしむる所にして、其十分の功を奏する能わず、反つて聖旨に戻る。実に恐懼戰慄の至りに堪えず。茲に使清始末の要を摘録し、互換条約、互換憑單二款と共に之れを開陳し、謹みて復命す。誠恐誠惶頓首謹白

明治七年十一月

全權辨理大臣 大久保利通

（『使清辨理始末』）

使清趣意書

辦理大臣西郷都督に示す所

夫れ征蕃の義拳たるは固より天地万国に對して愧じざる所、但昨春派清の使清官との応接書辭を以て徴す可き無く、而して蕃地は天下皆以て支那の版図と爲す。故に中外士民或は廟議の疎漏を評し、或は其非義を疑い、遂に物論紛紜を致す。加えるに清国政府異議を唱え、我が外務卿に照会せしより、是非曲直愈其真を失うに至る。此際に當り、外国使臣の兩國に駐紮する者皆竊かに兩國の挙動を窺伺し、往々流言訛伝中外人民をして転々狐疑の念を増さしめ、殆んど日清互いに敵視するに至らしむ。抑も我が政府の旨趣固より清国を敵視し疆土を犯越するの意あるに非ず。偏えに民人保護の理止む可らざるを以て、仁義の師を將いて無主の野蕃を懲罰するのみ。是を以て我が朝廷深く隣国の友誼を傷わん事を慮り、其疑惑を弁解せん爲め向きに柳原公使を派遣せり。公使在滬【上海に在る】数十日、潘蔚と応接する数回、潘蔚乃ち約に背き、直ちに蕃地に至り、都督に談するに譎詐【いつわり】を以てす。公使因つて其罪を責め、更に滬を去りて北京に前往【出向く】す。此時に當り、彼盛んに兵備を修め、戦を決するの色あり。我從軍將士亦今後一報を以て端を開かんとするに至る。事情頗る迫れり。是に於て朝廷深く其草卒禍端を啓き当初仁義の意に戻らん事を慮り、利通に全權辦理の事を命じ、清に使いせしむる所以なり。余則ち八月六日を以て日本東京を発し、九月十日清

国北京に抵^{いた}る【到着】。十四日其總理衙門に踵^{いた}り【おもむく】、諸大臣を見首として詰問して曰く、貴大臣等前
 来柳原公使と論弁せらるる如く生蕃の地貴国版図内にありとせば、何を以て今に至る迄蕃民を開化せざる。
 夫れ一国版図の地たる、其主管を設けて化導するに由らざるを得ず。貴国生蕃に於て果して幾許の政教を施
 す乎。万国交際を開きしより人々互に往来す。則ち各国に於て航客の安寧を保護せざるはなし。況んや貴国
 素より仁義道德を以て全地球に鳴る。而して生蕃の屢々漂民を暴害するを見て之れを度外に置き唯残暴の心
 を養う。是れ理有る乎と。抑も此二条を主腦とし説き起せし所以は、彼をして我が義拳たるの旨趣を貫徹せ
 しめ、万国公法の至理に基き彼の曲直を明らかにし、仮令^{たと}い議論協わす事破るるに至ると雖も、我が名声
 を損する無く、後世に至る迄異議無からしめん事を庶幾すればなり。自是^{これより}以後逐次往復弁論すれども、彼唯
 前議を主張する而已^{のみ}、毫も自ら悟る事無し。此際我が政府屢々書を致して云く、海陸軍備既に整実し、緩急
 処変の廟議全く決せり。支那政府陽に和好を以て時日を遷延し、陰に戦備を成すを聞く、不知果して然るや。
 和戦の決慎みて其機を過つ勿れと。又征蕃の将士蛮野瘴癘^{しょうれい}の地に在りて櫛風沐雨、曠日弥久^{くわうじつびきやう}、其艱酸の状実
 に想像に堪えず。然りと雖も、余不肖の身を以て至重の任を蒙る。和戦の際名義判然たるに非ずんば、固よ
 り未だ遽かに処断す可らず。是れを以て外間の非議を顧みず固く自ら持し、以て其機会を候す。彼の果して
 頑固解く可らざるを察するに及んでは、則ち機を荏苒に失わん事を恐る。是に於て遂に十月五日の談判を決
 せり。既にして復た謂いらく、貴重^{きちゆう}の命を奉^{ほう}じ大国に使す、一も遺算有る可らずと。因つて彼の平素口に和

i 底本では「開化セラル」となっているが、日本外交文書デジタルアーカイブでは「開化セサル」である。

好を重ねるを説くを以て、更に兩便の弁法有らば之れを聴き、之を議せんと云うの意を以て照会せり。然るに彼の言う所、我の撤兵を待ち、清帝の恩典贍卹【めぐみ】として銀兩を難民の家に給付せんとす。而して片書の以て後日を証する無く、徒に我兵を退かしめん事を主張し、未だ判然図を改むるを見ず。於是彼の終に諭す可らざるを知り、徒らに口舌を費さんより速かに帰朝するに如かざるを以て、旨を彼の王諸大臣に告げたり。即ち廿三日の応接なり。因つて蕃地の無主なるを以て、益々我が政教を施し漸次開誘するの意を諭し、以て決然帰朝するを告げ、廿六日を以て発京の期と定め、告別の礼を以て各国公使を其館に訪い、随従官員をして水陸便に従い先んじて発せしむ。又状を西郷都督に報せんが為め福島参謀、樺山少佐等に書を托し、廿五日を以て程を起さしめ、上海領事より本国へ電報を命ずる等の事を為し、発するに臨み又一書を投し、嗣後縦令い弁論千万なるも我複た教を領せずと云う。此に於て柳原公使も亦退京の事を告ぐ。既にして午後四時、駐清英国公使来りて曰く、本日總理衙門に踵りしに諸大臣依嘱する所あり、云う、五十万「テール」の額償うべく、所欲の証書出す可し、貴公使幸に日本大臣に告げよと。我因つて之れに答えて云く、我が討蕃の挙は遭害難民の為に復讐伸冤【冤をはらす】し、并に東西航客の安寧を保せんとするの一大義挙にして、天地神明に対し毫も恥ず可からざるの事なり。支那政府我が義とする所を義とし、我が方法を設けて航海者を保護せんとするの心を心とし、後患無からんを期するの明証確拠を示さば、我其金額の多少を問わざる可しと。乃ち三十一日に至りて和議全く成り、余衙門諸大臣と互に鈐印交換せり。

本文は余が命を奉じて清国に使い、蕃地の事件数回談判往復、遂に両国和議の結局に至れる概畧なり。其

詳細の如きは使清始末摘要、辨理始末日表、条約書写し等に就て見るべし。抑も此行や国家安危存亡の関する所にして、其大事件たる固より論を俟たず。其和戦の議を決せんとする誠に亦難し。清政府真に戦を期し勝敗を争うの意有らば則ち可なり。而も彼終始一も戦を説くの意なし。是れ蓋し其意戦を好まざるに出ずると雖も、和好を主張して我に曲名を負わす可きの深意之れなしとす可らず。故に談判破るると雖も、属否の論決せざるのみにて、彼の啓釁を待つに非ざれば我より宣戦の名義有る事なし。是れ我が征蕃の拳義務上に於て、其果さんと欲する所既に果せばなり。是れ戦の説に於て遽かに決する能わざる一なり。彼和好を以て弁法を説くに至りては、徒に我兵を撤せしめ、将来の処分は之を己に任せん事を乞う。是れ既に柳原公使に談ずる所、余繼いで之れを談ずるに至りて遽かに償金を開説する能わざるの情勢あり。故に問題二目を以て公道正理に屈服せしむるを要せし所以にして、遽かに和を以て決する能わざる二なり。此二条に於ては、余が焦心殫思【思いを尽す】以て急成を欲すと雖も、如何ともす可らず。荏苒日を費やし月を重さね以て今日に至るは、事実止むを得ざる所なり。且つ其和議調整の結末に至り、彼償う所の金其額僅少、我が欲する所に適せずと云うと雖も、金額多少の論よりして議破るるに至りては、我が義拳たるの本旨を失うに似たり。是れ我が名譽を損せず国権を失わざるを重しとし、一刀両断専決して疑わざる所以のものなり。然りと雖も我が政府許多の財を糜し【浪費し】、陸海二軍の整備を為し、其獲る所之れを償うに至らず、加えるに挙国人心皆義に奮い戦に決し、乃ち出軍將士に至りては艱を踐し、苦を嘗め、誓つて其憤りを洩さん事を欲す。実に其兵勢の強弱、勝負の得失、誰か和を以て是とし、戦を以て非とせん。唯余の決する所以の目的は固とより

強弱得失の外に在り。然りと雖も不肖せんれつ【浅はか】にして実に其任を辱めたり。朝廷若し譴責する所あらば、固より甘んじて受くる所なり。

『使清辨理始末』)

外政家 大久保利通略年譜

(括弧内数字は太陽曆を示す)

天保元 一八三〇 一歳

八、一〇 鹿兒島鍛冶屋町に生る。

嘉永四 一八五一 廿二歳

二、二 斉彬襲封。

嘉永五 一八五二 廿三歳

(四・一四) 閏二、二五 英軍、ビルマ占領。

嘉永六 一八五三 廿四歳

(七・八) 六、三 米国使節ペリー、浦賀に来航。

安政元 一八五四 廿五歳

(二・一三) 一、一六 ペリー、浦賀に再来。

安政三 一八五六 廿七歳

(八・二二) 七、二二 米国総領事ハリス、下田に来航。

安政五 一八五八 廿九歳

(四・一六) 三、三 露清愛理条約調印(露国、黒龍江以北の地を領

有)。

七、一六 斉彬薨去、忠義相統、久光後見役となる。

文久二 一八六二 卅三歳

(六・五) 五、八 仏国、交趾支那を略取。

(九・四) 八、二二 生麥事件突発。

文久三 一八六三 卅四歳

(八・二二) 六、二八 英国艦隊、鹿兒島湾前の浜に投錨(七月二日

(一・九) 交渉決裂し、交戦翌日に及ぶ、十月廿九日和

平交渉妥結)。

元治元 一八六四 卅五歳

(九・五) 八、五 英、仏、米、蘭四国聯合艦隊、下関襲撃。

慶応元 一八六五 卅六歳

九、二二 朝彦親王及び近衛内大臣に謁し、長藩処

分及び外交の二問題につき建策す。

一〇、五 兵庫開港に關し、近衛内大臣に建言す。

慶応二 一八六六 卅七歳

七、二〇 將軍家茂大坂に於て薨去。

- 一二、五 慶喜將軍宣下。
- 一二、二五 孝明天皇崩御。

慶応三 一八六七 卅八歳

- 一、九 明治天皇踐祚。
(三・三〇)
(二・二五)
(七・二〇)
米國、露國よりアラスカを買収。
- 五、二九 自治領カナダ聯邦成立。
- 一〇、一四 慶喜政權奉還を上奏、翌十五日允許。
- 一二、九 王政復古の大号令頒発。
- 一二、一二 参与に任ぜらる。

明治元 一八六八 卅九歳

- 一、一七 内国事務掛及び徴士を命ぜらる。
- 二、三 内国事務局判事を兼任す。
- 二、一七 堺に於ける仏国人殺害事件に関し大坂に赴く。二月廿日帰京復命す。

- 三、一四 五条御誓文發布。
(五・二二)
閏四、一 露國、サマルカンド領有。

- 閏四、二二 官制改革、参与に任ぜらる。

- 七、一七 鎮將府（十月十九日廃止）参与に任ぜらる。
- 一二、二五 岩倉公に外国留学生派遣につき進言す。

明治二 一八六九 四十歳

- 七、八 官制改革、待詔院学士（後出仕）を命ぜらる。
- 七、二三 参議に任ぜらる（——四、六、二五）。

- 八、一一 露國北地侵略につき、三條公に上書して自ら出張、折衝せんことを請う、允されず。

- 九、二六 維新参与の功により賞典緑千八百石を賜い、従三位に叙せらる。

明治三 一八七〇 四十一歳

- 七、二 普仏戦争勃発。（——四、一、一三）
(七・二九)
(二八七一、三・三二)
- 一〇、二四 公使註割制度を布く。

- 一〇、九 三條、岩倉兩公に新政府改革の要項を進言す。

(一八七三・一八七四)
一一・三八

普国王ウィルヘルム一世、独逸皇帝に即位、

独逸の統一完成。

明治四 一八七一 四十二歳

六、二五 西郷隆盛、参議に新任、木戸孝允参議に復任す。

六、二七 大蔵卿に任ぜらる(——六、一〇、一二)。

七、一四 廢藩置県。

(九・一三)
七、二九

日清修好条規調印(六年三月九日批准、四月

卅日批准交換)

(一〇・二〇)
一〇・二八

岩倉全權大使に従い、欧米へ差遣を命ぜらる。十一月十二日横浜解纜(大使一行、重

要政務は大使の帰朝を待つて処理すべきを在留者と誓約す。)

一一、六 琉球宮古島、八重山島の貢船、台湾蕃地に漂

到す(六十六名中、五十四名暴殺せらる)。

明治五 一八七二 四十三歳

二、一二 条約改正商議につき、委任状要求の為、

伊藤博文と共にワシントン出發、三月廿四

日帰朝す。

五、一七 横浜を出發、再び米国に向う、六月十七

日ワシントン着(条約改正商議は中止す)

七、一五 ロンドン着。滞在五ヶ月、各地を視察す。

一一、一六 パリ着。

明治六 一八七三 四十四歳

二、二七 パリ出發、ベルギー、和蘭を経て、三月

九日ベルリン着。

二、二七 外務卿副島種臣を特命全權大使と為し、清国

に差遣、台湾生蕃の我が漂民殺害を申理せし

む(七月廿六日帰朝復命す)。

三、二八 備中浅江郡柏島村民四名、台湾蕃地に漂到、

掠奪さる。

三、二八 本国政府の命により、岩倉大使一行と別

れ、ベルリン出發、帰朝の途に就く。

四、二三 マルセーユ出發。

五、二六 帰朝す。

七、二三 木戸孝允帰朝す。

八、一六 箱根に赴き、富士登山、尋で京阪近畿地方を遊歴す。

八、一七 閣議、参議西郷を遣韓特使とすべく内決し、岩倉大使一行帰朝後発表と定む。

八、一八 参議木戸孝允征台征韓の反対意見を上る。

九、二三 岩倉大使一行帰朝。

九、二二 京阪より帰京。

一〇、一二 参議に任ぜらる（——一一、五、一四）。

一〇、一四——一五 征韓に関し閣議、西郷、大久保その是非を論争、西郷の意見採用に決す。

一〇、一七 辞表を提出す。

一〇、一八 早晚、三條実美急疾を発し、尋で辞表を提出す。

一〇、二〇 岩倉具視太政大臣を撰行す。

一〇、二三 岩倉具視、閣議顛末者を上奏 聖上御嘉納。

西郷辞表を提出す（翌廿四日罷免、十月廿八日帰県す）。

一〇、二五 辞表却下せらる。

大久保利通略年譜

新内閣成立（副島、後藤、板垣、江藤各参議罷免）

一一、二九 内務卿を兼任す（——一一、五、一四）。

一二、三〇 参内、優渥なる勅語を拝し、金七百元を賜る。

明治七 一八七四 四十五歳

一、一〇 内務省事務開始。

二、四 佐賀の乱勃発（三月一日平定）。

二、六 参議大隈重信と「台湾蕃地処分要略」及び朝鮮遣使に関する取調書を提出す。

閣議、台湾征討と決定。

二、一〇 佐賀出張の命を拝す。

二、一四 東京出発。

二、一七 大阪着、出兵の協議を遂げ、十九日博多に着（福岡に本営を設置）。

四、四 陸軍中将西郷従道を台湾事務都督となす（参軍谷干城、赤松則良）。

四、五 参議兼大蔵卿大隈重信を台湾蕃地事務局長官

となす。

四、六 延遼館會議、台湾在討と決定す。

四、八 米人ル・ジャンドルを台湾蕃地事務局准二等出仕となす。尋で米人カッセル等を雇備す。

四、九 西郷都督東京出発。

四、一〇 在本邦英国公使パークス、外務卿寺島宗則を訪い、生蕃征撫の措置に関し会談す。

四、一三 江藤新平以下刑につく。

英国公使パークス、尋で十八日在本邦米国公使ビンガム、夫々征台に異議を唱え、英米人及び同船舶の参加を拒む。

四、一七 佐賀発途、二十四日帰京す。

四、二七 有功丸厦門に向け発す。

四、二八 台湾事件に付、長崎出張を命ぜらる。

五、二 日進、孟春、明光及び三邦の四艦、台湾社寮港に向け進発す。

五、三 長崎着。

五、四 大隈、西郷と相会し、台湾出兵と決定。

五、六 ル・ジャンドルを従え、長崎出帆、神戸、

大阪を経て、十五日帰京。

五、一七 西郷都督高砂丸にて長崎発。

五、一九 特命全権公使柳原前光、東京を発し、廿八日上海に着す。

五、二二 台湾生蕃熟蕃十八社投降す。

六、二 台湾略平定す。

七、九 閣議、海外出征を決し、宣戦発令順序条目を決議す。

七、一二 琉球藩（外務省所管）を内務省に移管す。

七、二四 柳原公使、天津にて李鴻章と会見。尋で、總理衙門諸大臣と往復辯難論駁を尽すも議協わず。

七、 台湾出征善後策に就き、三條公に覚書提出。

北京談判

八、一 全権辨理大臣として、清国差遣を命ぜらる（随員文武官十余人、司法省御雇仏人ボアソナー

ド亦顧問として随う」

八、五 召見親論、委任状を賜る。

八、六 東京出發。

八、一〇 長崎着〔高崎正風、小牧昌業を北京に先行せしむ〕

八、一六 龍驤艦に乘じ、長崎発。

八、一九 上海着〔廿二日吳淞江を下り、再び龍驤艦にて廿七日芝罘着、廿九日芝罘を發し、卅日太沽に至る、卅一日孟春丸に転乘し太沽出發。〕

九、一 天津着〔六日發して、九日通州着〕

九、一〇 北京着。

九、一四 清国總理衙門にて、日清第一回會談。

九、一五 柳原公使を伴い、在支露、英、米三国公使を訪問す〔米国公使ローに蕃地の清国版圖たる証拠の公文を借覽方申入る〕

九、一六 在支英國公使ウエード來訪〔撤兵に関し照会す。〕

我が旅寓にて、日清第二回會談。

九、一七 在支露国公使來訪。

九、一九 總理衙門にて、日清第三回會談。

九、二六 英國公使ウエード來訪〔日清間交渉經過を照会し、撤兵を条件として調停斡旋を申出す。〕

一〇、五 總理衙門にて、日清第四回會談〔談判不調を以て帰朝の意を表明す。〕

一〇、九 在北京日本公使飯館にて、柳原公使、英國公使ウエードと會談〔蕃地問題の國際仲裁裁判附託の提議に対し即座に拒絶す。〕

一〇、一〇 清国側の改圖を促し、五日間を期限として最後の通牒を發し、回答を求む。

〔十一日回答期限延期方を求め來り、十二日三日間の延期を諾す。〕

一〇、一四 在支英、仏兩國公使を訪い、日清交渉經過を説明す。

英國公使ウエード來訪。

一〇、一八 我が旅寓にて、第五回日清會談〔兩便の弁法として、我が方より賠償を要求す。〕

一〇、二〇 總理衙門にて、第六回日清会談。

一〇、二一 總理衙門にて、鄭書記官、軍機大臣沈

桂芬等と償金の額、名目等を議す。

一〇、二三 英国公使ウエード来訪〔両便の弁法商議の経過を問合せ、右斡旋方を申出ず。〕

總理衙門にて、第七回日清会談、商議決裂す。

一〇、二四 英国公使ウエードを、翌廿五日在支独

公使を各訪問す〔商議不調の経過を説明し、帰朝の挨拶をなす。〕

一〇、二五 清国の主張を駁し、帰朝すべきを總理衙門に通告す。

英国公使ウエード来訪〔清国側の和約条件を伝達す。〕

夜八時、英国公使ウエードを訪問〔和議条件を商議す。〕

一〇、二六 柳原公使、謁見を許されざるに付、帰国すべきを總理衙門に通告す。

英国公使ウエード来訪〔償金の收受等に付き商議す。〕

議す。〕

一〇、二七 總理衙門、和議条件を通告し、更に征蕃

問題解決後、柳原公使謁見の儀を奏請すべきを回答し来る。

一〇、二九 清国、我が征蕃の義挙たるを認め、償金

五十万両の支払を諾す。

英国公使ウエードより、償金の支払期日等に関する、清国側の意嚮を伝達し来る。

一〇、三〇 英国公使ウエードを訪問す〔償金の收受方等に付回答す。〕

田辺、太田、鄭總理衙門に至り、条約書並に銀両交付の順序を商議す。

一〇、三一 總理衙門にて、條款憑単に調印、尋で互に本件に関する往復公文を撤回す。

一一、一 北京出発、通州より舟行。

一一、三 天津に抵り、李鴻章を訪問、日清親善を

談す。

一一、四 天津出発〔五日芝罘着、同日神奈川丸に転乗し、出帆。〕

一一、七 上海着、尋で十日償金十万両を受領〔十一日上海出帆。〕

一一、一二 岩倉具視書を贈り、北京談判の成功を祝す。

寺島外務卿より英国公使ウエードの斡旋に
関し、英国公使パークスに謝意を表明、尋
で十五日勅語を賜る。

一一、一四 厦門上陸。

一一、一六 打狗（高雄）に着、西郷都督と会し、撤
兵を協議し、尋で戦趾を巡視す。

一一、一八 台地出発。

一一、一九 日清条約書を列国に送附す。

一一、二一 木戸孝允書を寄せ、大久保の功労を称す。

一一、二二 長崎帰着〔翌日出帆〕

大久保利通略年譜

一一、二六 夜半横浜入港。

侍従長東久世通禧台湾に至り、西郷従道に勅旨を伝
え、撤退を命ず。

一一、二七 入京、直に参内、復命す。

聖上太政官に出御、優詔を賜う。

一一、二九 横浜に英国公使パークスを訪い、英国公
使ウエードの好意を深謝す。

柳原公使清帝謁見、国書を捧呈。ⁱ

一一、三〇 独国公使フォン・ブランド訪問。

一一、一 米国公使ビンガム訪問。

一一、二三 聖上、殊勲を賞し、金一万円を賜う

〔十八日拝辞するも、廿二日徳大寺宮内卿允許し給
わざるを伝う。〕

一一、二五 琉球処分に関し建議す。

一一、二一 延遼館に清国派遣随員を招き、慰労の宴
を催す。

i 中公文庫版は11.26としているが、日本外交文書アーカイブで確認、11.29と正す。11.26と入替ったミスだろう。

一二、二三 英国公使に招かれ、横浜に赴く。

一二、二七 西郷従道台湾より凱旋し、征台の状を奏す。

明治八 一八七五 四十六歳

一、四 台湾蕃地事務局を廃す。

一、二九 大阪会議開始。

二、二五 英、仏両国、横浜衛兵を撤去す。

五、七 日露千島樺太交換条約調印（八月廿二日批准交換、十一月十日公布）。

九、二〇 江華島事件勃発。

明治九 一八七六 四十七歳

一、二五 霞ヶ関新邸落成し、本日移居。

五、一 英国ヴィクトリア女皇、印度女帝を宣言。

明治一〇 一八七七 四十八歳

二、二五——九、二四 西南之役勃発。

四、二四 露国、トルコに宣戦（十一年三月三日サン・ステファノ和約調印）

一、二 勲一等に叙し、旭日大綬章を賜る。

一二、二四 正三位に叙せられ、特に勅語を賜う。

明治一一 一八七八 四十九歳

五、一四 参朝の途中、清水谷に於て、島田一郎等の偽に刺され、遂に薨去。

聖上、勅使を遣わされ、特に右大臣正二位を贈り、金幣、誄詞を賜う。

五、一七 国葬の例に準じ、青山墓地に葬る。

後記

この著はその標題が示す如く、外政家としての大久保利通を書いて、その題意に終始した。もしそれ大久保によって代表される対外政策の持つ意味と影響という如き、やや広汎なる問題については、拙著『外交史』（『現代日本文明史』第三卷、東洋経済新報社版）【[『日本外交史』](#)】を併せ一読されんことを望む。

底本：『清澤冽選集』第七卷（1998.7.25 日本図書センター刊）

作成者：石井彰文

作成日：2014.10.22